埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第25集

諏訪木遺跡Ⅲ

2017

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第25集

諏訪木遺跡Ⅲ

2017

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、原始・古代の集落跡等の埋蔵文化財が数多く分布することで知られています。こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。

しかしながら、近年においては、多くの開発行為に伴い、我々の郷土の景観は日々変化しております。このような現状の中で、失われつつある文化財を保護し、それらを次世代に伝えていくことは我々の大きな課題であり、責務であるはずです。

さて、今回報告する諏訪木遺跡は、熊谷市上之地内に所在する原始から近世まで続く、複合遺跡であります。また、過去における発掘調査等により、付近一帯には原始から古代にかけての集落が分布していることが確認されております。

この度、この遺跡の一部に位置する宗教法人　一乗院から、墓地造成及び参道新設工事の計画が持ち上がりました。熊谷市教育委員会では、遺跡の保護と保存についてその関係者との間で協議を重ねた結果、熊谷市諏訪木遺跡調査会、熊谷市教育委員会で記録保存のための措置を講ずることとなりました。

本書は、平成 27 年 4 月 1 日から 7 月 27 日にかけて実施された記録保存のための発掘調査の成果をまとめたものでございます。今回の調査によって、本遺跡における集落の状況や調査箇所に隣接する寺院の歴史が明らかになってきました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を御理解、御協力を賜りました宗教法人　一乗院、並びに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

熊谷市教育委員会
教育長　野原　晃

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之２８８９番1、２８８９番3、２８８９番6に所在する諏訪木遺跡（埼玉県遺跡番号59－16）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査届出に対する埼玉県教育委員会からの指示通知は、平成２６年１１月１１日付教生文第5-1177号である。

3　本調査は、墓地造成及び参道新設に伴う事前の記録保存のための発掘調査であり、熊谷市諏訪木遺跡調査会、熊谷市教育委員会が実施した。

4　本事業の組織は、Ⅰ章のとおりである。

5　発掘調査期間は、平成２７年4月1日から平成２７年7月２７日ある。

また整理・報告書作成期間は、平成２８年4月1日から平成２９年3月２４日までである。

6　発掘調査は腰塚　博隆が行い、吉野　健がその補佐をした。

本書の執筆・編集は熊谷市立江南文化財センター内作業員の協力をもとに腰塚　博隆が行い、吉野　健がその補佐をした。なお、弥生における出土遺物の一部、近世における出土遺物については、それぞれ松田　哲、島村範久が補佐を、遺物実測についてはその一部を大野美知子が補佐した。

7　写真撮影は、発掘調査、遺物は腰塚が行った。

8　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

9　本書の作成にあたり多くの方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。

（敬称略　五十音順）

埼玉県教育局生涯学習文化財課　埼玉大学教授柿沼　幹夫

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　吉田　稔

凡　　例

1　本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

ＳＩ…住居跡、ＳＢ…掘立柱建物、ＮＲ…河川跡、ＳＤ…溝跡、ＳＥ…井戸跡、ＳＫ…土坑、

Ｐ…ピット、ＳＮ…水田跡、ＳＸ…性格不明遺構

2　遺構図面中の表記記号は、次のとおりである。

S…川原石（※土層表記中、指摘のないものは遺物を表す）

3　遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図…１/240、各遺構…原則１/60、ただし一部に限り縮尺が異なる。

4　遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、原則として同一図版、同一遺構の標高は統一し、Ａポイントに表記した。なお、例外的に標高差が大きい場合は、統一せずその都度表記してある。

5　遺物実測図の縮尺は、１/４である。ただし、一部に限り１/１、１/２及び１/３、１/６である。

6　遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。

また、土師器の断面は白抜き、須恵器の断面は黒塗りで示した。なお、須恵系土師質土器（酸化焔硝性土器）は表記を土師質土器とし、白抜きで示した。

ススが付着については　で、赤彩があるものは　で示した。

陶磁器については実測図に写真はめ込みで示している。

また底部調整は、回転糸切りが「◯」、回転ヘラケズリは「＼」で示した。

7　遺物である礫のうち、敲打痕があるものは、「◁――▷」がその範囲を、擦り痕があるものは「◀――▶」でその範囲を示した。

8　挿図中の遺物番号は、遺物実測図及び遺物観察表の番号と一致している。

9　土層断面のうち一部は、平面図中の遺構を省略している場合がある。

10　遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、㎝である。また、推定値・現存値は括弧付けで示した。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

Ａ…白色粒子、Ｂ…黒色粒子、Ｃ…赤色粒子、Ｄ…褐色粒子、Ｅ…赤褐色粒子、Ｆ…白色針状物質、

Ｇ…長石、Ｈ…石英、Ｉ…白雲母、Ｊ…黒雲母、Ｋ…角閃石、Ｌ…片岩、Ｍ…砂状、Ｎ…礫、

Ｏ…金雲母

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2010 年版）に照らし最も近似した色相を示した。

目　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　遺跡の概要 …… 9
　1　諏訪木遺跡について …… 9
　2　調査の方法 …… 9
　3　検出された遺構と遺物 …… 9
Ⅳ　遺構と遺物 …… 11
　1　住居跡 …… 11
　2　掘立柱建物跡 …… 15
　3　河川跡 …… 29
　4　溝跡 …… 31
　5　井戸跡 …… 78
　6　土坑 …… 83
　7　ピット …… 96
　8　水田跡 …… 109
　9　性格不明遺構 …… 112
　10　遺構外 …… 120
Ⅵ　調査のまとめ …… 133

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図（諏訪木遺跡位置図） …… 2
第２図　周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　調査地区位置図 …… 6
第４図　調査地区周辺発掘調査実績 …… 8
第５図　調査区全測図 …… 10
第６図　第１号住居跡・出土遺物 …… 11
第７図　第２号住居跡 …… 13
第８図　第２号住居跡出土遺物 …… 14
第９図　第１号掘立柱建物跡 …… 16
第10図　第２号掘立柱建物跡 …… 17
第11図　第３号掘立柱建物跡 …… 18
第12図　第４号掘立柱建物跡 …… 20
第13図　第５号掘立柱建物跡 …… 21
第14図　第６号掘立柱建物跡 …… 22
第15図　第７号掘立柱建物跡 …… 23
第16図　第８号掘立柱建物跡 …… 24
第17図　第９号掘立柱建物跡 …… 25
第18図　第10号掘立柱建物跡 …… 26
第19図　第11号掘立柱建物跡 …… 28
第20図　掘立柱建物跡出土遺物 …… 29
第21図　第１号河川跡・出土遺物 …… 30
第22図　第１号溝跡 …… 32
第23図　第１号溝跡出土遺物（１） …… 33
第24図　第１号溝跡出土遺物（２） …… 34
第25図　第１号溝跡出土遺物（３） …… 35
第26図　第１号溝跡出土遺物（４） …… 36
第27図　第１号溝跡出土遺物（５） …… 37
第28図　第１号溝跡出土遺物（６） …… 38
第29図　第１号溝跡出土遺物（７） …… 39
第30図　第１号溝跡出土遺物（８） …… 40
第31図　第１号溝跡出土遺物（９） …… 41
第32図　第１号溝跡出土遺物（10） …… 42
第33図　第１号溝跡出土遺物（11） …… 43
第34図　第１号溝跡出土遺物（12） …… 44
第35図　第１号溝跡出土遺物（13） …… 45
第36図　第１号溝跡出土遺物（14） …… 46
第37図　第１号溝跡出土遺物（15） …… 47
第38図　第１号溝跡出土遺物（16） …… 48
第39図　第１号溝跡出土遺物（17） …… 49
第40図　第１号溝跡出土遺物（18） …… 50
第41図　第１号溝跡出土遺物（19） …… 51
第42図　第１号溝跡出土遺物（20） …… 52
第43図　第１号溝跡出土遺物（21） …… 53
第44図　第１号溝跡出土遺物（22） …… 54
第45図　第２・３号溝跡 …… 58
第46図　第３号溝跡出土遺物 …… 59
第47図　第４・５・６・11号溝跡 …… 61
第48図　第７号溝跡 …… 62
第49図　第８号溝跡 …… 63
第50図　第９・10溝跡 …… 64
第51図　第10号溝跡出土遺物（１） …… 66
第52図　第10号溝跡出土遺物（２） …… 67
第53図　第10号溝跡出土遺物（３） …… 68
第54図　第12～21号溝跡（１） …… 70
第55図　第12～21号溝跡（２） …… 71
第56図　第13号溝跡出土遺物（１） …… 74
第57図　第13号溝跡出土遺物（２） …… 75

第58図　第4・5・7・9・11・12・15・18・21号溝跡出土遺物… 76
第59図　第1号井戸跡・出土遺物、第2号井戸跡… 78
第60図　第2号井戸跡出土遺物（1）…… 80
第61図　第2号井戸跡出土遺物（2）…… 81
第62図　第2号井戸跡出土遺物（3）…… 82
第63図　第1号土坑…… 84
第64図　第1号土坑出土遺物（1）…… 85
第65図　第1号土坑出土遺物（2）…… 86
第66図　第2～9号土坑…… 88
第67図　第10～22号土坑…… 89
第68図　第23～26号土坑…… 90
第69図　第3号土坑出土遺物（1）…… 91
第70図　第3号土坑出土遺物（2）…… 92
第71図　第3号土坑出土遺物（3）…… 93
第72図　第2・5～10・13・23～26号土坑出土遺物… 95
第73図　第1～24号ピット…… 97
第74図　第25～35号ピット…… 98
第75図　第36～57号ピット…… 99
第76図　第58～80号ピット……100
第77図　第81～107号ピット……101
第78図　第108～124号ピット……102
第79図　第125～147号ピット……103
第80図　第148～177号ピット……104
第81図　第178～210号ピット……105
第82図　ピット出土遺物（1）……107
第83図　ピット出土遺物（2）……108
第84図　第1号水田跡……110
第85図　第1号水田跡出土遺物……111
第86図　第1～4号性格不明遺構……113
第87図　第1号性格不明遺構出土遺物……114
第88図　第2号性格不明遺構出土遺物（1）……115
第89図　第2号性格不明遺構出土遺物（2）……116
第90図　第2号性格不明遺構出土遺物（3）……117
第91図　第3号性格不明遺構出土遺物……118
第92図　遺構外出土遺物（A区）（1）……121
第93図　遺構外出土遺物（A区）（2）……122
第94図　遺構外出土遺物（A区）（3）……123
第95図　遺構外出土遺物（A区）（4）……124
第96図　遺構外出土遺物（A区）（5）……125
第97図　遺構外出土遺物（B区）（1）……126
第98図　遺構外出土遺物（B区）（2）……127
第99図　遺構外出土遺物（B区）（3）……128
第100図　遺構外出土遺物（B区）（4）……129

挿表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……5
第2表　第1号住居跡出土遺物観察表……12
第3表　第2号住居跡出土遺物観察表……13・15
第4表　掘立柱建物跡出土遺物観察表……28
第5表　第1号河川跡出土遺物観察表……30
第6表　第1号溝跡出土遺物観察表……54～58
第7表　第3号溝跡出土遺物観察表……59
第8表　第10号溝跡出土遺物観察表……65・69
第9表　第13号溝跡出土遺物観察表……73・75
第10表　第4・5・7・9・11・12・15・18・21号溝跡出土遺物観察表… 77
第11表　第1号井戸跡出土遺物観察表……79
第12表　第2号井戸跡出土遺物観察表……82
第13表　土坑一覧表……84・86
第14表　第1号土坑出土遺物観察表……87
第15表　第3号土坑出土遺物観察表……109・94
第16表　第2・5～10・13・23～26号土坑出土遺物観察表… 94
第17表　ピット一覧表……96・98・105・106
第18表　ピット出土遺物観察表……108
第19表　第1号水田跡出土遺物観察表……109・112
第20表　性格不明遺構一覧表……112
第21表　性格不明遺構出土遺物観察表……119・120
第22表　遺構外出土遺物観察表……128・130～133

図版目次

第64図1
第64図2
図版1　調査区全景（真上から）
図版2　A区　全景（真上から）
　　B区　全景（真上から）
図版3　第1号住居跡（西から）
　　第2号住居跡（南から）
　　第1・2号掘立柱建物跡（真上から）
図版4　第3号掘立柱建物跡（真上から）
　　第4号掘立柱建物跡（真上から）
　　第5号掘立柱建物跡（南東から）
図版5　第8号掘立柱建物跡（南から）
　　第9号掘立柱建物跡（南から）
　　第10号掘立柱建物跡（真上から）
図版6　第1号溝跡　全景（南から）
　　第1号溝跡（南北軸方向）全景（北から）
　　第1号溝跡（東西軸方向）（東から）
　　第1号溝跡　遺物検出状況（北東から）
　　第1号溝跡　遺物検出状況（東から）

図版 7　第 2 号溝跡　全景（東から）
第 3 号溝跡　全景（東から）
第 4 号溝跡（西から）
第 5 号溝跡（東から）
図版 8　第 2 号溝跡　全景（東から）
右から第 6 ・ 7 号溝跡　全景（東から）
第 10 号溝跡（南から）
第 13 号溝跡（東から）
図版 9　第 13・16 号溝跡（南から）
第 15 号溝跡（東から）
第 21 号溝跡（東から）
図版 10　左から第 18～16 号溝跡（東から）
左から第 18～20 号溝跡（西から）
第 1 号井戸跡（南東から）
第 2 号井戸跡（南から）
図版 11　第 1 号土坑　遺物検出状況（南東から）
第 1 号土坑　遺物検出状況（№1）
第 1 号土坑　遺物検出状況（№3・4・6・8）
第 3 号土坑（南から）
第 5 号土坑（東から）
第 9 号土坑（北東から）
第 10 号土坑（北西から）
図版 12　第 11 号土坑（南東から）
第 26 号土坑（北から）
第 1 号河川跡（西から）
第 1 号水田跡（東から）
第 1 号水田跡（真上から）
図版 13　第 1 号性格不明遺構（東から）
第 2 号性格不明遺構　遺物検出状況（北東から）
第 2 号性格不明遺構　遺物検出状況（北東から）
作業員　作業風景
作業員　作業風景
図版 14　第 6 図 1 ～ 7
第 8 図 1
第 8 図 2，4，6 ～ 9，11，12
第 8 図 3，5，10，13～20
第 8 図 24～29
第 8 図 30～34
第 20 図 1－Ｐ4－1
第 20 図 4－Ｐ2－1，Ｐ4－2・3，Ｐ6－1・2・3
図版 15　第 23 図 1 ～ 9
第 24・25 図 51～55，60
第 24 図 38
第 24 図 39
第 24 図 40
第 24 図 41
第 24 図 42
第 24 図 43
第 25 図 57
第 25 図 58
第 26 図 81
第 26 図 82，83
第 23 図 32
第 27 図 94
図版 16　第 33 図 128～131
第 34 図 132～135
第 35 図 136～138
第 36 図 139～141
第 37 図 142
第 38 図 144
第 38 図 145
第 39 図 146
第 39 図 147
第 41 図 150
第 41 図 151
図版 17　第 33 図 130
第 33 図 131
第 35 図 136
第 35 図 137
第 35 図 138
第 36 図 140
第 36 図 141
第 37 図 143
第 38 図 144
第 39 図 147
第 40 図 148
第 40 図 149
図版 18　第 28 図 97
第 28 図 98
第 28 図 99
第 30 図 116
第 31 図 122
第 28 図～第 30 図 101，104，112，115，117，118
第 30 図 120
第 32 図 127
第 42 図 162
第 42 図 163
第 43 図 169

第 43 図 172
第 44 図 173
図版 19　第 51 図 9
第 51 図 10
第 51 図 11
第 51 図 12
第 51 図 13
第 53 図 53
第 56 図 8
第 56 図 9
第 56 図 10
第 56 図 17
第 56 図 18
第 56 図 20
第 56 図 22
第 56 図 31
第 57 図 38
図版 20　第 58 図 18-1
第 60 図 1 ～ 5
第 60 図 6
第 60 図 7
第 60 図 8，10～15
第 60 図 20
第 60 図 21
第 60 図 25
第 61 図 26
第 61 図 27
第 61 図 29
図版 21　第 65 図 3
第 65 図 4
第 65 図 5
第 65 図 6
第 65 図 7 ～16
第 82 図 43-1
第 82 図 104-1
第 82 図 68-3
第 82 図 144-1
第 83 図 207-1
第 85 図 1 ～ 3
第 85 図 5 ～ 7
第 85 図 27，28
第 85 図 10
第 85 図 11
図版 22　第 87 図 6
第 87 図 5
第 87 図 14
第 87 図 15，16
第 88 図 21
第 89 図 37
第 89 図 38
第 89 図 41～43
第 90 図 49～54
第 90 図 56
第 92 図 1 ～ 4
第 92 図 19
第 92 図 34
第 92 図 35
第 92 図 36
第 93 図 52
第 92 図 54
図版 23　第 93 図 56
第 93 図 58
第 94 図 87
第 95・96 図 116～120
第 96 図 123，124，126，127
第 97 図 1
第 97 図 14
第 97 図 18
第 98 図 28
第 98 図 29
第 98 図 30
図版 24　第 25 図 67～72
第 51 図 37，38
第 58 図 9-4
第 59 図 6，9，10，13
第 60 図 16，17，19
第 69 図 10
第 72 図 6-9，8-2，25-1
第 85 図 14，16，22
第 87 図 8，9，第 88 図 8 ～11
図版 25　第 88 図 12～15，17，19～29，31，33，35
図版 26　第 88 図 36、第 94 図 90～95，97，99～106
図版 27　第 99 図 37～41
調査箇所周辺（南東から）

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成 26 年 10 月 22 日付けで、宗教法人一乗院から埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。開発の内容は面積 1,221 ㎡の墓地造成及びそれに伴う参道を増設する事業であった。

この場所は平成 15 年５月 20 日に同埋蔵文化財発掘の届出が出され、同年中に旧熊谷市教育委員会で試掘調査を実施し、現地表面下 80 ～ 60 ㎝前後で弥生～古墳時代の遺物、遺構が検出され、埋蔵文化財の所在が確認された。その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を事業者に回答するとともに、その保存に関する協議を重ねた結果、掘削を伴わない形の駐車場として保護することとなった。

今回の届出はその駐車場を墓地として造成しようというもので、過去の試掘調査実績から、発掘調査を実施する必要があることから、その保存に関する協議を重ねたが、墓地として造成する計画の変更は行わないとのことであったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

熊谷市として予算編成を経ての実施では造成計画に支障をきたすことから、新たに熊谷市諏訪木遺跡調査会を設置し、調査会による発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、熊谷市諏訪木遺跡調査会から、平成 27 年３月 25 日付熊教社埋第 617 号で、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、平成 27 年４月１日から開始された。

なお、埼玉県教育委員会から、熊谷市教育委員会へ平成 27 年３月 31 日付教生文第３－ 68 号で発掘調査実施の指示通知があった。

発掘調査終了後、平成 28 年５月１日から遺物整理および報告書刊行作業を開始した。

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

発掘調査は、平成27年４月１日から平成27年７月14日にかけて行われた。調査面積は、1,221 ㎡であった。調査箇所は調査区内での残土処理ができないことから、調査区を二か所に分け、A区（西側）、B区（東側）とし、A区の調査終了後、B区の調査を行うという形で調査した。

まず、A区について、平成 27 年４月１日～ 10 日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行った。この時期には珍しく、雨が続いたため、表土剥ぎに想定外の時間を要した。表土を剥ぎ終わったのち、４月 14 日から遺構精査作業を行った。その際、住居跡、溝跡、多数の土坑、ピットなどが確認され、順次遺構の調査に着手した。

B区は平成 27 年５月 29 日から６月１日まで遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、遺構精査作業を行った。その際、溝跡、多数の土坑、ピットなどが確認され、順次遺構の調査に着手した。

ここの調査区では、確認面以下の層が粘質土であったため、水が貯まりやすく、６月から７月にはゲ

リラ豪雨や夕立により、水の浸み出しや、現場復旧により苦戦を要した。平成27年7月14日、調査のすべてを終了した。

（2）整理・報告書作成作業

整理作業は、平成28年5月1日から始めた。まずは、遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後11月までに順次、遺物の実測、拓本取りを行った。12月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を行い、2月下旬には、原稿執筆、割付等の作業をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月24日に本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市諏訪木遺跡調査会

（1）発掘調査

平成27年度

会　　長	野原　　晃
副 会 長	米澤ひろみ
事務局長	山崎　　実
事務局次長	森田　安彦
統括調査員	吉野　　健
調 査 員	松田　　哲
調 査 員	小島　洋一
調 査 員	蔵持　俊輔
調 査 員	腰塚　博隆
調 査 員	山下　祐樹

主体者　熊谷市教育委員会

（2）整理・報告書作成

平成28年度

教 育 長	野原　　晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	山崎　　実
社会教育課副参事	森田　安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野　　健
主　　査	松田　　哲
主　　査	小島　洋一
主　　査	蔵持　俊輔
主　　任	山下　祐樹
主　　任	腰塚　博隆
主　　任	金子　正之
主　　事	武部　喜充
主　　事	島村　範久
主　　事	大野　美知子
嘱託職員	山崎　和子

第1図　埼玉県の地形図（諏訪木遺跡位置図）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

諏訪木遺跡は、熊谷市に所在し、JR 高崎線熊谷駅の南約２㎞、荒川から北へ約 2.2 ㎞、利根川から南へ約 10.0 ㎞に位置する。

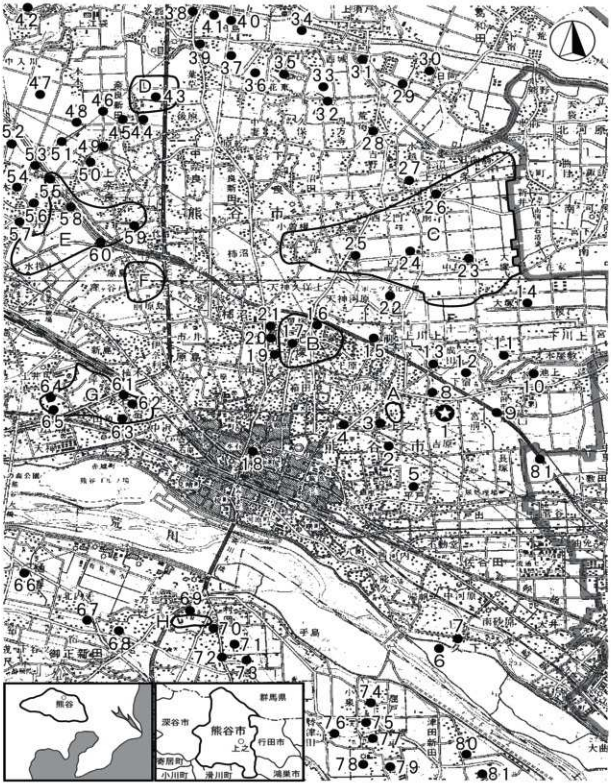
諏訪木遺跡の所在する上之地区は、熊谷市の中央東部にあたり、櫛挽台地の北端及びその北と北東に展開する妻沼低地上にある。櫛挽台地は寄居町末野付近を扇頂に、荒川の両岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地のうち、荒川左岸側が浸食されてできたものである。そして、妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている洪積扇状地の新荒川扇状地（市西部）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その荒川左岸の新荒川扇状地の、標高約 24 m前後に立地し、周囲より微高地であり、その周囲には水田が広がっており、近年では住宅地としての開発が目立つ場所である。遺跡を覆っていた土は、関東造盆地運動による地盤の沈下、及び微高地ではあるが、荒川の度重なる河川氾濫の影響がわずかに認められ、およそ 60 ～ 80 ｍの厚さをもっていた。

次に、本遺跡を中心に櫛挽台地及び妻沼低地における歴史環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。

まず、縄文時代であるが、熊谷市東部では極めて少ない。早期段階では熊谷市に隣接する深谷市東方城跡において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず、低地にも出現し始め、中期も特に後半段階の加曽利Ｅ式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地への進出が顕著になり、西城切通遺跡（地図未掲載）、場違ヶ谷戸遺跡（地図未掲載）など、櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が確認できるようになる。今回報告する諏訪木遺跡も前期遺跡が確認できた遺跡となる。晩期では遺跡数が減少し、諏訪木遺跡は後期に続いて集落が確認できた唯一の事例である。調査において、遺構に伴って、大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。

弥生時代に入ると、初期段階である前期末から中期前半において藤之宮遺跡で土器片が検出されている。遺構として確認できた遺跡は櫛引台地直下の低地に集中しているが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡では前期末から中期前半の再葬墓が 13 基確認され、このほかにも、飯塚遺跡、飯塚南遺跡や深谷市の上敷免遺跡などでも再葬墓が確認されている。中期中頃になるとこれまでの状況は一変して、集落跡の展開が増す。東日本でも最古の段階の環濠集落と考えられる池上遺跡や、その墓域される方形周溝墓が検出された行田市の小敷田遺跡などがあり、集落としての展開が本格的に始まる。中期後半は前中西遺跡、諏訪木遺跡、北島遺跡で集落が営まれており、前中西、諏訪木、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。北島遺跡では、大規模な集落展開と墓域の形成のほかに、特筆すべきこととして、水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。このことは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、注目すべき遺跡として挙げられる。後期になると初頭については藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が確認された事例は前中西遺跡、北島遺跡以外に周辺での確認事例はない。

古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。横間栗遺跡・別府条里遺跡・一本木遺跡・中耕地遺跡・北島遺跡弥藤吾新田遺跡等



第２図　周辺遺跡分布図

がある。横間栗遺跡では住居跡が3軒、北島遺跡では21軒検出されており、北島遺跡さらに弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・常光院東遺跡（後者2遺跡は地図未掲載）等で遺構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の甕を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の竈をもつ住居跡が検出されている。また、集落内の祭祀は東川端遺跡に確認されていて、遺物が集中分布している谷にむかう斜面部で剣形の滑石製模造品が検出されている。また、古墳に目を向けると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防に横塚山古墳が存在する。そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりではなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。櫛挽台地及び新荒川扇状地上では、樋の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が150軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上に上る。また現在では同遺跡の一部となっている上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居が50軒以上検出された。三ヶ尻遺跡内の天王遺跡等でも後期の集落が検出されている。一方、妻沼低地の自然堤防上では、一本木前遺跡・飯塚南遺跡・北島遺跡・小敷田遺跡等が存在する。一本木前遺跡では後期を中心に奈良・平安時代の住居跡が450軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見され、折り重なるように土師器杯等が出土し、それとともに臼玉も出土している。

第1表　周辺遺跡一覧表

1	諏訪木遺跡	24	女塚遺跡	47	別府条里遺跡	70	北西原遺跡
2	前中西遺跡	25	赤城遺跡	48	一本木前遺跡	71	塚本遺跡
3	藤之宮遺跡	26	中条遺跡	49	土用ヶ谷戸遺跡	72	西浦遺跡
4	箱田氏館跡	27	中条氏館跡	50	奈良氏館跡	73	腰廻遺跡
5	平戸遺跡	28	光屋敷遺跡	51	天神下遺跡	74	北方遺跡
6	久下氏館跡	29	先載場遺跡	52	寺東遺跡	75	宮前遺跡
7	市田氏館跡	30	八幡間遺跡	53	稲荷東遺跡	76	西浦町遺跡
8	成田氏館跡	31	東城館跡	54	玉井陣屋跡	77	宮前町遺跡
9	池上遺跡	32	長安寺遺跡	55	新ヶ谷戸遺跡	78	宮町遺跡
10	古宮遺跡	33	西城館跡	56	水押下遺跡	79	中町遺跡
11	上河原遺跡	34	西城切通遺跡	57	稲荷木上遺跡	80	旭町遺跡
12	宮の裏遺跡	35	鵜森遺跡	58	下河原中遺跡	81	北町遺跡
13	成田遺跡	36	森谷遺跡	59	本代遺跡	82	小敷田遺跡
14	中条条里遺跡	37	鷲ヶ谷戸東遺跡	60	下河原上遺跡		
15	河上氏館跡	38	下三丁免遺跡	61	天神前遺跡	A	上之古墳群
16	八幡山遺跡	39	場逢ヶ谷戸遺跡	62	兵部裏屋敷跡	B	肥塚古墳群
17	出口下遺跡	40	宮前遺跡	63	御蔵場跡	C	中条古墳群
18	熊谷氏館跡	41	実盛館	64	高根遺跡	D	奈良古墳群
19	肥塚館跡	42	道ヶ谷戸条里遺跡	65	不二ノ腰遺跡	E	玉井古墳群
20	出口上遺跡	43	横塚遺跡	66	宮前遺跡	F	原島古墳群
21	肥塚中島遺跡	44	東通遺跡	67	宿遺跡	G	石原古墳群
22	北島遺跡	45	西通遺跡	68	万吉西浦遺跡	H	村岡古墳群
23	中島遺跡	46	中耕地遺跡	69	村岡館跡		

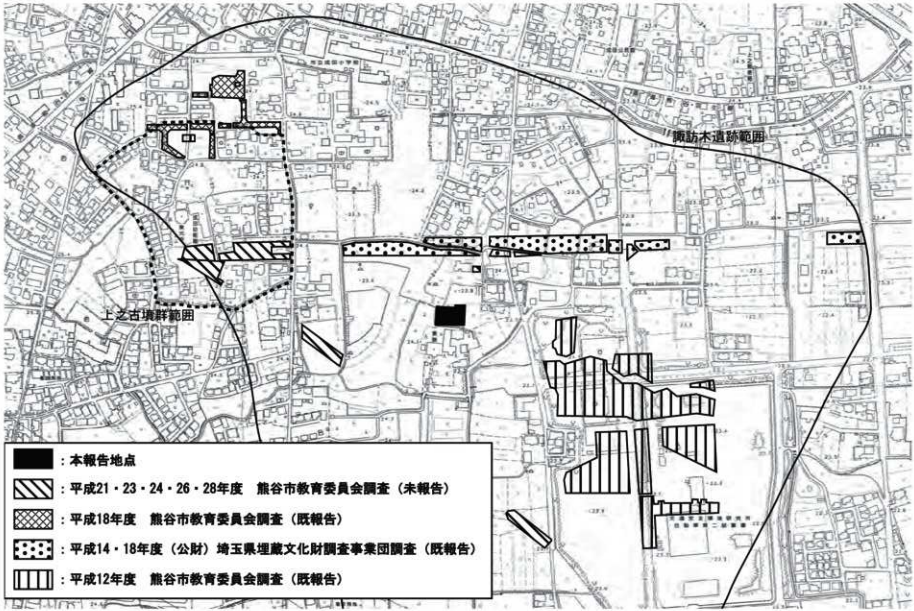
第３図　調査地区位置図

一方、古墳を見てみると、群を形成して築造されているのがわかる。櫛挽台地上の別府古墳群・在家古墳群・籠原裏古墳群・三ヶ尻古墳群、新荒川扇状地の玉井古墳群・広瀬古墳群・石原古墳群等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀ないし8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。別府古墳群は、農夫の埴輪を出土している。籠原裏古墳群は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀後半～8世紀初頭の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相において見流すことのできない発見である。三ヶ尻古墳群は、前方後円墳の二子山古墳を盟主墳とする100基以上の古墳で形成されている大古墳群であるが、現在でも61基の所在が確認されている（消滅・半壊を含める）。また、広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し、熊谷市唯一の国指定史跡として知られている。

古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするもの奈良・平安時代へと継続されていく。奈良時代には、この地域も律令体制に組み込まれていき、別府条里遺跡等が見られる。このころの中心的遺跡は櫛挽台地上に見られ、この地域には幡羅郡が設置され、台地上に「原郷」の地名が残り、正倉館、厨家、曹司等が発見された幡羅郡家跡の幡羅遺跡、8世紀初頭創建の西別府廃寺、湧泉祭祀跡・西別府祭祀遺跡が存在する。西別府廃寺は二度の発掘調査によって寺域を区画する大溝、伽藍配置は不明であるが基壇建物跡、瓦溜まり状遺構等とともに軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が大量に出土し、瓦は8世紀初頭から9世紀後半のものまで確認されており、県内でも滑川町寺谷廃寺に次いで最も古い建立の寺院の一つとして認識されている。また、その北西約200 mの湯殿神社裏のかつて湧水があった箇所には西別府祭祀遺跡が所在し、古墳時代後期から平安時代までの土師器・須恵器と共に古墳時代後期の馬形・櫛型・勾玉形・有孔円板形・有線円板形・剣形等の滑石製模造品が約297点発見されており、県内でも類例がほとんどない湧泉に対する祭祀の実態を考える上で貴重な遺跡である。西別府廃寺は、幡羅郡家との関係を考慮に入れれば、幡羅郡の郡司が関わった郡寺的な機能を有することが考えられるし、郡家成立以前の周辺の古墳群を形成した有力氏族との関係も想定できる。

奈良・平安時代の集落遺跡としては、広瀬地区には本遺跡のほか在家遺跡・籠原裏遺跡・拾六間後遺跡・飯塚南遺跡・新ケ谷戸遺跡・横塚遺跡・北島遺跡等がある。特に北島遺跡は7世紀から12世紀の大規模な集落で、多数の住居跡とともに大規模な掘立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等など、興味深い発見がされている。一本木前遺跡の11世紀初頭の住居跡からは、瑞花鸞鳳八稜鏡が出土し、県内初の住居跡出土例として注目されている。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。別府城跡・別府氏館跡・西別府館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・兵部裏屋敷等であるが、いずれの館跡も実態は不明である。その中で残りの良いものの中に、本遺跡の北西に位置する別府城跡がある。別府氏の居館で方形の敷地に土塁の一部と空堀をよく残している。また、三ヶ尻地区に所在する黒沢館跡は、発掘調査によって、渡辺崋山が記した『瓴』に残る「黒沢屋敷」の記載と調査成果が合致した貴重な例である。その北側に所在する樋の上遺跡でも、15～16世紀の土壙・集石遺構とともに比較的深くコーナーをもつ溝跡が検出されており、館跡の一部である可能性が考えられている。なお、中世以降の歴史的実態はまだまだ情報不足で、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところであろう。



第４図　調査地区周辺発掘調査実績

Ⅲ　遺跡の概要

1　諏訪木遺跡について

諏訪木遺跡の所在する上之地区周辺はこれまで数十年にわたり、発掘調査を実施している。また、現在上之地区においては、熊谷市による区画整理事業が進行しており、隣接する前中西遺跡、藤の宮遺跡と合わせて、毎年、区画整理地内における各遺跡で発掘調査を実施している。諏訪木遺跡は、規模としては78万㎡で、縄文から江戸時代に至るまでの複合遺跡である。

2　調査の方法

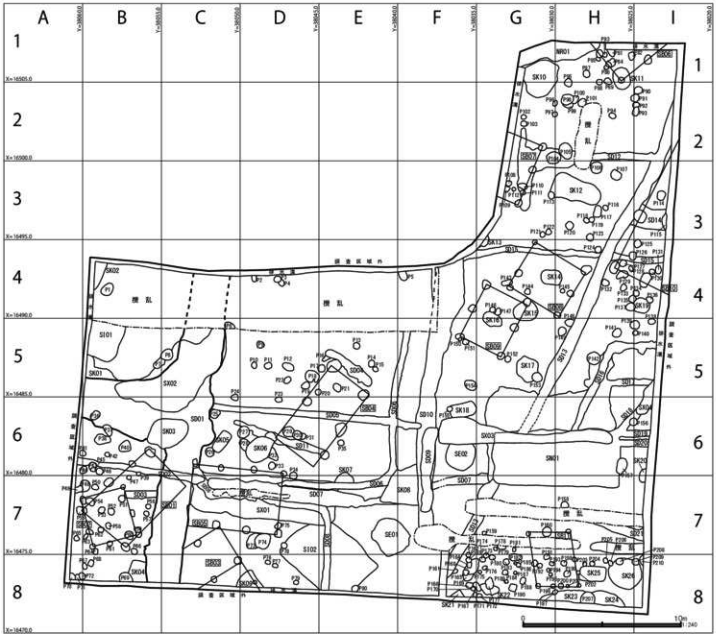
発掘調査の方法は、１辺５ｍのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をＡ－１として東へＡ・Ｂ・Ｃ……、南へ１・２・３……とし、Ａラインは北から南へＡ－１・Ａ－２・Ａ－３……と呼称した。Ｂライン以西もＡラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、先述のグリッド設定を行った。なお、座標は日本測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。今回、調査箇所を、２区に分け、西側をＡ区、東側をＢ区とし、Ａ区から作業を開始した。表土剥ぎ後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。原則として遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごとに一括して慎重に取り上げた。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして、最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

3　検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、合計して、竪穴式住居跡２軒、掘立柱建物跡９軒、河川跡１条、溝跡22条、土坑26基、井戸跡２基、水田跡１基、性格不明遺構14基、ピット多数であった。

遺構・遺物については、一番古いもので表採によるものであるが、縄文時代後晩期、それから弥生時代中期～後期、古墳時代中期～後期、奈良・平安時代、さらに中世、近世にわたって帰属するものが確認された。本遺跡の主体的な時期は前１世紀ごろから６世紀後半の弥生・古墳時代、そして中世、近世以降は寺院に関係する遺物が検出される大体14世紀から18世紀と、大まかに２つの時期にわたって展開されていたことが確認できる。検出した遺物量はコンテナ（大きさ：縦40㎝、横60㎝、深さ14㎝）に20箱であった。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
1
2
3
4
5
6
7
8
X=96000.0
X=96015.0
X=96030.0
X=96045.0
X=96060.0
X=96075.0
X=96090.0
X=96105.0
X=96120.0
Y=16505.0
Y=16500.0
Y=16495.0
Y=16490.0
Y=16485.0
Y=16480.0
Y=16475.0
Y=16470.0
0
10m
1:240

第５図　調査区全測図

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居跡

住居跡は、総じて２軒検出し、まず、１軒は調査区西端から検出され、もう１軒は調査区中央の南側で確認できた。うち第２号住居跡からは、検出遺物として、弥生時代中期から後期にかかる土器と、勾玉、管玉が数点検出されている。調査面積のうち、住居数が少ないように思えるが、集落としての展開は、今回の調査区より西に広がっていると考えられる。

以下住居跡ごとに詳細を記載する。

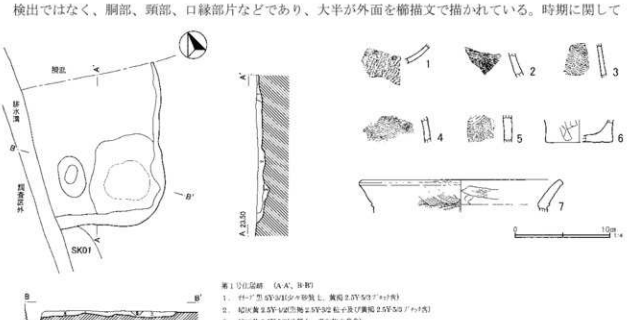
第１号住居跡（第６図）

Ｂ－５グリッドから検出した。第１号土坑と重複関係にあり、それに掘り込まれていた。また残念ながら、北側部分が大規模な攪乱により消滅、また西側は調査区域外であり、一部のみの現存している形である。

正確な規模は不明であるが、検出長軸がおよそ 2.48 m、短軸は 2.15 mを測り、主軸方向は確定できないが、北東方向、もしくは北西方向を向くものと考えられる。確認面からの深さは、平均して 0.1 m であることが確認された。床面は一様に平坦ではなく、いくらかピット状のくぼみや、起伏が目立つ。住居跡としての残存状態は悪く、覆土は基本層で２～３層しかない。水平堆積であることから自然堆積で埋まったと推定される。

床面にはピット状の落ち込みが１基、土坑状の落ち込みが１基あるが、残存状態が悪く、それらの性格について判断できなかった。

出土遺物は検出されたものすべてが弥生土器であった。器種は甕、壺などある。いずれも一個体分の検出ではなく、胴部、頭部、口縁部片などであり、大半が外面を櫛描文で描かれている。時期に関して



第１号住居跡　（A-A'、B-B'）
1．オリーブ黒 5Y3/1(少々砂気し、黄褐 2.5Y5/3ブロック含)
2．暗灰黄 2.5Y-4/2(黒色粒と 2.5Y5/2 粒子及び黄褐 2.5Y5/3ブロック大)
3．暗灰黄 2.5Y-5/2(砂質子、赤褐粒子含)
4．黄灰砂質 2.5Y-4/1(灰褐 2.5Y-5/3ブロック、粒子多く含)
5．オリーブ黒砂質 7.5Y-3/1

第６図　第１号住居跡・出土遺物

は、大体弥生時代中期後半と推測される。

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIN	橙 7.5YR-6/6	B	底部破片	外面：櫛描文 内面：ヘラナデ調整痕有	
2	弥生土器 壺	-	-	-	ABDGIKN	にぶい橙 7.5YR-5/3	B	頸部破片	外面ヘラケズリ有	
3	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEI	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	破片	外面：櫛描波状文有　４本	
4	弥生土器 壺	-	-	-	BDEG	褐灰 7.5YR-4/1	B	胴部破片	外面：櫛描縦羽状文有	
5	弥生土器 壺	-	-	-	BDEGHI	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	破片	胴部外面ヘラ描沈線文，及びその他櫛描文有	
6	弥生土器 壺	-	(2.4)	(7.2)	BEGHIK	にぶい橙 5Y-6/3	B	底部破片	外面：縦位ナデ痕	
7	弥生土器 壺	(21.6)	(3.4)	-	BDEGHI	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 10%	口縁部外面ヘラナデ調整有（5～6本一単位） 外面：頸部ヘラ調整有（ヘラナデ調整具に同一器具） 内面：ヘラナデ有 口縁部外面やや外反する	

第２号住居跡（第７図）

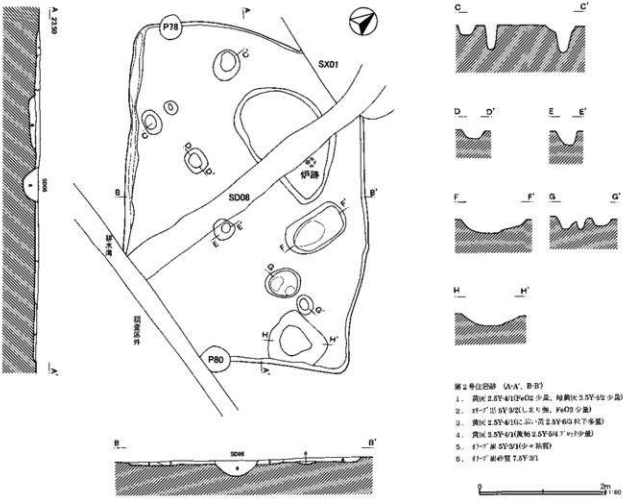
Ｄ，Ｅ－７，８グリッドから検出した。他の遺構との重複関係があり第８号溝跡および第１号性格不明遺構が住居跡の一部を掘り込んでいた。なお、南側は調査区域外である。

正確な規模は不明であるが、ほぼ全形において検出されたと考えられる。検出長軸がおよそ 5.3 m、短軸は 3.84 m を測る。住居跡の北東端には僅かに焼土、炭化物を含む落ち込みが確認され、炉跡と推測される。確認面からの深さは最大で 0.6 m であった。床面はいくらかの凹凸がみられるが全体的に平坦であり、住居跡全体にはいくらかのピットや落ち込みが確認でき、柱穴であろう遺構も確認できたが、その多くは残存状態が悪く、詳細は不明であった。しかし、西側のピット状の落ち込み２基は床面から 0.4 m 程度の落ち込みであることから柱跡であろうと推測される。

基本土層は３～４層のみであり、レンズ状に堆積したことが判断できる。

出土遺物として特徴的なものは、勾玉、管玉が炉跡と考えられる落ち込みの南東脇から数点、検出された。通常それらの多くは、副葬品として埋葬されるのが一般的であることから考えると、今回の検出例は珍しいことといえる。

遺物は、この住居跡全体的から大量に出土し、実測可能な出土遺物はおよそ 30 点ほどであった。土器としては、弥生土器の壺や甕であり、それ以外には勾玉や管玉、臼玉、磨製石斧、剥片石器などであった。弥生土器は実測したすべてにおいて、破片であり、一個体として様相を確認できるものはなかった。しかし、外面の形成から土器の特徴を確認でき、斜線文などがあり、沈線文として重三角文や、列点文、連弧文、重菱形文など、また櫛描文として羽状文や波状文が多用されているものが検出された。時期としては、弥生時代中期から後期に位置する段階であろうと推測される。



第７図　第２号住居跡

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表（１）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺	-	(5.9)	-	ABCHIKN	にぶい赤褐5Y-5/3	B	頸部60%	外面上段：ハケ目（斜位）後、横ミガキ痕有 下段：突帯部（２本）有 突帯上に櫛歯状工具による刺突列点文（２本１組）有 内面：ミガキ調者	
2	弥生土器 壺	-	-	-	ABCEIMN	外面：橙5YR-6/6 内面：灰褐5YR-6/2	B	破片	外面：櫛描文及び波状文 内面：摩耗者	
3	弥生土器 壺	-	-	-	ABEN	橙7.5YR-6/6	B	破片	外面：横走沈線文（４本以上か？）及び斜線文有	
4	弥生土器 壺	-	-	-	ACI	外面：灰褐7.5YR-4/2 内面：明褐7.5YR-5/6	B	破片	外面：斜線文 or 横羽状文有 内面：ヘラナデ痕	
5	弥生土器 壺	-	-	-	ACN	外面：橙5YR-7/6 内面：明黄褐10YR-7/6	B	破片	外面：ヘラ描重三角文か？ 内面：摩耗者	
6	弥生土器 壺	-	-	-	AC	明褐7.5YR-5/6	B	破片	外面：櫛描波状文有（４本一単位） 内面：使用痕有（煤付着）	
7	弥生土器 壺	-	-	-	ACGI	橙7.5YR-7/6	B	口縁部破片	波状口縁 外面：櫛描羽状文有	
8	弥生土器 壺？	-	-	-	BCI	黄褐10YR-3/1	B	頸部片	外面：櫛描文有	
9	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIJ	にぶい橙7.5YR-6/3	B	破片	外面：櫛描羽状文	
10	弥生土器 壺	-	-	-	ABIK	明褐灰7.5YR-7/2	B	破片	外面：ヘラ描沈線及び縄文痕（LR単節か？） 摩耗痕著しい	

24～29は1/1　0　10cm　1:1

35は1/2　0　5cm　1:2

0　10cm　1:4

第８図　第２号住居跡出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表（２）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
11	弥生土器？	-	-	-	ABEIMN	橙 5YR-6/6	B	破片	器種不明 外面：篠状文有 内面：ヘラミガキ痕	
12	弥生土器 甕	-	-	-	ABIJ	外面：赤褐 5YR-4/6 内面：黒褐 2.5Y-3/1	B	破片	外面：櫛描羽状文有	
13	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIJ	外面：にぶい黄褐 10YR-5/3 内面：褐灰 10YR-6/1	B	破片	外面：ヘラ描押し引き刺点文有	
14	弥生土器 壺	-	-	-	ABEGIJK	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	破片	外面：斜位沈線（ヘラ描文） 沈線区間ごとに LR 単節縄文有	
15	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEIJM	灰黄褐 10YR-6/2	B	破片	外面：ヘラ描による重曲形文（内部に刺突充填文有）	
16	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIKM	褐灰 10YR-4/1	B	破片	外面：ヘラ描沈線による連弧文有 内面：摩耗著	
17	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEGIJKM	灰黄褐 10YR-6/2	B	破片	外面内面共に摩耗著 外面：沈線痕わずかに確認	
18	弥生土器 壺？	-	-	-	CIKN	褐灰 10YR-4/1	B	破片	外面：ヘラ描沈線による重四角文か？ 内外共摩耗著	
19	弥生土器 壺	-	-	-	EHN	灰黄褐 10YR-5/2	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線文 内外共摩耗著	
20	弥生土器 壺	-	-	-	EKN	灰黄褐 10YR-6/2	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線間に列点文が施されている 内外共摩耗著	
21	土師器 坏	-	-	-	ACI	橙 7.5YR-7/6	B	破片	模倣坏 内外面横ナデ痕 流れ込みか？	
22	弥生土器 壺	-	-	-	ABI	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部～胴上片	口縁部先端欠損 胴部にかけて櫛描羽状文有	
23	ミニチュア土器	(5.2)	2.3	(3.8)	ABCGI	明褐 7.5YR-5/6	B	50%	内外面横ナデ痕	
24	勾玉	最大長 0.85	最大幅 0.5	最大厚 0.25	重さ 0.17g					緑色凝灰岩
25	勾玉	最大長 1.2	最大幅 0.85	最大厚 0.35	重さ 0.56g					緑色凝灰岩
26	管玉	最大長 0.7	最大幅 0.27	最大厚 0.27	重さ 0.08g					緑色凝灰岩
27	管玉	最大長 0.8	最大幅 0.25	最大厚 0.25	重さ 0.08g					緑色凝灰岩
28	管玉	最大長 0.9	最大幅 0.27	最大厚 0.27	重さ 0.11g					緑色凝灰岩
29	臼玉	最大径 0.55	最大厚 0.35	重さ 0.16g						黒色凝灰岩
30	磨製石斧	最大長 6.7	最大幅 4.4	最大厚 1.4	重さ 60g					フォルンフェルス
31	石器(剥片石器)	最大長 6.1	最大幅 5.1	最大厚 1.5	重さ 41g					フォルンフェルス
32	石器(剥片石器)	最大長 (8.5)	最大幅 4.5	最大厚 (1.8)	重さ 88g				横長の剥片を利用	フォルンフェルス
33	石器(剥片石器)	最大長 6.2	最大幅 2.6	最大厚 0.5	重さ 7.0g				横形スクレイパー	砂岩
34	たたき石	最大長 9.9	最大幅 2.3	最大厚 1.6	重さ 49g				敲打痕有（上下共に）	砂岩
35	釘	最大長 2.3	最大幅 0.35	最大厚 0.35	重さ 0.55g				後世の流れ込みか？ 頭部折り曲げて留える 1寸釘か？	

２　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、総じて９軒検出し、第１号、第２号掘立柱建物跡が調査区西端で検出され、第３号掘立柱建物跡が、調査区の中央南隅で確認でき、第４号掘立柱建物跡は調査区の中央やや西側で確認できた。第５号掘立柱建物跡は第３号掘立柱建物跡の北に位置し、第６号、７号掘立柱建物跡は調査区北側に、第８号、９号掘立柱建物跡は互いに隣接する形で、調査区中央やや東に位置する。そして第10号掘立柱建物跡は調査区の南東隅に検出され、第11号掘立柱建物跡は調査区東隅に位置している。

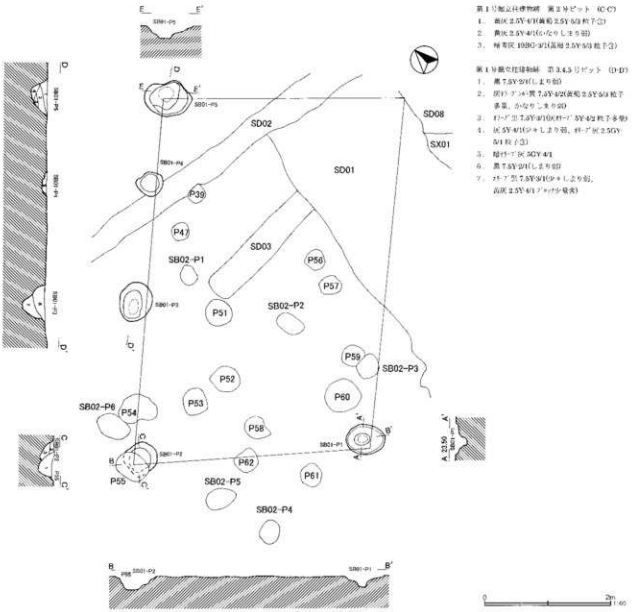
以下、掘立柱建物跡ごとに詳細を記載する。

第１号掘立柱建物跡（第９図）

Ｂ，Ｃ－６，７グリッドから検出した。第２号溝跡、第 55 号ピットと直接重複関係にあり、本遺構が、第２号溝跡を一部掘り込んでいた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第２号掘立柱建物跡、第３号溝跡、第 39、47、51 ～ 54、56 ～ 60、62 号ピットと重複関係にある。なお、北東方向の柱穴が確認できなかったが、第１号溝跡によって掘り込まれてしまったと考えられる。

一部が第１号溝跡により掘り込まれていると推定され、建物跡は、南北棟側柱式掘立柱建物跡と推測され、規模は、１間×３間、桁行 5.9 m（19.4 尺）、梁行 3.65 m（12 尺）、面積は検出分で 21.5 ㎡ある。柱間も、桁行が北から西面で 1.5 m－ 1.9 m－ 2.42 m（4.9 尺－ 6.2 尺－ 7.9 尺）、梁行は西から南面で 3.6 mである。主軸方位は、N－ 42°－Eで北東方向を指すと思われる。

柱穴は円形から楕円形の掘り跡があり、長軸 0.43 ～ 0.75 m、短軸 0.48 ～ 0.52 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 18 ㎝、Ｐ２が 21 ㎝、Ｐ３が 35 ㎝、Ｐ４が９㎝、Ｐ５が 25 ㎝を測る。



第９図　第１号掘立柱建物跡

柱痕跡は、多くが平面上で柱穴を確認することができ、断面からは柱穴を確認することはできず、P4は掘り方が浅かった。また、平面上からもわかる通り、第1号溝跡に掘り込まれ、半分の柱穴が確認できないが、ほぼ柱筋の通りが概ね良い建物である。土層断面観察からは明確な柱穴が確認できなかったことから推定される柱の直径は、不明である。

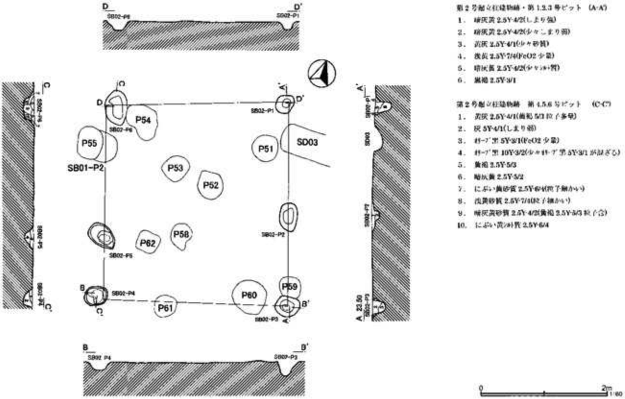
出土遺物は、1点のみP3、P4の柱穴痕内から弥生土器壺と石製模造品がそれぞれ1点ずつ出土した。出土数がわずかであったことから、時期判断は残念ながら確定できなかった。

第2号掘立柱建物跡（第10図）

A，B－7グリッドから検出した。第59号ピットと直接重複関係にあり、本遺構が、第59号ピットを一部掘り込んでいた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第1号掘立柱建物跡、第51～54号、58～62号ピットと重複関係にある。

総柱跡が検出でき、この建物は1間×2間の南北棟側柱式掘立柱建物跡と推定され、規模は、桁行が3.2 m（10.5尺)、梁行は2.62～2.98 m（8.6尺～9.8尺）で、面積は約9.5㎡を測る。柱間は、桁行が北から東面で1.75 m－1.5 m（5.77尺－2.25尺)、西面で2.1 m－1.2 m（6.9尺－3.96尺)、梁行が北面で2.62 m（8.6尺)、南面で2.98 m（9.8尺）であった。主軸方位は、やや北東を指し、N－75°－Eであった。柱穴は円形、楕円形状などの掘り方で、長軸0.55 m－0.30 m、短軸0.40～0.26 mを測る。

掘り方の深さは、いずれも確認面からP1が26 cm、P2が12 cm、P3が22 cm、P4が15 cm、P5が15 cm、P6が18 cmを測り、P4を除き、四隅の柱穴は大体均等な深さであった。



第10図　第2号掘立柱建物跡

すべてのピットの平面確認で柱痕跡が確認でき、複数の柱穴痕で断面観察から柱穴の確認ができた。特に東面の桁行の柱穴はすべて断面観察で柱痕跡が判別できた。桁行、梁行ともほぼ同じ尺度であり、各柱穴とも柱筋が通っていることから、柱筋の通りが概ね良い建物である。

土層断面観察から柱痕跡の確認ができたことから、推定される柱の直径は、約18～20㎝と推定される。

残念ながら、柱穴からは出土遺物は、検出されなかった。

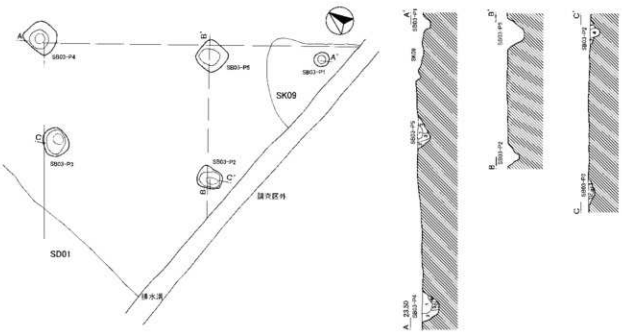
第３号掘立柱建物跡（第11図）

Ｃ－７，８・Ｄ－８グリッドから検出した。第９号土坑と直接重複関係にあり、本遺構が、その遺構の一部を掘り込んでいる。直接切り合いの関係にはないが、第１号溝跡と重複関係にあると推測され、本遺構の一部柱穴はこの第１号溝跡によって掘り込まれてしまったものと推測できる。

なお、この建物跡のＰ４は第５号掘立柱建物跡のＰ４として相関関係にある。

南側が調査区域外、西側が第１号溝跡のため、詳細は不明だが少なくとも２間以上×２間以上の一面仕切りのある側柱式掘立柱建物跡で、規模は、桁行が検出部分で4.4 m（7.7尺）、梁行検出部分で1.68 m（5.5尺）、面積は約7.3㎡以上を測るものと推測される。柱間も、桁行は北から2.65 m－1.75 m（8.7尺－5.7尺）、梁行は一間部で1.68 m（5.5尺）である。主軸方位は、N－40°－Eを指す。

柱穴は東桁部分が隅丸方形以外、ほぼ円形の掘り方で、長軸0.40～0.50 m、短軸0.32～0.47 mを測る。ただし、Ｐ１については、第９号土坑に掘り込まれているため、性格な様相は不明である。



第11図　第３号掘立柱建物跡

掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 15 ㎝、Ｐ２が 18 ㎝、Ｐ３が 12 ㎝、Ｐ４が 28 ㎝、Ｐ５が 22 ㎝を測る。柱は、Ｐ３、４、５の平面確認で柱痕跡が確認でき、Ｐ３からＰ４にかけての柱筋の通りはいささか悪いが、柱間の間隔や、柱幅から規模の大きな建物であったことが推測できる。土層断面観察からはＰ２、３、５で柱痕が確認でき、いずれも、土層断面から見ると柱穴のほぼ中央にやや斜めの状態で柱痕が位置し、約 14 ～ 16 ㎝の太さと考えられる。出土遺物の検出はなかったが、この建物跡を掘り込んでいる第９号土坑が古墳時代前期（４世紀後半）と考えられることからそれ以前の遺構と考えられる。

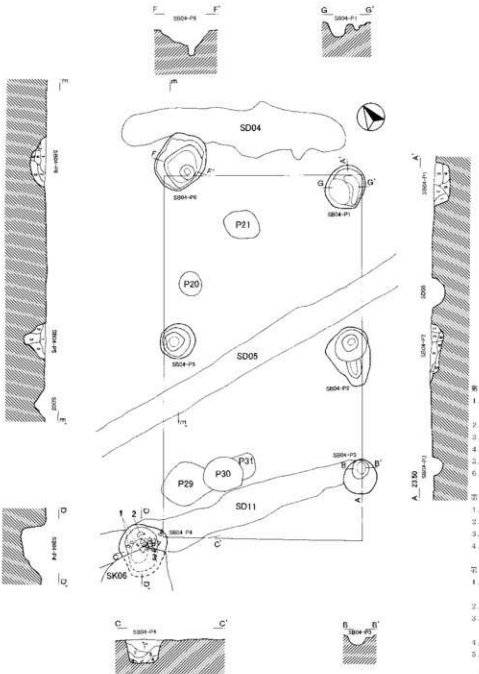
第４号掘立柱建物跡（第 12 図）

Ｄ，Ｅ－５，６グリッドから検出した。第４、11 号溝跡、第６号土坑と直接重複関係にあり、本遺構が第４、11 号溝跡を切っており、第６号土坑が本遺構を切っていた。直接切り合いの関係にはないが、第５号溝跡、第 20、21 号、第 29 ～ 31 号ピットと重複関係にある。

１間×２間の南北棟式側柱式掘立柱建物跡で、規模は、梁行が 2.37 m～ 3.7 m（7.8 尺～ 12.2 尺）、桁行が 4.45 ～ 6 m（14.6 尺～ 19.8 尺）である。面積は約 22 ㎡以上を測るものと推測される。

柱間は、桁行は北から東面で 2.4 m－ 2 m（7.9 尺－ 6.6 尺）、西面で 2.7 m － 3.3 m（7.9 尺－ 10.8 尺）、梁行は北面で 2.4 m（7.9 尺）、南面で 3.65 m（12 尺）である。主軸方位は、N－ 55°－Wを指す。柱穴は、Ｐ２がいびつな楕円状を呈しているがほぼ円形の掘り方で、長軸 0.55 ～ 0.75 m、短軸 0.53 ～ 0.72 m を測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 25 ㎝、Ｐ２が 20 ㎝、Ｐ３が 20 ㎝、Ｐ４が 38 ㎝、Ｐ５が 35 ㎝、Ｐ６が 26 ㎝を測る。複数の柱穴で平面上から柱痕が確認でき、土層断面からもＰ５のみであるが柱痕跡が確認でき、掘り方はほぼ中央部であった。この建物跡は東桁ではＰ２とＰ３の柱間がやや狭く、Ｐ４に至っては西桁や南梁の柱筋にも通っておらず、柱筋が乱れた建物である。土層断面から確認できた柱痕跡を観察すると、推定される柱の直径は、約 15 ㎝と推定されるが、確認できたのはＰ５のみであるため、詳細は不明である。

出土遺物はＰ４、Ｐ６から、集中して検出された。主に弥生土器と土師器が中心であるが、出土した弥生土器は出土量から考えて流れ込みか、弥生時代のピットが後世に再度掘り返され、柱穴として利用されたものと推察される。曖昧ではあるが、時期的には第１号掘立柱建物跡と同様と推測される。



第12図　第4号掘立柱建物跡

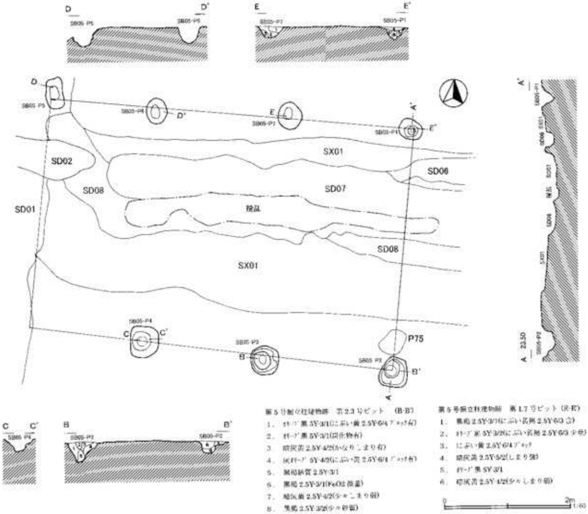
第５号掘立柱建物跡（第 13 図）

Ｃ，Ｄ－６，７グリッドから検出した。第１号溝跡と直接重複関係にあり、本遺構が、その溝跡に切られていた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第２、６、７、８号溝跡、第 75 号ピット、第１号性格不明遺構と重複関係にある。なお、南東隅の柱穴が確認されていないが、第１号溝跡によって消滅したものと考えられる。

なお、この建物跡のＰ４は第３号掘立柱建物跡のＰ４として相関関係にある。

１間×３間の東西棟側柱式掘立柱建物跡であり、規模は、桁行は 5. 68 m（18. 7 尺）、梁行は 3. 80 m（12. 5 尺）で、面積は約 21. 5 ㎡を測る。柱間は、桁行が西から北面で 1. 63 m － 2. 1 m － 1. 95 m （5. 3 尺－ 6. 9 尺－ 6. 4 尺）、南面で 1. 8 m以上－ 1. 95 m － 2. 05 m （5. 94 尺－ 6. 4 尺－ 6. 76 尺）、梁行が北から東面で 3. 80 m （12. 5 尺）、西面で 3. 70 m以上 （12. 2 尺） であった。主軸方位は、Ｎ－ 175° －Ｗを指す。

柱穴は円形、楕円形状、隅丸方形状と様々な掘り方で、長軸 0. 46 m～ 0. 42 m、短軸 0. 39 ～ 0. 30 m を測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 19 cm、Ｐ２が 20 cm、Ｐ３が 32 cm、Ｐ４が 20 cm、Ｐ５が 28 cm、Ｐ６が 28 cm、Ｐ７が 18 cmを測り、大体 20 ～ 30 cm程度の深さであった。



第 13 図　第５号掘立柱建物跡

すべてのピットの平面確認で柱痕跡が確認でき、Ｐ１、２からは土層観察からも柱痕跡が確認できた。また、Ｐ６が若干南に寄っているが、柱筋の通りが概ね良い建物である。土層断面観察から柱痕跡の確認により推定される柱の直径は、約 15 ～ 20 ㎝と推定される。

Ｐ２から石製品が検出されたが、詳細については不明である。

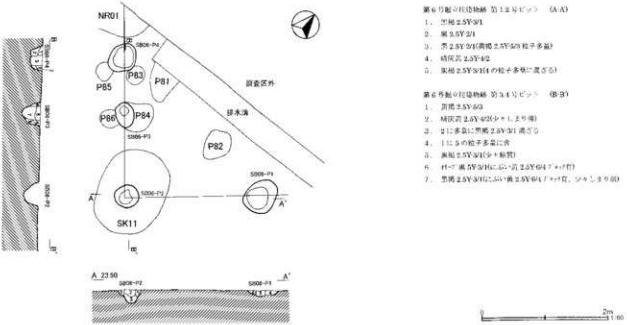
第６号掘立柱建物跡（第 14 図）

Ｈ，Ｉ－１グリッドから検出した。第11号土坑と第83～86号ピットと直接重複関係にあり、本遺構が、それらの遺構を切っていた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第81、82号ピットと重複関係にある。

大半が調査区域外であるため詳細は不明であるが、２間以上×１間以上の南北棟側柱式掘立柱建物跡であると推定される。規模は、検出桁行で 2.17 m（7.1 尺）、梁行検出で 2.22 m（7.3 尺）となり、面積は約 4.8 ㎡を測る。柱間は、桁行が北から 2.17 m（7.1 尺）、梁行が西から 0.87 m－1.38 m（2.87 尺－4.5 尺）であった。主軸方位は、N－ 50°－Eを指す。柱間の間隔が桁行、梁行と差が大きい。場合によっては、Ｐ３は柱穴にはそぐわない可能性もある。

柱穴は円形の掘り方で、長軸 0.38 ～ 0.58 m、短軸 0.29 ～ 0.47 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 10 ㎝、Ｐ２が 25 ㎝、Ｐ３が 29 ㎝、Ｐ４が 20 ㎝を測り、柱は、北側のＰ１についてはやや深さは浅く、北東方向に柱筋が続くものと想定できる。それ以外の柱穴の深さは大体平均 25 ㎝程度であった。また、平面上から複数の柱穴が、柱穴痕となっていることが確認され、断面上からもＰ２～４の土層観察から柱痕跡が確認できた。

この建物跡は検出個所が建物隅部分のみであることから判断が難しいが、比較的柱筋がしっかり通った建物であろうと推測できる。確認できた土層断面から観察すると、柱痕跡として推定される柱の直径は、約 17 ～ 20 ㎝と推定される。



第６号掘立柱建物跡 第３土層ピット（A-A'）
1. 黒褐2.5Y3/1
2. 黒2.5Y2/1
3. 黒2.5Y2/1(黄褐2.5Y5/8粒子多量)
4. 暗灰黄2.5Y4/2
5. 黒褐2.5Y3/1(4の粒子多量に混ざる)

第６号掘立柱建物跡 第３土層ピット（B-B'）
1. 黒褐2.5Y3/3
2. 暗灰黄2.5Y4/2(少々しまり強)
3. 2に多量に黒褐2.5Y3/1混ざる
4. 1に多の粒子多量に含
5. 黒褐2.5Y3/1(少々粘質)
6. 灰オリーブ黒5Y3/2に赤い黄2.5Y6/4ブロック付
7. 黒褐2.5Y3/1に赤い黄2.5Y6/4ブロック付、少々しまりなし

第 14 図　第６号掘立柱建物跡

出土遺物として実測できたものは、土師器坏の１点のみであり、それ以外に数点土師器の甕片などが検出されたが、残念ながら図示できるものは検出されなかった。口縁部のみの検出であったが、模倣杯であることから、古墳時代中期（５世紀末～６世紀初頭）と考えられる。このことからこの掘立柱建物跡もその時期に推定される。

第７号掘立柱建物跡（第 15 図）

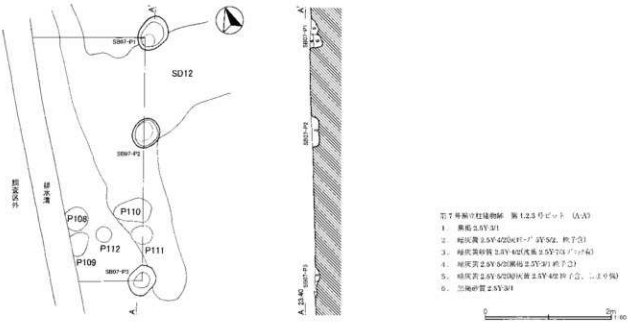
Ｇ－２，３グリッドから検出した。第 12 号溝跡と直接重複関係にあり、本遺構が、それらの遺構を切っていた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第 108 ～ 112 号ピットと重複関係にある。

大部分が調査区域外で詳細は不明だが、１間以上×２間以上の南北棟式側柱式掘立柱建物跡と推定され、規模は、桁行は 3.83 m（12.6 尺）、梁行は 1.8 m以上で、面積は約 6.9 ㎡以上を測る。柱間は、桁行が北から 1.47 m－2.29 m（4.8 － 7.5 尺）、梁行は不明である。主軸方位は、N－ 65°－Eを指す。

柱穴は円形の掘り方で、長軸 0.48 ～ 0.52 m、短軸 0.40 ～ 0.42 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 21 ㎝、Ｐ２が 12 ㎝、Ｐ３が９㎝を測り、Ｐ３は他と比較して、浅いが表土剥ぎ時に表面を深く削りすぎたことが原因であると考えられる。

柱は、Ｐ１のみで平面確認及び土層観察で柱痕跡が確認できたが、Ｐ２、Ｐ３からは平面、土層のどちらからも柱痕跡の確認はできなかった。しかしながら、Ｐ１～Ｐ３までまっすぐな柱筋がよく、いずれも同規模の円形のピットである。土層断面観察からは明確な柱痕跡が確認でき、柱痕跡から推定される柱の直径は、約 22 ㎝と推定される。

出土遺物は、土師器の坏が１点のみＰ３から出土しており、ほかのピットからも遺物片が確認されたが、残念ながら、実測可能なものはなかった。検出した坏は坏蓋模倣杯で時期は古墳時代中期ごろ（５世紀～６世紀初頭）であることから、この掘立柱建物跡の時期においても、第６号掘立柱建物跡同様の時期と考えることができる。



第 15 図　第７号掘立柱建物跡

第８号掘立柱建物跡（第 16 図）

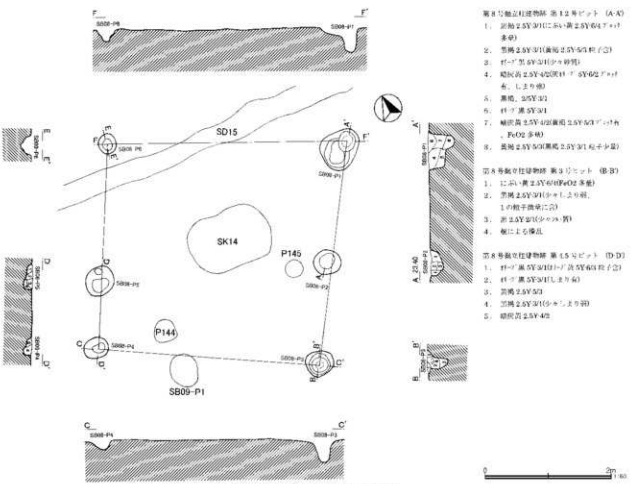
Ｇ，Ｈ－３，４グリッドから検出した。直接重複関係にある遺構は検出されなかったが、直接切り合いの関係にはない遺構として、第 15 号溝跡、第 14 号土坑、第 144,145 号ピットが重複関係にある。なお、同規模である第９号掘立柱建物跡と隣接している。

１間×２間の南北棟式側柱式掘立柱建物跡で、規模は、桁行で 3.60 m（11.8 尺）、梁行で 3.36 m（11 尺）となり、面積は約 13 ㎡を測る。柱間は、桁行が北から東面から 1.91 m－1.68 m（6.3 尺－5.5 尺）、西面から 2.2 m－1.18 m（7.2 尺－3.8 尺）、梁行が西から北面で 3.8 m（12.5 尺）、南面で 3.6 m（11.8 尺）であった。主軸方位は、Ｎ－65°－Ｅを指す。

柱穴はやや方形、円形、楕円形状と様々な掘り方で、長軸 1.18 m～0.33 m、短軸 1.03～0.30 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 42 ㎝、Ｐ２が 21 ㎝、Ｐ３が 35 ㎝、Ｐ４が 14 ㎝、Ｐ５が 15 ㎝、Ｐ６が 16 ㎝を測る。

すべてのピットの平面確認で柱痕跡が確認でき、東桁部分のＰ１～Ｐ３のみしっかりと断面観察から柱痕跡が確認できた。ややＰ４とＰ５の柱間の間隔が狭い点と、西桁面のＰ４～６の深さが浅い点を除き、比較的柱筋の通りが概ね良い建物である。土層断面観察から柱痕跡が確認でき、そこから推定される柱の直径は、約 15 ～ 22 ㎝と推定される。

出土遺物は、１点のみ陶器の甕と思われる破片が出土した。出土した陶器甕片は東海系のものと思われるが時期判断までできるものではなかった。



第 16 図　第８号掘立柱建物跡

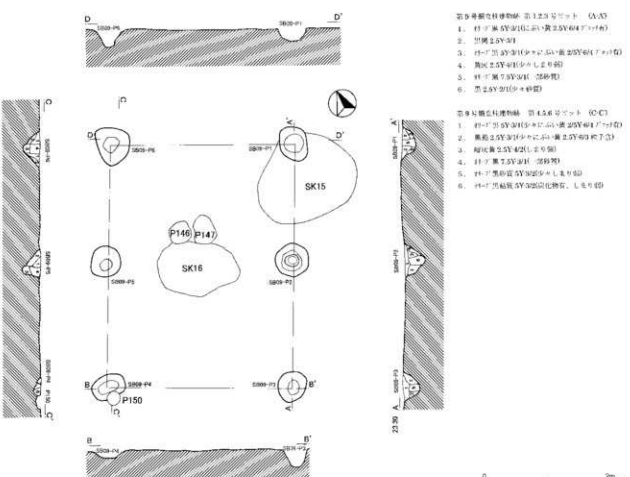
第９号掘立柱建物跡（第 17 図）

Ｆ，Ｇ－４，５グリッドから検出した。第 15 号土坑と第 150 号ピットと直接重複関係にあり、本遺構が第 15 号土坑を切っており、第 150 号ピットが本遺構を切っていた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第 16 号土坑、第 146、147 号ピットと重複関係にある。なお、同規模である第８号掘立柱建物跡に隣接する。

１間×２間の南北棟側柱式掘立柱建物跡であり、規模は、桁行は 3.85 m（12.7 尺）、梁行は 2.94 m（9.7 尺）で、面積は約 11 ㎡を測る。柱間は、桁行が北から東面で 1.85 m－ 2.04 m（6.1 尺－ 6.7 尺）、西面で 1.93 m－ 1.95 m（6.3 尺－ 6.4 尺）、梁行が西から北面で 2.92 m（9.6 尺）、南面で 2.94 m（9.7 尺）であった。主軸方位は、Ｎ－ 60°－Ｅを指す。

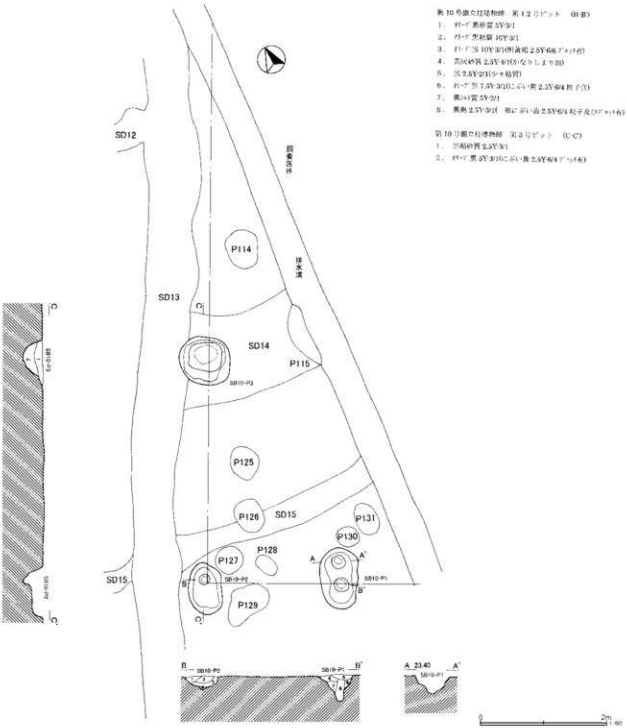
柱穴は円形、楕円形状と様々な掘り方で、長軸 0.61 m－ 0.44 m、短軸 0.52 ～ 0.35 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ１が 23 ㎝、Ｐ２が 32 ㎝、Ｐ３が 28 ㎝、Ｐ４が 13 ㎝、Ｐ５が 30 ㎝、Ｐ６が 28 ㎝を測り、Ｐ４以外は大体均等な深さであった。

すべてのピットの平面確認で柱痕跡が確認でき、Ｐ４以外でしっかりと断面観察から柱痕跡が確認できた。いずれの柱穴も柱間がそろっており、柱筋の通りが良い建物である。土層断面観察から柱痕跡が確認でき、そこから推定される柱の直径は、約 12 ～ 15 ㎝と推定される。



第 17 図　第９号掘立柱建物跡

出土遺物は、土師器片が何点か検出され、その内、実測が可能なものが３点あり、土師器の甕が検出された。うち１点は櫛描文が特徴的な甕であり、それ以外は底部のみの甕で、底部がやや突出するタイプである。時期は、古墳時代中期（５世紀末～６世紀前半）と推定される。そのことから、この掘立柱建物跡は先述した６・７号掘立柱建物跡と同時期と考えられる。



第 18 図　第 10 号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡（第18図）

H，Ⅰ－3，4グリッドから検出した。第13、14号溝跡と直接重複関係にあり、本遺構が、第13、14号溝跡を切っていた。なお、直接切り合いの関係にはないが、第15号溝跡、第114、115号ピット、第125～131号ピットと重複関係にある。残念ながら、大部分は調査区域外にあるものと考えられる。

1間以上×2間以上の南北棟側柱式掘立柱建物跡であり、大部分が調査区域外に位置するものと考えられる。規模は、桁行は3.72 m以上（12.2尺）、梁行は1.6 m以上（5.2尺）で、面積は約5.9 ㎡以上を測る。柱間は、桁行が1.5 m（4.9尺）、梁行が0.9 m（2.9尺）であった。主軸方位は、は、N－65° －Eを指す。

柱穴は方形、楕円形の掘り方で、長軸0.81 m～0.98 m、短軸0.51 m～0.58 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ1が43 ㎝、Ｐ2が24 ㎝、Ｐ3が32 ㎝を測り、掘り方は比較的大きいわりに各ピットの深さはまちまちであった。

すべてのピットの平面確認で柱痕跡が確認でき、Ｐ1については柱穴と捉えられる落ち込みが2か所あり、掘り直しによるものか、建て替え時によるものだろうと考えられる。断面観察から柱痕跡が確認できたのはＰ1のみであり、Ｐ2については断面からも深さからも柱穴と捉えるには疑問が残るが、柱筋で考えれば、筋がしっかり通っており、規模も大きい概ね良い建物である。

土層断面観察から柱痕跡の確認はＰ1のみであったが、そこから推定される柱の直径は、約15 ㎝と推定される。

出土遺物は、弥生土器、土師器が検出され、どちらも破片であることから、時期判断は難しいが、いくつかの溝跡との切り合い関係から、古墳時代前期以前と考えられる。

第11号掘立柱建物跡（第19図）

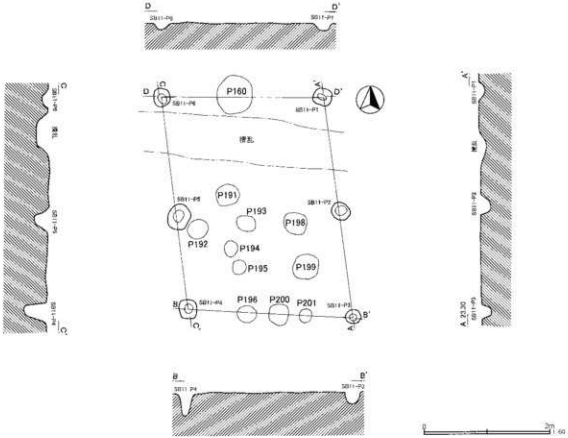
G，H－7，8グリッドから検出した。直接的な重複関係にある遺構は検出されていないが、直接の切り合いの関係にはないが、第160号、第191号～第196号、198号～201号ピット、攪乱と重複関係にある。

1間×2間の南北棟側柱式掘立柱建物跡であり、全体が確認できた。規模は、桁行は3.55 m（11.7尺）、梁行は2.61 m（8.6尺）で、面積は約9.2 ㎡を測る。柱間は、桁行が北から東面で1.81 m－1.72 m（5.9尺－5.6尺）、西面で1.92 m－1.51 m（5.3尺－4.9尺）、梁行が西から北面で1.9 m－1.3 m（6.2尺－4.29尺）、南面で2.58 m－2.62 m（7.4尺－8.64尺）であった。主軸方位は、N－100° －Wを指す。

柱穴は円形、楕円形状と様々な掘り方で、長軸0.40 m～0.30 m、短軸0.37 m～0.22 mを測る。掘り方の深さは、いずれも確認面からＰ1が13 ㎝、Ｐ2が17 ㎝、Ｐ3が18 ㎝、Ｐ4が37 ㎝、Ｐ5が26 ㎝、Ｐ6が11 ㎝を測り、Ｐ4を除き、大体15～20 ㎝程度であった。

すべてのピットの平面確認で柱痕跡が確認でき、いずれも、ピットの掘り方がそのまま柱穴痕となっているようである。また、全体の柱筋を組んでみると、やや平行四辺形状の柱筋の通りが良く、柱間も整った建物である。土層断面観察から柱痕跡の確認はできなかったが、掘り方をそのまま柱穴痕と考え、そこから推定される柱の直径は、約18～20 ㎝と推定される。

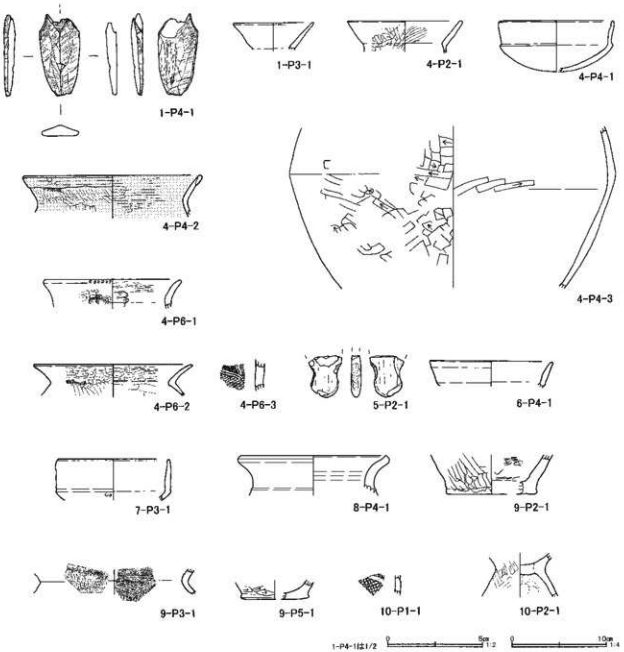
残念ながら、出土遺物は、検出されなかった。



第 19 図　第 11 号掘立柱建物跡

第 4 表　掘立柱建物跡出土遺物観察表

遺構	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SB01-P3	1	弥生土器 壺	(8.6)	(2.9)	–	ADHN	にぶい橙 7.5YR-7/4	A	口縁部 20%		
SB01-P4	1	石製模造品	最大長　4.3	最大幅　2.1	最大厚　0.55	重さ　5.9g			口縁部 10%	上下部とも一部欠損 上端部穿孔有	凝灰岩
SB04-P2	1	弥生土器 壺	(12.2)	(3.4)	–	ABDGHIKN	外面：にぶい橙 7.5YR-7/4 内面：橙 5YR-7/6	B	口縁部 10%	内面：ヘラケズリ痕（斜位）及びミガキ痕有	
SB04-P4	1	土師器 坏	(12.2)	5.4	–	AGI	明赤褐 2.5YR-5/6	B	口縁部 30%	坏底横位坏 外面：体部下段ミガキ顕著	
SB04-P4	2	土師器 壺	(19.0)	(4.4)	–	AD	赤褐 2.5YR-4/6	B	口縁部 20%	有段口縁壺 両面に赤彩あり 内外面：口縁部ヘラミガキ痕有	
SB04-P4	3	弥生土器 壺	–	(17.0)	–	BDEHKNO	外面：灰褐 5YR-5/2 内面：にぶい褐 7.5YR-6/3	B	胴部 20%	外面：ヘラケズリ痕 胴部屈曲著しい	
SB04-P6	1	弥生土器 壺	(14.6)	(3.0)	–	BDGHKN	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	口縁部 10%	口縁端部押し引き刺突文 外面：ヘラ調整痕、ヘラナデ痕有	
SB04-P6	2	土師器 甕？	(16.8)	(3.3)	–	ABDEGHIN	外面：暗赤灰 10R-4/1 内面：にぶい褐 7.5YR-6/3	B	口縁部 10%		
SB04-P6	3	弥生土器 壺？	–	–	–	ABDGHN	橙 5YR-6/6	B	破片	外面：LR 単節縄文、その上部にヘラ描沈線有（2 本 1 対）	
SB05-P2	1	石製品？	最大長　(4.4)	最大幅　3.5	最大厚　1.0	重さ　21.5g				両側面敲打により欠損 表裏は擦痕痕有	片岩系自然礫
SB06-P1	1	土師器 坏	(13.0)	(2.7)	–	ADEI	橙 5YR-6/6	B	口縁部 10%	坏底横位坏 ロクロ調整痕有 外面：ミガキ調整痕有	
SB07-P3	1	土師器 坏	(12.0)	(4.4)	–	ADDEIKO	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部～胴部 10%	坏底横位坏	
SB08-P4	1	陶器 壺？	(16.0)	(4.2)	–	ABEM	暗赤褐 5YR-3/4	B	口縁部 10%		東海系
SB09-P2	1	土師器 甕	–	–	(9.6)	ABDEHM	にぶい橙 5YR-7/4	B	底部 20%	底部やや突出する 外面：ヘラケズリ痕（斜位）有 内面：わずかにヘラケズリ痕有	
SB09-P3	1	土師器 台付甕	頸部径 (15.6)	(2.7)	–	ABEI	灰褐 7.5YR-4/2	B	頸部破片	外面：口縁部上位方向に櫛描文有 内面：ケズリ調整痕有	
SB09-P5	1	土師器 甕	–	–	(7.2)	ABEGN	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	底部 20%	底部やや突出する	
SB10-P1	1	弥生土器 壺	–	–	–	ADEGHI	にぶい橙 5YR-6/3	B	破片	外面：ヘラ描沈線文、その下部に縄文痕有 全体的に摩耗著しい	
SB10-P2	1	土師器 台付甕	–	(4.6)	–	ACEGIN	橙 5YR-7/6	B	台部 30%	外面：ヘラナデ痕有 内面：指調整痕有	



第 20 図　掘立柱建物跡出土遺物

3　河川跡

第 1 号河川跡（第 21 図）

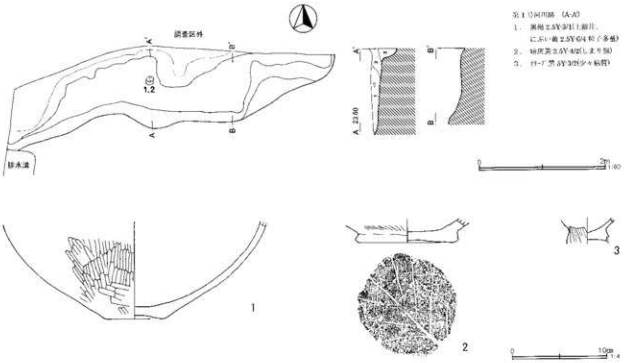
G，H－1グリッドから検出した。第 10 号土坑、第 6 号掘立柱建物跡と隣接しているが、重複はしていない。

大半が調査区域外であり、正確な様相は不明であるが、検出長 5.32 m、検出幅 0.94 ～ 1.41 m、深さは確認面から 0.28 ～ 0.44 mであった。かなりいびつな形で流れており、断面観察からは判断できなかったが、各地点の深さから西から東に向かって流れていることがわかる。

平面上からは、残念ながら、流路跡のうち右岸部分のみの検出であり、底部についても最深部は調査区域外であるため、確認できなかった。

土層断面を観察すると、上から黒褐色土（１層）、暗灰黄色土（２層）、オリーブ黒粘質土（３層）、の順で堆積しており、底部付近は粘質土が堆積し、河川の底部中央に向かって、落ち込んでいる様子が確認できる。

出土遺物は、土師器が数多く出土したが、実測可能なものは、３点のみであった。内１点は壺で、底部に葉模様の刻印が残っており、そのことから土器形成時に葉を敷いた跡とみることができる。それらの遺物から河川としての流路時期は、古墳時代中期（５世紀後半～６世紀初め）と考えられる。



第 21 図　第１号河川跡・出土遺物

第５表　第１号河川跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	土師器 壺	–	(10.3)	(6.0)	ABCIJ	明褐 7.5YR-5/8	B	10%	外面：胴部ヘラケズリ 底部：やや内へくぼみ有	
2	土師器 壺	–	(2.5)	11.0	ABEJ	明褐 7.5YR-5/6	B	底部 100%	やや底部が突出する 底部外面「葉模様」の刻印有	
3	土師器 高杯	–	(2.8)	–	ABCI	浅黄橙 7.5YR-8/6	B	脚部片	外面ヘラケズリ（斜位）痕有	

4　溝跡

溝跡は、総じて21条検出した。第1号溝跡が、調査区西側で南北に横断する形で検出され、そこに隣接する形で、第2、3号溝跡が検出された。第4号溝跡が調査区中央やや北に検出し、第5号溝跡は第1号溝と第10号溝を接続する形で東西方向に走っていた。第6号溝跡は調査区中央に南北方向に走り、第8号土坑を経て、東西方向に進路を変え、第7号溝跡へと合流する。第7号溝跡は第1号水田跡から東西方向に延び、第1号溝跡手前で終点となる。また第8号溝跡は調査区中央南から第2号住居跡を掘り込み、第7号溝跡、攪乱に掘り込まれながら、第1号溝跡へと走っている。第9号溝跡は第10号溝の直上に位置し、第10号溝跡は第1号溝跡と平行に走る形で、南北方向に検出された。第11号溝跡は調査区中央付近に第4号溝跡と同様の向きで平行に走っていた。第12号溝跡は東西方向に第13号溝跡に接続する形で検出され、第13号溝跡は北東から南西に向かって各遺構を横断する形で検出されている。第14、15号溝跡も東西方向に第13号溝跡と接続する形で検出されている。第16～20号溝跡はすべて第1号水田跡に接続する形で検出されている。第21号溝跡は調査区の南東で確認され、攪乱により消滅していた。多数の溝跡は、区画割りを考えての掘り方であろうと考えられる。

以下溝跡ごとに詳細を記載する。

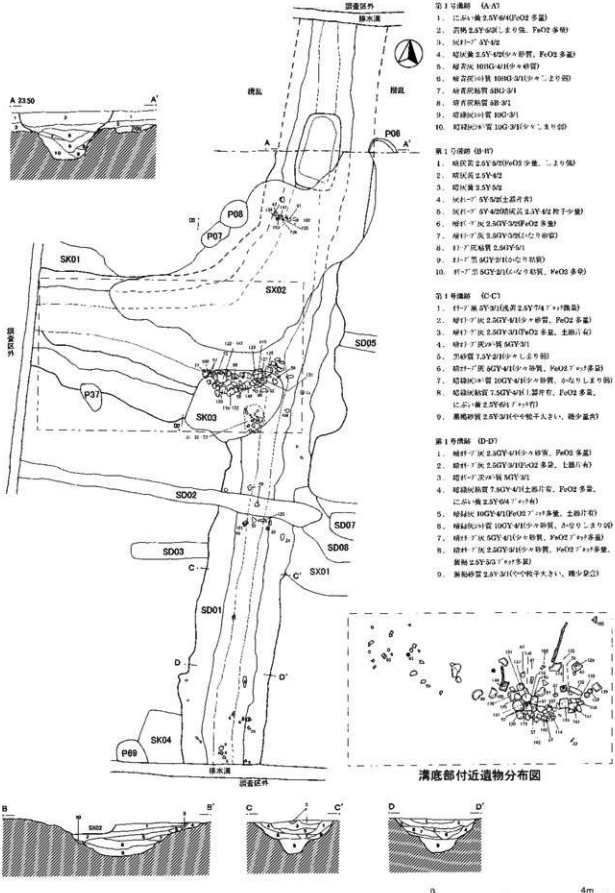
第1号溝跡（第22図）

A～C－4～8グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にあり、第3号掘立柱建物跡、第1、2号性格不明遺構、第2、3、5、8号溝跡、第3、4号土坑、第6、36、37号ピットと重複関係にあり、北側は攪乱によって大半が消滅していた。それらの内、第2号性格不明遺構、第2号土坑、第2号溝跡を除いた、全ての遺構を切っていた。なお溝跡は検出規模から考えると大半は調査区域外と推定される。

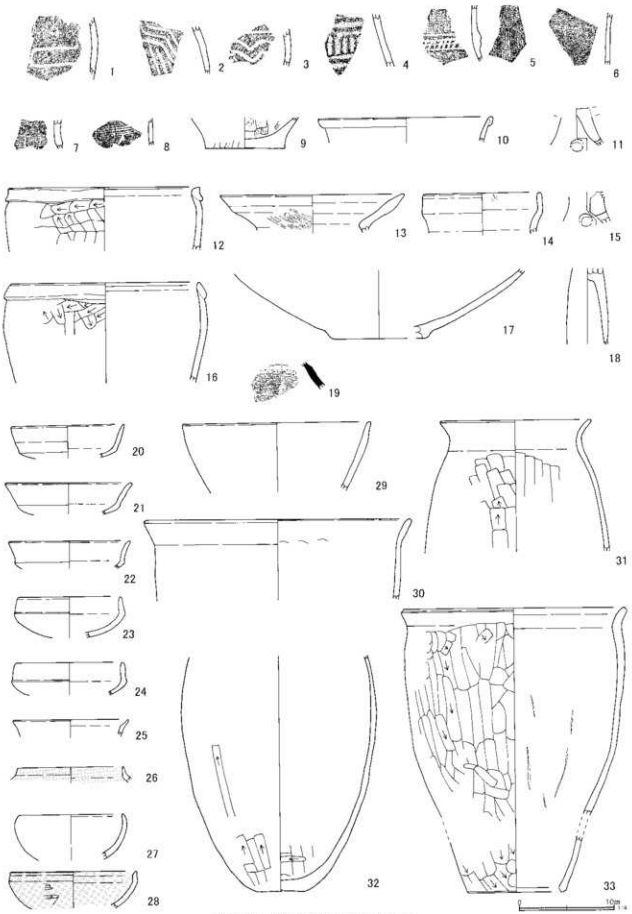
検出部分は、「卜」の字を反転した形になっており、南北方向に伸びる部分と、西方向に伸びる部分とで検出され、いずれも調査区域外まで直進していた。

規模は、南北方向で検出長20m、幅2.2～2.8m、深さは0.88～1.25m、西方向で検出長6m、幅2.6～4.0m、深さは0.85～0.90mであった。攪乱に掘り込まれ、ほとんど消滅していた箇所があったが、比較的きれいに残っており、機能していた当時の様相を濃く残していた。土層断面からも判断できるように、ほぼ一貫して同じ深さで走っており、幅も広いことから溝としての利用というより、堀と考えた方が良さそうである。土層から見てみると、一貫してどのセクションでも堆積が似通っており、最深部は青灰や暗緑灰色土の粘質土を掘り抜いており、意図してこの深さに設計していたことがわかる。

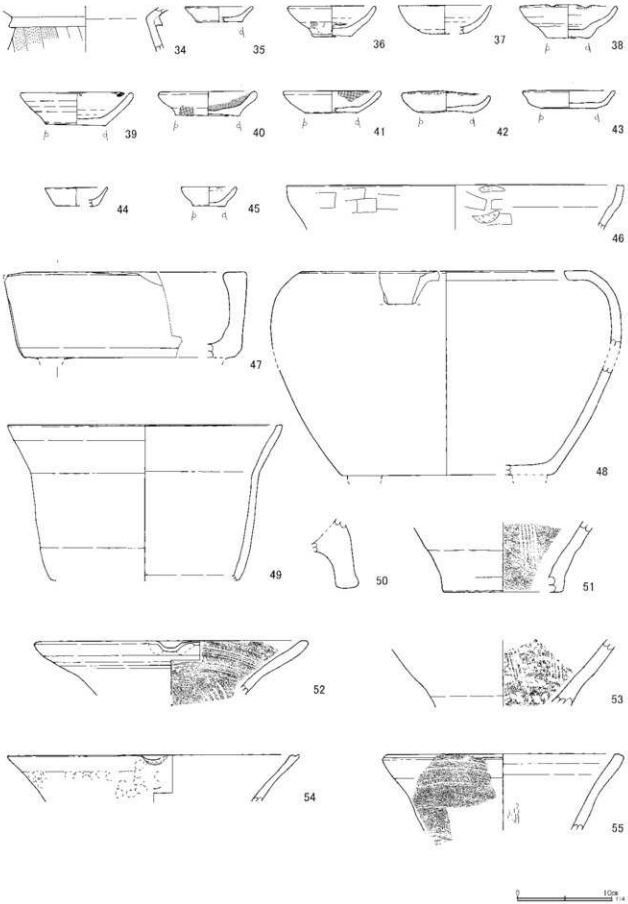
調査区にはこの溝跡以外に0.5m幅の南北軸、東西軸方向に走る溝跡が数条検出されており、この第1号溝跡もそれらと同様に走っていたものを、寺院の堀として拡張し、転用したものと推測される。なお、この溝の底部付近の粘質土層前後からは、遺物と共に、杭などの木片や木製品が確認された。杭などの木製品から場合によっては水路としての様相を備え、堰を設けていた可能性も考えられる。


調査区外
排水溝
機乱
A 23.50
A'
P06
P08
P07
SK01
SX02
SD05
P37
SK03
SD02
SD07
SD08
SD03
SX01
SD01
SK04
P09
B
B'
C
C'
D
D'
溝底部付近遺物分布図
0
4m
1:100

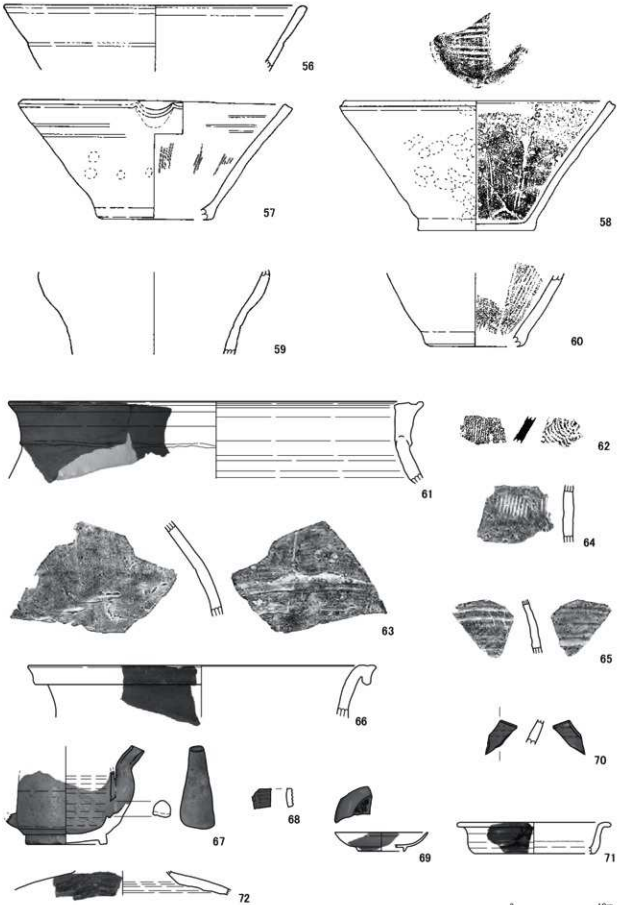
第22図　第1号溝跡



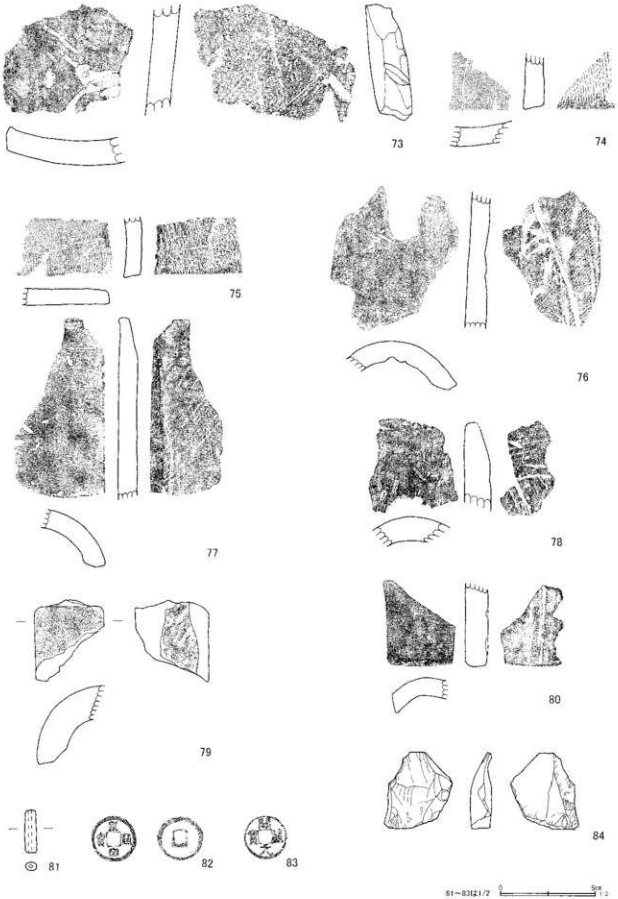
第 23 図　第 1 号溝跡出土遺物（1）



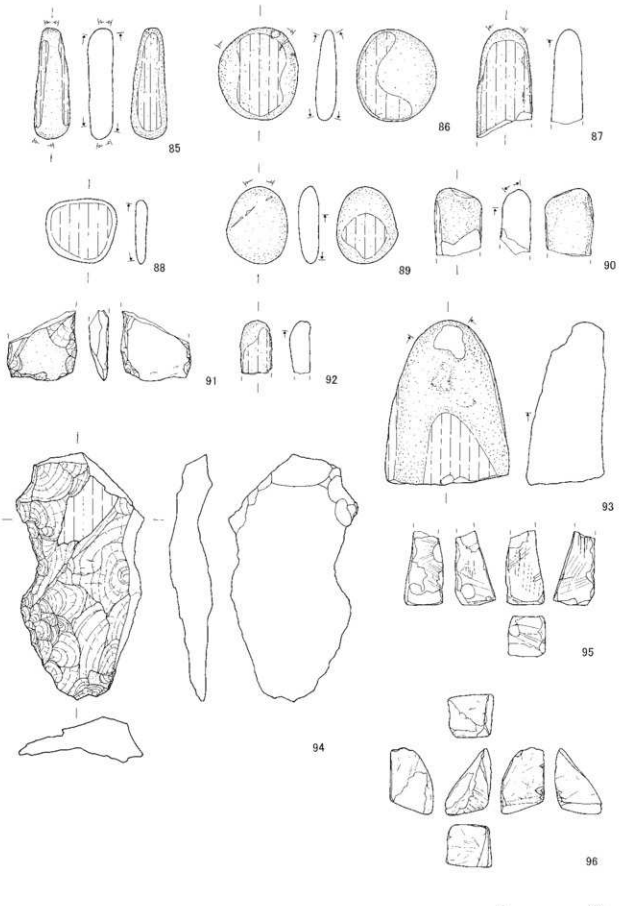
第 24 図　第 1 号溝跡出土遺物（2）



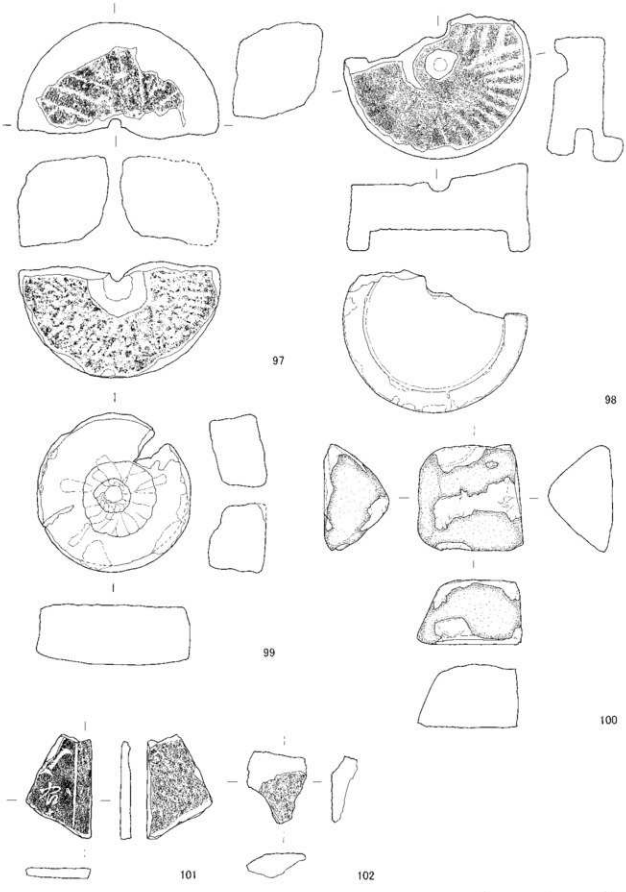
第 25 図　第 1 号溝跡出土遺物（3）



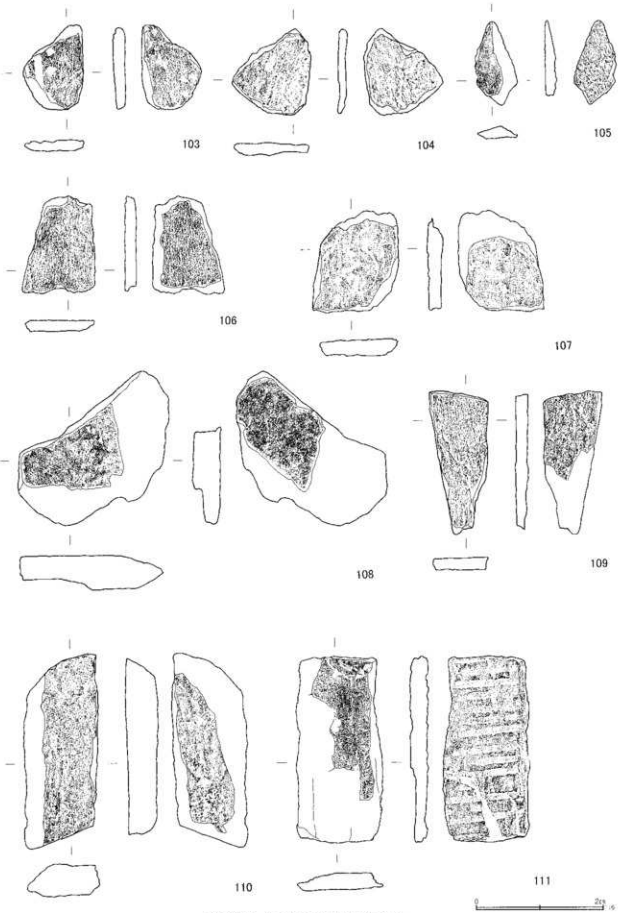
第26図　第1号溝跡出土遺物（4）



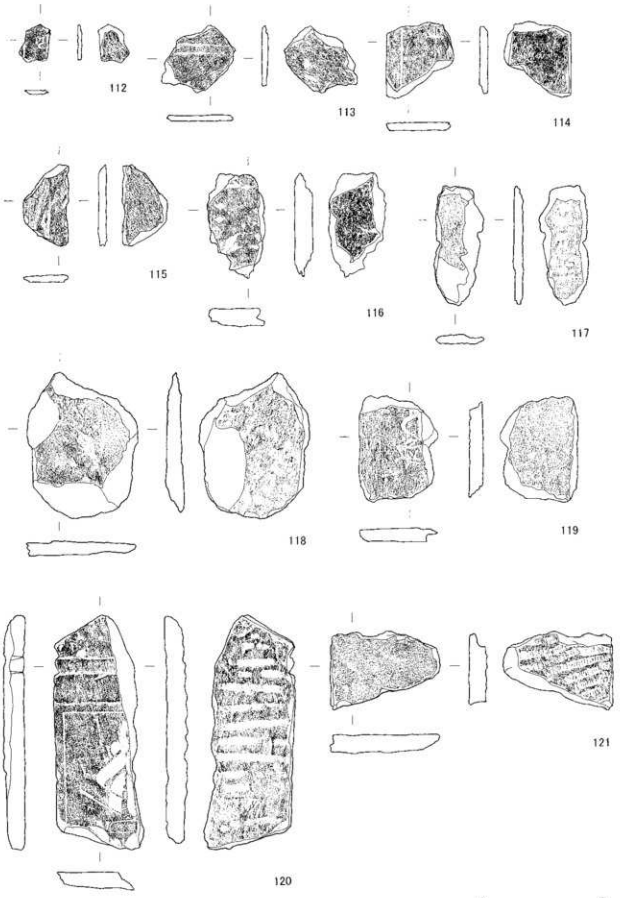
第27図　第1号溝跡出土遺物（5）



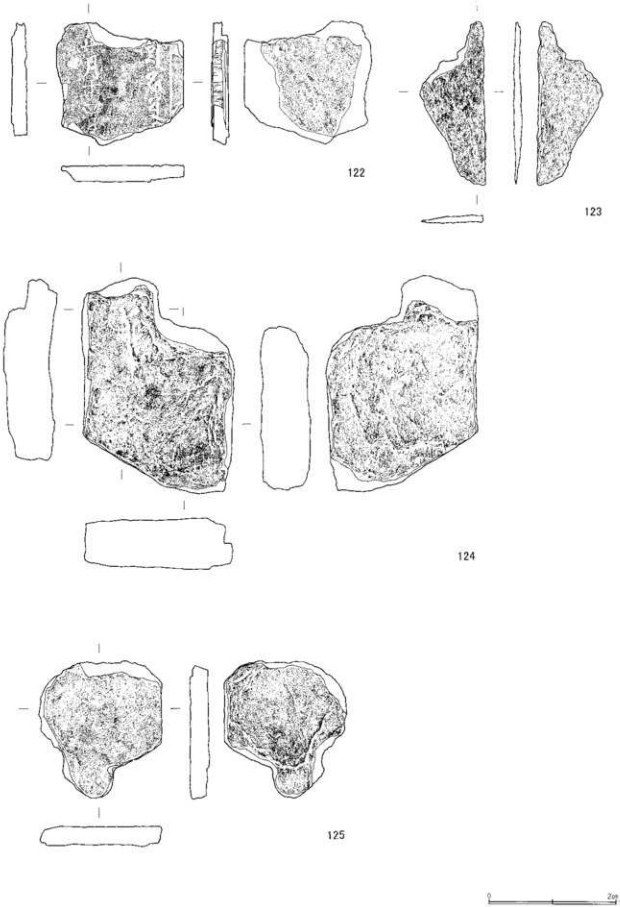
第 28 図　第 1 号溝跡出土遺物（6）



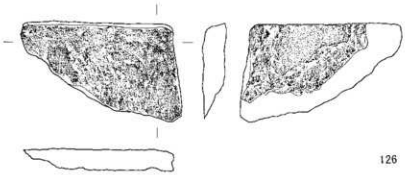
第 29 図　第 1 号溝跡出土遺物（7）



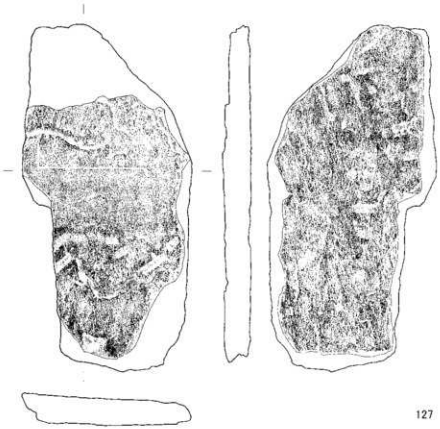
第30図　第1号溝跡出土遺物（8）



第31図　第1号溝跡出土遺物（9）



126



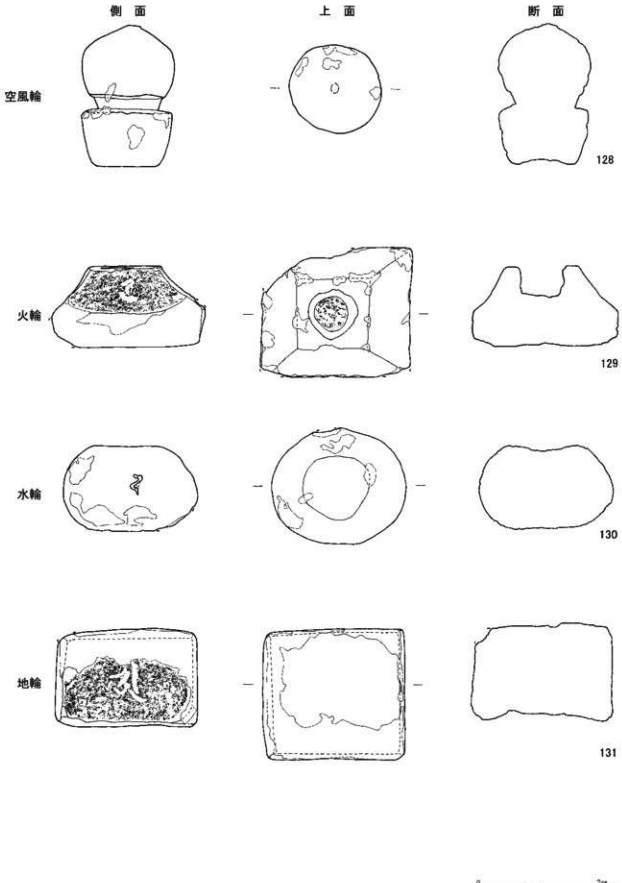
127

第 32 図　第 1 号溝跡出土遺物（10）

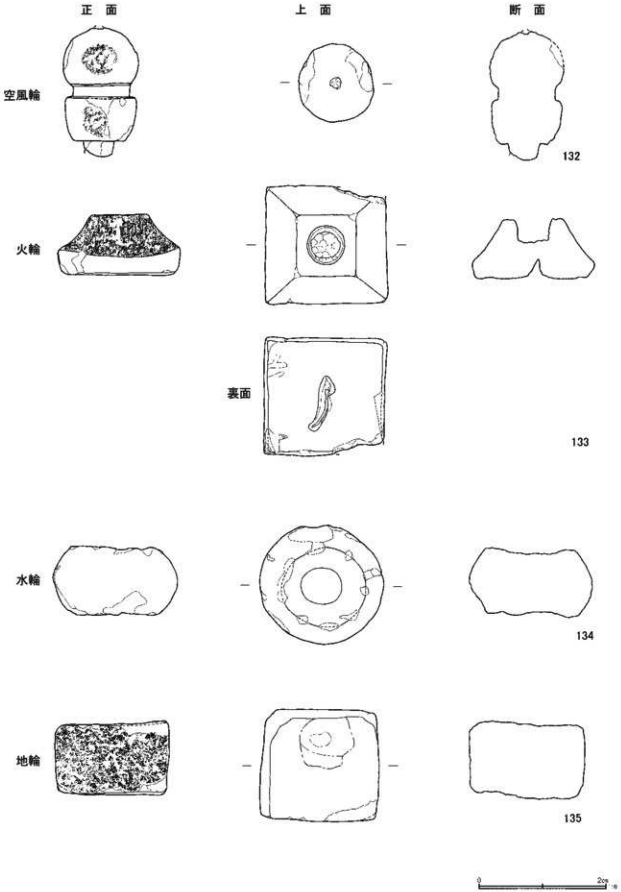
出土遺物は弥生時代から近世にかけてのものが多量に出土しており、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物として弥生土器壺や甕、土師器坏、甕、甑などが数十点ほど検出されている。この時期のものとして出土点数を見ると、古墳時代後期の遺物が最多である。

また、この溝跡からはそれ以外に寺院に関連性のある中世から近世に属する遺物も大量に出土した。かわらけ、焙烙、擂鉢、瓦、陶器甕、香炉、磁器皿等のように多種多様の器種が確認された。中世でも一番古いものとしては大体 12 世紀代のものとして土師質土器の皿や平瓦がある。

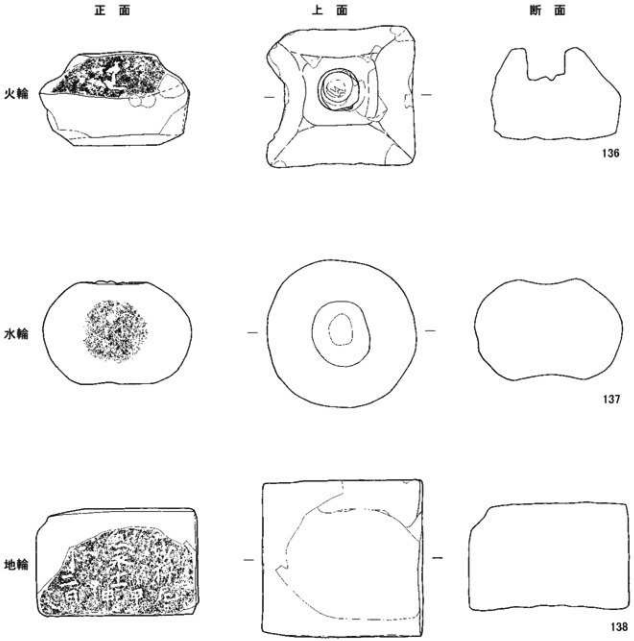
それらの多くが、溝跡の南北軸と東西軸の交差する部分から多量に検出されており、溝の交差する箇所に集中していた。



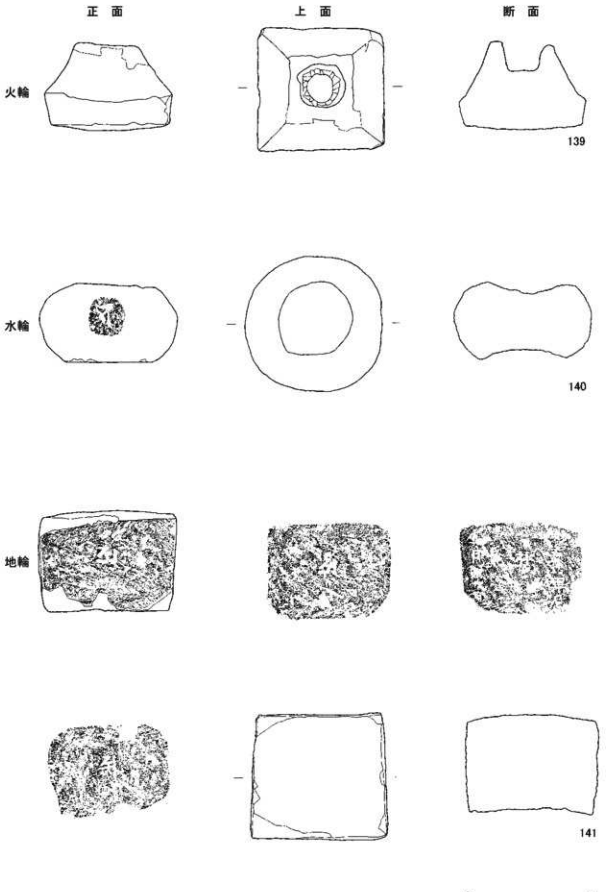
第 33 図　第 1 号溝跡出土遺物（11）



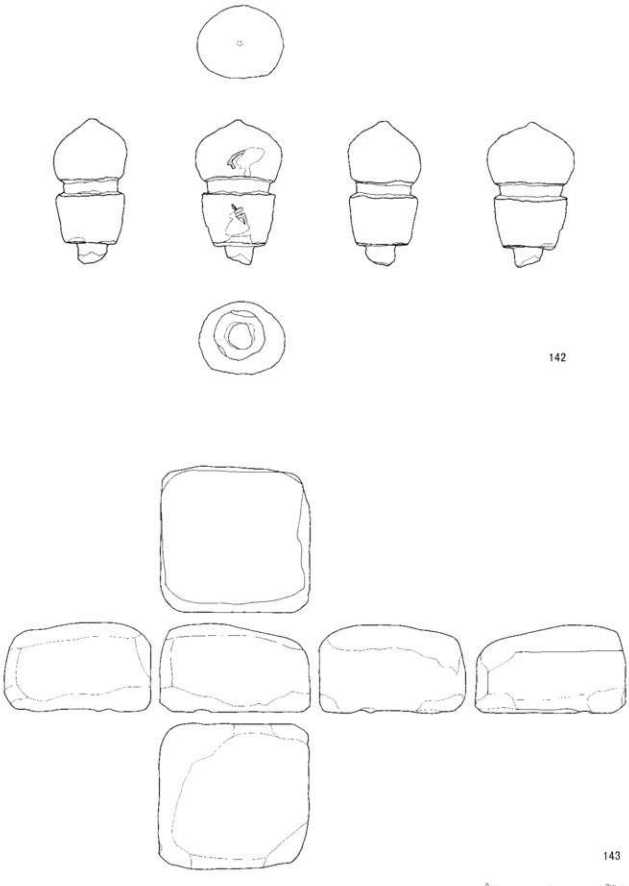
第 34 図　第 1 号溝跡出土遺物（12）



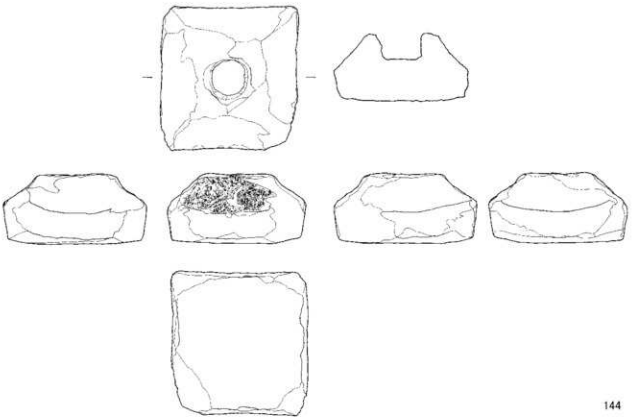
第 35 図　第 1 号溝跡出土遺物（13）

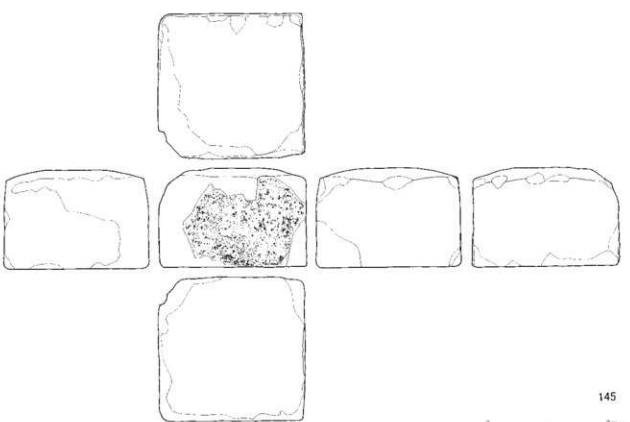


第 36 図　第 1 号溝跡出土遺物（14）

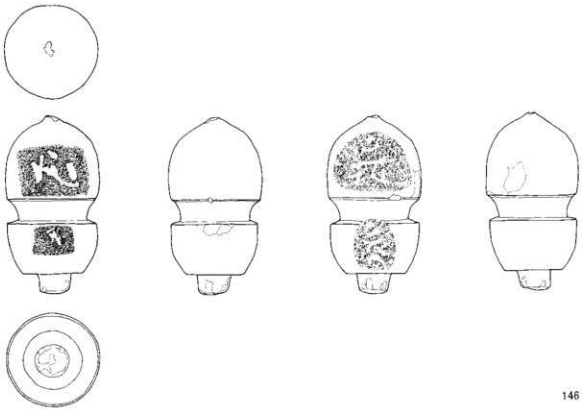


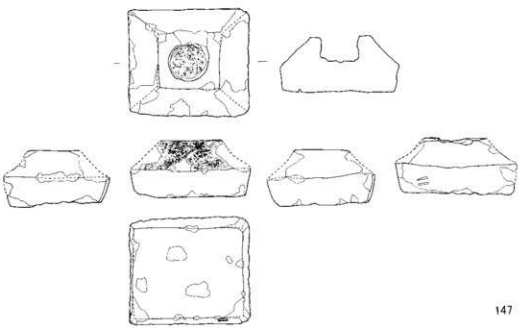
第 37 図　第 1 号溝跡出土遺物（15）



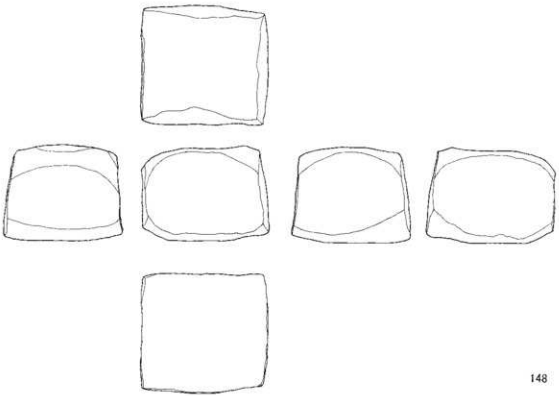


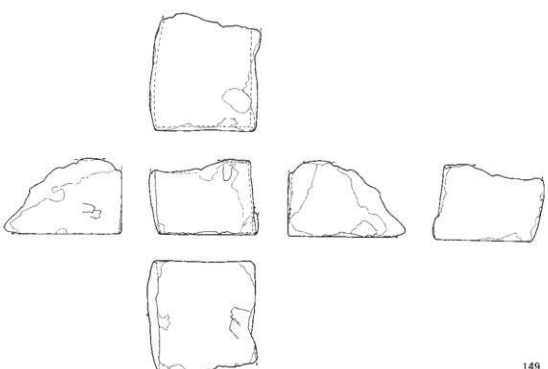
第 38 図　第 1 号溝跡出土遺物（16）



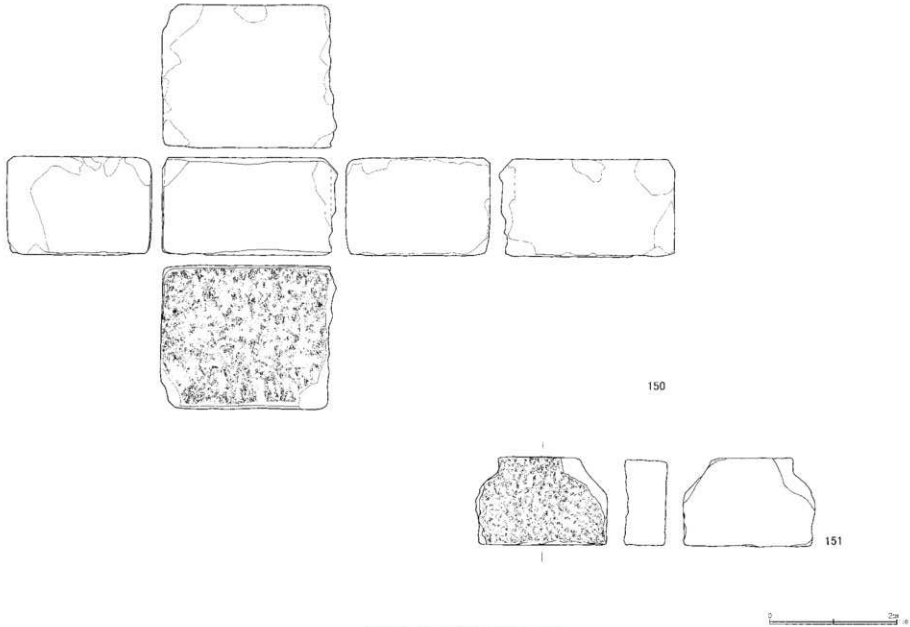


第 39 図　第 1 号溝跡出土遺物（17）

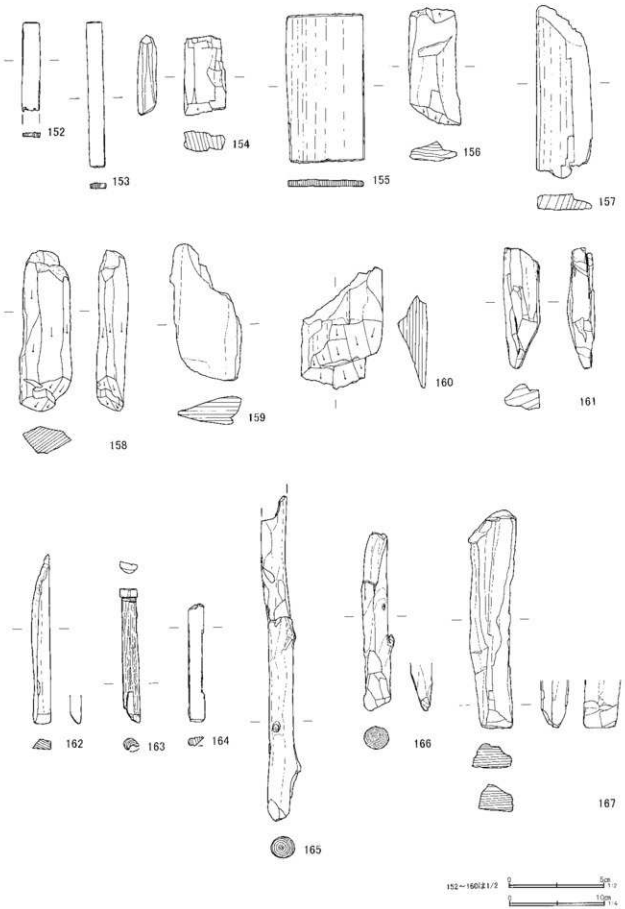




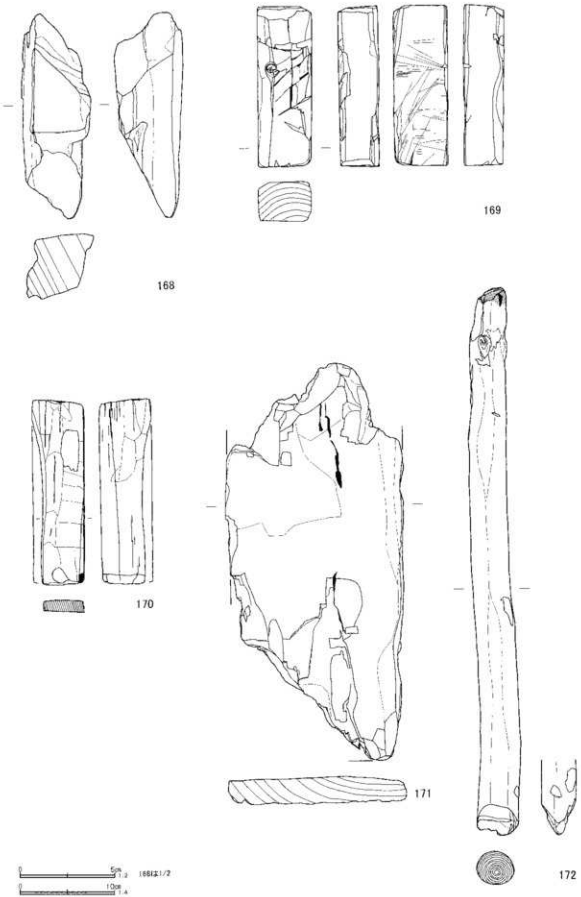
第 40 図　第 1 号溝跡出土遺物（18）



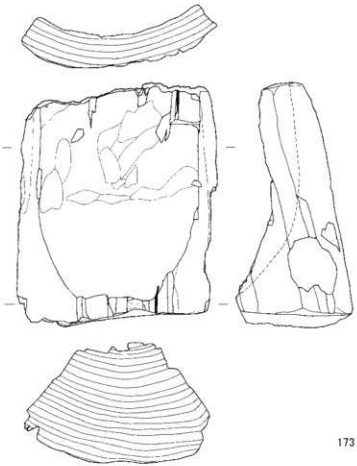
第41図　第1号溝跡出土遺物（19）



第 42 図　第 1 号溝跡出土遺物（20）



第 43 図　第 1 号溝跡出土遺物（21）



第 44 図　第１号溝跡出土遺物（22）

第６表　第１号溝跡出土遺物観察表（１）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺	–	–	–	ABEIJ	橙 5YR-6/8	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線文２条有	
2	弥生土器 壺	–	–	–	ABDEHI	橙 5YR-7/6	B	破片	外面：ヘラ描波状沈線文（２条）　直下に重菱形文 or 複合鋸歯文有 内面：ヘラケズリ痕有	
3	弥生土器 壺	–	–	–	ABHIJ	外面：にぶい黄橙 10YR-7/2 内面：褐灰 10YR-6/1	B	破片	外面：波状沈線文（２条）及び縦文痕有　磨耗著しい	
4	弥生土器 壺	–	–	–	ABCIJ	浅黄橙 10YR-8/4	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線文？（上下２条） その間に縦状沈線文有	
5	弥生土器 壺	–	–	–	ABCI	橙 5YR-7/6	B	口縁部～頸部破片	外面：上段櫛描重波文（２条） 下段交差に格子状櫛描文有	
6	弥生土器 壺	–	–	–	ABCI	にぶい黄橙 7.5YR-7/3	B	破片	外面：櫛描による波状文（条数不明） 磨耗著しい	
7	弥生土器 壺	–	–	–	ABDI	橙 5YR-6/6	B	破片	外面：櫛描簾状文（６本一単位）	
8	弥生土器 壺	–	–	–	ABCIJ	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	破片	外面：櫛描簾状文	
9	弥生土器 壺	–	(3.2)	(8.4)	ABC	浅黄橙 10YR-8/3	B	底部 50%	内外面ともハケ目調整痕有（外面縦位）	
10	弥生土器 壺	(18.1)	(2.6)	–	ABDJ	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部 20%	有段口縁壺	
11	器台？	–	(3.4)	–	ABCIJ	橙 5YR-7/6	B	器台部破片	4 箇所透孔有　うち２箇所確認 坏接続箇所剥離有	
12	土師器 鉢	(20.3)	(6.3)	–	AEGMN	灰白 10YR-8/2	C	口縁部 20%	有段口縁有 外面：ヘラケズリ調整	
13	土師器 壺	(19.5)	(4.0)	–	ADEGKN	灰白 7.5YR-8/2	C	口縁部 20%	やや弥生からの流れをくむか？ 外面：ミガキ有 口径が大きい	
14	土師器 壺	(12.6)	(4.3)	–	ABDEN	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	口縁部 20%	口径ややすぼまる 古相か？	
15	器台？	–	(3.3)	–	ABEI	黄橙 7.5YR-8/8	B	器台部破片	4 箇所透孔有　うち２箇所確認	
16	土師器 鉢	(20.0)	(10.5)	–	ABEGJM	黄橙 7.5YR-8/8	C	口縁部～体部 10%	有段口縁有 外面：ヘラケズリ調整	
17	土師器 壺	–	(7.2)	(10.4)	ABDIJN	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	胴部～底部 10%	外面：ヘラケズリ後ナデ調整か？	
18	土師器 高坏	–	(8.0)	–	ABEI	明赤褐 2.5YR-5/6	B	脚部 40%		
19	須恵器 壺	–	–	–	ADHN	外面：暗灰 N-3/ 内面：灰 N-5/	B	破片	外面：ハケ目痕有	末野産
20	土師器 坏	(12.0)	(3.4)	–	BGK	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	20%	有段口縁坏	

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
21	土師器 坏	(13.4)	(3.3)	–	ABEIJ	明赤褐 5YR-5/6	B	10%	坏器種敲坏 口縁部外反する	
22	土師器 坏	(12.8)	(2.9)	–	ABEHN	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部 10%	坏器種敲坏 口縁部外反する	
23	土師器 坏	(10.7)	(4.3)	–	ABDIK	橙 7.5YR-6/6	B	20%	坏身種敲坏 口縁部内減	
24	土師器 坏	(11.1)	(3.4)	–	ABEIK	橙 5YR-6/6	B	10%	坏身種敲坏 口縁部内減	
25	土師器 坏?	(12.3)	(1.9)	–	ABCI	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	口縁部 10%	坏身種敲坏か? 口縁部大きく外反する	
26	土師器 坏	(11.0)	(1.6)	–	ABDKM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	10%	内外面赤彩有	
27	土師器 坏	(11.0)	(4.8)	–	ABEIKM	明赤褐 2.5YR-5/8	B	10%	内面平坦坏 丸底形	
28	土師器 坏	(13.4)	(3.9)	–	AFGHM	赤褐 10R-5/4	A	口縁部 20%	両面赤彩 口縁部「S」字状に外反（比企型坏）	
29	土師器 甕 or 鉢	(20.0)	(7.3)	–	ABDI	橙 7.5YR-7/6	B	10%	外面：多量に煤付着	
30	土師器 甕 or 鉢	(28.4)	(8.5)	–	BDEHN	黄橙 2.5Y-5/3	B	口縁部 10%	口縁部やや外反する 長胴形か?	
31	土師器 甕	(16.1)	(13.9)	–	ABEI	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	20%	外面：ヘラケズリ痕（縦位）有 胴部に指ふみ有	
32	土師器 甕	–	(24.8)	5.2	DEGHN	にぶい黄橙 10YR-5/3	B	胴部～底部 100%	長胴甕 外面：ヘラケズリ痕（縦位）有	
33	土師器 甕	(24.0)	(30.0)	(10.5)	ABEGIKMN	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	30%	やや胴張り 外面：ヘラケズリ痕（縦位）有	
34	土師器 壺	–	(4.6)	–	ABDGHKN	灰褐 7.5YR-5/2	B	頸部 20%	有沓口縁壺 頸部外面ハケ目調整痕有	
35	土師質土器 皿	(7.2)	1.6	(5.0)	BDI	浅黄橙 10YR-8/3	B	30%	外面：底部煤付着 内面：油煙付着 底部回転糸切り痕	
36	土師質土器 坏（かわらけ）	9.4	3.2	4.3	ABIK	灰褐 7.5YR-4/2	B	60%	内外面油煙付着 外面：指頭圧痕有 灯明皿か?	
37	土師質土器 坏（かわらけ）	(9.8)	3.0	(4.9)	ABCI	灰白 2.5Y-8/2	B	10%	ロクロ調整痕有	
38	土師質土器 坏（かわらけ）	(10.4)	3.5	4.4	ABDIK	灰白 7.5YR-8/2	B	60%	口縁部油煙付着 底部回転糸切り痕 灯明皿か?	
39	土師質土器 坏（かわらけ）	12.0	3.4	6.4	ABEIJ	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	80%	ロクロ調整痕有 口縁部煤付着	
40	土師質土器 皿	10.4	2.5	6.8	ABI	灰白 2.5Y-7/1	B	完形	内外面煤付着 底部回転糸切り痕有 底部火襷痕有	
41	土師質土器 皿	10.4	2.3	5.6	ABEI	にぶい黄橙 7.5YR-6/4	B	完形	口縁部煤付着 底部回転糸切り痕	
42	土師質土器 皿	9.4	2.3	5.2	ABDEGK	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	完形	口縁部油煙付着 底部回転糸切り痕有	
43	土師質土器 皿	(9.8)	1.8	6.2	ABGK	黒 7.5YR-1.7/1	B	60%	口縁部外反する 底部回転糸切り痕有	
44	土師質土器 皿	(6.1)	1.9	(4.2)	ABCI	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	50%	底部摩耗しており不明	
45	土師質土器 皿	(5.9)	2.1	(3.5)	ABEI	灰白 10YR-8/1	B	50%	口縁部先端油煙付着 底部回転糸切り痕	
46	結晶	(35.8)	(4.7)	–	ABCIJ	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	10%	外面：煤多量に付着	
47	瓦質土器 火鉢（角火鉢）	–	(9.2)	–	BDGIK	褐灰 7.5YR-5/1	B	10%	板作り 四足脚付	
48	瓦質土器 風炉? or 煙炉?	(30.6)	(21.5)	(22.2)	ABDEMN	暗灰 N3/	B	20%	口縁部歪? 脚付き	
49	瓦質土器 土鍋	(29.0)	(16.5)	(20.0)	ABCEKO	外面：黒 N2/ 内面：明褐灰 7.5YR-7/2	B	20%	土鍋内耳鍋 口縁部外反 煤外面に多量に付着	
50	瓦質土器 火鉢脚部	–	(7.2)	–	ABCDEIJKMN	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	脚片		
51	擂鉢	–	(7.5)	(12.8)	ABEGK	赤灰 2.5YR-6/1	B	胴部 30%	内面：5本擂り目有 瓦質	
52	擂鉢（片口）	(29.0)	(5.7)	–	ABDGHIK	灰 5Y-6/1	B	口縁部 20%	内面：5本擂り目有 片口部指圧痕有 瓦質	
53	擂鉢	–	(7.0)	–	ABEGK	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	胴部 20%	内面：5本擂り目有 瓦質	
54	擂鉢（片口）	(30.8)	(5.0)	–	ABDGIJKN	灰 5Y-5/1	B	口縁部 30%	内面：口縁部周辺指頭圧痕多数 瓦質	
55	擂鉢	(24.4)	(8.1)	–	ABM	外面：灰白 10YR-8/2 内面：暗灰 N-3/	B	口縁部 20%	内面：4本擂り目有 口縁部に溝有	
56	擂鉢	(32.0)	(6.9)	–	ABIN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 10%	口縁部やや外反する 土師質	
57	擂鉢	29.1	12.5	(12.5)	ABDEGK	暗灰 7.5YR-5/1	B	70%	内面：5本擂り目痕（放射線状） 外面：指頭圧痕有 土師質	
58	擂鉢	(28.2)	13.7	(12.2)	ABDHIM	暗灰 N-3/	C	50%	内面：擂り目痕（5本一単位）有 外面：指頭圧痕 内面：底部格子状に擂り目 口方面に溝有	
59	土師質土器 土鍋?	(24.5)	(8.6)	–	ABGK	外面：暗灰 10YR-5/1 内面：にぶい橙 7.5YR-6/3	B	20%	口縁部大きく外反	上野産?
60	擂鉢	–	(7.7)	(10.6)	ABEK	灰褐 7.5YR-5/2	B	胴部 20%	内面：6本擂り目有 土師質	
61	陶器 甕	(43.8)	(8.1)	–	ABN	外面：暗灰 10YR-6/1 内面：橙 2.5YR-6/8	B	口縁部 20%		常滑産
62	須恵器 壺	–	–	–	AEIN	黄灰 2.5Y-5/1	A	破片	外面：平行叩き目痕 内面：同心円状当て具痕	末野産
63	陶器 壺	–	–	–	ACI	にぶい赤 5YR-5/4	B	頸部破片	外面：ヘラケズリ痕有	常滑産
64	陶器 壺	–	–	–	AEI	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	破片	外面：押印文	常滑産か
65	陶器 壺?	–	–	–	ABI	にぶい赤褐 5YR-5/3	B	破片		産地不明
66	陶器 壺	(36.4)	(5.5)	–	ABC	赤灰 2.5YR-5/1	B	口縁部 10%		常滑産
67	陶器 汁次	推定 23kg	(10.3)	9.5	AIN	浅黄 2.5Y-6/4	B	60%	灰釉	瀬戸・美濃産
68	陶器	–	–	–	ABD	暗灰 7.5YR-5/1	A	破片	器種不明 灰釉に緑釉	瀬戸・美濃産か?

第6表　第1号溝跡出土遺物観察表（2）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
69	磁器 丸皿	(9.8) (2.0)	(4.8)	–	灰白色		B	10%	明朝染付皿	
70	磁器 瓶	–	–	–	–	灰色	B	破片	青磁	亀泉窯
71	陶器 壺か?	(16.2)	(3.3)	(12.6)	DHN	灰白 2.5Y-8/1	B	口縁部 10%	鉄釉	瀬戸・美濃産
72	陶器 甕	–	(2.5)	–	AN	灰黄 2.5Y-6/2	A	胴部破片	外面：鉄釉かけ流し	丹波系か?
73	平瓦	最大長 (12.0)	最大幅 (12.5)	最大厚 2.5	ABDE	褐色灰 7.5YR-5/1	B	破片	凸面：狐縄圧痕有（斜位） かぎかに縄文叩き痕有 凹面：縦ナデ痕有 摩耗著しい	
74	平瓦	最大長 (6.5)	最大幅 (5.8)	最大厚 (2.1)	AC	にぶい黄橙 10YR-7/3	A	破片	凸面：縄叩き痕有 凹面：布目痕有	
75	平瓦	最大長 (6.5)	最大幅 (10.4)	最大厚 1.8	ADN	黄灰 2.5Y-5/1	A	破片	凸面：縄叩き痕 凹面：布目痕有	
76	浅瓦 丸瓦	最大長 (14.2)	最大幅 (12.0)	最大厚 2.2	ABD	灰 N6/	B	破片	凸面：縦ナデ痕 凹面：吊り紐痕及び布目痕有	
77	浅瓦 丸瓦	最大長 (9.4)	最大幅 (8.5)	最大厚 2.0	ABI	N 灰白 6/	B	破片	凸面：縦ナデ痕 凹面：布目痕有	
78	浅瓦 丸瓦	最大長 (9.4)	最大幅 (8.2)	最大厚 2.8	ABCE1	灰黄褐 10YR-6/2	B	破片	凸面：縦ナデ痕 凹面：布目痕有	
79	丸瓦	最大長 (8.5)	最大幅 (7.3)	最大厚 3.2	ABD	灰 7.5Y-6/1	B	破片	玉縁連続部付近 凹面：布目痕有	
80	浅瓦 平瓦	最大長 (9.3)	最大幅 (6.4)	最大厚 2.4	BD	灰白 5Y-7/1	B	破片		
81	管玉	最大長 2.8	最大幅 0.6	最大厚 0.45	重さ 0.96g			完形		
82	銭貨	直径 2.4	最大幅 2.4	最大厚 0.1	重さ 3.0g				皇宋通宝	
83	銭貨	直径 2.3	最大幅 2.3	最大厚 0.1	重さ 0.2g				開元通宝	
84	石器 スクレーパー?	最大長 4.0	最大幅 3.6	最大厚 1.1	重さ 16.0g					チャート
85	石器 磨石	最大長 11.7	最大幅 3.8	最大厚 2.7	重さ 120g				上下端部敲打痕有	砂岩
86	石器 磨石	最大長 9.8	最大幅 8.4	最大厚 2.2	重さ 250g				両面ともすり痕 上端に敲打痕有	砂岩
87	石器 磨石	最大長 11.3	最大幅 5.7	最大厚 3.3	重さ 280g				全面すり痕有 先端部のみ敲打痕有	砂岩
88	石器 磨石	最大長 6.7	最大幅 7.5	最大厚 1.2	重さ 92.0g				表面すり痕	砂岩
89	石器 磨石	最大長 8.1	最大幅 13.8	最大厚 2.1	重さ 165.6g				表面すり痕 先端に敲打痕有	
90	石器 磨石	最大長 (7.2)	最大幅 5.1	最大厚 3.1	重さ 184.0g				両側面、特に縁き鎬著	
91	石器 打製石斧	最大長 (7.3)	最大幅 (7.4)	最大厚 (2.0)	重さ 118.8g					
92	石器 磨石?	最大長 (5.7)	最大幅 3.3	最大厚 2.1	重さ 51g				下部欠損 表面のみすり痕有	堆積岩
93	石棒	最大長 17.4	最大幅 13.1	最大厚 8.2	重さ 2.8kg				表面下部すり痕有	砂岩
94	打製石斧	最大長 26.0	最大幅 13.7	最大厚 4.7	重さ 1.6kg				表面上部すり痕有（二次転用か?）	結晶石片岩
95	砥石	最大長 (7.8)	最大幅 4.1	最大厚 4.3	重さ 163.9g				下部欠損	花崗岩
96	砥石	最大長 7.0	最大幅 4.9	最大厚 4.5	重さ 145g					砂岩
97	石臼	最大長 31.9	最大幅 (18.4)	最大厚 14.1	重さ 11.4kg				上臼部 心棒径（2.1cm） 推定径（33.0cm）	安山岩
98	石臼	最大長 29.6	最大幅 (22.8)	最大厚 13.9	重さ 8.2kg				下臼部分 推定径 29.6cm	安山岩
99	石臼	最大長 25.2	最大幅 24.2	最大厚 9.6	重さ 7600g				臼下部 ノミ痕有（特にホゾ穴）周辺部	凝灰岩
100	石製品	最大長 24.9	最大幅 25.0	最大厚 15.2	重さ 14,000g				全面ミガキによる調整有 用途不明	玄武岩
101	板石塔婆	最大長 16.7	最大幅 10.5	最大厚 1.7	重さ 433g			破片	碑面：偏頭一部有（「右志」） 枠線、蓮座（右脇侍）	結晶石片岩
102	板石塔婆	最大長 11.6	最大幅 9.5	最大厚 (4.0)	重さ 419g			破片	裏面：刻線	結晶石片岩
103	板石塔婆	最大長 13.6	最大幅 9.6	最大厚 2.0	重さ 376g			破片	種子表現による阿弥陀（薬研彫） 装飾として枠線有	結晶石片岩 （善長石）
104	板石塔婆	最大長 13.8	最大幅 12.4	最大厚 2.0	重さ 401g			破片	碑面：装飾・枠線 裏面：一部ノミ痕有	結晶石片岩
105	板石塔婆	最大長 13.4	最大幅 6.7	最大厚 1.6	重さ 170g			破片	碑面：すり痕有（二次転用の可能性大）	結晶石片岩
106	板石塔婆	最大長 15.6	最大幅 11.7	最大厚 1.6	重さ 594g			破片		結晶石片岩
107	板石塔婆	最大長 16.2	最大幅 13.8	最大厚 2.7	重さ 890g			破片	種子表現による地蔵（薬研彫） 装飾として月輪（6.8cm） 全体的に刻線あり	結晶石片岩
108	板石塔婆	最大長 24.7	最大幅 24.4	最大厚 5.5	重さ 3800g			破片	碑側面ややミガキ痕有	結晶石片岩
109	板石塔婆	最大長 22.9	最大幅 9.4	最大厚 2.1	重さ 704g			破片	碑底部左側面片 碑上端左部片	結晶石片岩
110	板石塔婆	最大長 31.2	最大幅 11.3	最大厚 5.2	重さ 3400g			破片	下部側面すり痕（二次転用か?）	結晶石片岩
111	板石塔婆	最大長 29.8	最大幅 13.9	最大厚 2.6	重さ 2000g			破片	一部赤系色に変色 碑面：上部に装飾として蓮線有 裏面：積ノミ痕	結晶石片岩
112	板石塔婆	最大長 6.2	最大幅 4.6	最大厚 0.7	重さ 29.0g			破片	光明真言一部有（種子一文字分） 枠線有	結晶石片岩
113	板石塔婆	最大長 11.8	最大幅 10.8	最大厚 0.9	重さ 175g			破片	碑面：沈線（2 条）有 裏面：ノミ痕有	結晶石片岩
114	板石塔婆	最大長 12.1	最大幅 10.7	最大厚 1.4	重さ 293g			破片	装飾として、枠線、花瓶有 植物の影響かー部紫灰色に変色	結晶石片岩
115	板石塔婆	最大長 13.1	最大幅 7.2	最大厚 1.3	重さ 205.0g			破片	枠線有	結晶石片岩
116	板石塔婆	最大長 16.8	最大幅 9.3	最大厚 2.9	重さ 677g			破片	ケガキ線 3 本あり 種子表現による阿弥陀三尊（薬研彫） 装飾として蓮線有	結晶石片岩
117	板石塔婆	最大長 19.2	最大幅 1.5	最大厚 7.6	重さ 340g			破片	裏面：積ノミ痕有	結晶石片岩
118	板石塔婆	最大長 23.4	最大幅 17.6	最大厚 2.4	重さ 1,550g			破片	碑面：「○月○日」	結晶石片岩
119	板石塔婆	最大長 17.0	最大幅 12.5	最大厚 2.3	重さ 830g			破片	碑面：梵字有 欠損により判読不能	結晶石片岩

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
120	板石塔婆	最大長 37.5	最大幅 14.0	最大厚 3.7	重さ 3kg			破片	碑面：種子薬師による阿弥陀一尊（薬研彫） 装飾による枠線、蓮線 裏面：積ノミ痕有	緑泥石片岩
121	板石塔婆	最大長 12.4	最大幅 17.6	最大厚 3.0	重さ 1032 g			破片	裏面：積ノミ痕有	緑泥石片岩
122	板石塔婆	最大長 19.6	最大幅 20.3	最大厚 2.7	重さ 1800 g			破片	側面面取り調整有　装飾に枠線有 碑面：光明真言「正月十四日　成嵯居士（梵字）」有 碑身部片	緑泥石片岩 （豊長石）
123	板石塔婆	最大長 26.1	最大幅 10.5	最大厚 1.4	重さ 332 g			破片		緑泥石片岩
124	板石塔婆 基部	最大長 24.4	最大幅 34.5	最大厚 8.2	重さ 10800 g			破片	ホゾ穴有	雲母片岩
125	板石塔婆	最大長 21.9	最大幅 19.6	最大厚 3.2	重さ 2000 g			破片	碑右側面	緑泥石片岩
126	板石塔婆	最大長 25.8	最大幅 15.6	最大厚 3.8	重さ 2000 g			破片		緑泥石片岩
127	板石塔婆	最大長 55.2	最大幅 27.0	最大厚 4.7	重さ 10600 g			破片	碑面：光明真言有（大半剥離） 装飾として枠線有 裏面：積ノミ痕有	緑泥石片岩
128	五輪塔 空風輪	最大長 22.5	最大幅 14.5	奥行 14.1	重さ 2800 g					凝灰岩
129	五輪塔 火輪	最大長 12.4	最大幅 24.1	奥行 20.2	重さ 4200 g				隆刻による達磨り梵字有 表裏とも大きく欠損	凝灰岩
130	五輪塔 水輪	最大長 13.7	最大幅 21.5	奥行 18.6	重さ 3200 g				正面部、隆刻梵字？　漆痕有	凝灰岩
121	五輪塔 地輪	最大長 15.7	最大幅 22.8	奥行 21.0	重さ 8000 g				隆刻による達磨り梵字有	凝灰岩
132	五輪塔 空風輪	最大長 20.5	最大幅 12.0	奥行 12.4	重さ 2000 g				背面欠損多い	凝灰岩
133	五輪塔 火輪	最大長 9.7	最大幅 19.5	奥行 18.3	重さ 2600 g				隆刻による達磨り梵字有 背面に9cm程度の孔有 ホゾ穴部分無欠の工具痕有	凝灰岩
134	五輪塔 水輪	最大長 11.0	最大幅 19.9	奥行 19.1	重さ 3200 g				隆刻による達磨り梵字有	凝灰岩
135	五輪塔 地輪	最大長 11.8	最大幅 18.3	奥行 17.9	重さ 3600 g				隆刻による達磨り梵字有 表面やや黄褐色に変色	凝灰岩
136	五輪塔 火輪	最大長 15.0	最大幅 24.0	奥行 22.2	重さ 6200 g				隆刻による達磨り梵字有 正面赤彩有 上部ホゾ外周ノミ痕有 ホゾ穴部分無欠の工具痕有	凝灰岩
137	五輪塔 水輪	最大長 16.5	最大幅 23.9	奥行 23.5	重さ 12600 g				隆刻による達磨り梵字有	凝灰岩
138	五輪塔 地輪	最大長 17.1	最大幅 25.9	奥行 25.0	重さ 20800 g				隆刻による達磨り紀年名有 「口妙禅尼　応永十一年甲申口口二日」	凝灰岩
139	五輪塔 地輪	最大長 14.0	最大幅 20.3	奥行 19.8	重さ 5800 g				ホゾ穴にノミ痕有	凝灰岩
140	五輪塔 水輪	最大長 12.7	最大幅 22.0	奥行 21.7	重さ 5000 g				隆刻による達磨り梵字有	凝灰岩
141	五輪塔 地輪	最大長 16.0	最大幅 22.0	奥行 20.3	重さ 8400 g				隆刻による達磨り梵字有（四面）	凝灰岩
142	五輪塔 空風輪	最大長 23.1	最大幅 11.6	奥行 11.6	重さ 1800 g				隆刻による達磨り梵字有 風輪部わずかに金泥痕有 全体的に黒く変色	角閃石安山岩
143	五輪塔 地輪	最大長 14.1	最大幅 24.0	奥行 23.4	重さ 6600 g				ノミ調整痕、補書に有	凝灰岩
144	五輪塔 火輪	最大長 11.2	最大幅 22.1	奥行 22.9	重さ 4800 g				隆刻による達磨り梵字有 ホゾ穴部分無欠の工具痕有	凝灰岩
145	五輪塔 地輪	最大長 15.8	最大幅 23.6	奥行 23.1	重さ 10800 g				隆刻による達磨り梵字有	凝灰岩
146	五輪塔 空風輪	最大長 28.5	最大幅 15.0	奥行 14.9	重さ 7400 g				隆刻による達磨り梵字有（梵字不鮮明） 空輪部表裏に2カ所、風輪部表に1カ所梵字	凝灰岩
147	五輪塔 火輪	最大長 9.0	最大幅 19.5	奥行 17.0	重さ 2800 g				隆刻による達磨り梵字有 一部にノミ痕有	凝灰岩
148	五輪塔 地輪	最大長 15.3	最大幅 20.7	奥行 19.1	重さ 10600 g				上下両面ともミガキ調整痕有	凝灰岩
149	五輪塔 地輪	最大長 12.1	最大幅 17.6	奥行 18.9	重さ 2800 g				正面一部に赤彩有 各面にノミ痕有 欠損著しい	角閃石安山岩
150	五輪塔 地輪	最大長 15.7	最大幅 28.0	奥行 23.0	重さ 16800 g				底部ノミ調整痕多数有	砂岩
151	石製品	最大長 21.1	最大幅 13.9	最大厚 7.2	重さ 3600 g				表面わずかにノミ痕有 使用用途不明	砂岩
152	短冊形木製品	残存長 4.15	最大幅 9.05	最大厚 0.20			下部欠損 両端、上部完存		木取：柾目	広葉樹？
153	短冊形木製品	残存長 7.70	最大幅 0.80	最大厚 0.20			完存（上下、両端部完存）		木取：柾目	広葉樹？
154	用途不明木製品	残存長 4.20	最大幅 2.20	最大厚 0.95			一部欠損		木取：斜め（板目）　下部削りによる成形痕有	広葉樹？
155	板状木製品	残存長 7.80	最大幅 4.05	最大厚 0.30			完存（上下、両端部完存）		木取：柾目	広葉樹？
156	用途不明木製品	残存長 6.00	最大幅 2.65	最大厚 1.00			一方面欠損 もう一方は自然面		木取：割材？　一部欠物による傷跡あり？	針葉樹？
157	板状木製品	残存長 9.10	残存幅 2.90	最大厚 0.80			一方側端のみ残存		木取：斜め（板目）	針葉樹？
158	用途不明木製品 （板状）	残存長 8.45	最大幅 2.80	最大厚 1.40					木取：斜め 面取りにより本体作成（ただし、先端部のみ斜めに削り落とし、切先作成）	－
159	用途不明木製品	残存長 7.25	最大幅 3.30	最大厚 1.45					木取：板目 断面が鋭角三角形状の棒状木製品（経巻風状）	－
160	用途不明木製品	残存長 6.45	最大幅 4.30	最大厚 1.50					木取：板目 削りによる切り落として、先端作成（三角形状） 裏面は自然面有	－
161	用途不明木製品	残存長 12.75	最大幅 3.60	最大厚 2.70			一部欠損		木取：板目（斜め） 両端とも斜めに切り落とし成形 一方端は杭先状に2面を切り落とす	針葉樹？
162	棒状木製品 （角形）	残存長 17.85	残存幅 1.95	最大厚 0.95			一方側端と一方端欠損		木取：斜め（板目） 角形の棒状製品の先端一面のみ斜めに削ぎ落とし先端作成	－
163	有頭棒状木製品	残存長 14.20	最大幅 1.70	残存厚 1.30			下部欠損 半身欠損		木取：心持材 先端から0.8cm以下に幅0.3mm程度のくびれをもって頭部有。本体前面面取り整形	－

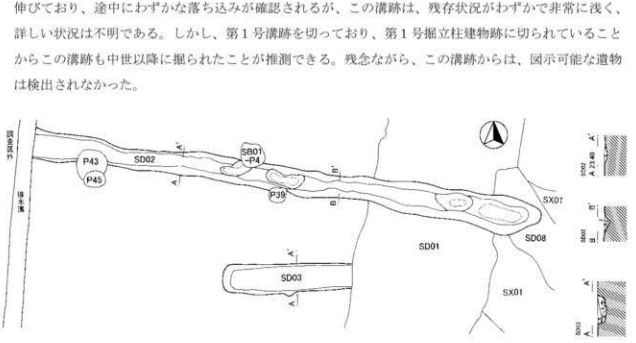
第６表　第１号溝跡出土遺物観察表（３）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
164	棒状木製品	残存長 12.50	最大幅 1.75	最大厚 0.80				一方端欠損 一方側端欠損	木取：斜め（板目） 一方端部。斜めに崩とし、先端部を丸く作る	-
165	杭	残存長 34.30	最大幅 2.55	最大厚 2.35				先端部欠損	木取：心持材 一面を斜めに切り落とし杭先を形成	広葉樹？
166	杭	残存長 18.80	最大幅 2.75	最大厚 2.30					木取：心持材 枝を払ったのみの材の先端を２面削り落とし、杭先を形成する	-
167	棒状木製品（杭？）	残存長 23.00	最大幅 5.00	最大厚 2.60					木取：板目 端部の両面を斜めに切り落とし先端作成	
168	角材	残存長 10.80	最大幅 3.50	最大厚 3.20					木取：斜め 先端の一面を削り落とし、直角三角形に形成し、先端部を形成、本体は一面以上欠損か？	
169	角材（杭木製品）	残存長 16.50	最大幅 5.70	最大厚 4.25					木取：割材 ６面整形した角材 一部欠損するもほぼ完存 ２面において刃物傷らしき傷多数有	
170	杭	残存長 57.70	最大幅 4.30	最大厚 3.50				ほぼ完形？	木取：心持材 先端の一面を削り落として杭先を形成している	
171	板材（曲物の側板？）	残存長 19.45	最大幅 5.50	最大厚 1.20					木取：斜め 両方とも削りによる成形。一部側端大きく欠損するも、他面は完存	
172	板状木製品	残存長 41.90	最大幅 18.85	最大厚 2.75					木取：割材 両側端の一部及び下端の極部が残存する以外欠損	用途不明
173	木製品（曲輪容器？）	残存長 24.20	最大幅 20.80	最大厚 12.70					木取：割材 曲輪または容器の木製品か？ 内面側を削り抜いて成形 一方端は欠損、外面は板皮を剥ぎ取り成形	

第２号溝跡（第 45 図）

Ａ～Ｃ－６グリッドから検出した。他の遺構と重複関係にあり、第１、８号溝跡、第１号掘立柱建物跡、第 39、43 号ピットと重複関係にあり、それらのピットに掘り込まれている以外は、全ての遺構を切っていた。なお、一部は調査区域外に向かって走っており、詳細は不明であった。

規模は、検出長 8.2 m、幅 0.62 ～ 0.32 m、深さは 0.05 m であった。ほぼ一貫した幅で東西方向に伸びており、途中にわずかな落ち込みが確認されるが、この溝跡は、残存状況がわずかで非常に浅く、詳しい状況は不明である。しかし、第１号溝跡を切っており、第１号掘立柱建物跡に切られていることからこの溝跡も中世以降に掘られたことが推測できる。残念ながら、この溝跡からは、図示可能な遺物は検出されなかった。



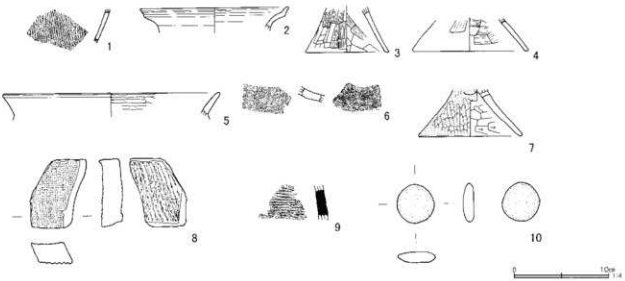
第 45 図　第２・３号溝跡

第３号溝跡（第 45 図）

Ｂ－７グリッドから検出した。第１号溝跡と重複しており、その溝跡に切られていた。

規模は、検出長 20.4 m、幅 0.45 m、深さは 0.16 mであった。東西方向に伸びており、第１号溝跡に切られて全体は不明ではあるが、他の溝跡に比べて規模が小さい。

出土遺物は、規模が小さいわりに比較的多く検出されており、弥生土器の壺、高坏、古墳時代のものとして土師器壺などが検出された。これらの遺物から、弥生時代中期後半～古墳時代中期初頃の溝と考えられ、須恵器や瓦などは、流れ込みと考えられる。



第 46 図　第３号溝跡出土遺物

第７表　第３号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺か？	-	-	-	ABEGIM	にぶい橙 7.5Y-7/4	B	胴部破片	外面羽状文有	
2	弥生土器 壺	(15.8)	(2.6)	-	ABEGJMO	にぶい橙 7.5Y-7/4	B	口縁部 10%		
3	弥生土器 高坏？	-	(4.9)	(8.8)	ABEI	橙 7.5Y-6/6	B	台部 20%	外面：ヘラ調整（6本） 内面：ヘラ調整	
4	弥生土器 高坏？	-	(3.4)	(12.3)	ABCI	橙 7.5Y-6/4	B	底部 30%	外内ともヘラ調整有	
5	土師器 壺	(23.0)	(2.8)	-	BDEHN	にぶい橙 5YR-7/4	B	口縁部 10%		
6	土師器 壺	-	-	-	BDEHKN	外面：にぶい橙 5YR-6/4 内面：黄灰 2.5Y-4/1	B	口縁部破片	胴部との接着痕外面に有	
7	土師器 器台	-	(5.0)	(11.0)	ABDEIJM	外面：赤 10YR-4/8 内面：橙 7.5Y-6/6	B	40%	表面赤彩有 外面：ヘラナデ 透孔有	
8	平瓦	最大長 (7.2)	最大幅 (6.0)	最大厚 2.5	ABD	灰オリーブ 5Y-6/2	B	破片		
9	須恵器 壺	-	-	-	AEGM	暗青灰 5B-4/1	B	胴部破片	外面：平行たたき文	産地不明
10	丸石	最大長　4.1	最大幅　4.0	最大厚　1.1	重さ　25.2g					砂岩

第４号溝跡（第 47 図）

Ｅ－５グリッドから検出した。第４号掘立柱建物跡と重複関係にあり第４号掘立柱建物跡に切られていた。

規模は、全長 3.5 m、幅 0.48 ～ 0.80 m、深さは 0.14 mであった。第３号溝跡同様規模が他の溝跡に比べ小さい。

出土遺物は、ほとんど検出されず、たたき石１点のみの出土であった。

第５号溝跡（第 47 図）

Ｃ～Ｆ－６グリッドから検出した。第１、６、10 号溝跡と重複関係にあり、第１、10 号溝跡に本遺構が切られていた。第６号溝跡とは、断面などから切りあい関係を確認したが、新旧関係は分からなかった。

規模は、検出長 13.2 m、幅 0.48 m、深さは 0.14 ～ 0.21 mであった。東西方向に、ほぼ一貫して同じ幅で走っていた。深さもほぼ一貫して同一であり、第１号溝跡と、第 10 号溝跡とをつなぐ溝跡と考えられる。

遺物は、陶器が数点出土し、うち２点が実測可能であった。一点は器種不明、もう一点は肥後系の腰張型中椀であった。この遺物から、時期は 17 世紀代のものと考えられ、同遺構も同時期と推測される。

第６号溝跡（第 47 図）

Ｄ，Ｅ，Ｆ－５，６，７グリッドから検出した。第５、７号溝跡、第７、８号土坑、第１号性格不明遺構と重複関係にあり、第７号溝跡に合流する形で消滅し、第８号土坑に掘り込まれ、第７号土坑、第１号性格不明遺構を切り、一部北端は攪乱により消滅している。なお、第５号溝跡とは、断面などから切りあい関係を確認したが、新旧関係は分からなかった。

規模は、検出長 16.1 m、最大幅 35 m、深さは 0.05 ～ 0.13 mであった。南北方向に第５号溝跡と同様の幅で走っており、第８号土坑付近で西に向かって 90° 屈曲し、第７号溝跡に合流する。

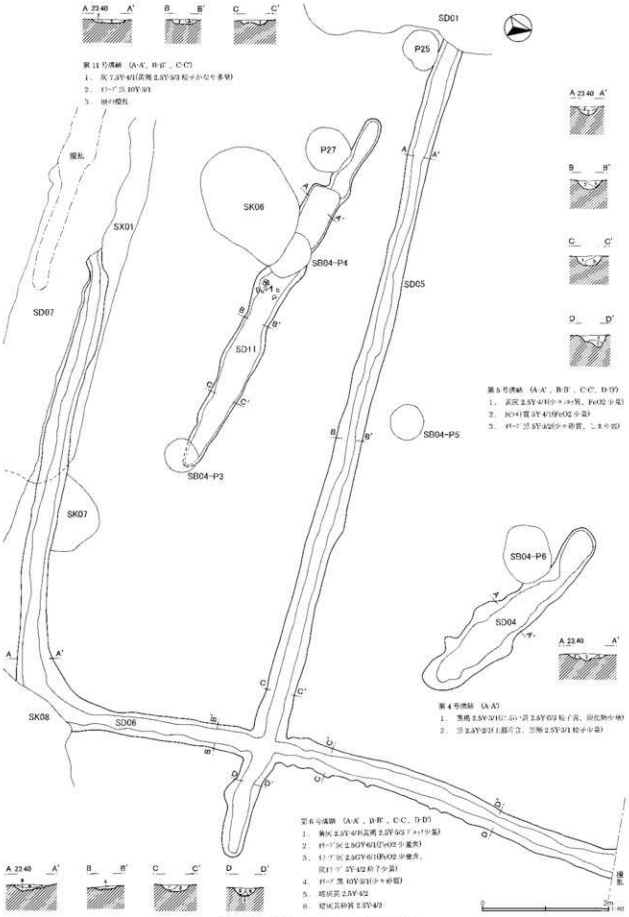
残念ながら、この溝跡からは検出された遺物はなかった。

第 11 号溝跡（第 47 図）

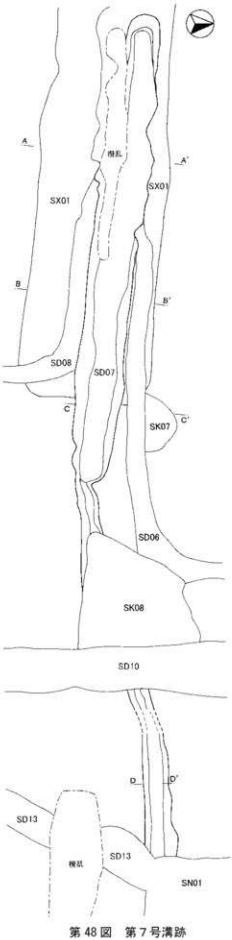
Ｃ，Ｄ，Ｅ－６グリッドから検出した。第４号掘立柱建物跡、第６号土坑、第 27 号ピットと重複関係にあり、いずれの遺構にも掘り込まれていた。

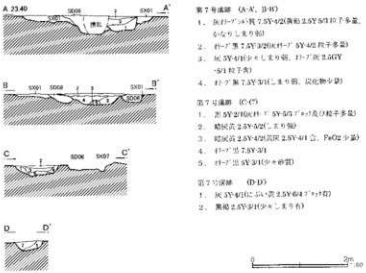
規模は、全長 6.15 m、幅 0.52 ～ 0.29 m、深さは 0.10 mと浅い。第４号溝跡とやや平行する形で東西方向に伸びており、全体的に深さも浅く、底部は凹凸が目立つ。掘り方も西端から 1.3 m手前でやや方形な掘り込みがなされている。しかしながら、性格は不明である。

この遺構からは土師器片を中心に数点の遺物が検出され、内実測できたのは土師器甕と須恵器甕であった。遺物点数や、他の遺構との重複完形から考えて、この遺構は、土師器片から判断した時期である古墳後期末ごろと考えられる。



第47図 第4・5・6・11号溝跡





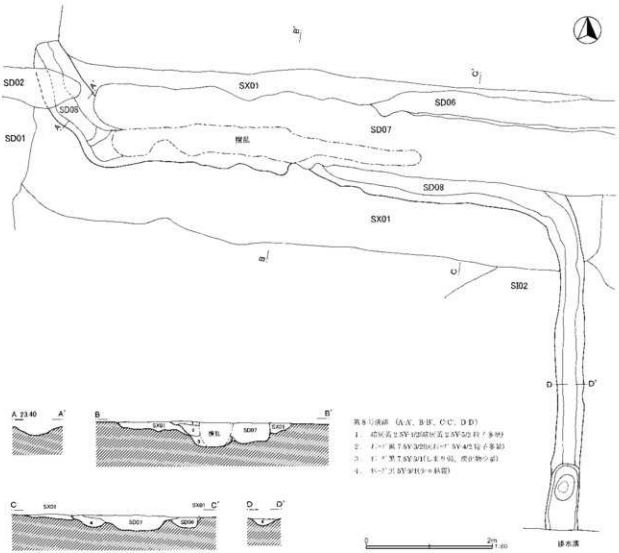
第48図　第7号溝跡

第7号溝跡（第48図）

C～F－6，7グリッドから検出した。第8号土坑、及び第6、8～10、13号溝跡、第1号水田跡、第1号性格不明遺構と重複関係にあり、西は第6号溝跡と合流し、東は第1号水田跡とぶつかり、第8号溝跡を掘り込んでいた。また、第9、10、13号溝跡、第8号土坑に掘り込まれ、一部は攪乱で消滅していた。

規模は、検出長11 m、幅1.1～0.68 m、深さは0.20～0.31 mであった。東西に伸びており、東から西に向かってやや傾斜している。東は、第8号土坑に切られた箇所から延伸しているが、さらに東の第1号水田跡から発生している溝跡と推測される。そこから西に向かって走り、第6号溝跡と合流し、第1号溝跡の1m手前で収束する。収束付近では、第8号溝跡とも重複関係にあり、複数の溝跡と接する。第1号水田跡の排水を流すため、第1号溝跡へ向かって作られたものと推測したが、途中で収束することから、詳細は不明である。

出土遺物は溝が収束する付近で陶磁器が中心に出土され、うち3点は図示可能な遺物があり、陶器碗、黒色泥岩の硯が実測できた。これらの遺物は大体17世紀ごろと考えられるが、溝跡との関連については複数の遺構と重複関係にあることから正確に判断できない。



第49図　第８号溝跡

第８号溝跡（第49図）

Ｃ，Ｄ，Ｅ－６，７，８グリッドから検出した。第２号住居跡と第１号性格不明遺構、第１、７号溝跡と重複関係にあり、第２号住居跡、第１号性格不明遺構を掘り込み、第７号溝跡に切られて、第１号溝跡に合流する。

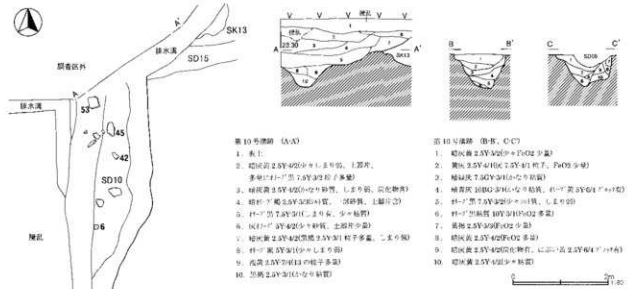
規模は、推定検出長13.8ｍ、幅0.45～0.75ｍ、深さは0.11～0.39ｍであった。溝の途中の第７号溝跡と接する付近の落ち込みは深いが、それ以外は一貫して浅い溝である。南から北へ向かい、途中で西へ屈曲し、第７号溝跡、攪乱に掘り込まれた後、再び第１号溝跡に向かって落ち込んでいた。これは当初第１号溝跡に向かって延伸し、この溝跡が後に第７号溝跡に掘り込まれ、一部欠損したものと思われる。出土遺物はわずかに須恵器、陶磁器片が検出されたが、図示可能な遺物ではなかった。

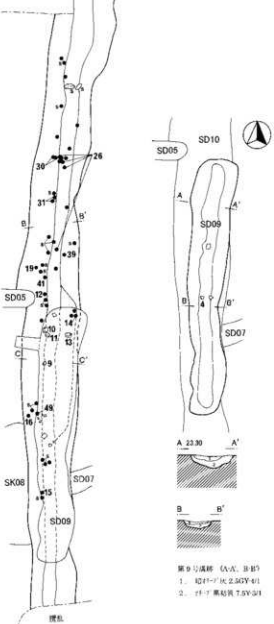
第９号溝跡（第50図）

Ｆ－６，７グリッドから検出した。第10号溝跡の真上に掘り込まれていた。

規模は、全長5.35ｍ、幅0.6～0.85ｍ、深さは0.16～0.26ｍであった。第10号溝跡が埋まった後に、再度掘り直されたようであるが、全長の規模から考えて、その性格は不明である。

遺物については土師器坏、燈明皿、陶器皿、焙烙を検出した。土師器坏は身模倣杯の古相であり、古





第50図　第9・10溝跡

墳時代後期前半（6世紀前半）ごろ、陶器、焙烙については大体17世紀前半ごろのものと考えられ、第10号溝跡との重複関係なども考慮にいれると、この溝跡の時期としては、陶器類などの時期である17世紀代が妥当であろうと考えられる。

第10号溝跡（第50図）

F－4～7グリッドから検出した。第5、7、9号溝跡、第8号土坑と重複関係にあり、第5、9号溝跡に切られており、第8号土坑を掘り込んでいた。また、残念ながら、南北部分には攪乱が存在し、それにより切られていた。

規模は、検出長12.15 m、幅1.25～0.95 m、深さは確認面の地山から0.69～0.72 mであった。現地表面下からは1.44 mの深さを持つ。西側に検出された、第1号溝跡と平行して、南北方向に伸びており、弱化ではあるが北から南へやや傾斜がついているようである。検出はされていないがおそらく、調査区域外にまで延伸するものと考えられる。

この遺構からは多量の遺物が出土しており、弥生土器から陶磁器に至るまで、各時代の遺物が出土した。弥生時代の遺物については、壺や甕で主に櫛描文を多用し、簾状文や波状文が確認できる。このことから、弥生時代中期末ごろのものと推定される。

続いて、古墳時代における遺物は、土師器の坏が主体であり、暗文内屈口縁坏や、和泉型の高坏、坏蓋模倣杯が確認でき、古くて5世紀後半から6世紀中ごろの時期

のものと推測される。

その後平安時代にかけ、一時断絶があり、鎌倉時代中ごろからの遺物が検出されるようになる。大半がかわらけであり、それ以外に陶磁器の碗や皿、壺が検出され、早いもので 13 ～ 14 世紀、遅くて 17 世紀後半ごろまでと考えられる。陶磁器は、瀬戸・美濃産、明代中国産、肥後産が確認できる。青磁、白磁も検出されており、青磁は竜泉窯のものであった。板石塔婆や五輪塔も検出されており、時期は不明であるが、寺院に関係する遺物で近世に至るころに廃棄されたものであることが推測できる。

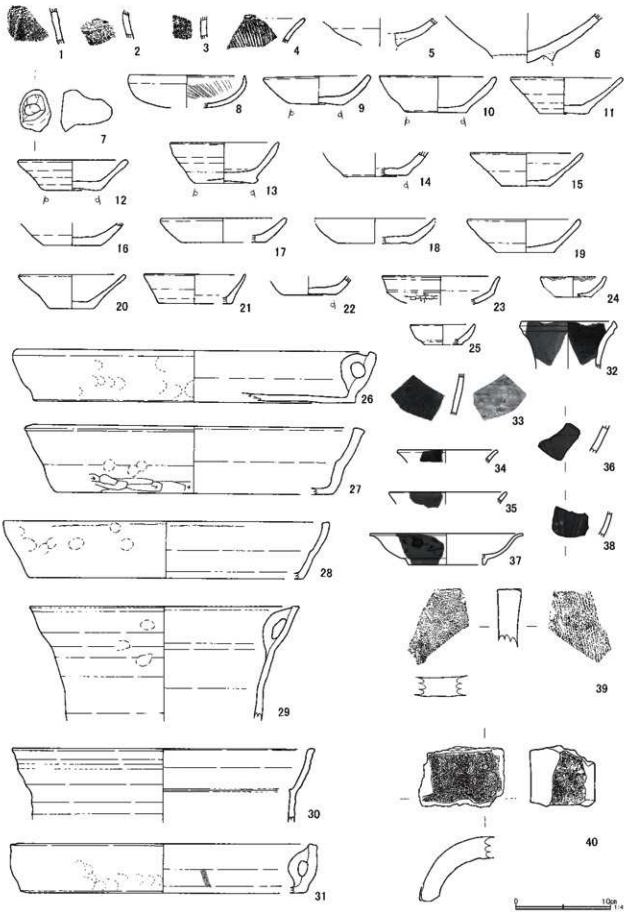
また、遺構内からは瓦の検出もあり、実測できたのは、平瓦、丸瓦の 1 点ずつであり、中世に属する瓦と推定される。よって、寺院に関係する建物に葺いていた瓦と判断できる。

第 12 号溝跡（第 54 図）

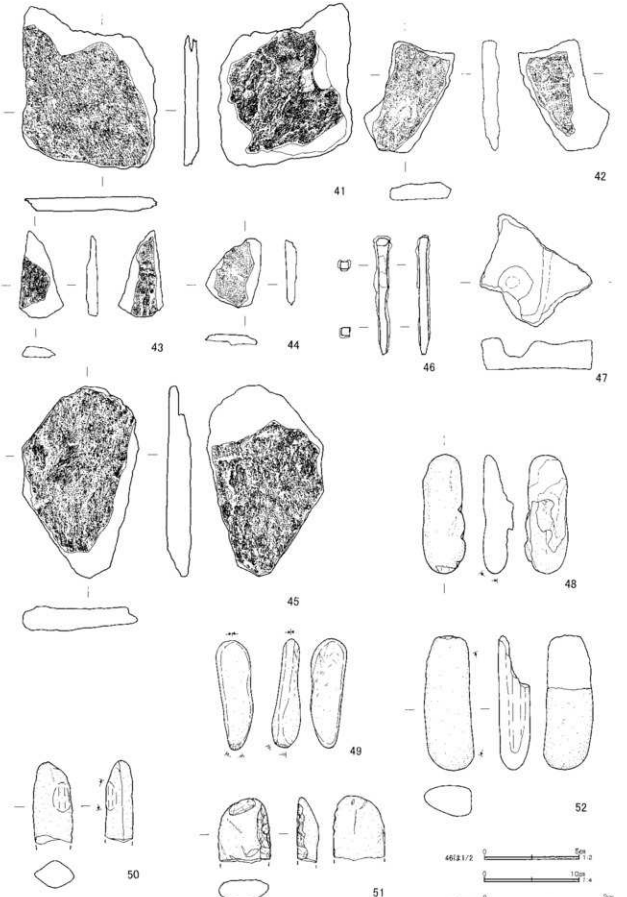
G，H，I －２，３グリッドから検出した。第 13 号溝跡、第 7 号掘立柱建物跡、第 104、105、110、

第 8 表　第 10 号溝跡出土遺物観察表（１）

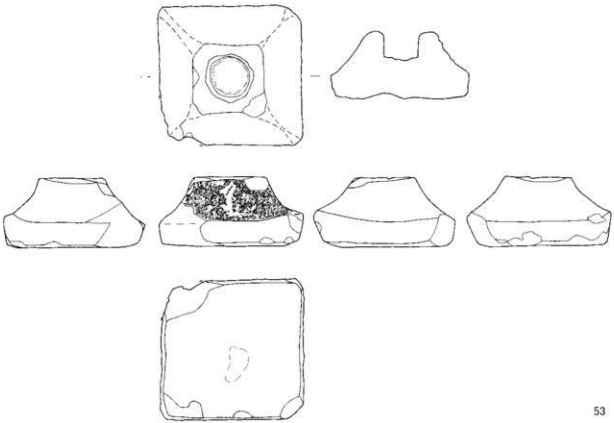
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺か？	–	–	–	GHKNO	褐灰 5YR-4/1	B	破片	頸部付近か？ 外面：縄文後わずかに確認できる　摩耗著しい	
2	弥生土器 壺	–	–	–	ABDIK	外面：暗赤灰 7.5Y-4/1 内面：灰白 7.5YR-8/2	B	頸部破片	外面：櫛描簾状文（5 本 1 単位）及び波状文	
3	弥生土器	–	–	–	DEGK	外面：にぶい橙 5YR-7/4 内面：にぶい黄橙 10YR-7/2	B	破片	外面：櫛描波状文有	
4	弥生土器	–	–	–	DI	灰黄褐 10YR-5/2	B	口縁部破片	外面：平行櫛描文有	
5	土師器 高坏	–	(3.0)	–	ABCIN	内面：にぶい橙 7.5YR-7/4	B	脚部 10%	和泉型高坏 外面：わずかに赤彩あり（有段部）	
6	土師器 高坏	–	(5.3)	–	ABCIN	にぶい橙 7.5YR-5/4	B	底部（台部） 80%		
7	土師器 鍋（取手）	–	–	–	DI	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	取手のみ		
8	土師器 坏	(12.6)	(3.4)	–	AGKN	橙 5YR-6/6	B	20%	内部口縁坏 内面：煤文有	
9	土師器 坏（かわらけ）	11.5	2.8	5.5	ABEIJ	にぶい赤橙 5YR-5/3	B	ほぼ 100%	ロクロ調整	
10	土師器 坏（かわらけ）	12.3	3.8	6.3	ABCJ	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	ほぼ 100%	ロクロ調整	
11	土師器 坏（かわらけ）	11.9	3.8	5.3	BDEGIK	にぶい橙 5YR-6/4	B	80%	ロクロ調整	
12	土師器 坏（かわらけ）	(11.7)	3.2	5.8	ABDGK	橙 7.5YR-7/6	B	50%	ロクロ調整	
13	土師器 坏（かわらけ）	(11.6)	4.3	6.2	ABCDN	浅黄橙 7.5YR-8/6	B	80%	かなり厚手　ロクロ調整	
14	土師器 坏（かわらけ）	–	(2.5)	(6.6)	ABEIJKN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	40%	ロクロ調整	
15	土師器 坏（かわらけ？）	(12.0)	3.5	(5.0)	ABCDI	橙 5YR-6/6	B	50%	ロクロ調整 口縁部径と底部径が 2：1 である	
16	土師器 坏（かわらけ？）	–	(2.4)	(6.0)	ABCDEIK	橙 7.5YR-6/6	B	底部 30%	ロクロ調整	
17	土師器 坏（かわらけ）	(13.4)	2.1	(8.8)	ABDEGKM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	10%	ロクロ調整	
18	土師器 坏（かわらけ）	(12.8)	2.6	(8.0)	BDEK	橙 7.5YR-7/6	B	20%	ロクロ調整	
19	土師器 坏（かわらけ）	(12.1)	3.5	6.0	ABEIJ	橙 5YR-6/8	B	40%	ロクロ調整	
20	土師器 坏（かわらけ）	(11.4)	3.6	4.5	ABCIJ	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	40%	ロクロ調整	
21	土師器 坏（かわらけ）	(10.8)	3.1	(7.8)	EIK	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	20%	ロクロ調整	
22	土師器 坏（かわらけ）	–	(2.0)	(5.6)	ABEGK	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	底部 50%	ロクロ調整	
23	土師器 坏	(12.5)	(2.9)	–	ABIK	橙 5YR-7/6	B	20%	坏蓋模倣坏 口縁部外反	
24	土師器 坏	(7.0)	(2.15)	(3.8)	BDK	灰白 5YR-8/1	B	30%	口縁部歪曲痕有 ロクロ調整 体部外面剥離痕有	
25	土師器 坏（かわらけ？）	(6.9)	2.2	(4.0)	ABDI	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	20%	ロクロ調整	
26	焙烙	(38.4)	5.4	(34.2)	ABDEIK	橙 7.5YR-6/6	B	30%	指頭圧痕有 内壁に内耳有	
27	焙烙	(36.0)	7.1	(29.6)	DGIKNO	黒褐 10YR-3/1	B	10%	外面：指頭圧痕 底部ヘラケズリ痕有	
28	焙烙	(34.5)	6.0	(29.0)	ABEIJN	外面：黒褐 7.5YR-3/1 内面：灰黄褐 10YR-6/2	B	10%	外面：指頭圧痕有	
29	土鍋	(28.6)	(12.1)	–	ADEM	外面：黒 10YR-2/1 内面：褐灰 10YR-4/1	B	内耳付近 10%	内耳土鍋 外面：使用痕（炭化物） 外面：指頭圧痕	
30	土鍋	(32.0)	(7.6)	–	ABEG	外面：黒褐 5YR-2/1 内面：灰褐 5YR-5/2	B	口縁部 10%	外面：使用痕？（炭化物）	
31	焙烙	(32.4)	5.2	(30.2)	ABDEK	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	10%	指圧痕有	

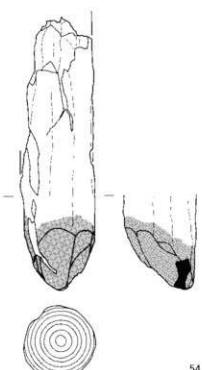


第51図　第10号溝跡出土遺物（1）



第 52 図　第 10 号溝跡出土遺物（2）





第 53 図　第 10 号溝跡出土遺物（3）

第８表　第 10 号溝跡出土遺物観察表（２）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
32	陶器 水注？	(9.6)	(12.0)	–	AB	外面：灰 7.5Y-6/1 内面：焼締灰 5GY-4/1	B	口縁部 10%	内面に施釉（半難）	古瀬戸産
33	陶器 壺	–	–	–	AB	外面：にぶい赤褐 2.5YR-4/3 内面：灰 5Y-5/1	B	破片	外面：鉄釉	古瀬戸産
34	陶器 小皿	(11.2)	(1.4)	–		暗赤灰 7.5R-4/1	B	口縁部 10%	灰釉小皿	瀬戸・美濃産
35	陶器 小皿	(13.0)	(1.3)	–		灰黄 2.5Y-7/2	B	口縁部 10%	灰釉小皿	瀬戸・美濃産
36	磁器 碗	–	–	–		灰白色	B	破片	白磁碗	龍泉窯・平戸系か？
37	磁器 皿	(16.2)	(3.3)	(8.0)		灰白色	B	10%	呉灰皿 内外面：染付	明朝
38	磁器 碗	–	–	–		灰白色	B	破片	青磁	龍泉窯
39	平瓦	最大長 (6.1)	最大幅 (5.9)	最大厚 2.5	ABIN	灰 7.5Y-6/1			凹面：布目痕 凸面：縄叩き	
40	丸瓦	最大長 (6.4)	最大幅 (9.0)	最大厚 3.2	AB1	灰白 7.5Y-7/1			凹面：布目痕 凸面：縦方向ナデ	
41	板石塔婆	最大長　26.0	最大幅　21.5	最大厚　2.2	重さ　2kg			破片	碑面下部：ケガキ線 上部左端：側面摩擦痕有	緑泥石片岩
42	板石塔婆	最大長　17.2	最大幅　14.0	最大厚　2.5	重さ　800g			破片	裏面：ノミ痕有	緑泥石片岩
43	板石塔婆	最大長　13.9	最大幅　7.1	最大厚　1.8	重さ　200g			破片	板石塔婆右端部か？	緑泥石片岩
44	板石塔婆	最大長　11.0	最大幅　8.8	最大厚　(1.8)	重さ　222g			破片	阿弥陀三尊の内脇侍蓮座の一部有 装飾として枠線有	緑泥石片岩
45	板石塔婆	最大長　30.5	最大幅　18.5	最大厚　4.0	重さ　2.2kg			破片	裏面：ノミ痕有	緑泥石片岩
46	鉄釘	最大長　(6.2)	最大幅　0.7	最大厚　0.6	重さ　4.5g			頭部及び問頭部欠損	角釘	
47	白石	最大長　11.8	最大幅　12.0	最大厚　3.4	重さ　415g				石臼中心部分 下部か？	安山岩
48	すり石	最大長　12.5	最大幅　4.5	最大厚　3.2	重さ　209g				下部先端すり痕有	砂岩
49	たたき石	最大長　11.6	最大幅　3.8	最大厚　4.0	重さ　159g				全面すり痕 下部先端敲打痕	フォルンフェルス
50	石製品	最大長　8.6	最大幅　4.2	最大厚　2.8	重さ　140g				側面一部すり痕有	砂岩
51	打製石斧	最大長　6.8	最大幅　5.5	最大厚　2.2	重さ　110g				表面わずかに赤彩付着 左上方向に敲痕　摩擦痕有	砂岩
52	石斧	最大長　14.2	最大幅　4.8	最大厚　3.2	重さ　308.5g				側面すり痕	凝灰岩
53	五輪塔 火輪	高さ　11.0	幅　23.0	奥行　23.0	重さ　3.8kg			90%	隅刻による漆塗り梵字有	角閃石安山岩？
54	杭	残存長　14.4	最大幅　3.9	最大厚　3.8				上部欠損 側面一部欠損	木取：心持材 先端を削りにより杭先を作成(先端部炭化)	材？

111 号ピットと重複関係にあり、溝跡以外の各遺構に掘り込まれている。しかし、第 13 号との切り合い関係については残念ながら確認できなかった。また、途中攪乱により一部が欠損している。

この溝跡は第 13 号溝跡から西へ向かって伸び、７ｍほど進むと、南北方向へ向かう「卜」の字状に検出された。東西方向での規模は、全長 8.65 m、幅 1.18 ～ 0.45 m、深さは 0.32 mであり、西へ向かうにつれ、その幅も広くなる。一方、南北方向は、全長 5.32 m、幅 0.95 ～ 0.36、深さは 0.29 mであった。

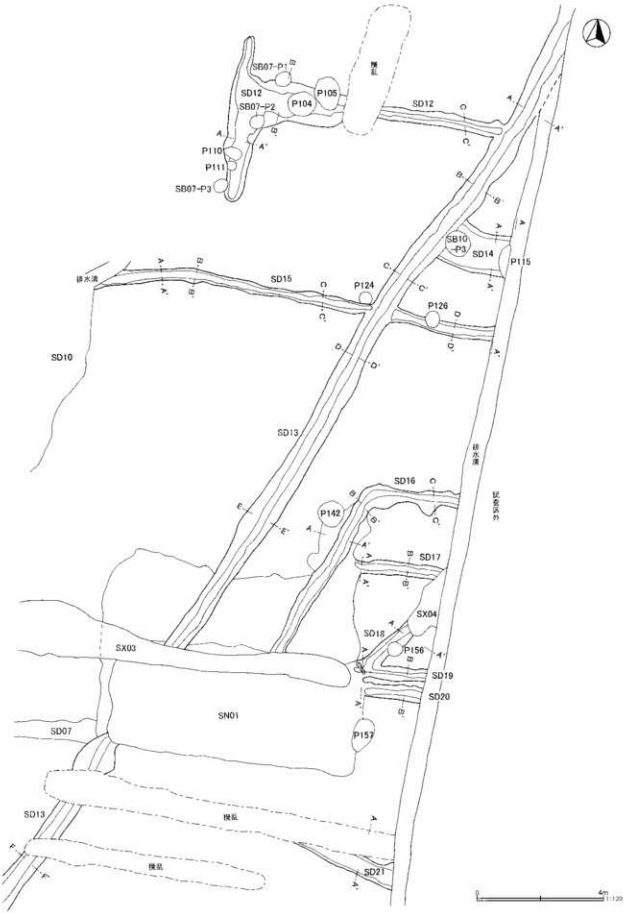
遺物については土師器片、須恵器片、陶磁器片がわずかに検出されたが、実測可能なものは土師器高坏、陶器甕それぞれ１点のみであった。土師器高坏は古墳時代に属するもので、陶器甕は中世常滑系に属するものであったが、性格な時期判断はできなかった。また、出土遺物数が少ないため、遺構に関わる時期判断はできなかった。

第 13 号溝跡（第 54・55 図）

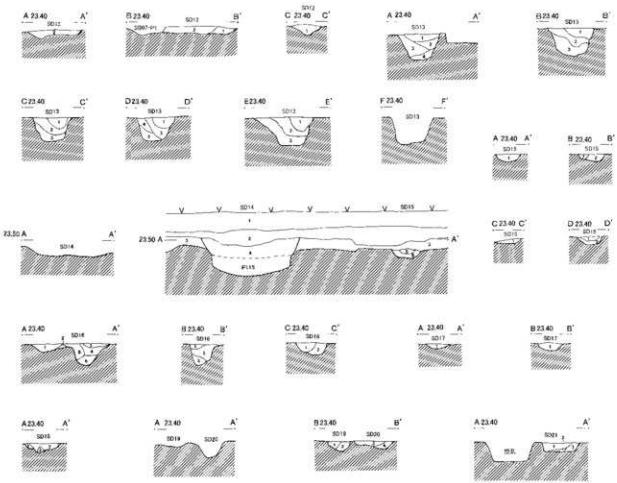
Ｆ～Ｉ－２～８グリッドから検出した。第 10 号掘立柱建物跡、第７、12、14、15 号溝跡、第１号水田跡と重複関係にあり、第 10 号掘立柱建物跡に切られており、第 14 号溝跡、第１号水田跡を掘り込んでいた。残念ながら、第７、12、15 号溝跡との切り合い関係は不明であった。

規模は、検出長 32.53 m、幅 0.95 ～ 0.65 m、深さは 0.38 ～ 0.45 mであった。一貫してほぼ同じ幅で北東方向から南西方向に伸びており、検出はされていないがおそらく、西側に検出された第 10 号溝跡へ合流するものと考えられる。

遺物は、古墳時代前期の遺物が大半で、土師器壺、台付甕、坩、高坏が確認できる。一部弥生時代に



第54図　第12～21号溝跡（1）



第12号溝跡 (A-A'、B-B')

1. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1(上層)、にぶい黄 2.5Y6/4(粒子荒)
2. 黒褐(ﾛｰﾑ)黄 2.5Y3/1(粘質)黄 2.5Y6/2ﾌﾟﾗｲﾄ有、かなりしまりなし

第12号溝跡 (C-C')

1. 黒褐 2.5Y3/1(ｼｬｰﾌﾟ)(粗質)

第13号溝跡 (A-A'、B-B'、C-C'、E-E')

1. 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY4/1
2. 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰(粘質)2.5GY3/1(浅黄 2/5Y3/4)粒子少量、少しまりなし
3. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1(灰黄 2.5Y5/2ﾌﾟﾗｲﾄ)有、少しまりなし
4. 暗灰黄 2.5Y4/2(少々粘質、FeO2多量)

第13号溝跡 (D-D')

1. 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY4/1
2. 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰(粘質)2.5GY3/1(浅黄 2/5Y5/4)粒子少量、少しまりなし
3. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1(灰黄 2.5Y5/2ﾌﾟﾗｲﾄ)有、少しまりなし
4. 灰白 2.5Y4/1(少しまりあり)

第14、15号溝跡 (A-A')

1. 表土
2. 暗(ｵﾘｰﾌﾞ)5Y4/2(少々砂質、上部中多量)
3. 黒褐 2.5Y3/1(上部有、にぶい黄 2.5Y6/4粒子及びﾌﾟﾗｲﾄ有、少しまりあり)
4. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1(ｼｬｰﾌﾟ)質、かなりしまりあり、及褐色 2.5Y3/2ﾌﾟﾗｲﾄ及び粒子多量)
5. 暗灰黄 2.5Y4/2(しまりあり、FeO2有、粒子大)
6. 暗褐 2.5Y3/1(しまりあり、FeO2有、粒子少)

第16号溝跡 (A-A'、C-C')

1. 暗灰黄 2.5Y4/2

第15号溝跡 (B-B')

1. 暗褐灰 10GY4/1(少々粘質)
2. 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY3/1(少々ｼｬｰﾌﾟ質)

第15号溝跡 (D-D')

1. 黒 2.5Y2/1
2. 黒褐 2.5Y3/1

第16号溝跡 (A-A')

1. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1(粒子細質、少々しまりあり)
2. 灰 10Y4/1(FeO2多量)
3. 1に黒褐 2.5Y3/1層多量
4. 暗灰黄 2.5Y4/2(FeO2少量)
5. 黒褐(ﾛｰﾑ)黄 2.5Y3/1(FeO2少量)
6. 黒褐砂質 2.5Y3/1

第16号溝跡 (B-B')

1. 暗灰(ﾛｰﾑ)2.5Y4/2(少々しまりあり)
2. 黒褐 2.5Y3/1(少々しまりあり)
3. 2ににぶい黄 2.5Y6/4粒子及びﾌﾟﾗｲﾄ有

第16号溝跡 (C-C')

1. 灰白 7.5Y8/1 砂質 5Y4/2(FeO2少量)
2. ｵﾘｰﾌﾞ黒砂質 5Y3/2(ｼｬｰﾌﾟ質)

第17号溝跡 (A-A'、B-B')

1. ｵﾘｰﾌﾞ黒 2.5Y3/2(少々砂質、
(黒)ｵﾘｰﾌﾞ褐 2/5Y4/3、粒子大)

第18号溝跡 (A-A')

1. 黒褐 2.5Y3/2(粒子細(ﾛｰﾑ))
2. 暗灰黄 2.5Y4/2(少々粘質、及黄 2.5Y5/4)
3. にぶい黄 2.5Y6/4(しまりなし)

第19、20号溝跡 (B-B')

1. 暗ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY4/1(FeO2少量)
2. 暗ｵﾘｰﾌﾞ(ﾛｰﾑ)質 5G4/1(しまりあり)
3. ｵﾘｰﾌﾞ黒 2.5Y3/2(FeO2少量)
4. 黒褐 2.5Y3/1(少々ｼｬｰﾌﾟ質、しまりあり)

第21号溝跡 (A-A')

1. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/2(しまりなし)
2. 黒褐 2.5Y3/1(黄(ﾛｰﾑ)2.5Y4/1)粒子少量
3. ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/2(しまりなし、無(ﾛｰﾑ)2.5Y5/3)多量)

0 2m 1:60

第55図　第12～21号溝跡（2）

属する土器も含まれていたが、この溝跡は古墳時代前期に帰属するものと考えられる。

第 14 号溝跡（第 54・55 図）

H，Ⅰ－3グリッドから検出した。第 10 号掘立柱建物跡、第 13 号溝跡、第 115 号ピットと重複関係にあり、いずれの遺構にも掘り込まれていた。

規模は、全長 1.86 m、幅 1.50 m、深さは現地表面下から 1 m で、確認面からの深さは 0.20 m である。溝跡の幅は他の東西方向に検出された溝跡と比較し、大きいが、深さが浅いことと、検出された範囲が狭いため、詳細は不明である。

遺物については土師器杯片 1 点出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

第 15 号溝跡（第 54・55 図）

F～Ⅰ－4グリッドから検出した。第 13 号溝跡、第 124、126 号ピットと重複関係にあり、各ピットに切られていたが、第 13 号溝跡との切り合い関係は残念ながら不明である。また、直接重複関係にはないが、第 8、10 号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、検出長 12.26 m、幅 0.61 ～ 0.31 m、深さは現地表面下で 0.75 m、遺構確認面から 0.16 m であった。東西方向に伸びる他の溝跡と同様の幅で延伸しており、一部は調査区域外で確認できないが、西へ進むと、第 10 号溝跡と接続し、第 1 号溝跡方向へ向かって進んでいるものと考えられる。

出土遺物は、土師器坏、須恵器甕が出土しており、坏は、坏蓋模倣杯、甕は産地不明であるが、櫛描工具による波状文が確認できた。その内の 1 点の坏は、内面に赤彩が確認されている。時期は、古墳時代中期とされ、この溝跡も同時期のものと推測される。

第 16 号溝跡（第 54・55 図）

H，Ⅰ－5，6グリッドから検出した。第 1 号水田跡と重複関係にある。この遺構の検出状況は、東西軸に 2.5 m程度伸びたら、そこから第 13 号溝跡と平行に、南西方向に伸び、第 1 号水田跡へと合流する。規模は、検出長 8.57 m、幅 0.83 ～ 0.37 m、深さは 0.20 ～ 0.37 m であった。

水田跡への接続から考えて、水の引き込みのための溝跡と推測することができる。

遺物については土師器杯片数点出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

第 17 号溝跡（第 54・55 図）

H，Ⅰ－5グリッドから検出した。第 1 号水田跡、第 4 号性格不明遺構と重複関係にあり、第 4 号性格不明遺構に切られていた。

規模は、検出長 2.66 m、幅 0.43 m、深さは最大 0.14 m であった。検出規模はわずかだが、東から西へ向かって水田跡まで伸びているものと推測され、この溝跡も第 16 号溝跡と同様、水田への水の引き込みのためのものと考えられる。

残念ながら、出土遺物は検出されなかった。

第 18 号溝跡（第 54・55 図）

H，Ⅰ－5，6グリッドから検出した。第 19 号溝跡、第 1 号水田跡、第 156 号ピット、第 4 号性格不明遺構と重複関係にあり、第 156 号ピット、第 4 号性格不明遺構に切られている。

規模は、検出長 2.30 m、幅 0.47 m、深さは 0.15 m であった。詳細は分からないが、北東方向から南西方向へ水田跡に向かって水を引き込むために掘られた溝であろう。また、水田跡への接続部には溝

の主軸方向に交差する形で、長さ0.45 m、幅0.07 mの長方形のくぼみが確認された。

遺物については弥生時代中期後半に属する鉢が1点のみ検出され、外面がヘラ描縦平フラスコ状文や重弧文が施されている。この遺物から判断すると、遺物と同様に弥生時代中期後半であろう。

第19号溝跡（第54・55図）

H，I－6グリッドから検出した。第18号溝跡、第1号水田跡と重複関係にあり、先に第18号溝跡、続いて第1号水田跡へ合流しているようである。

規模は、検出長0.20 m、幅0.45 m、深さは最大0.16 mであった。第16～18号溝跡同様、第1号水田跡への水の引き込みのために掘られたものだと考えられる。

出土遺物は、残念ながら図示可能な遺物はなかった。

第20号溝跡（第54・55図）

H，I－6グリッドから検出した。第1号水田跡と重複関係にある。

規模は、検出長1.78 m、幅0.43 m、深さは最大0.14 mであった。第16～19号溝跡同様、第1号水田跡への水の引き込みのために掘られたものだと考えられる。

遺物については土師器片1点出土したが、図示可能な遺物ではなかった。

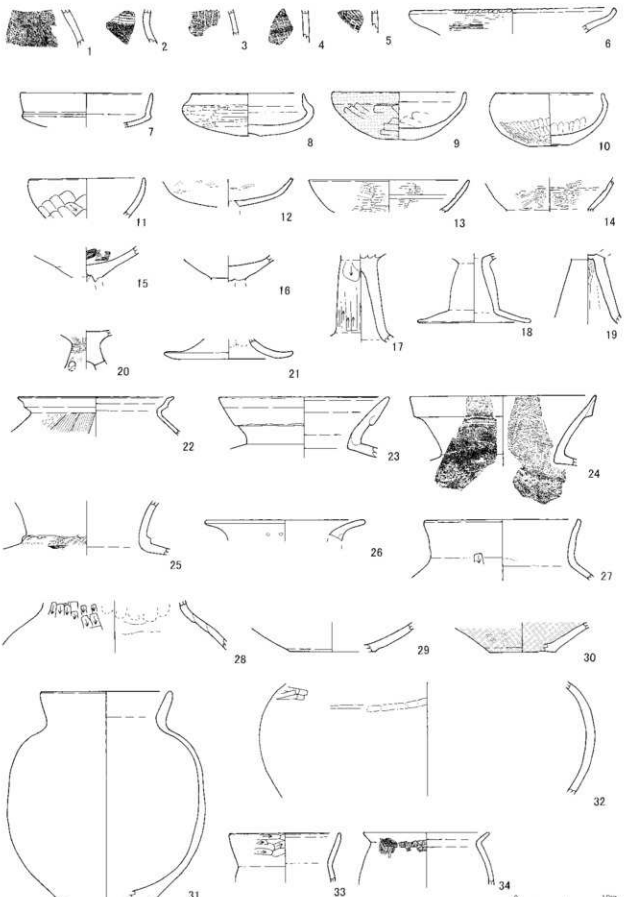
第21号溝跡（第54・55図）

H，I－7グリッドから検出した。攪乱により重複関係などが不明である。

規模は、検出長3.48 m、幅0.59 m、深さは0.14 mであった。これまでの溝跡と異なり、掘り方が方形に落ち込んでおり、南東方向から北西方向へ伸びている。攪乱で消失したのか延伸部分は確認でき

第9表　第13号溝跡出土遺物観察表（1）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺 or 甕	-	-	-	AGMD	赤10R-5/8	B	破片	外面：櫛描波状文、及び縦位方向にも波状文有 わずかにハケ目有	
2	弥生時代 壺	-	-	-	AB1	灰褐7.5YR-6/2	B	頸部破片	外面：櫛描翼状文有	
3	弥生時代 壺 or 甕	-	-	-	ABEG	褐灰5YR-4/1	A	破片	外面：ヘラ描重三角文、櫛描文（横位）有	
4	弥生時代 壺 or 甕	-	-	-	AEHNO	褐灰5YR-5/2	B	破片	外面：櫛描翼状文（7条一単位）が2段有	
5	弥生時代 壺 or 甕	-	-	-	ABDE	褐灰5YR-5/1	A	破片	外面：縄文痕有（摩耗著しく、詳細不明）	
6	弥生土器 壺 or 甕	(22.0)	(2.6)	-	DHN	浅黄橙7.5YR-8/3	B	口縁部10%	口縁端部刻み有り 外面：櫛描文（横位）有	
7	土師器 坏	(17.0)	(3.6)	-	ABD1	橙5YR-6/8	B	20%	坏蓋模倣坏 口縁部わずかに外反する 流れ込み	
8	土師器 坏	11.9	4.5	-	ACE1	橙5YR-6/8	A	完形	坏身模倣坏か？ 外面：ミガキ痕有 底部：円状のくぼみ有	
9	土師器 坏	14.3	5.0	3.6	ABD1	外面：赤10R-4/8 内面：黒7.5YR-1.7/1	B	70%	黒色土器（内面黒色処理） 外面：赤彩あり 内外面ともヘラケズリ痕有	
10	土師器 坏	11.5	5.7	4.0	ABDEM	赤10R-4/6	A	80%	内湾半球坏 内外面とも赤彩 体部内外面ミガキ有 底部わずかに内へくぼみ	
11	土師器 坏	(12.0)	(4.2)	-	ABDE1MO	明赤褐2.5YR-5/8	B	20%	やや口縁部内湾する 外面ヘラケズリ痕有 内面ヨコナデ痕有	
12	土師器 高坏	-	(2.9)	-	AB1N	にぶい黄橙10YR-7/4	B	接合部20%	脚部径（2.3）cm 脚部剥離欠損	
13	土師器 小型壺？	(17.0)	(3.4)	-	ABD1	灰褐7.5YR-5/2	A	20%	内外面ともにミガキ痕 内面口縁部中段に沈線有 No.14と同型か？	
14	土師器 小型壺？	-	(3.6)	-	AB1	にぶい黄橙10YR-7/3	B	口縁部20%	内外面ともにミガキ痕 内面口縁部中段に沈線有 No.13と同型か？	

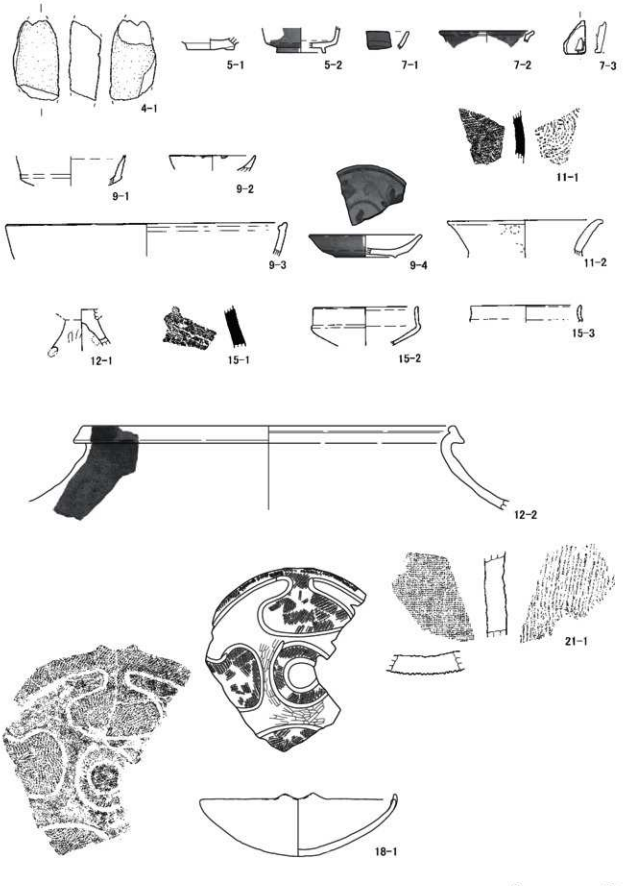


第 56 図　第 13 号溝跡出土遺物（1）

第 57 図　第 13 号溝跡出土遺物（2）

第９表　第 13 号溝跡出土遺物観察表（2）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
15	土師器 高坏	–	(3.6)	–	ABH1	外面：灰黄褐 10YR-4/2 内面：黒褐 2.5Y-3/1	B	坏部 40%	脚部径（3.2）cm 内面：ハケ目調整（横位）有 脚部剥離欠損	
16	土師器 高坏	–	(2.7)	–	ABE1W	明赤褐 2.5YR-5/8	B	接合部片	坏部分やや厚手 脚部剥離欠損	
17	土師器 高坏	–	(9.3)	–	ABDE1KM	橙 5YR-6/8	A	脚部のみ 100%	外面：ヘラケズリ痕（縦位）有	
18	土師器 高坏	–	(7.3)	(12.0)	ABD1K	橙 5YR-6/8	B	脚部 40%	大きく「八」の字状に開く 外面わずかにミガキ痕有	
19	土師器 高坏	–	(7.3)	–	ABD1N	橙 5YR-6/6	B	脚部 30%	外面：強ナデ調整 内面：ヘラ調整痕 坏部剥離欠損	
20	土師器 高坏	–	(4.0)	–	ABCDH1	外面：にぶい橙 7.5YR-6/4 内面：黒灰 2.5Y-4/1	B	接合部 80%	脚部：透孔３箇所 脚部外面：ミガキ痕（横位）有 坏部：内外面ミガキ痕有	
21	土師器 高坏	–	(2.1)	(13.7)	ABDE1N	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	脚部 30%	脚部わずかに外反する	
22	土師器 台付甕	(16.6)	(4.0)	–	DE1N	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部 20%	口縁部「S」字状 胴部にハケ目（縦位）有	
23	土師器 甕	(18.0)	(6.4)	–	ABEGDN0	にぶい橙 5YR-7/4	A	口縁部 30%	有段口縁甕	
24	土師器 甕	(19.6)	(7.4)	–	BDEKN0	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部 10%	有段口縁甕 外面：口縁部 ハケ目（横位）痕 頸部～胴部 ハケ目（縦位）痕 内面：口縁部内面引っ掻き痕 以下胴部にかけハケ目（横位）痕有	
25	土師器 甕	–	(5.7)	–	ABDG1	外面：にぶい黄橙 10YR-7/3 内面：暗灰 10YR-5/1	B	頸部～胴部 20%	口縁部「八」の字状に大きく外反 外面：櫛描文及び、同一工具による頸部接着跡有	
26	土師器 甕	(17.0)	(2.2)	–	ADEH1	橙 5YR-6/6	B	口縁部 10%	外面に圧痕有（２カ所） 口縁部外反する 口縁部断面部剥離有	
27	土師器 甕	(16.6)	(6.4)	–	ABDE1W	褐 7.5YR-4/4	B	口縁部 40%	外面：ヘラケズリ痕有 内面：指頭み上げ痕有	
28	土師器 甕	–	(5.3)	–	ABDE1W	明褐 7.5YR-5/8	B	頸部～胴部 40%	内外面ともに強圧痕 外面：ヘラ調整痕有 内面：頸部接着痕有	
29	土師器 甕	–	(3.1)	(9.2)	ABD1	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	底部 20%	内外面赤彩痕 外面：強ナデ調整痕	
30	土師器 甕	–	(3.1)	(7.0)	ABDH1N	明赤褐 2.5YR-5/8	B	底部 20%	内外面赤彩有 外面：強ナデ痕及び一部ミガキ有 内面：剥離著しい	
31	土師器 甕	(14.0)	22.4	(9.2)	ABDG1N	明赤褐 2.5YR-5/8	B	70%	外面：一部表面剥離痕有 胴張り、わずかにミガキ痕有	
32	土師器 甕	–	(11.9)	–	AB1N	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	頸部 20%	外面やや赤彩あり ヘラケズリ痕有（うち一部帯状にあり）	
33	土師器 坩	(11.9)	(5.3)	–	ABEGJW	橙 2.5YR-6/8	B	口縁部～頸部 10%	口縁部外面わずかにヘラケズリ痕	
34	土師器 台付甕	(13.4)	(6.0)	–	ABG1J	明赤褐 2.5YR-5/6	A	口縁部～頸部 20%	口縁部「S」字状 頸部にハケ目（縦位）有	
35	土師器 台付甕	–	(3.5)	–	BDEKN0	橙 7.5YR-7/6	B	接合部 90%	外面：わずかにハケ目有	
36	土師器 台付甕	–	(2.4)	4.3	ABGKN	橙 2.5YR-6/6	B	底部 100%	外面：ハケ目痕有 内面：ヘラケズリ痕（無作為）	
37	土師器 台付甕	–	(3.3)	(10.0)	ABEN	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	台部 10%	外面：わずかにヘラケズリ痕有（斜位）	
38	扁製石斧	最大長（13.3）	最大幅 6.2	最大厚 4.1	重さ 572g				刃部わずかに欠損	砂岩
39	鉄製品 釘？	最大長（5.1）	最大幅（1.2）	最大厚 0.9	重さ 6.3g				先端部わずかに欠損 内部断面不明	



第58図　第4・5・7・9・11・12・15・18・21号溝跡出土遺物

第 10 表　第４・５・７・９・11・12・15・18・21 号溝跡出土遺物観察表

遺構	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SD04	1	石器(たたき石)	最大長　8.3	最大幅　4.8	最大厚　3.2	重さ　190g					砂岩
SD05	1	陶器 皿 or 碗	–	(1.2)	(5.0)	ADN	灰白 10YR-6/1	B	底部 30%	内面に釉有	
SD05	2	瓦器 中碗	–	(2.6)	(5.2)	–	にぶい黄橙 10YR-7/2	A	底部 10%	外面に釉有 腰張型 底部に刻印有	肥後系
SD07	1	陶器 碗	–	–	–	ABD	浅黄 2.5Y-7/4	A	口縁部破片		
SD07	2	陶器	(10.0)	(1.2)	–	AB	浅黄 5Y-7/3	A	口縁部 10%	器種不明	
SD07	3	硯	最大長　3.5	最大幅　2.3	最大厚	重さ　7.0g				右下角部のみ残存（丘部分） 薄手	黒色泥岩
SD09	1	土師器 坏	–	(2.8)	–	ABCIJ	にぶい橙 5YR-7/3	B	10%	身稜部坏 体部上端ヨコナデ	
SD09	2	土師器 (灯明皿)	(9.2)	(1.6)	–	ABEIJ	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	20%	底部欠損部分から考えて高坏の可能性有	
SD09	3	須恵	(29.8)	(2.4)		ABGI	外面：オリーブ黒 5Y-3/1 内面：灰 N-6/	B	口縁部 10%		
SD09	4	陶器 皿	(12.0)	2.4	(6.3)	ADN	灰白 5Y-8/2	B	30%	鉄絵皿	瀬戸・美濃産
SD11	1	須恵器 壺	–	–	–	ADIL	黄灰 2.5Y-5/1	A	破片	外面：ヘラケズリ 内外：同心円状当て具痕	
SD11	2	土師器 壺	(16.5)	(3.9)	–	ABDEHIKN	にぶい赤褐 2.5YR-4/3	B	口縁部 10%	口縁部外反 外面：指頭圧痕有	
SD12	1	土師器 高坏	–	(4.4)	–	BDGHIKN	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	脚上部破片	透孔有 内部に指頭圧痕有	
SD12	2	陶器 壺	(41.2)	(8.9)	–	DHIN	灰オリーブ 5Y-4/2	B	10%	外面：釉有	常滑系
SD15	1	須恵器 壺	–	–	–	AELN	褐灰 7.5YR-4/1	A	破片	外面：櫛描波状文有 突帯文有（口縁部一部のみ）	
SD15	2	土師器 坏	(11.1)	(4.0)	–	ABIN	明赤褐 5YR-5/6	B	20%	坏蓋模倣坏	
SD15	3	土師器 坏	(11.7)	(1.7)	–	ABN	橙 5YR-7/6	B	口縁部破片	坏蓋模倣坏 内面　口縁部付近赤彩有	
SD18	1	弥生土器 鉢	(21.0)	6.6	–	ABDIJ	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	60%	外面上段：ヘラ描重平フラスコ状文 中段：四方から LR 単節縄文痕 下部：ヘラ描重円弧文（内部に四方から LR 単節縄文痕） 底部ミガキ調整痕 全体的に摩耗著しい	
SD21	1	平瓦	最大長 (10.1)	最大幅 (10.9)	最大厚 2.1	ABDI	灰白 7.5Y-7/1	B	破片	凹面：布目痕 凸面：縄叩き痕 粘土板縄巻き造りか？	

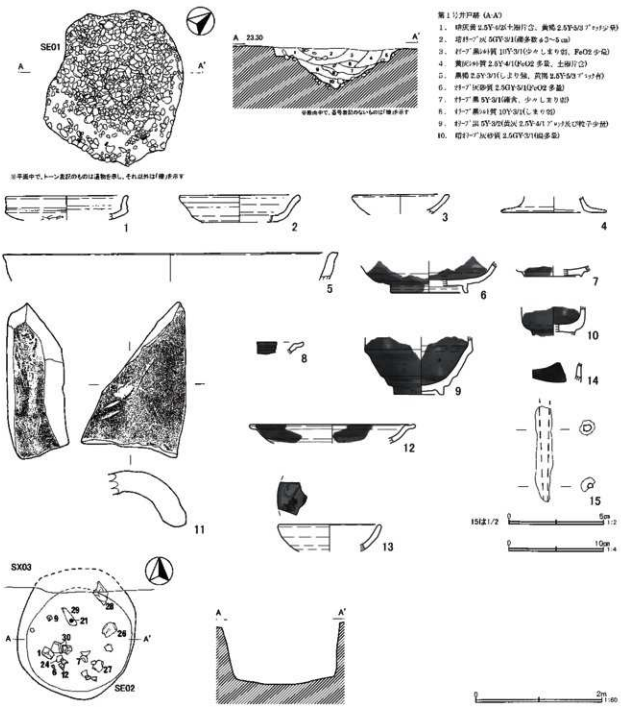
なかった。

遺物は平瓦１点出土した。９世紀から 10 世紀ごろの平安時代に遡る可能性がある瓦である。１点のみの出土であることから、不確定であるが、平安時代前後の遺構としたい。

5　井戸跡

今回、井戸跡は、総計２基検出された。うち１基は、川原石などで、構築された石積みの井戸跡であり、もう一方は、素掘りの井戸跡であった。

以下、各井戸跡についての詳細を述べる。



第 59 図　第１号井戸跡・出土遺物、第２号井戸跡

第１号井戸跡（第 59 図）

Ｅ，Ｆ－７・Ｅ－８グリッドから検出した。他の遺構との重複関係はない。

規模は、長軸 2.45 m、短軸 1.95 m、深さは 0.66 mであった。この井戸跡は、直径 0.7 m程度の大きな穴（掘り方）を掘り、その中に河原石を丸く積み上げた石組み井戸と考えられる。土層は底部付近において西からのオリーブ黒色の堆積土が連続して積もったことが観察できる。井戸にしては、0.66 mと浅いが、この周辺は微高地でありながら、地下水の水位が高く、周辺でも１m も掘らずして湧き上がることから、不自然ではないものと考えられる。残念ながら、底部付近の様相は地下水が豊富であったことから、満足に確認することができなかった。

出土遺物は、かわらけ、陶磁器などが多数出土しており、陶器類は折縁皿、小碗、天目茶碗などが検出され産地が確認できたものはすべて瀬戸・美濃系であった。１点、６世紀から７世紀頃の土師器坏が確認でき、これは後世の流れ込みと判断できる。出土した遺物のほとんどが、16 世紀～ 17 世紀代にかけてのものであることから、この井戸跡はこの時期に属する遺構と考えられる。

第 11 表　第１号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	土師器 坏	(12.0)	(2.6)	–	AHEIKW	にぶい橙 5YR-7/3	B	破片	外面：口縁部～体部横ナデ	
2	土師質土器 坏（かわらけ）	(12.8)	2.8	(8.0)	AIEIMN	橙 5YR-7/8	B	20%		
3	土師質土器 皿（かわらけ）	(10.4)	(2.0)	–	AIDEIK	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部 20%		
4	土師質土器 器台	–	(1.7)	(11.2)	AEHI	橙 5YR-6/6	B	底部 30%	燭台、もしくは灯明受皿か？	
5	信楽	(35.3)	(2.0)	–	AEGIJ	褐 10YR-4/4	B	破片		
6	陶器 皿or鉢か？	–	(3.3)	8.2	A	灰白 2.5Y-8/1	B	底部 30%		瀬戸・美濃系
7	陶器 皿か？	–	(1.1)	(6.1)	A	灰白 10YR-8/2	B	破片	№.10 と同一？	
8	陶器 折縁皿	–	–	–	AB	灰白 5Y-8/1	B	破片		瀬戸・美濃系
9	陶器 天目茶碗	–	(6.1)	5.3	AB	灰白 2.5Y-8/2	B	底部～胴部 30%	口天目 釉薬うけがけ	瀬戸・美濃系
10	陶器 小碗	–	(2.0)	–	BE	灰白 5Y-8/1	A	30%	丸形か	瀬戸・美濃系か？
11	丸瓦	最大長（16.4）	最大幅（11.1）	最大厚 2.4	DI	灰N-6/	B	破片	凸面：ナデ調整 凹面：布目痕（底部付近ナデ調整）	
12	陶器 折縁皿	(17.6)	(2.0)	–	ABE	灰白 5Y-8/1	B	口縁部破片		瀬戸・美濃系
13	陶器 皿か？	(11.0)	(2.8)	–	ABN	灰白 2.5Y-8/2	A	破片	内面：受け有　文様不明 №.11 と同一？	
14	陶器	–	–	–	AI	灰白 10YR-7/1	B	破片	器種不明 外面内面ともに鉄釉	
15	鉄釘	最大長（5.0）	最大幅（0.5）	最大厚（0.35）	重量　6.5g				丸釘か？	

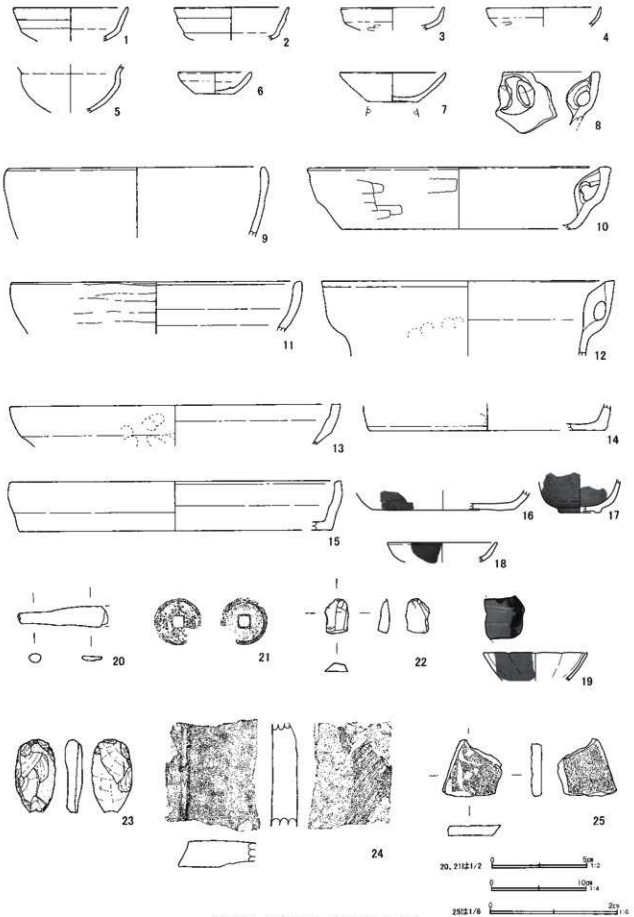
第２号井戸跡（第 59 図）

Ｆ－６グリッドから検出した。第３号性格不明遺構と重複関係にあり、一部その遺構により掘り込まれている。

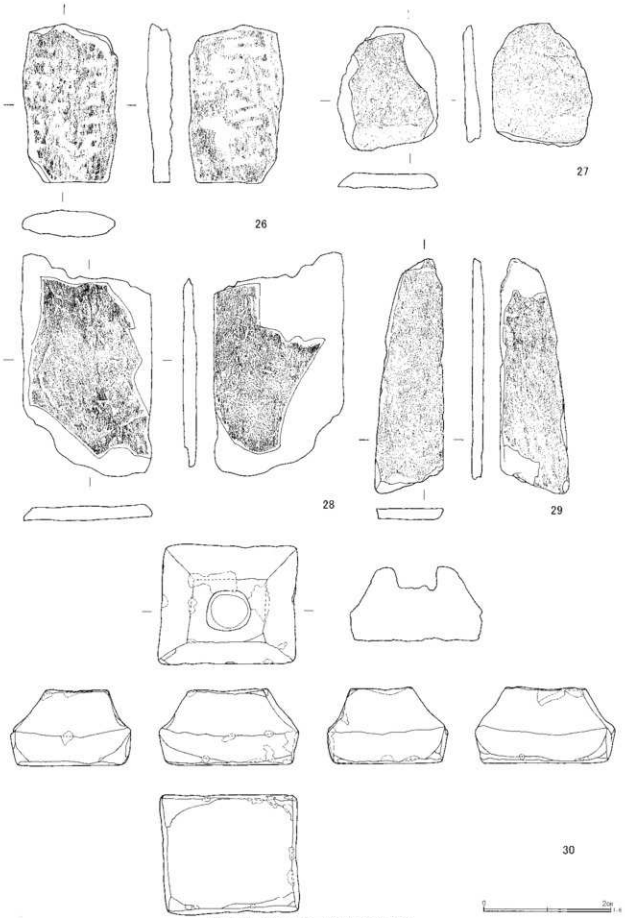
規模は、長軸 2.12 m、短軸 1.85 m、深さは 0.98 mであった。

第１号井戸跡と比較して、直径、深さともに大きく、規模の大きいものと考えられる。こちらはこちらも掘り方を円筒状に掘り抜いているが、そこに河原石を組んでおらず、素掘りのままである。調査時にこの井戸跡は地下水の浸透があまりなかったことから、井戸としての利用ができなくなったことから、放棄されたものと考えられる。

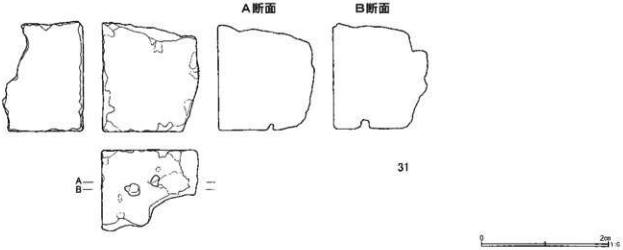
遺物として、かわらけ、陶磁器、焙烙や瓦、板石塔婆、珍しいもので煙管の吸口部分の検出があった。一部に、古墳時代の土師器坏が数点検出されているが、これらは、隣接する遺構などからの流れ込みと捉えることができる。そのため、それ以外のかわらけなどからおおよそ、15 世紀から 17 世紀初めにおける井戸跡であろうことが推測できる。



第60図　第２号井戸跡出土遺物（１）



第61図　第2号井戸跡出土遺物（2）



第 62 図　第２号井戸跡出土遺物（３）

第 12 表　第２号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	土師器 坏	(12.2)	(3.5)	－	ABEI	黒 10YR-1.7/1	B	20%	有段口縁坏 内外面ともに黒色処理	
2	土師器 坏	(12.2)	(3.5)	－	ABIJ	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	10%	有段口縁坏 内外面ともわずかに黒色処理痕有	
3	土師器 坏	(11.0)	(2.4)	－	ABCIJ	橙 7.5YR-6/6	B	10%	外面：底部ヘラケズリ痕有	
4	土師器 坏	(12.2)	(2.1)	－	ABCJ	橙 5YR-6/8	B	10%	外面：口縁部横ナデ 底部ヘラケズリ痕有	
5	土師器 椀	－	(5.1)	－	BDEI	橙 7.5YR-6/6	B	体部 10%		
6	土師質土器 皿	(7.8)	2.3	(4.0)	BIK	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	50%	外面：ロクロ調整痕わずかに有	
7	土師器 坏（かわらけ）	(11.2)	3.1	(5.1)	ABDI	灰白 5Y-8/1	B	50%	外面：ロクロ調整 底部回転糸切り痕	
8	瓦質土器 焙烙	－	－	－	ADGK	黒 7.5Y-2/1	A	内耳部破片		
9	瓦質土器 土鍋 or 焙烙	－	(7.4)	－	ABDGI	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	口縁部破片		
10	瓦質土器 焙烙	(32.2)	(6.6)	(24.8)	ABGJ	外面：にぶい赤褐 5YR-5/3	B	10%	内壁耳有、逆平坦 外面：ヘラケズリ痕有	
11	瓦質土器 土鍋	(30.8)	(5.4)	－	ABGK	黒褐 7.5YR-3/2	B	口縁部 10%		
12	瓦質土器 土鍋	(31.0)	(7.9)	－	BGIK	外面：灰黄褐 10YR-4/2 内面：灰 5Y-4/1	B	口縁部 10%	外面：煤多量に付着 内壁耳有	
13	瓦質土器 土鍋	(35.0)	4.3	－	ABDEGIK	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部破片	外面：指頭圧痕多数有	
14	瓦質土器 焙烙	－	(2.8)	(25.0)	ABDEIK	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	底部破片		
15	瓦質土器 焙烙	(35.4)	5.2	(33.0)	BIK	外面：明灰黄 2.5Y-4/2 内面：黄灰 2.5Y-5/1	B	10%	口縁部わずかに内寄する	
16	陶器 唐崎大皿	－	(2.1)	(15.0)	AD	浅黄 5Y-7/3	B	破片	底部断面割れ口に黒色塗料付着 焼締痕か？	古瀬戸産
17	陶器 志野小椀	－	(3.5)	(4.2)	BDM	灰白 2.5Y-8/3	B	底部 30%		美濃系
18	陶器 丸皿	(11.6)	(2.1)	－	－	灰 5Y-6/1	A	10%	内外面に薄い透明釉有	瀬戸・美濃系
19	磁器 染付型打皿	(11.0)	(2.1)	－	－	白色	A	10%	型打皿	肥前系
20	煙管 吸口	最大長 (4.8) 最大幅 1.05 最大厚 0.5 重量 4.76g							使用金属不明	
21	古銭	直径 2.5 孔幅 0.6 0.6 重量 2.16g							明代銅銭「永楽通宝」 1411年～	
22	剥片石器	最大長 3.7 最大幅 2.5 最大厚 1.2 重量 11.6g								チャート
23	平瓦	最大長 7.7 最大幅 4.3 最大厚 1.8 重量 64g								砂岩
24	型斗瓦	最大長 (12.2) 最大幅 (9.0) 最大厚 (2.9)			ABCI	灰黄褐 10YR-6/2	B	破片	凸面：ヘラケズリ痕わずかに有	
25	板石塔婆	最大長 (9.2) 最大幅 (9.4) 最大厚 1.6 重量 225g						破片	種子表現として阿弥陀一尊（薬研彫） 裏面：刺縫	緑泥石片岩
26	板石塔婆	最大長 (25.2) 最大幅 15.0 最大厚 4.2 重量 2800g						破片	神面：左右面わずかにケズリ調整有 裏面：横ノミ痕多数	緑泥石片岩
27	板石塔婆	最大長 (19.8) 最大幅 (16.0) 最大厚 (2.5) 重量 1145g						破片	裏面：一部黒く変色、一部ニノミ痕有	紅簾石片岩
28	板石塔婆	最大長 (35.7) 最大幅 (20.9) 最大厚 2.2 重量 2800g						破片	左上部に梵字有、光明真言か？ 「応永十五年」の紀年銘有	緑泥石片岩
29	板石塔婆	最大長 (37.5) 最大幅 (11.0) 最大厚 1.8 重量 1400g						破片	種子表現の薬研彫 銘文として「〇二年〇月〇日」有	緑泥石片岩
30	五輪塔 火輪	最大長 12.2 最大幅 22.4 奥行 19.2 重さ 4800g								凝灰岩
31	五輪塔 地輪	最大長 (17.4) 最大幅 (15.4) 奥行 (12.8) 重さ 4000g							底部に穿孔有（２カ所） 大部分欠損	凝灰岩

6　土坑

土坑は、各調査区を通じて総数26基検出した。土坑は規模の大きなものもあれば、調査区域外に接しており、一部のみしか確認できないものもあった。平面プランについては、楕円形または方形を呈するものが多い。

規模は1m～1.5m程度の長軸をとり、深さは15cm程度が平均である。しかし、規模が大きいものや、深さが30cmを超えるものもある。

全体の30%ほどの土坑から出土遺物の検出があり、全てにおける時期特定は難しく、遺物の出土がある土坑における時期については、その多くが弥生時代中期～近世に至るまでの遺物が出土しており、主として古墳時代後期と近世に該当する土坑が多いと考えられる。

個々に注視すると、第1号土坑は、大半が第1号溝跡により掘り込まれており、完全な形で確認することができなかったが、出土遺物に関しては貴重な発見となった。この遺構からは、20点ほどの弥生時代中期中葉を主体とする弥生土器壺、甕が出土し、そのうち№1～3については、ほぼ東西軸方向に等間隔（約2m）に並んで検出された。そのうち2点は在地における在地系の池上式の壺と長野地域における栗林Ⅰ式の壺で、2点が伴って出土していたことは注目すべき点であった。

第2号土坑は調査区北西の隅に検出されており、残念ながら、攪乱に大きく掘り込まれているため、深さが0.12m程度しか確認できなかった。また、大半が調査区域外であることから全様を推測することはできないが、検出遺物から、弥生時代に属する遺構と推測することができ、弥生時代中期後半ごろと考えることができる。

第3号土坑が調査区西に確認でき、第1号溝跡の直上に重複する。形はいびつな楕円形で、掘り込まれている深さは0.27mである。出土した遺物の大半は古墳時代後期を中心とした土師器坏や甕などとともに、室町から江戸期に渡る陶磁器や五輪塔、板石塔婆などの石製品などが確認されている。これは第1号溝跡から出土した遺物などと同じであり、掘り方も第1号溝跡の掘り方とほぼ同様であることから、第1号溝跡が埋没したのちに、改めて掘り返されたものであろうと考えられる。

第6号土坑は、第4号掘立柱建物跡、第11号溝跡と重複しており、同遺構は南側に寄った位置にやや深い落ち込みが存在する。

ここからは弥生時代壺、甕や、古墳時代の土師器坏、甕、壺が検出されており、用途は不明であるが、出土遺物から弥生時代中期～古墳時代後期まで利用されていたものと考えられる。

第8号土坑は、第6、7号溝跡を掘り込み、第10号溝跡に掘り込まれていた。規模は検出最大長で2.4mを測り、実測遺物として土師器甕、陶器皿が検出されているが、比較的浅く、やや小ぶりな川原石が数十点確認されたのみであった。出土した陶器皿は比較的新しいものであり、土師器甕などは、隣接する溝跡からの流れ込みと考えることができる。よって時期については不明である。

第9号土坑は第3号掘立柱建物跡と重複し、出土遺物は土師器の台付甕、椀が検出された。椀は口縁部が大きく外反し、和泉型と考えられる。時期は古墳時代前期末と推測できる。

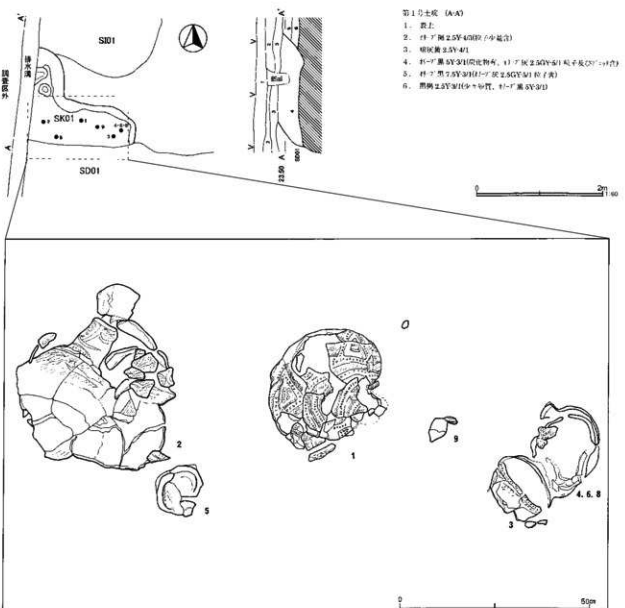
第14、16号土坑はそれぞれ、第8、9号掘立柱建物跡と直接重複関係にはないが、それら建物跡の中央に位置する。いずれの土坑からは特に遺物の出土はなかったが、それぞれの位置関係から意図して

掘り込んだことも考えられる。

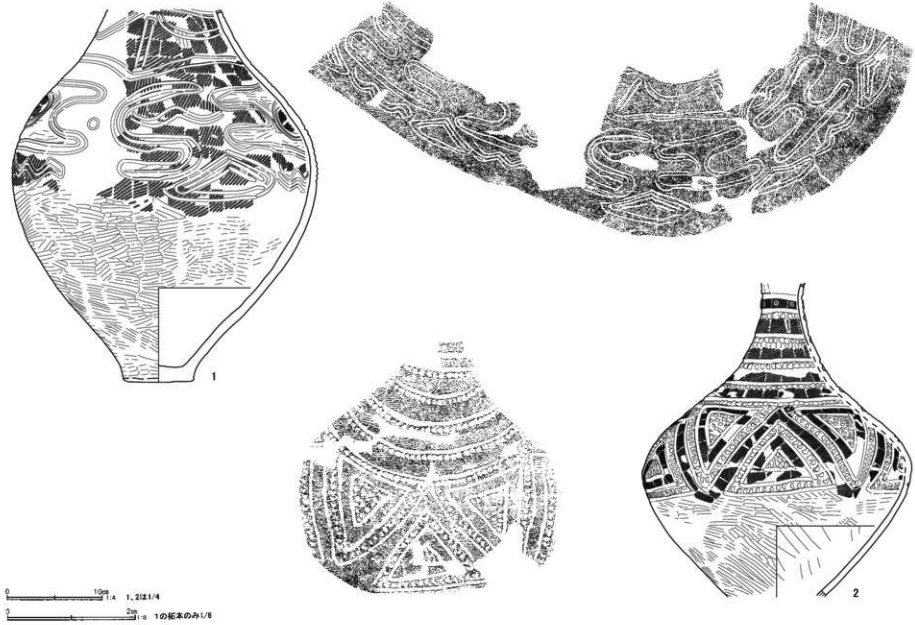
以下、紙面の都合上から、土坑の特徴等について一覧表で掲載をする。(第 63 ～ 72 図・第 13 表)

第 13 表　土坑一覧表（1）

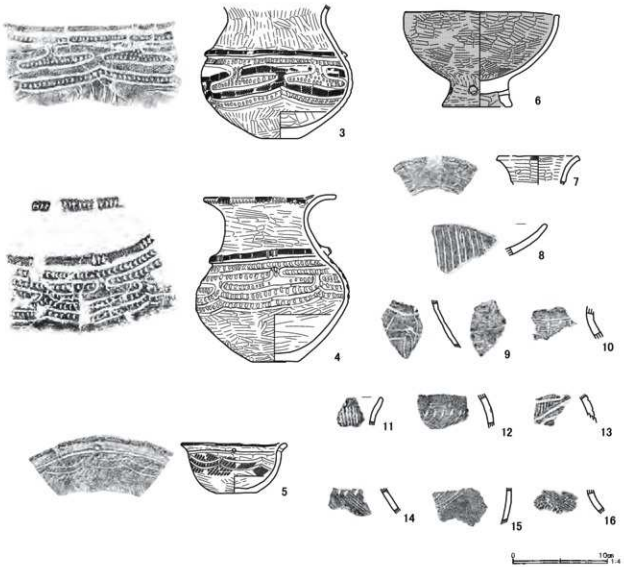
No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
1	B-5	(不整形)	(1.68) × (1.46) × 0.75	弥生土器壺・浅鉢・高坏・甕	S101、SD01	
2	B-4	(楕円形)	(1.8) × (0.8) × 0.06	弥生土器壺		
3	B, C-6	(楕円形)	2.75　1.86　0.28	壺・坏・陶器・磁器・五輪塔・石製品・板石塔婆・たたき石	SD01	
4	B-8	(長方形)	(1.32) × (0.94) × 0.23		P69、SD01	
5	C-6	長方形	1.46　0.69　0.08	土師器壺・弥生土器甕	P26	
6	D-6	不整楕円形	1.95　1.40　0.13	弥生土器壺・壺・土師器壺・坩呑・陶器	P28、P32、SB11、SB04-P4	
7	E-6、7	(円形)	1.12 × (0.69) × 0.10	土師器壺・甕 or 火鉢	SD06	
8	E、F-6、7	(不整長)	(1.92) × 2.58　0.21	土師器壺・陶器	SD06、SD07、SD10	
9	C、D-8	(不整長方形)	(1.38) × 1.12　0.10	土師器坩・台付壺・磨石	SB03-P1	
10	G、H-1、2	(不整楕円形)	2.48 × (2.12) × 0.10	土師器高坏・須恵器壺 or 瓶把手		
11	H-1、2	楕円形	1.37　1.07　0.16		SB06-P2	
12	G、H-3	(不整長方形)	3.16　1.04　0.15		P113	



第 63 図　第 1 号土坑



第 64 図　第 1 号土坑出土遺物（1）



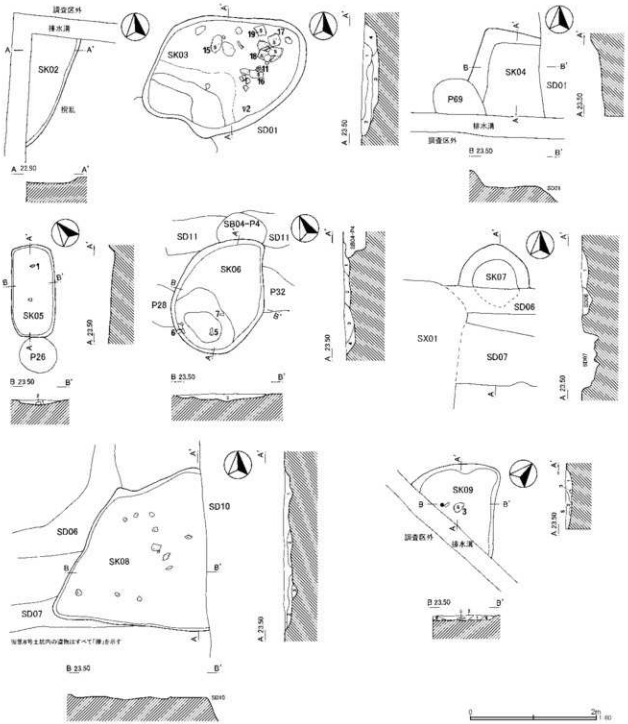
第 65 図　第 1 号土坑出土遺物（2）

第 13 表　土坑一覧表（2）

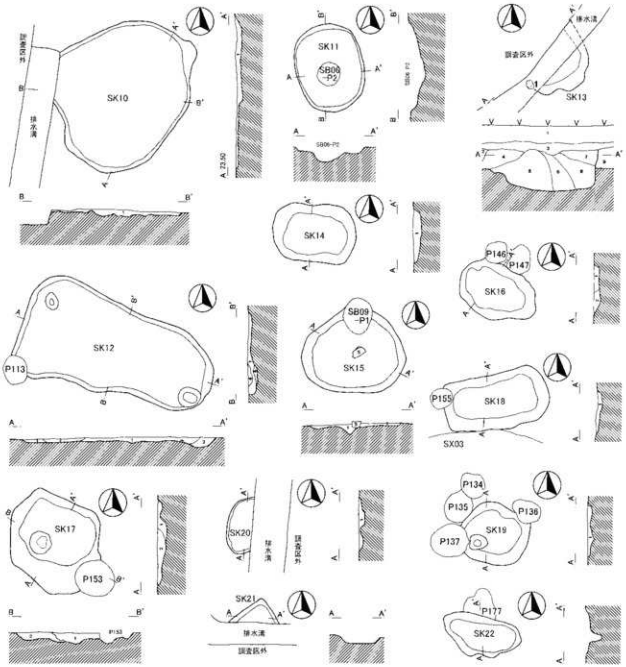
No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
13	G-3、4	（楕円形）	(0.42) × (1.02) × 0.64	土師器坏		
14	G、H-4	楕円形	1.33　0.92　0.13			
15	G-4、5	楕円形	1.65　1.32　0.17		SB09-P1	
16	G-4、5	楕円形	1.32　0.85　0.10		P146、P147	
17	G-5	不整楕円形	1.07　1.52　0.14		P153	
18	F-6	長方形	1.66　0.86　0.10		SX03、P155	
19	I-4	（楕円形）	(10.2) × (10.0) × 0.10		P135、P136、P137	
20	I-6、7	（楕円形）	0.88 × (0.40) × 0.11			
21	F-8	（方形）	(0.80) × (0.38) × 0.14			
22	G-8	楕円形	1.28　0.60　0.26		P167、P177	
23	G、H-8	（不整形）	(2.90) × (0.70) × 0.10	陶器	P197、P207	
24	H-6	（楕円形）	(1.93) × (0.80) × 0.34	土師器甕or鉢、須恵器壺	P207	
25	H-8	長方形	1.66　0.94　0.23	陶器	P202、P203、P204	
26	H、I-8	円形	2.01　1.98　0.20	土師器壺、土師器甑、須恵器壺	P206、P208、P209	

第14表　第1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成形	残存率	手法，形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺	–	(39.3)	7.4	ABEHKN	にぶい赤褐 5YR-5/6 内面：橙 7.5YR-6/6	A	頸部～底部 80%	外面：やや太めのヘラ描工字状文が4単位，「S」字状ヘラ描文が1単位を中心に，ヘラ描による波状文，平行沈線など多数有 LR単節縄文痕有（ただし，工字状文内はミガキのみ） 下部はミガキ調整 内面：ヘラナデ調整（横位）有	池上式（新）
2	弥生土器 壺	–	(23.1)	–	ABHKN	にぶい赤褐 5YR-5/3	A	頸部～胴下部 70%	外面（頸部～胴部上端）上から円形刺突列点文，ヘラ描横線文，半円型刺突文有（文様は LR 充填縄文で区画割されるも） 外面（胴部）上部はヘラ描による重三角文（間に半円形刺突列点文及び LR 充填縄文有） 下部はミガキ痕有 内面：ヘラナデ調整有 縄文施工部にはわずかに赤彩有	東林Ⅰ式
3	弥生土器 壺	–	(14.1)	4.3	ABEIKN	にぶい赤褐 5YR-5/3	B	頸部～底部 80%	外面：頸部周辺ミガキ調整痕 胴部以下ヘラ描横線文，半円形刺突列点文有 中央に最平フラスコ状文が5単位，その下にヘラ描鋸縄文が2条有（どちらも間に半円形刺突列点文，フラスコ状文のみ，外に LR 充填縄文が有） 底部付近はミガキ調整痕 内面：ヘラナデ調整有 縄文施工部にわずかに赤彩有	
4	弥生土器 壺	(14.0)	17.6	5.0	ABHKN	外面：赤褐 10R-5/4 内面：黒褐 2.5Y-3/1	B	80%	外面（口縁～頸部）：LR単節縄文（撚糸縄文）の上に半円形刺突列点文，頸部はミガキ調整有 （胴部）：突帯部に LR 単節縄文（撚糸縄文）の上に3条一組の縦位刻み（6単位）有 中央にヘラ描変形工字状縄文（4単位）有（間を半円形刺突列点文有） 底部周辺はミガキ調整有 内面：上部ヘラナデ（横位），下部ヘラナデ（斜位）	
5	弥生土器 浅鉢	11.2	5.3	4.4	ABCDHIKN	にぶい赤褐 5YR-5/3	B	90%	外面（口縁部）：LR 縄節縄文、ミガキ調整、ヘラ描横線文の痕に有（うち1カ所透孔有） 胴部：ヘラ描凍鋸文（撚糸縄文の LR 縄文有）有、下部にかけて、ミガキ調整有 内面：ミガキ調整	
6	弥生土器 高杯	15.4	10.1	7.4	ABDHIK	外面：にぶい黄橙 10YR-6/4 内面：赤褐 10R-5/4	B	80%	内外面ともミガキ調整 脚部内面ヘラナデ調整痕有 透孔4カ所有 赤彩内外面わずかに有	
7	弥生土器 壺	(8.8)	(3.1)	–	ABCHIK	にぶい赤褐 5YR-5/3	B	口縁部～頸部 20%	外面：口縁端部 LR 単節縄文有 以下ミガキ調整有 摩耗顕著不鮮明 内面：ミガキ調整有	
8	弥生土器 鉢？	–	–	–	ABIKN	黒褐 2.5Y-3/1	B	口縁部～体部 破片	外面：ヘラ描沈線による斜線文 （沈線内赤彩か？） 内面：ミガキ調整有	
9	弥生土器 壺	–	–	–	ABDINN	外面：灰褐 7.5YR-5/2 内面：にぶい黄橙 10YR-6/4	B	頸部～肩部破片	外面：ヘラ描横線文 内面：輪積痕複数有 流れ込みか？	
10	弥生土器 壺	–	–	–	ACHKN	外面：橙 7.5YR-6/6 内面：灰褐 7.5YR-4/2	B	頸部破片	外面：櫛描波状文（7本一単位）および羽状文（横、斜位）有 流れ込みか？	
11	弥生土器 壺	–	–	–	AHIN	灰褐 7.5YR-5/2	B	口縁部破片	外面：櫛描状工具による横羽状文 内面：ミガキ調整有	
12	弥生土器 壺	–	–	–	ABEHIKN	外面：黒褐 2.5YR-2/1 内面：にぶい赤褐 5YR-3/4	B	胴部破片	外面：半円形刺突列点文（上下部にミガキ調整） 内面：横位ミガキ調整有	
13	弥生土器 壺	–	–	–	ABIK	灰褐 7.5YR-4/2	B	胴部破片	外面：ヘラ描重三角文？ 縄文 LR（縦位）有 内面：ヘラナデ調整	
14	弥生土器 壺	–	–	–	ABDI	灰褐 7.5YR-4/2	B	胴部破片	外面：半円形刺突列点文有（わずかにハケ目（斜位）痕） 内面：ミガキ調整（横位）有	
15	弥生土器 壺	–	–	–	ABDIN	橙 7.5YR-6/6	B	胴部破片	外面：櫛描羽状文（横位） （ハケ目調整（斜位）痕） 内面：ミガキ調整痕有	
16	弥生土器 壺	–	–	–	ADEN	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	胴部破片	外面：ヘラ描矢羽根状文様有（2段） 内面：ミガキ調整痕有	


調査区外
排水溝
SK02
SK03
SK04
SD01
P69
SK05
P26
SD11
SB04-P4
SK06
P28
P32
SK07
SD06
SX01
SD07
SD10
SK08
SK09
第3号土坑　(A-A')
1.　暗オリーブ褐色(2.5GY-4/4)
2.　暗オリーブ褐色(5GY-4/4FeO2少量)
3.　オリーブ黒色(10Y-3/1FeO2少量)
4.　黒褐色(2.5Y-3/1少々炭・焼土、FeO2少量)
第5号土坑　(B-B')
1.　灰(5Y-4/1)褐色(2.5Y-4/1粒子状)
2.　明灰褐色
第6号土坑　(A-A'、B-B')
1.　オリーブ黒色(5Y-3/1)褐色(2.5Y-5/3粒子少量)
2.　暗オリーブ褐色(5GY-4/1)黄褐(2.5Y-5/3ブロック状少量)
3.　オリーブ黒(2.5Y-3/1少々ブロック、少々褐色(2.5Y-4/1)
4.　オリーブ黒(7.5Y-3/1)(土器片、炭化物有)
第7号土坑　(A-A')
1.　暗黒灰(2.5Y-4/2)黒灰(2.5Y-4/1ブロック少量)
第8号土坑　(A-A')
1.　暗褐色(10GY-3/2)(少々粘質)
2.　暗褐色(7.5GY-4/1)(少々ブロック・炭粒(2.5Y-6/4 作)
3.　オリーブ黒(7.5Y-3/1)(FeO2少量)
第9号土坑　(A-A'、B-B')
1.　灰褐(2.5Y-4/1)黒褐(2.5Y-3/2粒子状)
2.　灰褐(2.5Y-4/1)黒褐(2.5Y-3/2粒子状)
3.　黒(2.5Y)褐色
4.　オリーブ黒(5Y)(炭化物少量)
5.　暗褐色(5BG-4/1)(少々黒褐(2.5Y-3/2)粒子状)
B 23.50
A 22.50
A 23.50
SD03
SD04-P4
SD10
SD07
SK09
第地層堆土範囲内の遺物はすべて(陽)を示す

第 66 図　第２～９号土坑



第10号土坑　(A-A' B-B')
1．黒褐砂質 2.5Y3/1（黒色 2.5Y2/1、炭子多量）

第12号土坑　(A-A' B-B')
1．オリーブ黒 5Y3/2(Fe(O)少量)
2．黒 5Y2/1
3．オリーブ褐砂質 5Y3/3
4．黒褐 2.5Y3/1
5．黒褐 2.5Y3/3(少々粘質)

第13号土坑　(A-A')
1．表土
2．暗オリーブ黒 2.5Y3/3(小石、一部砂質、土器片含)
3．灰オリーブ 5Y4/2(少々砂質、土器片少量)
4．明灰黄 2.5Y4/2(黒褐 2.5Y3/1粒子多量、しまり強)
5．黒褐 10YR3/1(にぶい黄 2.5Y6/4粒子含)
6．黒褐 10YR3/2(少々しまり弱)
7．オリーブ黒 7.5Y 2/2(にぶい黄 2.5Y6/4ブロック多)
8．オリーブ黒 7.5Y3/2(少々しまり弱、一部地山粒子含)
9．黒褐 2.5Y3/1(4.5層中、にぶい黄 2.5Y6/4ブロック及び粒子多、少々しまり弱)

第14号土坑　(A-A')
1．黒褐 2.5Y3/1(にぶい黄 2.5Y6/3ブロック多量)

第15号土坑　(A-A')
1．暗灰黄 2.5Y 4/2(少々砂質)

第16号土坑　(A-A')
1．オリーブ黒 5Y3/1
2．黒 2.5Y2/1(炭少量)

第17号土坑　(A-A' B-B')
1．浅黄 2.5Y7/4(黒褐 2.5Y 4/1ブロック多、しまり強)
2．黄灰 2.5Y 4/1(少々しまり弱)

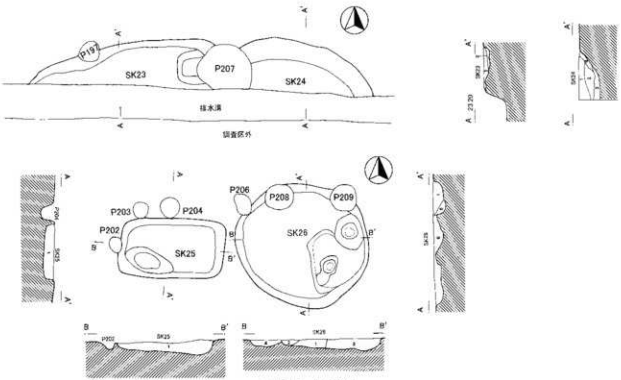
第18号土坑　(A-A')
1．暗オリーブ灰褐質 2.5GY3/1

第19号土坑　(A-A')
1．黒褐 2.5Y3/1(少々砂質、黄灰 2.5Y 4/1砂質小粒子含)

第20号土坑　(A-A')
1．オリーブ黒 5Y3/2(しまり強)

0　2m
1:60

第67図　第10～22号土坑



第23号土坑　(A-A')
1．黒褐2.5Y-4/1(灰黄2.5Y6/2、暗黄2.5Y-6/1ブロック状、FeO2少量)
2．暗灰黄褐2.5Y-4/2(しまり弱)

第24号土坑　(A-A')
1．オリーブ黒5Y5/3(FeO2少量)
2．黒褐2.5Y3/1(FeO2ブロック状、しまり普通)
3．灰オリーブ褐質5Y-5/2
4．上の砂質(しまり弱)

第25号土坑　(A-A'　B-B')
1．黒褐砂質2.5Y-3/1(一部黒2.5Y-2/1粒子多様)

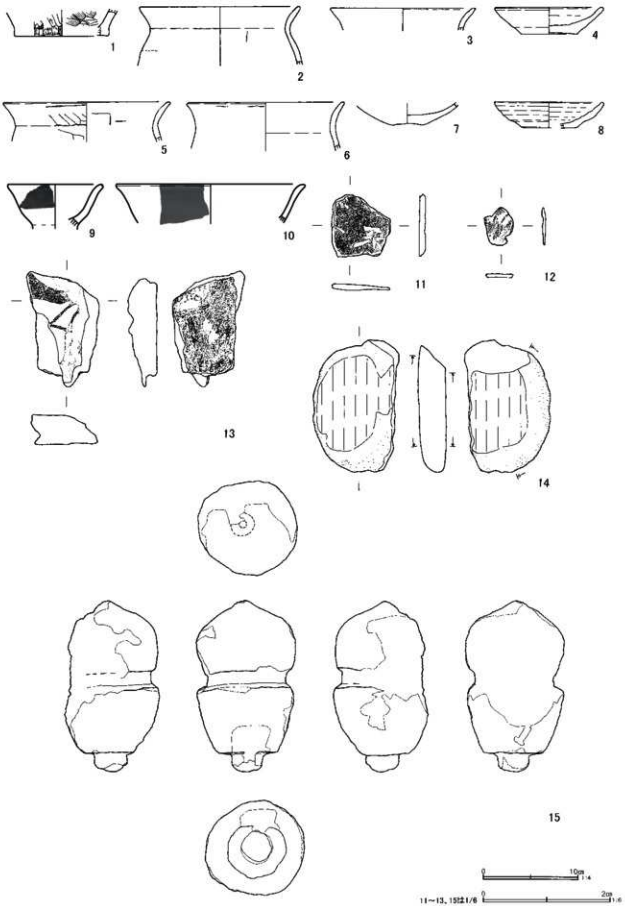
第26号土坑　(A-A'　B-B')
1．オリーブ黒7.5Y-3/1(黒褐2.5Y-3/1ボソ)
2．黒褐砂質2.5Y-3/1
3．黒褐色2.5Y-3/1(少々砂質、黒褐2.5Y-5/3ブロック状)
4．オリーブ黒7.5Y-3/1(オリーブ2.5Y-4/2粒子少)
5．褐灰10YR-5/1(一部砂質)
6．オリーブ黒7.5Y-3/1(ごしまり強)

0　2m
1:60

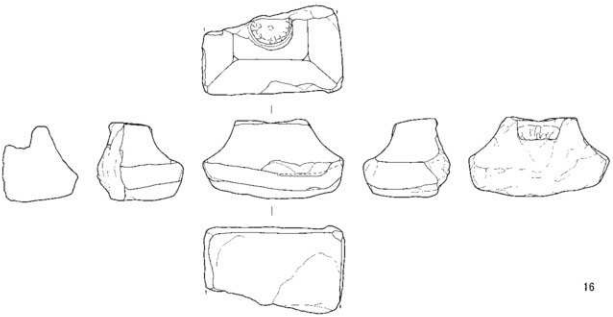
第68図　第23～26号土坑

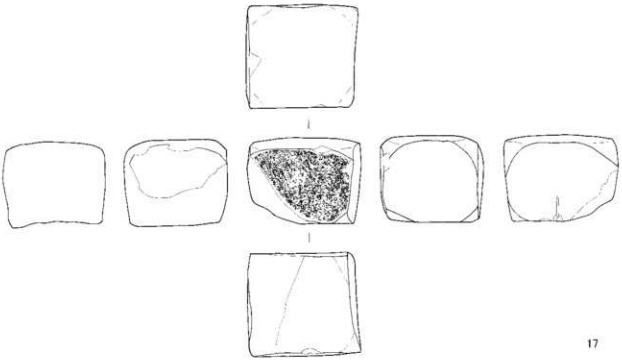
第15表　第3号土坑出土遺物観察表（1）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	土師器 甕	-	(2.8)	(10.0)	ABHI	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	底部 20%	底部外面ヘラケズリ痕（斜位）有 及び指調整痕 内面：ヘラケズリ調整有	
2	土師器 甕	(17.0)	(6.2)	-	ABEH	橙 7.5Y-6/6	B	口縁部 30%	内面：胴部ヘラ調整痕	
3	土師器 甕	(15.4)	(2.9)	-	AE	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	口縁部 10%		
4	土師器 坏	(11.5)	2.9	5.8	ABEJW	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	40%		
5	土師器 甕	(17.8)	(4.2)	-	ABCDIN	外面：にぶい黄橙 10YR-7/3 内面：にぶい黄橙 10YR-6/3	B	口縁部 10%	口縁部内面ヘラ調整痕	
6	土師器 甕	(16.8)	(5.1)	-	ABDHIN	外面：にぶい橙 7.5YR-7/4 内面：灰黄褐 10YR-4/2	B	口縁部 20%		
7	土師器 甕	-	(2.3)	(3.7)	AE	明赤褐 5YR-5/6	B	底部 100%		
8	土師器 坏	(11.6)	2.7	(4.5)	ABEJ	灰白 7.5YR-8/2	B	40%	外面：横ナデ痕	
9	陶器 灯明皿	(5.0)	(2.4)	-	AB	灰白 5Y-7/2	B	20%	やや口縁部外反する	
10	磁器 小碗	(10.0)	(2.1)	-	-	白色	A	口縁部 10%	口縁部外反　端反形か？	
11	板石塔婆	最大長　10.0　最大幅　9.4　最大厚　1.1　重さ　151g						破片	「永」か？ 裏面：剥離有	緑泥石片石
12	板石塔婆	最大長　6.1　最大幅　4.7　最大厚　0.7　重さ　23g						破片	梵面：刻み痕有 裏面：剥離	緑泥石片石
13	板石塔婆	最大長　18.5　最大幅　11.7　最大厚　4.8　重さ　1.2kg						破片	梵面：梵字有（判読不能）	緑泥石片石
14	たたき石	最大長　(14.1)　最大幅　(9.0)　最大厚　3.1　重さ　547g							側面に敲打痕有	砂岩
15	五輪塔 空風輪	高さ　(27.3)　幅　(15.9)　奥行　(15.2)　重さ　4kg							背面：欠損　No.16・17と一体	多孔質角閃石安山岩
16	五輪塔 火輪	高さ　12.5　幅　22.5　奥行　(14.0)　重さ　2.2kg						50% 欠損	No.15・17と一体	多孔質角閃石安山岩

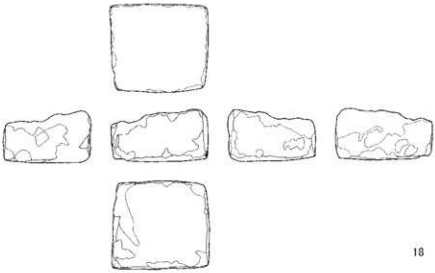


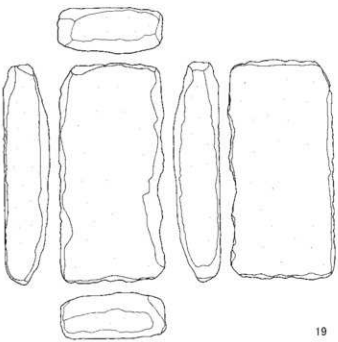
第69図　第3号土坑出土遺物（1）





第70図　第3号土坑出土遺物（2）





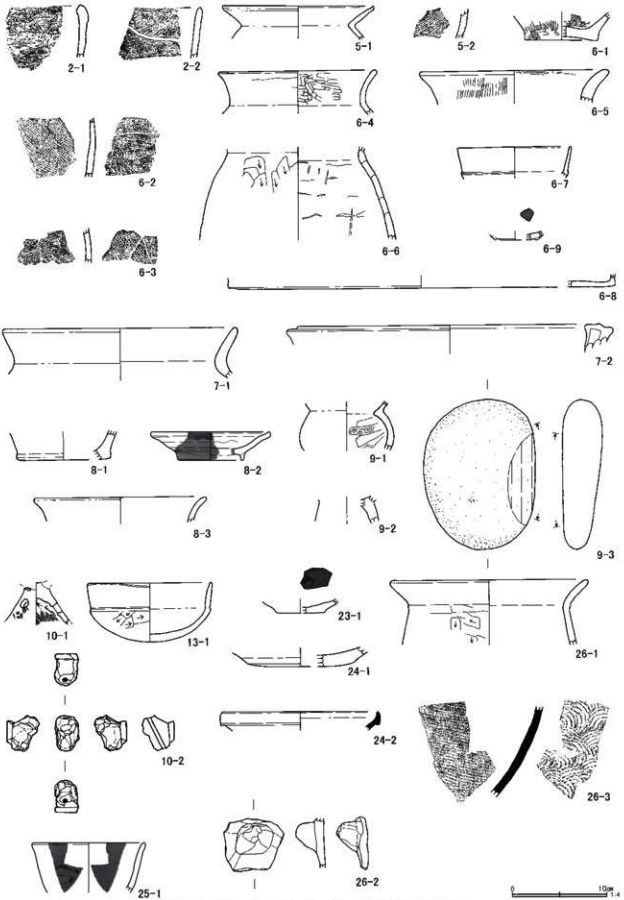
第71図　第3号土坑出土遺物（3）

第 15 表　第 3 号土坑出土遺物観察表（2）

No.	器種	法量	手法，形態の特徴等	備考
17	五輪塔 地輪	高さ　13.7　幅　18.3　奥行　16.5　重さ　4.2kg	陸刻による凍塗り梵字有 陸立時は天地逆であった？ No.15・16 と一体	多孔質角閃石安山岩
18	五輪塔 地輪	高さ　(8.3)　幅　15.6　奥行　14.1　重さ　1.4kg	上部一部欠損有	多孔質角閃石安山岩
19	石製品	最大長　35.0　最大幅　16.9　最大厚　7.3　重さ　6.2kg	方形型 四方はいびつだが方向を意識して削ったようである 上面はやや研磨痕有	安山岩

第 16 表　第 2・5～10・13・23～26 号土坑出土遺物観察表

遺構	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
SK02	1	弥生土器 壺	－	－	－	ABDKM	橙 5YR-6/6	B	口縁破片	口縁部外面先端で面らみを持ち、内面へ肉薄する 内外面横ナデ痕	
SK02	2	弥生土器 鉢	－	－	－	ABM	橙 5YR-6/6	B	口縁破片	外面：ヘラ描沈線有 沈線上部わずかに縦文痕有 内面：横ナデ痕	
SK05	1	土師器 壺	(15.9)	(3.6)	－	ABEIJKM	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部 20%	外面：横ナデ痕有 内面：摩耗のため不明	
SK05	2	弥生土器 壺	－	－	－	ABDEI	明褐 7.5YR-5/6	B	胴部破片	外面：櫛描羽状文（4 本一単位）	
SK06	1	弥生土器 壺	－	(3.0)	(7.8)	ABEHI	黒褐 2.5Y-3/1	B	底部 50%	内外面ヘラケズリ痕有 底部指頭圧痕多数有	
SK06	2	弥生土器 壺	－	－	－	ABDIJN	にぶい黄橙 10YR-5/3	B	胴部破片	外面：櫛描羽状文有 内面：ヘラケズリ痕有	
SK06	3	弥生土器 壺	－	－	－	BDEGHIKM	外面：暗赤灰 10R-4/1 内面：にぶい橙 5YR7/3	B	胴部破片	外面：櫛描羽状文有 内面：ヘラケズリ痕有	
SK06	4	土師器 壺	(16.8)	(4.6)	－	DGHN	外面：浅黄橙 7.5YR-8/3	B	口縁部 20%	口縁に赤彩の痕跡あり 内面：ヘラケズリ痕有	
SK06	5	土師器 皿	(20.0)	(3.5)	－	ABEH	橙 5YR-6/6	B	口縁部 20%	口縁周辺にミガキ痕（縦位）有 胴部との接着痕有	
SK06	6	弥生土器 壺	－	(9.8)	－	ABDEJM	橙 5YR-6/6	B	胴部 30%	外面：ヘラケズリ（斜位）痕有 内面：ヘラケズリ痕及び当て具痕有	
SK06	7	土師器 坏	(12.0)	(3.2)	－	ABEI	明赤褐 2.5YR-5/8	B	口縁部 20%	外面横撫坏 口縁部外反	
SK06	8	須恵 皿	－	(1.3)	(41.0)	ABIJN	橙 7.5YR-7/6	B	底部破片	底部平坦	
SK06	9	陶器 皿	－	(0.9)	(3.4)	AB	灰白 7.5Y-8/1	B	底部 10%	台部接着かなり不整形	
SK07	1	土師器 壺	(24.8)	(5.3)	－	ABDEGHN	にぶい橙 5YR-7/3	B	口縁部 10%	内外面とも摩耗著	
SK07	2	壺 or 火鉢	(34.6)	(3.0)	－	BDGHN	外面：にぶい褐 7.5YR-6/3 内面：橙 5YR-6/6	B	口縁部 10%	外面：横ナデ痕	
SK08	1	土師器 壺	－	(3.0)	(10.0)	ABDI	橙 5YR-6/6	B	底部 20%		
SK08	2	陶器 皿	(12.6)	(3.0)	(7.0)		外面：にぶい赤褐 5YR-5/3	A	20%	口縁部にかけて青釉有 コバルト系の青釉か？	
SK08	3	土師器 壺	(18.3)	(2.7)	－	ABDN	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部 10%	内面：指頭圧痕有 ヘラケズリ当て具痕	
SK09	1	土師器 甕	－	(5.1)	－	ABEI	橙 7.5YR-7/6	B	胴部 30%	内面：ヘラケズリ痕有 口縁部大きく外反する （和泉型か？）	
SK09	2	土師器 台付壺	－	(2.9)	－	ABCIK	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	台部 40%		
SK09	3	砥石	最大長　15.8　最大幅　11.9　最大厚　4.2　重さ　1.24kg								閃緑岩
SK10	1	土師器 高坏	－	(4.4)	－	ABCGIM	橙 2.5YR-6/6	B	高台部 70%	内外面ともヘラケズリ痕有	
SK10	2	須恵器 蓋 or 鳶把手	最大長 3.7　最大幅 2.5　最大高 3.4			AND	暗青灰 5PB-5/1	A	つまみ部分のみ	穿孔有　耳型を呈する	産地不明
SK13	1	土師器 坏	13.2	6.3	－	ABDEIJK	橙 5YR-6/8	B	80%	横撫坏 口縁部やや外反する 外面：口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ痕有	
SK23	1	陶器 碗	－	(1.5)	(5.2)	ABI	褐灰 10YR-6/1	B	底部 30%	外面：横ナデ痕 釉薬の付着内外面底部に有	
SK24	1	土師器 坩 or 鉢か？	－	(2.0)	(11.2)	AEHN	橙 5YR-6/6	B	底部 20%		
SK24	2	須恵器 壺	(17.0)	(2.0)	－	ABDEGHN	灰白 2.5Y-7/1	B	口縁部 10%	外面：回転ナデ痕痕（鎬著）	
SK25	1	陶器 碗	(12.0)	(5.2)	－	A	浅黄 5Y-8/3	B	10%	すっぽんロ形の中碗 灰釉	瀬戸・美濃系か？
SK26	1	土師器 壺	(21.0)	(6.9)	－	BDEGK	橙 5YR-6/6	B	口縁部 10%	口縁部「く」の字に外反 外面：胴部ヘラケズリ痕有	
SK26	2	土師器 甕	－	－	－	BDGN	灰白 7.5YR-8/2	B	破片		
SK26	3	須恵器 壺	－	－	－	ADHN	灰 N-5/	B	破片	外面：平行叩き目 内面：同心円状当て具痕	



第72図　第2・5～10・13・23～26号土坑出土遺物

7　ピット

ピットは、総じて 210 基検出した。ただし、調査区のうち一部は規模の大きな攪乱であったため、本来は総数がもっとあったものと思われる。

多くのピットは性格を判断できるものはなかったが、一部には柱穴痕を伺わせるものも確認することができたが、判断材料に乏しく、ピットとした。

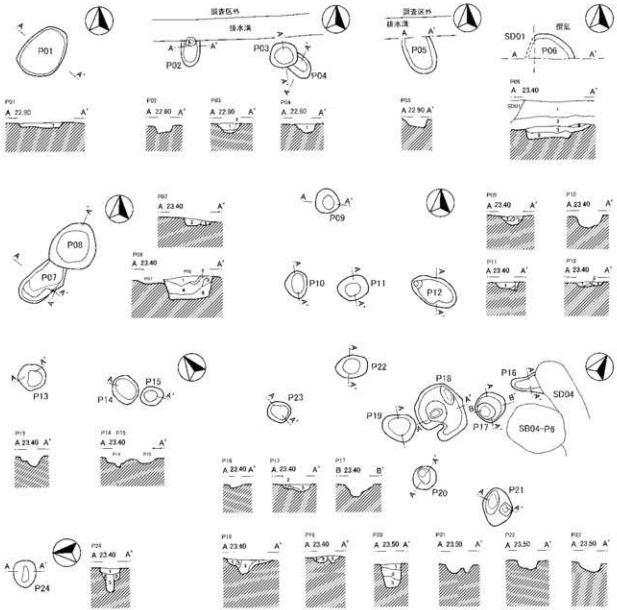
また大多数のピットからは出土遺物はほぼ検出されなかったが、およそ 30 のピットから弥生時代中期の壺、鉢、甕や、古墳時代前期後半～ 7 世紀初めの土師器坏、坩、甕、壺などが確認でき、その後の遺物としては、時期が経て、16 ～ 17 世紀に属するすり鉢や、瀬戸・美濃産の陶器皿などが確認された。また、時期不明ではあるが、剣型の石製模造品や碁石と考えられる遺物が出土している。

さらにP 207からは鎌倉時代初期から中期のものと考えられる平瓦が出土しており、第 21 号溝跡から出土した瓦類同様、寺院の歴史を知る貴重な遺物であろう。

以下、紙面の都合上から、ピットの特徴等について一覧表で掲載をする。（第 73 ～ 81 図・第 17 表）

第 17 表　ピット一覧表（1）

No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ（m）	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
1	B-4	楕円形	0.88　0.64　0.07			
2	B-4	（楕円形）	（0.40）× 0.30　0.10	土師器甕		
3	B-4	楕円形	0.44　0.38　0.16		P04	
4	B-4	（楕円形）	（0.36）× 0.34　0.14		P03	
5	F-4	（楕円形）	（0.61）× 0.45　0.15			
6	C-5	（楕円形）	0.75 × （0.39）× 0.61	すり鉢		
7	B、C-5	（楕円形）	（0.78）× 0.46　0.15	弥生土器甕	P08、SK02	
8	C-5	楕円形	0.84　0.69　0.39	土師器坏	P07、SK02	
9	D-5	楕円形	0.39　0.34　0.14			
10	D-5	楕円形	0.48　0.43　0.20			
11	D-5	楕円形	0.48　0.38　0.14			
12	D-5	楕円形	0.76　0.45　0.08			
13	E-5	楕円形	0.43　0.42　0.14			
14	E-5	楕円形	0.45　0.40　0.16			
15	E-5	楕円形	0.35　0.30　0.09			
16	E-5	（楕円形）	（0.42）× 0.28　0.05		SD04	
17	E-5	円形	0.50　0.50　0.12			
18	D-5	不整楕円形	0.81　0.75　0.24			
19	D-5	楕円形	0.53　0.46　0.12			
20	B、E-5	円形	0.39　0.38　0.38			
21	E-5	楕円形	0.61　0.48　0.16	土師器甕 or 壺　剥片石器		
22	D-5	楕円形	0.52　0.36　0.15			
23	D-6	楕円形	0.36　0.35　0.16			
24	C-5、6	楕円形	0.42　0.36　0.38	土師器壺		
25	C-6	楕円形	0.63　0.58　0.16		SD05	
26	C-6	楕円形	0.58　0.56　0.24	土師器甕	SK05	
27	C、D-6	円形	0.72　0.70　0.20	土師器壺　土師器高坏 or 台付甕　弥生土器鉢	SD11	
28	C、D-6	（不整楕円形）	（0.60）× 0.60　0.16		SK06	
29	D-6	（不整円形）	（0.68）× 0.68　0.10		P30	
30	D-6	楕円形	0.64　0.54　0.10		P29、P31	
31	D-6	（楕円形）	（0.26）× 0.38　0.08		P30	
32	D-6	（不整楕円形）	（0.71）× 0.64　0.08		SK06	
33	D-6	円形	0.47　0.44　0.17			
34	D-6、7	楕円形	0.48　0.43　0.27			
35	E-6	楕円形	0.39　0.35　0.24			
36	B-6	楕円形	0.68　0.44　0.10	弥生土器甕	SD01	
37	B-6	楕円形	0.80　0.45　0.08	弥生土器甕　土師器器台	SD01	
38	B-6	不整楕円形	1.03　0.64　0.04			
39	B-6	正方形	0.27　0.25　0.26		SD02	
40	B-6	不整楕円形	0.75　0.68　0.09			
41	A、B-6	楕円形	0.38　0.28　0.30			
42	B-6	円形	0.29　0.28　0.05			
43	B-6	（円形）	0.50 × （0.36）× 0.30	弥生土器甕	P45、SD02	
44	A、B-6	楕円形	0.56　0.42　0.16			
45	B-6	楕円形	0.35　0.25　0.39		P43	
46	B-6	円形	0.43　0.42　0.23			
47	B-7	円形	0.26　0.26　0.12			
48	A、B-7	（楕円形）	0.72 × （0.60）× 0.44			
49	A-7	（不整楕円形）	（0.44）× 0.35　0.14			
50	B-7	楕円形	0.45　0.34　0.15			
51	B-7	楕円形	0.42　0.40　0.23			
52	B-7	楕円形	0.50　0.40　0.30			
53	B-7	長方形	0.41　0.36　0.22			
54	B-7	不整楕円形	0.62　0.41　0.16		SB02-P6	
55	A-7	楕円形	0.51　0.40　0.05		SB01-P2	
56	B-7	円形	0.31　0.30　0.12			
57	B-7	楕円形	0.33　0.29　0.33			
58	B-7	不整楕円形	0.44　0.34　0.06			
59	B-7	（楕円形）	0.38　0.34　0.19		SB02-P3	
60	B-7	楕円形	0.58　0.53　0.12			
61	B-7	円形	0.32　0.32　0.14			
62	B-7	不整楕円形	0.40　0.34　0.18			
63	B-7	楕円形	0.38　0.22　0.10			



第1号ピット（A-A'）
1．オリーブ灰2.5GY5/1(少々粘質，FeO2多量)

第3号ピット（A-A'）
1．オリーブ灰2.5GY5/1(少々粘質，FeO2多量，焼化物微量)
2．黄褐2.5Y5/3(少々しまり弱)

第4号ピット（A-A'）
1．オリーブ灰2.5GY5/1(少々粘質，FeO2多量，焼化物微量)

第6号ピット（A-A'）
1．にぶい黄2.5Y6/4(FeO2多量)
2．灰褐2.5Y5/2(しまり強，FeO2多量)
3．黒褐2.5Y3/1(少々粘質，FeO2少量)
4．褐灰2.5Y5/1(少々粘質)
5．オリーブ黒5Y3/1(FeO2少量)

第7号ピット（A-A'）
1．黄灰2.5Y4/1
2．暗灰黄2.5Y4/2(少々しまり弱)

第8号ピット（A-A'）
1．黒褐2.5Y3/2(粒子粗ぶかい)
2．暗灰黄5Y4/2
3．オリーブ5Y4/3(しまり強)
4．オリーブ黒10Y3/1(粒子粗，7.5GY5/1ブロック含)
5．オリーブ黒5Y3/2(FeO2少量)

第9号ピット（A-A'）
1．暗灰黄2.5Y4/2(FeO2少量，オリーブ黒5Y3/1ブロック含)
2．黒褐2.5Y3/1
3．黄褐2.5Y5/3(粒子荒)

第11号ピット（A-A'）
1．黒褐2.5Y3/1(黄褐2.5Y5/3ブロック少量)
2．暗灰黄2.5Y4/2(少々砂質)

第12号ピット（A-A'）
1．オリーブ黒5Y3/1(しまり強)
2．にぶい黄2.5Y6/4(少々黄灰2.5Y4/1粒子含)

第17号ピット（A-A'）
1．オリーブ黒5Y3/1
2．暗灰黄2.5Y4/2(少々黄褐2.5Y5/3粒子含)
3．オリーブ黒5Y3/2(FeO2少量)

第18号ピット（A-A'）
1．灰5Y4/1(灰オリーブ5Y4/2粒子混ざる)
2．黄灰2.5Y4/1(ゆるやかしまり弱，灰5Y4/1少々混ざる)
3．褐灰2.5Y5/3(FeO2少量)

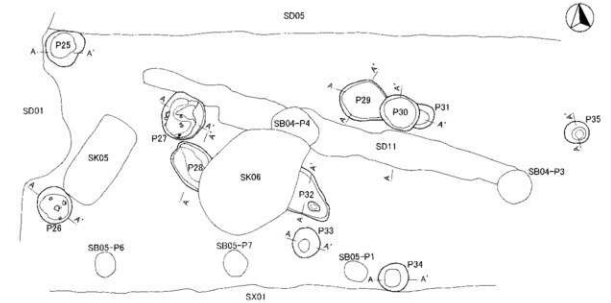
第19号ピット（A-A'）
1．オリーブ黒5Y3/2(少々砂質)
2．灰オリーブ5Y4/2(少々砂質)
3．暗灰黄2.5Y4/2

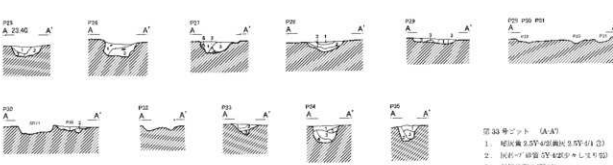
第20号ピット（A-A'）
1．褐灰2.5Y4/2
2．暗灰黄2.5Y4/2(褐灰2.5Y4/1粒子含，しまり弱)
3．オリーブ黒5Y3/1(少々しまり弱)

第24号ピット（A-A'）
1．黄褐2.5Y5/1(少々砂質)
2．黒褐10YR-3/1(しまり弱)
3．オリーブ黒5Y3/2（黒褐10YR-3/1粒子含）

0 20 40 60

第73図　第1～24号ピット





第 25 号ピット　(A-A')
1．暗オリーブ灰 5GY-3/1(シャ粘質)
2．オリーブ黒 10Y-3/1(黒褐 2.5Y-3/3 粒子少量)
3．オリーブ黒 7.5Y-3/2(シャ粘質)

第 26 号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒 5Y-3/1(黒褐 2.5Y-3/1 ブロック少量)
2．オリーブ黒 10Y-3/1(黒褐 2.5Y-3/1 ブロック少量，土器片含)

第 27 号ピット　(A-A')
1．灰褐黒砂質 10YR-4/2
2．にぶい黄褐 10YR-5/3(土器片含)
3．2 に黒褐 2.5Y-3/1 粒子多量

第 28 号ピット　(A-A')
1．黒褐 10YR-3/1(しまり強)
2．オリーブ黒 5Y-3/2(しまりやや強)
3．暗緑黒 10GY-3/1(2 の粒子及びブロック混ざる)

第 29 号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒 5Y-3/2(2 に粒子多量，しまり強)
2．黒褐 2.5Y-3/1
3．オリーブ黒 7.5Y-3/1

第 30 号ピット・第 31 号遺跡　(A-A')
1．灰 7.5Y-4/1
2．黒灰 2.5Y-4/1(シャ砂質)

第 33 号ピット　(A-A')
1．暗灰黄 2.5Y-4/2(黒褐 2.5Y-4/1 含)
2．灰白オリーブ砂質 5Y-4/2(少々しまり強)
3．暗褐砂質 2.5Y-3/2

第 34 号ピット　(A-A')
1．暗灰黄 2.5Y-5/2(しまり強)
2．暗灰黄砂質 2.5Y-4/2
3．オリーブ黒 5Y-3/2
4．オリーブ褐砂質 5Y-3/1

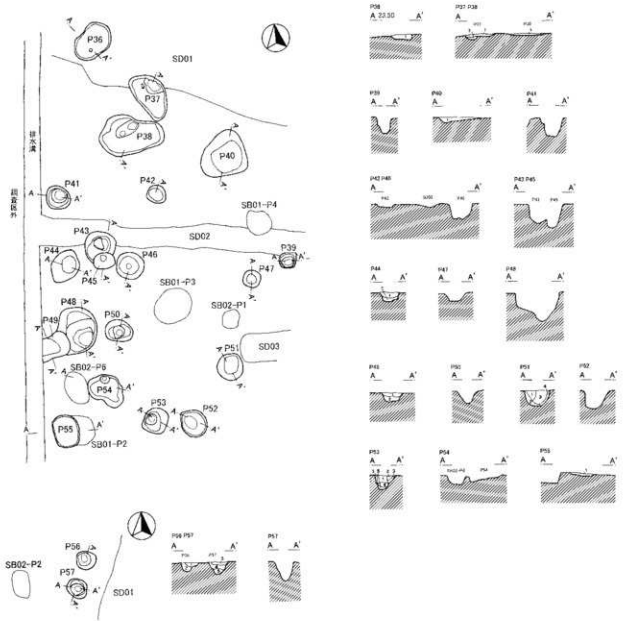
第 35 号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y-3/1(少々粘質)
2．黒褐 2.5Y-3/1(黒褐 2.5Y-3/1 ブロック少量)
3．暗灰黄 2.5Y-4/2(シャしまり強)

0　2m　1:40

第 74 図　第 25 ～ 35 号ピット

第 17 表　ピット一覧表（2）

No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
64	B-7	楕円形	0.38　0.27　0.14			柱跡？
65	A-7	不整円形	0.35　0.35　0.08			
66	B-7	楕円形	0.42　0.36　0.12			
67	B-8	楕円形	0.43　0.27　0.11			
68	B-8	楕円形	0.45　0.40　0.26	弥生土器甕　陶器底？　石製模造品		
69	B-8	(楕円形)	(0.61) × (0.72) × 0.20		SK04	
70	A-8	(楕円形)	(0.43) × (0.33) × 0.09		P71	
71	A-8	(楕円形)	(0.40) × (0.28) × 0.26		P70，P72	
72	A，B-8	楕円形	0.44　0.39　0.25		P71	
73	B-7	(楕円形)	(1.00) × (0.51) × 0.40		P74	
74	B-7	楕円形	1.13　0.94　0.23	土師器坏	P73	
75	B-7	不整楕円形	0.47　0.35　0.07			
76	B-8	楕円形	0.33　0.25　0.23			
77	B-8	楕円形	0.35　0.25　0.07			
78	B-7	楕円形	0.40　0.36　0.20		S102	
79	B-8	楕円形	0.33　0.28　0.19			
80	E-8	楕円形	0.49　0.40　0.11		S102	
81	H-1	(楕円形)	(0.46) × 0.50　0.24	弥生土器甕 or 壺　土師器椀		
82	H，I-1	楕円形	0.54　0.49　0.12			
83	H-1	(円形)	0.31 × (0.26) × 0.31		SB06-P4	
84	H-1	(楕円形)	(0.32) × 0.46　0.26		SB06-P3	
85	H-1	(円形)	(0.22) × 0.26　0.26		SB06-P4	
86	H-1	(円形)	(0.26) × 0.28　0.28		SB06-P3	
87	H-1	楕円形	0.49　0.41　0.15			
88	H-1，2	円形	0.39　0.36　0.12			
89	H-1，2	楕円形	0.50　0.38　0.29			



第36号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y3/1(少々砂質)

第37,38号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y4/2(砂質)
2．灰黄褐砂質 10YR5/2(土師片含)

第40号ピット　(A-A')
1．明オリーブ灰 5GY4/1

第41号ピット　(A-A')
1．黒2.5Y2/1(にぶい黄2.5Y6/4ブロック多)
2．黒2.5Y2/1(しまり悪)

第49号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒7.5Y3/1 (FeO2少量，少々しまり悪)
2．暗灰黄2.5Y4/2(FeO2少量，しまり悪)

第51号ピット　(A-A')
1．明灰黄2.5Y4/2(少々砂質)
2．灰オリーブ 5Y4/2(褐色2.5Y7/4ロイ多)
3．黒褐2.5Y3/1(褐色2.5Y7/4ロイ多)
4．褐色2.5Y7/4(黒褐2.5Y3/1粒子多量)

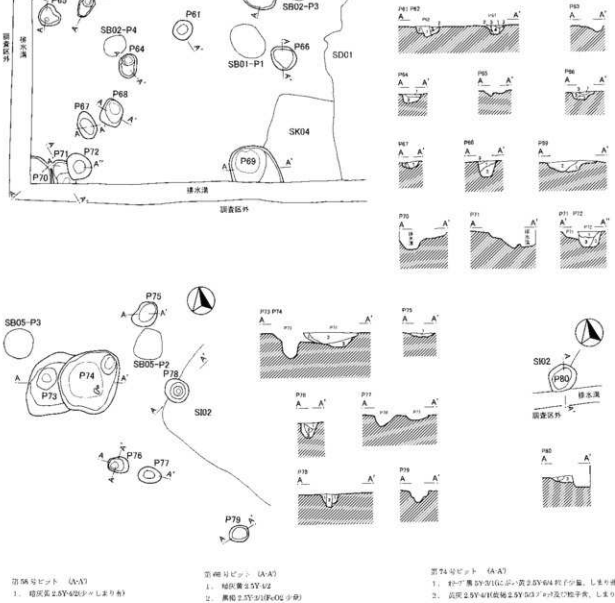
第53号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒5Y3/1(にぶい黄2.5Y6/4ブロック少量)
2．黒褐2.5Y4/1
3．黒褐2.5Y4/1(にぶい黄2.5Y6/4ブロック少量)
4．オリーブ黒5Y3/2(褐色2.5Y4/1粒子含)
5．明灰黄2.5Y 6/2(ふなり49層)

第55号ピット　(A-A')
1．黒褐2.5Y3/1

第56,57号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒5Y3/1(少々黄褐2.5Y5/3ロイ含)
2．黄褐2.5Y5/3(黒褐2.5Y3/1粒子多)
3．暗灰黄2.5Y4/2
4．オリーブ黒5Y3/2(少々にぶい黄2.5Y6/3ブロック有)
5．黒褐4/1黄2.5Y3/1

0　2m 1:60

第75図　第36～57号ピット



第58号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2(少々しまり有)

第60号ピット　(A-A')
1．灰10Y-4/1(黄褐5/3粒子多量)
2．オリーブ黒7.5Y-3/1(黄褐5/3粒子多量、しまり弱)

第61号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-5/2
2．にぶい黄褐色2.5Y-6/4(粒子細かい)
3．にぶい黄橙色7.5YR-6/4
4．3に同黄2.5Y-7/2粒子及びFeO_2片有

第62号ピット　(A-A')
1．暗灰黄褐色2.5Y-4/2(黄褐2.5Y-5/3粒子有)
2．にぶい黄2.5Y-6/4(黄褐2.5Y-4/2粒子少量)
3．暗灰黄2.5Y-4/2(少々粘質)

第64号ピット　(A-A')
1．黄灰2.5Y-4/1(黄褐5/3粒子多量)
2．灰5Y-4/1(しまり弱)

第66号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2
2．黒褐2.5Y-3/1(FeO2少量)
3．暗灰黄2.5Y-4/2(FeO2多量)

第67号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2
2．黒褐2.5Y-3/1(少々粘質)

第68号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2(しまり弱)
2．暗灰黄2.5Y-4/2(黄灰2.5Y-4/1粒子多量に混入)
3．黒褐2.5Y-3/1

第69号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2(しまり弱)
2．黒褐2.5Y-3/1(2.下シルト質、一部に黄褐2.5Y-5/3粒子含)

第72号ピット　(A-A')
1．暗黄灰5GB-4/1(少々粘質)
2．黄灰2.5Y-4/1(黄褐2.5Y-5/3粒子有)
3．オリーブ黒5Y-3/1(黄褐2.5Y-5/3粒子有)

第74号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒5Y-3/1(GL面ハ黄褐2.5Y-6/4粒子少量、しまり強)
2．灰黄2.5Y-4/1(黄褐2.5Y-5/3ブロック及び粒子有、しまり弱)
3．オリーブ黒7.5Y-3/1(少々粘質)

第75号ピット　(A-A')
1．黒褐2.5Y-3/1(少々粘質)

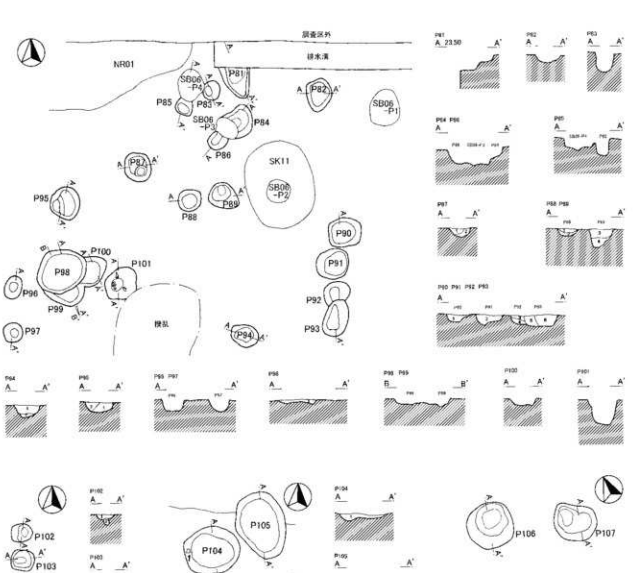
第76号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2(少々しまり弱)
2．暗灰黄褐色2.5Y-4/2
3．黒褐10YR-3/1(少々粘質)

第78号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2(黄褐2.5Y-6/4ブロック有)
2．黒褐2.5Y-3/1(少々粘質)

第80号ピット　(A-A')
1．黒褐2.5Y-3/1(FeO2少量)
2．黒褐2.5Y-3/1

0　2m　1:60

第76図　第58～80号ピット



第87号ピット　(A-A')
1．褐色2.5Y-3/1(少々2の粒子含)
2．黒褐2.5Y-3/1(しまり弱)

第88,89号ピット　(A-A')
1．ボーブ 黒2Y-3/1(Fe02少量)
2．暗灰黄2.5Y-5/2(少々粘質、Fe02有)
3．暗灰黄5Y-4/2(黄褐2.5Y-5/3粒子少量)
4．ボーブ 黒5Y-3/2に赤い黄2.5Y-6/4粒子少量、Fe02少量)

第90,91,92,93 リビット　(A-A')
1．黒褐砂質2.5Y-3/1(炭子細かい)
2．黒褐2.5Y-3/1
3．暗黄褐砂質2.5Y-5/2
4．黄褐砂質2.5Y-5/3
5．黒褐砂質2.5Y-3/1
6．暗黄褐砂質2.5Y-4/2(炭子細かい)

第94号ピット　(A-A')
1．黄灰砂質2.5Y-4/1(に赤い黄2.5Y-6/4アッチ有、しまり弱)
2．暗灰黄2.5Y-4/2(しまり弱)

第95 リビット　(A-A')
1．黄灰2.5Y-4/1(に赤い黄2.5Y-6/4アッチ有、しまり弱)
2．暗灰黄2.5Y-4/2(しまり弱)

第96号ピット　(A-A')
1．暗灰2.5Y-4/2

第102号ピット　(A-A')
1．黄灰2.5Y-4/1(浅黄2.5Y-7/4アッチ多量)
2．暗灰黄2.5Y-5/2(5Y-5/2やしまり弱)

第103号ピット　(A-A')
1．暗灰黄2.5Y-4/2(炭子細かい)
2．暗灰黄5Y-5/2
3．ボーブ 褐砂質2.5Y-3/2

第104号ピット　(A-A')
1．ボーブ 黒2.5Y-3/2(灰黄2.5Y-4/1アッチ少量)

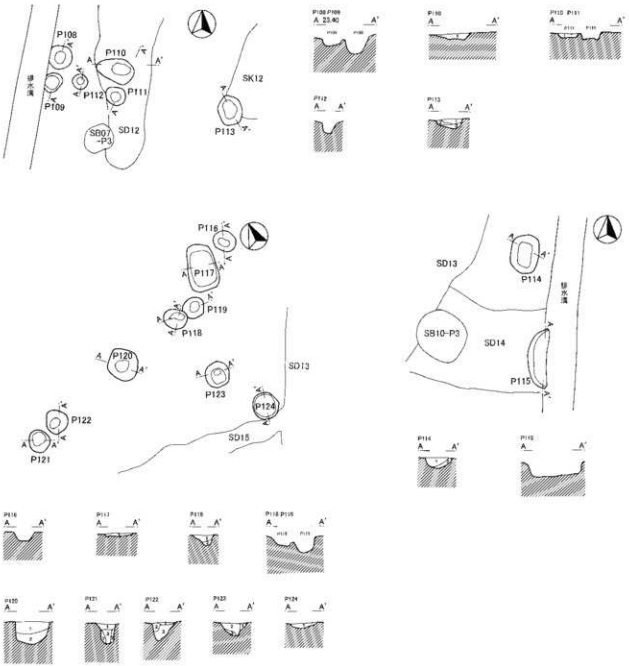
第105号ピット　(A-A')
1．黒褐砂質5Y-3/1(しまり弱)
2．灰オリーブ質5Y-4/2
3．オリーブ褐砂質2.5Y-3/3(しまり弱)

第106 リビット　(A-A')
1．暗5Y-4/1(浅黄2.5Y-7/4アッチ有)
2．黄灰砂質2.5Y-4/1(に赤い黄褐2.5Y-5/3)
3．黒褐2.5Y-3/1(黄褐2.5Y-5/4アッチ及び炭子含)
4．黄褐2.5Y-5/3(5Y-6/1子少量)

第107号ピット　(A-A')
1．ボーブ 黒5Y-3/1(に赤い黄2.5Y-6/4アッチ及び炭子多量)
2．に赤い黄砂質2.5Y-6/4

0　2m
1:100

第77図　第81～107号ピット



第 119 号ピット　(A-A')
1．暗褐 2.5Y 3/1(黒炭 2.5Y 4/1 ブロック状)

第 111 号ピット　(A-A')
1．暗灰黄褐色 2.5Y 4/2(しまり弱)

第 113 号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y 3/1(Fe/Mn 少量)
2．暗灰黄 2.5Y 4/2(少々砂質)
3．オリーブ 5Y 6/6(Fe/Mn 少量)

第 114 号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y 3/1(にぶい黄 2.5Y 6/3 ブロック状)
2．にぶい黄 2.5Y 6/4(暗灰黄 2.5Y 4/2 粒子少量)

第 117 号ピット　(A-A')
1．オリーブ灰 5GY 6/1(Fe/Mn 少量)

第 118 号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y 3/1(黒炭 2.5Y 4/1 粒小量)
2．黒褐 2.5Y 3/1

第 120 号ピット　(A-A')
1．暗灰黄 2.5Y 5/2(黒炭 2.5Y 2/1 ブロック状)
2．暗灰黄 2.5Y 4/2(少々砂質、しまり弱)

第 121 号ピット　(A-A')
1．オリーブ褐 5Y 3/2
2．灰オリーブ 5Y 4/2
3．黄 10Y 5/1(しまり弱)

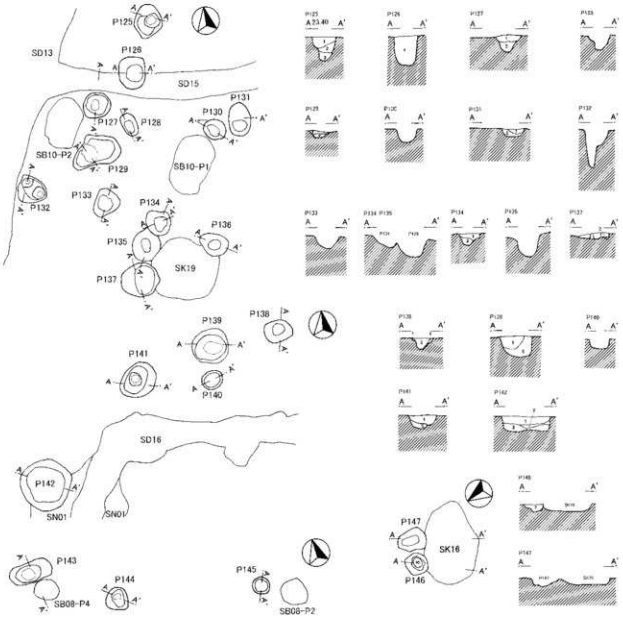
第 122 号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y 3/1
2．暗灰黄 2.5Y 5/2(Fe/Mn 少量)
3．オリーブ黒 5Y 3/1(灰オリーブ 5Y 5/2 粒子少)

第 123 号ピット　(A-A')
1．暗オリーブ褐 5Y 4/3
2．オリーブ黒 5Y 3/1
3．明黄褐 10YR 6/6(オリーブ褐 2.5Y 4/2

第 124 号ピット　(A-A')
1．オリーブ黒 5Y 3/1(オリーブ褐 2.5Y 4/3 ブロック状、Fe/Mn 少量)

0　2m　1:60

第 78 図　第 108 ～ 124 号ピット



第125号ピット　(A-A')
1．ｵﾘｰﾌﾞ黒 10Y-3/1
2．ｵﾘｰﾌﾞ黒 10Y-3/1(上部層，に赤い黄 2.5Y-6/4ブロック混)
3．に赤い黄 2.5Y-6/4(2の粒子少含)

第126号ピット　(A-A')
1．ｵﾘｰﾌﾞ 5Y-3/3(黄褐 2.5Y-5/3粒子混入)

第127号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y-3/1(黄褐 2.5Y-5/3粒子少量)
2．ｵﾘｰﾌﾞ黒 7.5Y-3/1(少々しまり弱)

第128号ピット　(A-A')
1．暗灰褐 2.5Y-4/1
2．灰(ｵﾘｰﾌﾞ)褐 5Y-5/3

第129号ピット　(A-A')
1．暗灰褐 2.5Y-4/1
2．灰(ｵﾘｰﾌﾞ)褐 5Y-5/3

第131号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y-3/1
2．ｵﾘｰﾌﾞ褐 2.5Y-4/3(少々粘質)

第134号ピット　(A-A')
1．ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y-3/1(に赤い黄 2.5Y-6/4ブロック混)
2．黒褐 2.5Y-3/1(少々しまり弱，に赤い黄 2.5Y-6/4ブロック混)

第137号ピット　(A-A')
1．黒灰 2.5Y-4/1
2．黒灰 2.5Y-4/1(Fe/Oｘ多量)
3．黒褐砂質 2.5Y-3/1(Fe/Oｘ少量)

第138号ピット　(A-A')
1．黒灰 2.5Y-4/1
2．黒褐 2.5Y-3/1(少々粘質，かなりしまり弱)

第139号ピット　(A-A')
1．ｵﾘｰﾌﾞ黒 10Y-3/1(黄褐 2.5Y-5/1ブロック少量)
2．黒褐 2.5Y-3/1(Fe/Oｘ少量，少々しまり弱)

第141号ピット　(A-A')
1．黒 5Y-2/1(少々粘質，しまり弱)
2．黒褐 2.5Y-3/1(しまり弱)

第142号ピット　(A-A')
1．暗ｵﾘｰﾌﾞ灰 5GY-3/1(ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y-6/3ブロック多)
2．ｵﾘｰﾌﾞ黒(砂質 5Y-6/4
3．ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y-3/1(一部ｺﾞの粒子及びブロック多)

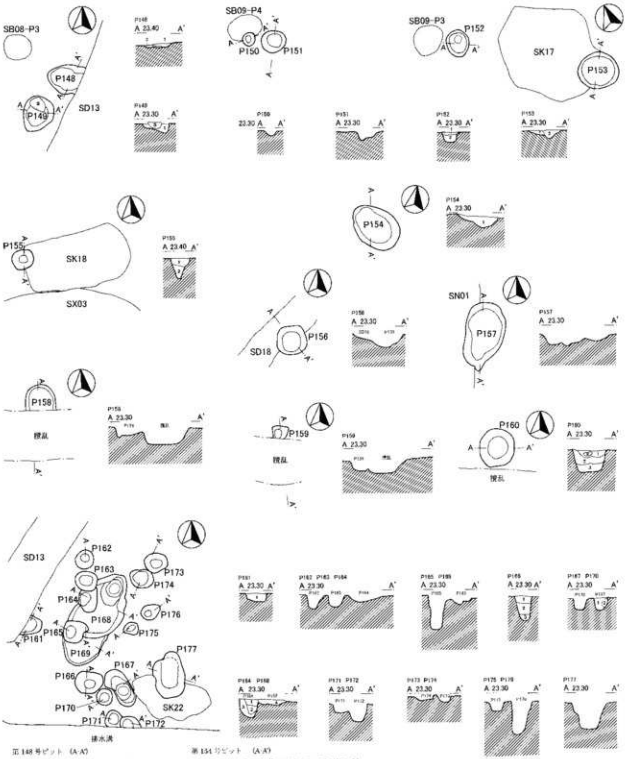
第143号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y-3/1(黄褐 2.5Y-5/3混入)

第144号ピット　(A-A')
1．黒褐(砂質 2.5Y-3/2
2．ｵﾘｰﾌﾞ 5Y-2/1(上部層)
3．に赤い黄 2.5Y-6/4ブロック多

第146号ピット　(A-A')
1．黒 2.5Y-3/1(に赤い黄 2.5Y-6/4粒子及びブロック多量)

0　2m
(1:40)

第79図　第125～147号ピット



第148号ピット (A-A')
1. 黒褐粘質 2.5Y3/1(黒褐 2.5Y4/1)
2. 灰区砂質 2.5Y4/1

第149号ピット (A-A')
1. オリーブ黒 2.5Y4/3(黒褐 2.5Y3/1ブロック)

第152号ピット (A-A')
1. 灰褐 2.5Y3/1(上より堆)
2. 灰白質 2.5Y3/1(しまり悪)

第153号ピット (A-A')
1. 黒褐 2.5Y3/3(黒褐 2.5Y3/1粒子含)
2. 黒褐 2.5Y3/1(1の粒子多量に含)

第154号ピット (A-A')
1. 黒 2.5Y2/1(にぶい黄 2.5Y6/4ブロック及び粒子含)

第155号ピット (A-A')
1. 褐褐 2.5Y3/1(にぶい黄 2.5Y6/4ブロック多量)
2. 黒 2.5Y2/1(少々砂質)

第160号ピット (A-A')
1. 褐灰黄 2.5Y4/2(硬質)
2. オリーブ黒 5Y3/1(少々ロック質)
3. 灰オリーブ 5Y4/2(少々粘質)

第161号ピット (A-A')
1. 黒褐 2.5Y3/1(少々しまり悪)

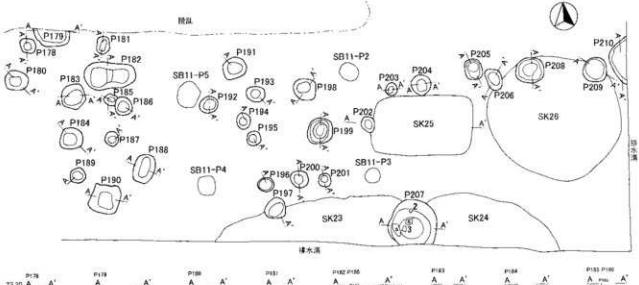
第164,168号ピット (A-A')
1. 灰砂質 5Y4/1
2. オリーブ黒 5Y3/1(FeO2含量)
3. オリーブ黒砂質 5Y3/2
4. 灰白色質 2.5Y4/1

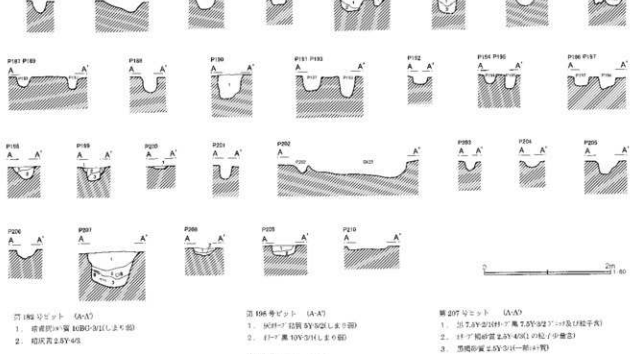
第166号ピット (A-A')
1. 灰黒色質 2.5Y4/1
2. 黒褐ロック質 2.5Y3/1(FeO2少量)
3. 黒褐粘質 2.5Y3/1

第167号ピット (A-A')
1. 黒褐粘質 2.5Y3/1
2. 褐の撹乱

0 1 2m (1:80)

第80図 第148～177号ピット





第178号ピット　(A-A')
1．暗黄褐色砂質 10BD-3/1(しまり弱)
2．暗灰黄 2.5Y-4/3

第183号ピット　(A-A')
1．灰オーブ粘質 5Y-5/2(一部砂質，少々しまり弱)
2．黒褐粘質 2.5Y-3/1(しまり強)

第189号ピット　(A-A')
1．黒褐色 2.5Y-3/1(しまり強，ブロック多量)

第198号ピット　(A-A')
1．灰オーブ粘質 5Y-5/2(しまり弱)
2．オーブ黒 10Y-3/1(しまり強)

第199号ピット　(A-A')
1．オーブ灰 7.5Y-5/1
2．暗オーブ灰 2.5GY-5/1
3．オーブ灰 10Y-5/1(しまり強)

第200号ピット　(A-A')
1．灰 7.5Y-5/1

第207号ピット　(A-A')
1．灰 7.5Y-5/1(暗オーブ黒 7.5Y-3/2 ブロック及び粒子含)
2．オーブ褐砂質 2.5Y-4/3(2.5YR2/1 少量含)
3．黒褐砂質 2.5Y-3/1(オーブ黒 5Y 少量)

第206号ピット　(A-A')
1．黒褐 2.5Y-3/1(しまり強)
2．暗黄黄 2.5Y-5/2(5YR2/2 少量)

第209号ピット　(A-A')
1．オーブ黒 5Y-3/1(しまり強)
2．オーブ黒 5Y-5/2(しまり強)

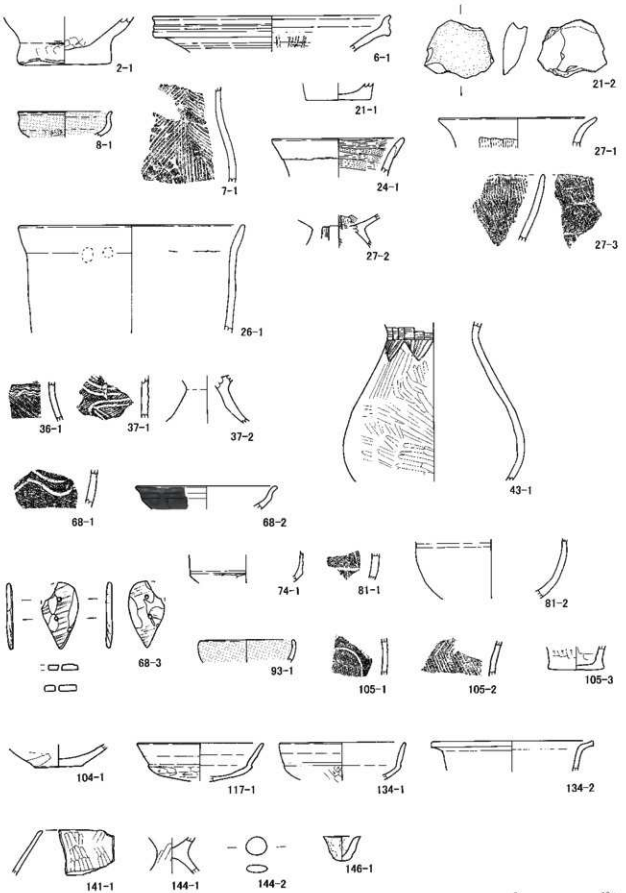
第81図　第178～210号ピット

第17表　ピット一覧表（3）

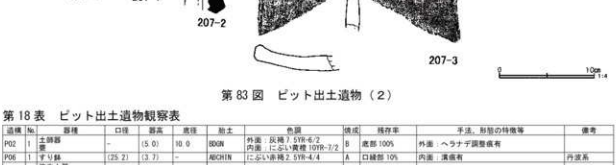
地	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ (m)	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
90	I-2	楕円形	0.54　0.48　0.08			
91	H, I-2	円形	0.52　0.48　0.18			
92	H, I-2	(円形)	(0.34 × 0.40) × 0.16		P93	
93	H, I-2	楕円形	0.58　0.38　0.17	土師器坏	P92	
94	H-2	楕円形	0.43　0.35　0.19			
95	H-1, 2	円形	0.52　0.48　0.17			
96	G, H-2	楕円形	0.36　0.26　0.20			
97	G, H-2	円形	0.32　0.32　0.20			
98	H-2	楕円形	0.83　0.69　0.09		P100, P99	
99	H-2	(楕円形)	(0.26) × 0.54　0.14		P98, P100	
100	H-2	(楕円形)	(0.26) × 0.46　0.11		P98, P99	
101	H-2	(楕円形)	0.58 × (0.44) × 0.39			
102	G-2	円形	0.33　0.29　0.17			
103	G-2	楕円形	0.38　0.32　0.26			
104	G-2, 3・H-2, 3	楕円形	0.88　0.74　0.12	土師器甕	SD12	
105	H-2	楕円形	1.04　0.81　0.17	弥生土器甕，壺	SD12	
106	H-3	円形	0.76　0.73　0.50			

第17表　ピット一覧表（4）

No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ（m）	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
107	H-3	楕円形	0.68　0.57　0.16			
108	G-3	円形	0.38　0.37　0.31			
109	G-3	楕円形	0.36 × (0.26) × 0.13			
110	G-3	楕円形	0.60　0.24　0.10		SD12	
111	G-3	楕円形	0.34　0.29　0.07		SD12	
112	G-3	円形	0.24　0.24　0.17			
113	G-3	楕円形	0.47　0.38　0.19		SK12	
114	I-3	楕円形	0.61　0.48　0.17			
115	I-3	（楕円形）	0.95 × (0.20) × 0.22		SD14	
116	H-3	楕円形	0.37　0.30　0.15			
117	H-3	楕円形	0.75　0.44　0.06	土師器杯		
118	H-3	楕円形	0.38　0.30　0.18		P119	
119	H-3	円形	0.36　0.33　0.26		P118	
120	H-3	円形	0.48　0.46　0.37			
121	G-3	円形	0.36　0.32　0.33			
122	G-3	円形	0.38　0.34　0.29			
123	H-3、4	楕円形	0.38　0.42　0.21			
124	H-4	円形	0.42　0.41　0.09		SD15	
125	I-4	円形	0.54　0.46　0.40			
126	H、I-4	楕円形	0.53　0.42　0.40		SD15	
127	H-4	円形	0.46　0.44　0.27			
128	H-4	楕円形	0.37　0.23　0.24			
129	H-4	不整楕円形	0.78　0.50　0.12			
130	I-4	楕円形	0.37　0.32　0.20			
131	I-4	楕円形	0.52　0.36　0.14			
132	H-4	楕円形	0.48　0.42　0.61			
133	H-4	楕円形	0.44　0.38　0.21			
134	I-4	楕円形	0.44　0.39　0.19	土師器杯、甕	P135	
135	H、I-4	（楕円形）	(0.45) × (0.42) × 0.31		P134、SK19	
136	I-4	楕円形	0.46　0.38　0.34		SK19	
137	H、I-4	楕円形	0.62　0.52　0.10		SK19	
138	I-5	楕円形	0.46　0.36　0.17			
139	H、I-5	円形	0.59　0.55　0.32			
140	H、I-5	円形	0.34　0.30　0.16			
141	H-5	円形	0.62　0.49　0.23	土師器甕		
142	H-5	円形	0.83　0.80　0.25		SN01	
143	G-4	楕円形	0.69　0.32　0.30			
144	G-4	円形	0.29　0.25　0.16	弥生土器高坏or器台　墓石？		
145	H-4	円形	0.28　0.28　0.10			
146	G-4	（円形）	(0.38) × 0.36　0.12	ミニチュア土器	SK16	
147	G-4	楕円形	0.46　0.32　0.13		SK16	
148	H-5	（楕円形）	(0.53) × 0.44　0.07		SD13	
149	H-5	楕円形	0.59　0.49　0.15			
150	F-5	円形	0.21　0.20　0.08		SB09-P4	
151	F-5	楕円形	0.40　0.34　0.14			
152	G-5	楕円形	0.44　0.35　0.16			
153	G-5	楕円形	0.66　0.58　0.14		SK17	
154	F、G-5	楕円形	0.84　0.60　0.21			
155	F-6	円形	0.34　0.30　0.33		SK18	
156	H、I-6	円形	0.50　0.50　0.21		SD18	
157	H-6	不整楕円形	1.09　0.60　0.19		SN01	
158	H-7	（楕円形）	(0.42) × 0.48　0.18			
159	G-7	（楕円形）	(0.19) × 0.22　0.15			
160	G-7	楕円形	0.63　0.56　0.37			
161	F-8	（楕円形）	(0.21) × 0.30　0.13		SD13	
162	F-7、8	円形	0.32　0.30　0.23		P168	
163	F-8	円形	0.36　0.32　0.18		P164、P168	
164	F-8	（楕円形）	(0.34) × 0.29　0.10		P163、P168	
165	F-8	不整円形	0.40　0.34　0.15		P168、P168	
166	F-8	楕円形	0.44　0.34　0.40			
167	F、G-8	不整楕円形	0.66　0.29　0.22			
168	F、G-8	（不整楕円形）	(1.16 × (0.48) × 0.10		P163、P164、P165、P169	
169	F-8	（楕円形）	(0.46) × 0.69　0.55		P165、P168	
170	F-8	円形	0.26　0.24　0.17			
171	F-8	（楕円形）	0.28 × (0.22) × 0.15		P172	
172	G-8	（楕円形）	(0.18) × 0.29　0.28	陶器、折縁皿	P171	
173	G-7、8	楕円形	0.38　0.32　0.12		P174	
174	G-8	楕円形	0.29　0.31　0.09		P173	
175	G-8	楕円形	0.24　0.2　0.15			
176	G-8	円形	0.32　0.22　0.53			
177	G-8	不整楕円形	0.74　0.50　0.41		SK22	
178	G-7	楕円形	0.28　0.22　0.20			
179	G-7	（楕円形）	0.53 × (0.27) × 0.15			
180	G-8	楕円形	0.36　0.30　0.17			
181	G-7	楕円形	0.32　0.18　0.10			
182	G-8	楕円形	0.62　0.29　0.21			
183	G-8	円形	0.40　0.39　0.27			
184	G-8	円形	0.40　0.38　0.16			
185	G-8	（楕円形）	(0.20) × 0.18　0.13		P186	
186	G-8	円形	0.28　0.27　0.16		P185	
187	G-8	円形	0.23　0.20　0.19			
188	G-8	楕円形	0.45　0.34　0.25			
189	G-8	円形	0.25　0.22　0.16			
190	G-8	方形	0.46　0.45　0.39			
191	G-8	楕円形	0.37　0.32　0.24			
192	G-8	円形	0.32　0.30　0.11			
193	G-8	楕円形	0.32　0.24　0.34			
194	G-8	楕円形	0.26　0.21　0.14			
195	G-8	円形	0.24　0.22　0.22			
196	G-8	楕円形	0.28　0.22　0.20			
197	G、H-8	円形	0.36　0.34　0.5		SK23	
198	H-8	円形	0.40　0.32　0.21			
199	H-8	円形	0.44　0.41　0.21			
200	H-8	円形	0.28　0.26　0.05			
201	H-8	円形	0.21　0.20　0.22			
202	H-8	楕円形	0.26　0.20　0.1		SK25	
203	H-8	円形	0.22　0.2　0.14			
204	H-8	円形	0.33　0.31　0.1			
205	H-8	楕円形	0.34　0.28　0.22			
206	H-8	楕円形	0.34　0.26　0.14		SK26	
207	H-8	（不整円形）	0.8 × (0.74) × 0.56	土師器高坏、須恵器、長頸壺、平瓦	SK23、SK24	
208	H-8	円形	0.46　0.42　0.13		SK26	
209	H、I-8	円形	0.42　0.41　0.16		SK26	
210	I-8	（楕円形）	0.74 × (0.28) × 0.06			



第 82 図　ピット出土遺物（1）



第 83 図　ピット出土遺物（２）

第 18 表　ピット出土遺物観察表

遺構	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
P02	1	土師器 甕	-	(5.0)	10.0	SDCN	外面：灰褐 7.5YR-6/2 内面：にぶい黄橙 10YR-7/2	B	底部 100%	外面：ヘラナデ調整痕有	
P06	1	すり鉢	(25.2)	(3.7)	-	ABCHTN	にぶい赤褐 2.5YR-4/4	A	口縁部 10%	内面：漆痕有	丹波系
P07	1	弥生土器 甕	-	-	-	SDEHKNO	灰褐 7.5YR-4/2	B	頸部破片	外面：櫛描羽状文（縦位、横位）	
P08	1	土師器 坏	(10.0)	(2.7)	-	SDEI	赤 10R-5/6	B	口縁部 10%	ミニチュア土器（パレット？） 内外に赤彩有 口縁部外反する 外面：ヘラケズリ痕有	
P21	1	土師器 甕 or 壺	-	(1.8)	6.8	SDEIKNO	橙 7.5YR-6/6	B	底部 100%	外面：指頭圧痕有	
P21	2	石製 剥片石器？	最大長 (6.1)	最大幅 (7.3)	最大厚 (2.5)	重さ 10g					砂岩
P24	1	土師器 甕	(14.0)	(4.0)	-	ABEJN	灰白 10YR-8/2	B	口縁部 20%	有段口縁部 内面：ハケ目調整痕有	
P26	1	土師器 甕	(24.0)	(11.3)	-	SCGHN	橙 5YR-6/6	B	口縁部 30%	外面：一部黒変している（煤？）	
P27	1	土師器 甕	(16.8)	(3.2)	-	ABCIJ	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	口縁部 10%	外面：口縁部ハケ目（縦位）有	
P27	2	土師器 高坏 or 台付甕か？	-	(3.5)	-	BCGI	明褐 7.5YR-5/8	B	台部 30%	内外面共にハケ目痕有	
P27	3	弥生土器 鉢	-	-	-	BCGI	浅黄 2.5Y-7/3	B	口縁部～胴部破片	外面：櫛描羽状文（縦位）痕有	
P36	1	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEI	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	頸部破片	外面：櫛描波状文２条有	
P37	1	弥生土器 壺	-	-	-	ABDEIJNM	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	破片	外面：ヘラ描縦線文及び LR 単節縄文有 煤科者しい	
P37	2	土師器 器台	-	(5.0)	-	ABEI	橙 2.5YR-6/6	B	器台部 10%	底部付近やや外反ぎみ	
P43	1	弥生土器 壺	-	(16.8)	-	ABCI	浅黄橙 7.5YR-8/6	B	胴部 50%	外面：櫛描簾状文（7本一単位） その直下に細いヘラ描工具による縦痕文有	
P68	1	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIJKN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	破片	外面：ヘラ描縦線文？ かなり煤科者しい	
P68	2	陶器 皿？	(15.0)	(2.4)	-	ABGH	オリーブ黄 7.5Y-6/3	B	口縁部 10%	反釉に緑釉かけ流し 瑞浪系	瀬戸・美濃系
P68	3	石製模造品 剥片	最大長 3.0	最大幅 1.9	最大厚 0.3	重さ 3g				2 面所穿孔有	緑泥石片岩
P74	1	土師器 坏	-	(3.1)	-	ABEKN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部 20%	外面横撫痕	
P81	1	弥生土器 壺 or 甕？	-	-	-	ABDEI	にぶい赤褐 5YR-4/3	B	胴部破片	外面：ヘラ描沈線縦線文有 煤科者	
P81	2	土師器 坩	-	(6.2)	-	ABDEI	灰黄褐 10YR-6/2	B	胴部 20%	半球状坩 口縁部外反（和泉型坩か？）	
P93	1	土師器 坏	(10.3)	(2.4)	-	ABEJ	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 10%	内外面赤彩有 外面：口縁部内湾 内面：ややミガキ痕有	
P104	1	土師器 甕	-	(2.4)	(5.2)	ABCIJ	灰白 2.5Y-8/2	B	底部 20%	外面：指ナデ調整痕有	
P105	1	弥生土器 壺	-	-	-	ABCIJ	橙 7.5YR-6/6	B	破片	外面：指ナデ調整（縦位）痕 内面：ヘラナデ痕	
P105	2	弥生土器 壺	-	-	-	ABEIJ	にぶい黄橙 10YR7/4	B	破片	外面：櫛描羽状文有	
P105	3	弥生土器 壺	-	(2.5)	(6.0)	ABCI	橙 7.5YR6/8	B	底部 50%	ヘラ描低状沈線文有（その内面に LR 単節縄文有） 煤科者しい	
P117	1	土師器 坏	(13.4)	(4.0)	-	ABDKN	橙 5YR-6/8	B	30%	有段口縁坏 口縁部大きく外反	
P134	1	土師器 坏	(13.4)	(3.9)	-	ABEGKN	橙 5YR-6/8	B	口縁部 10%	坏蓋模倣坏 口縁部やや外反	
P134	2	土師器 甕	(17.2)	(3.2)	-	SDEHIKNO	にぶい橙 7.5YR-6/3	B	口縁部 10%	口縁部大きく外反	
P141	1	土師器 甕	-	-	-	ABCI	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	破片	内面：ヘラケズリ痕有	
P144	1	弥生土器 高坏 or 器台	-	(3.8)	-	ABCI	橙 7.5YR-6/6	B	台部 20%	外面：指ナデ調整痕有	
P144	2	碧石？	最大長 2.2	最大幅 1.9	最大厚 0.8	重さ 5g					チャート
P146	1	ミニチュア土器 （手づくね） 坏	(4.0)	2.6	?	ABDM	にぶい橙 7.5YR-6/3	B	50%	指頭圧痕多数有	
P172	1	陶器 折縁皿	(10.2)	(1.8)	-	A	浅黄 5Y-7/3	B	口縁部 10%	反釉に緑釉かけ流し	瀬戸・美濃系
P207	1	土師器 高坏	-	(4.3)	-	SDEHKN	にぶい橙 5YR-7/3	B	台部破片	赤彩有 脚の内部は黒色	
P207	2	須恵器 長頸壺	-	(6.0)	-	D	灰白 5Y-8/1	B	頸部破片	外面：沈線有 下部欠損箇所ミガキ有 →二次転用か？	三角産か？
P207	3	平瓦	最大長 (7.5)	最大幅 (9.5)	最大厚 1.5	ABDEHN	明褐灰 7.5YR-7/1	B	破片	凹面：布目痕 凸面：ナデ痕 凸面端にナデ前の格子叩き痕有	

8　水田跡

第１号水田跡（第 84 図）

G，H－５～７グリッドから検出した。第７、13、16 ～ 20 号溝跡、第 142、157 号ピット、第３号性格不明遺構と重複関係にあり、それら第 16 溝跡、各ピット及び第３号性格不明遺構に切られているが、それ以外の重複遺構をこの水田跡と接続する形で掘り込んでいるようであった。

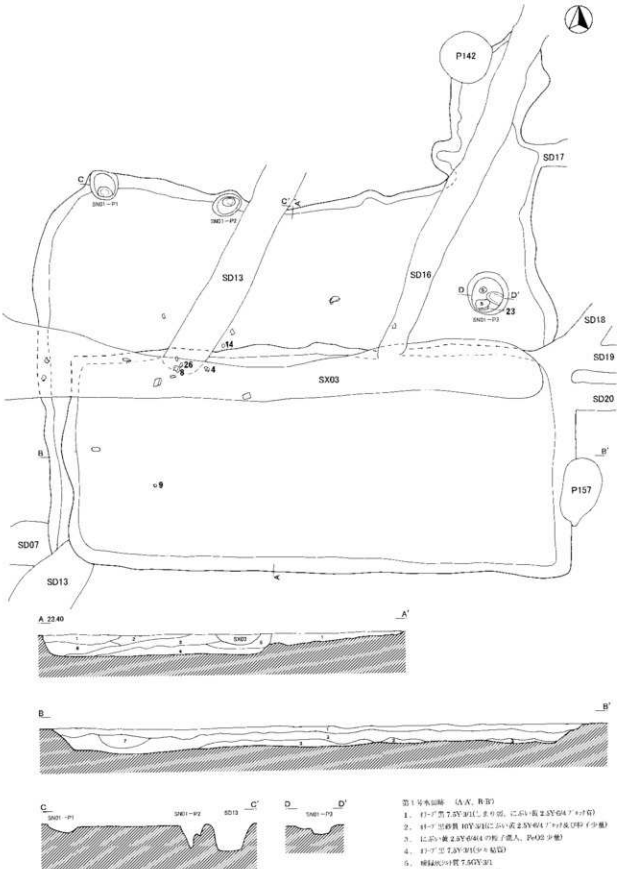
規模は、前庭部と考えられる北側から、南北軸で最大長 6.22 m、東西幅 8.45 m、深さは最深部で 0.38 mであり、約５度の傾斜で南の水田本体へと落ち込んでいた。第３号性格不明遺構により、一部詳細は分からないが、全体の様相が確認でき、合計７条もの溝跡がこの水田跡と絡んでいる。水の引き込み用と排水用とが考えられるが、おそらく地形的な観点から、北から南への傾斜が認められることから、排水用は第７、13 号溝跡が主であったろうと考えられる。

水田本体の規模は東西軸で約８m、南北軸で 3.6 m、深さは 0.38 mで、東西に長い方形の水田である。直上に確認できた第１号河川跡や、過去の調査により周辺には河川の流路があることからこの水田を設けたと考えられるが、接続されている溝跡の数から鑑みて、水の引き込みには大変苦慮していたのだろうことが窺い知れる。

遺物は弥生時代～近世に属するものが数多く検出されている。第 13 号溝跡を切っていることからこの水田跡は古墳時代前期以降のものと判断できる。

第 19 表　第１号水田跡出土遺物観察表（１）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
1	弥生土器 壺？	–	–	–	BD	褐灰 7.5YR-4/1	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線文５条有 沈線間に LR 単節縄文痕有	
2	弥生土器 壺	(12.0)	(5.0)	–	BDN	褐灰 7.5YR-4/1	B	口縁部 20%	口縁端部刻み有 外面：櫛描波状文有	
3	弥生土器 壺	–	(2.9)	–	ABHIN	黒褐 2.5Y-3/2	B	頸部 10%	外面：櫛描翼状文有（５条一単位）	
4	弥生土器 壺	–	(6.2)	5.0	ABHIW	外面：褐 7.5YR-4/6 内面：黒褐 10YR-3/1	B	底部 100%	外面：ヘラケズリ痕（斜位）有	
5	土師器 坏	–	(3.7)	(11.2)	ADGIN	にぶい黄橙 10YR-6/3	B	10%	有段口縁坏 内面：指頭圧痕多数、及びナデ痕	
6	土師器 坏	(11.0)	(2.7)	–	AIKN	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部 20%	内外に赤彩有	
7	土師器 椀	(8.0)	(3.4)	–	ABEI	橙 5YR-6/6	B	口縁部 20%	小椀　　半球型	
8	土師質土器 皿	(9.4)	2.5	(5.3)	BDEGIK	淡橙 5YR-8/3	B	90%	灯明皿 口縁部に油煙付着 底部回転糸切り痕有	
9	土師質土器 皿	(6.6)	2.5	(4.1)	ABD	淡橙 5YR-8/4	B	50%	外面：横ナデ痕有 小皿	
10	土師質土器 皿	–	(1.9)	3.1	ABD	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	30%	外面：横ナデ痕有 小皿	
11	土師質土器 皿	(11.8)	2.3	(7.8)	ABDEI	橙 5YR-6/8	B	20%	底部回転糸切り痕	
12	土師質土器 坏（かわらけ）	(11.0)	3.0	(4.0)	ABDIK	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	口縁部～体部 20%	ロクロ調整痕有	
13	土師質土器 皿	(10.5)	(2.2)	(7.4)	ABEJ	灰白 10YR-8/2	B	10%	ロクロ調整痕有	
14	陶器 天目茶碗	–	(1.4)	4.7	B	外面：灰白 7.5Y-8/1 内面：黒 7.5Y-2/1	B	底部 100%	高台部にナデ調整痕有	瀬戸・美濃産
15	在地土器？ 鉢	–	(5.2)	(11.6)	ABE	にぶい褐 7.5YR-5/4	B	胴部～底部 30%	外面ヘラケズリ（斜位）痕有	
16	陶器 志野皿由	–	–	–	AB	灰白 2.5Y-8/1	B	口縁部片		瀬戸・美濃産
17	陶器 反り皿	(15.0)	(1.8)	–	AB	灰白 5Y-7/1	B	口縁部 10%	内外面に灰釉	瀬戸・美濃産
18	陶器 鉄釉皿	(17.4)	(1.3)	–	H	灰白 2.5Y-8/2	B	口縁部 10%	鉄絵皿（陶老絵か？）	瀬戸・美濃産
19	陶器 絵釉小皿	–	(1.2)	(6.3)	ABD	灰白 2.5Y-8/2	B	底部片	底部回転糸切り痕	瀬戸・美濃産
20	磁器 染付丸碗	–	–	–	–	灰色	B	破片	青磁	龍泉窯
21	磁器 碗	–	–	–	B	灰白色	B	破片	青磁	龍泉窯

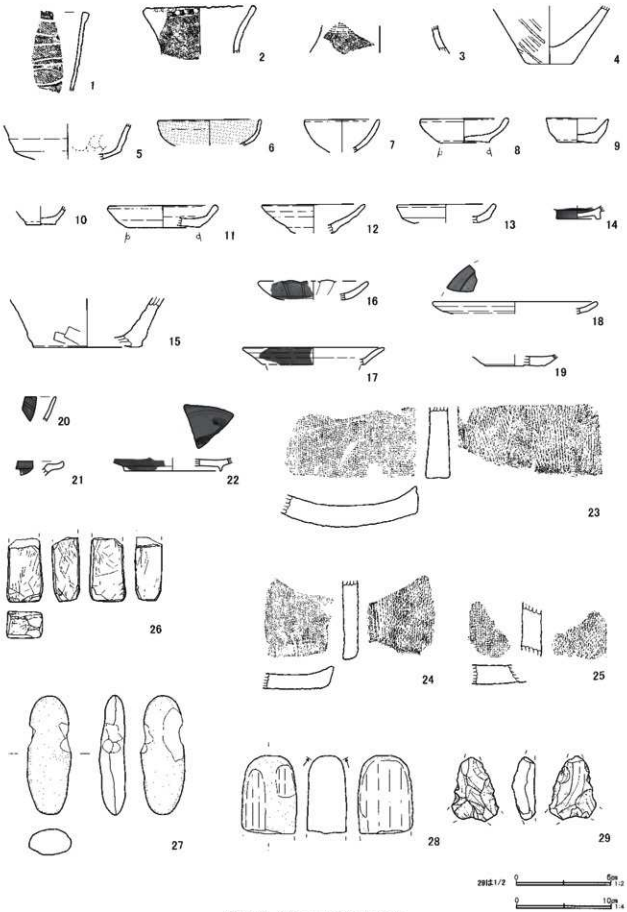


第1号水田跡　（A-A'、B-B'）

1. オリーブ黒 7.5Y 3/1（しまりが、にぶい黄 2.5Y 6/4 ブロック少）
2. オリーブ黒砂質 10Y 3/1（にぶい黄 2.5Y 6/4 ブロック及び炭子少量）
3. にぶい黄 2.5Y 6/4（炭子混入、Pit02 少量）
4. オリーブ黒 7.5Y 3/1（少々粘質）
5. 暗緑灰色 7.5GY 3/1
6. 黒褐 2.5Y 3/1（Pit02 少量）
7. 黒褐 2.5Y 3/1（小礫多量）

2m
1:60

第 84 図　第 1 号水田跡



第 85 図　第 1 号水田跡出土遺物

第 19 表　第 1 号水田跡出土遺物観察表（2）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
22	陶器 鉄釉瓶	–	(1.4)	(10.2)	AB	灰白 5Y-7/1	B	底部 20%	鉄釉	竜泉窯
23	平瓦	最大長 (7.5)	最大幅 (14.6)	最大厚 (2.5)	ABDIN	灰 5Y-6/1	B	破片	重量 424.5g 凸面：縄叩き痕有（一部ヘラ調整により消滅） 凹面：布目文有	
24	平瓦	最大長 (8.7)	最大幅 (7.6)	最大厚 (1.6)	ABD	灰白 5Y-7/1	B	破片	重量 149.7g 凸面：縄叩き痕有 凹面：布目文有（先端わずかにミガキ有）	
25	平瓦	最大長 (6.3)	最大幅 (6.1)	最大厚 (2.1)	ACDN	灰 5Y-5/1	B	破片	重量 84.1g 凸面：縄叩き痕有 凹面：布目文有	
26	石製品 砥石	最大長　(6.7)　最大幅　3.6　最大厚　2.8　重さ　119.9g				全面砥ぎ痕有　一部欠損				泥岩
27	石器 打製石斧？	最大長　12.6　最大幅　4.6　最大厚　2.7　重さ　215.5g				下半分はややミガキ痕有				砂岩？
28	磨石	最大長　8.3　最大幅　5.7　最大厚　4.1　重さ　311g								閃緑岩
29	石器 石鏃	最大長　(3.3)　最大幅　(2.5)　最大厚　1.2　重さ　9g				作成途中のものか？				チャート

9　性格不明遺構

今回の調査において性格不明遺構は全部で 4 基出土し、大部分が形状の不明なものや、全容が判断できないことから、性格不明遺構としたものが多い。しかし、中には、土器（かわらけ）廃棄遺構や溝跡からの転化ではないかと推測できるものもあった。

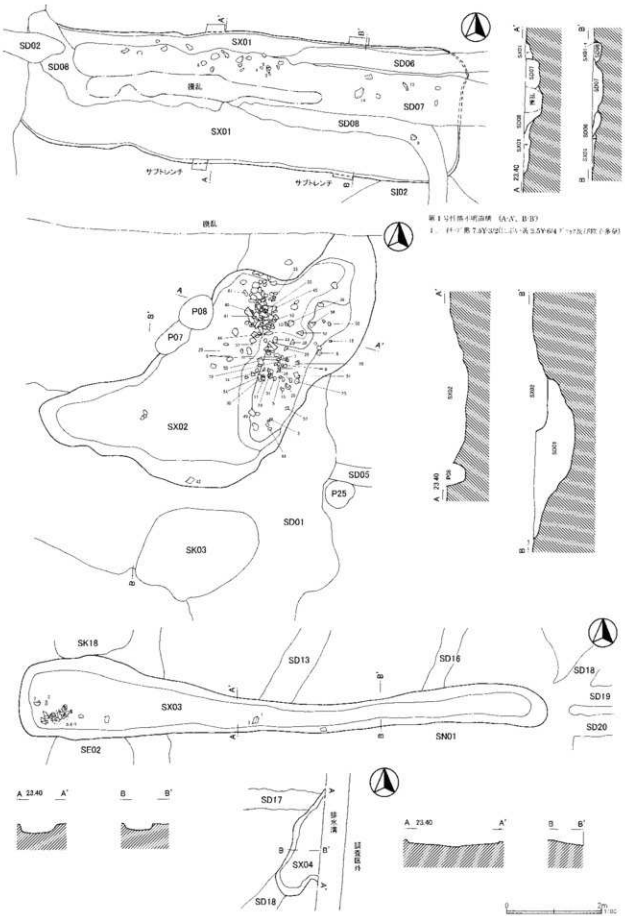
第 2 号性格不明遺構は、第 1 号溝跡と重複しており、第 1 号溝跡を掘り込んでいた。かなりいびつな掘り込みで、出土遺物から考えて、近世における寺院の土器廃棄遺構であることが疑われる。一部、弥生や古墳時代の土器が確認されているが、大半は第 1 号溝跡の遺物と考えられる。それらを除けば、かわらけや陶磁器、瓦などが顕出されており、古いもので 13 世紀ごろのもの、主要な遺物の多くが、1 8 世紀～ 19 世紀代のものであった。

第 3 号性格不明遺構は、東西に延びる溝状の遺構である。当初はこの遺構の南に展開する攪乱と同様と捉えていたが、掘り進めて見ると、中近世の瓦が多量に出土したことから瓦だまりに転用した溝状の掘り込みと推測した。実測可能であったものは大半が近世の桟瓦であるが、実測不能であったものには中世に属する瓦片も検出していた。このことから中近世以降の掘り込みであることが推測される。

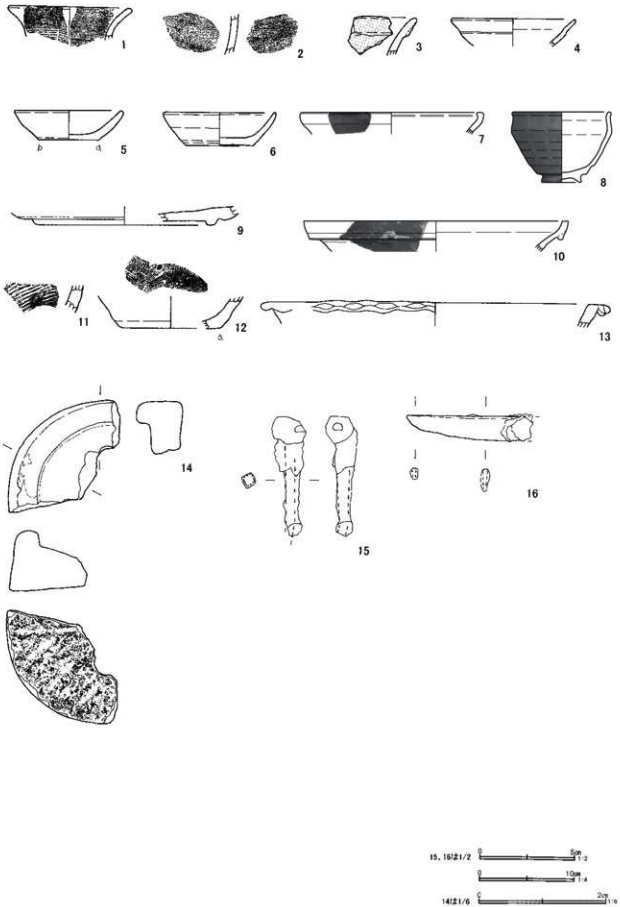
以下、紙面の都合上から、性格不明遺構の特徴等について一覧表で掲載をする。（第 86 図・第 20 表）

第 20 表　性格不明遺構一覧表

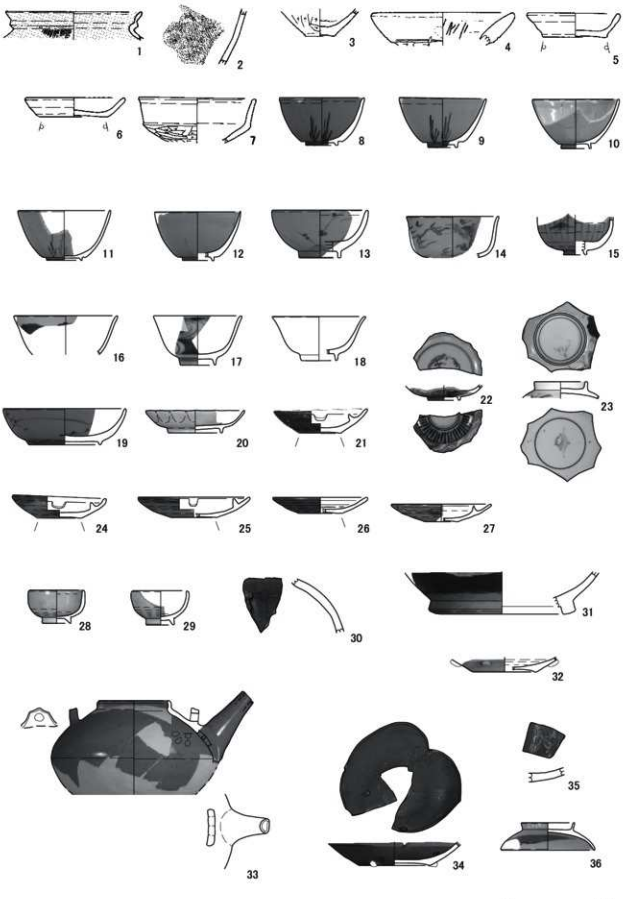
No.	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ（m）	出土遺物	重複関係（新旧）	備考
1	C-6・7、D、E-7	（長方形）	(9.14) × 2.79　0.20	弥生土器壺、土師器壺、土師器坏、陶器、すり鉢、火鉢、石臼、鉄釘、刀子	SD02、SD06、SD07、SD08、SI02	
2	B、C-5・6	不整楕円形	7.86　3.13　0.41	土師器台付壺、土師器壺、土師器壺、土師質皿、土師器坏、陶器、磁器、硯、瓦器、瓦、角釘、板碑塔、たたき石、スクレイパー	P07、P08、SD01	
3	F、G、H-6	不整形	11.20　0.62　0.18	瓦質土器壺、砥石、角釘、桟瓦	SD13、SD16、SK18、SE02、SN01	
4	I-5・6	（不整形）	(1.80) × (0.65) × 0.70		SD17、SD18	



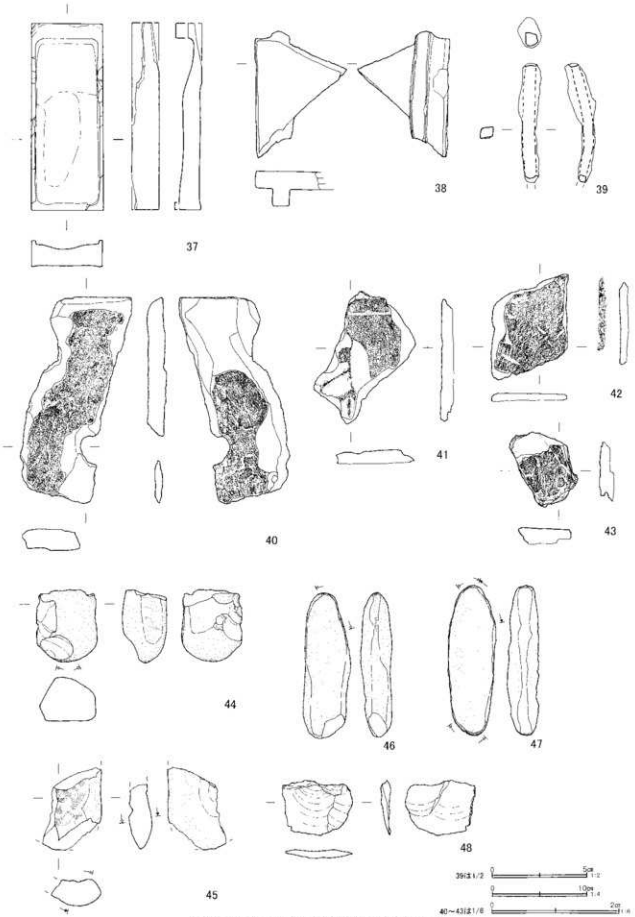
第86図　第1～4号性格不明遺構



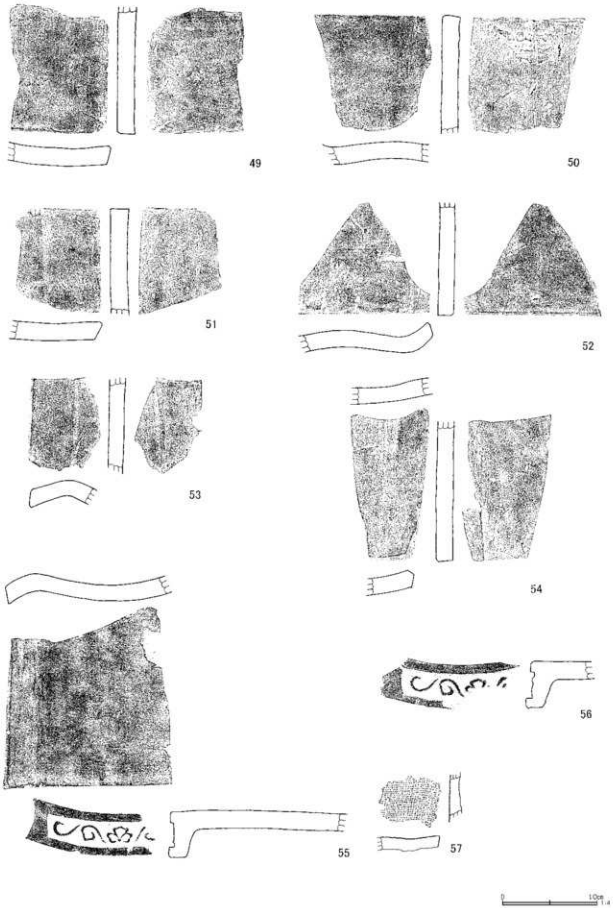
第87図　第1号性格不明遺構出土遺物



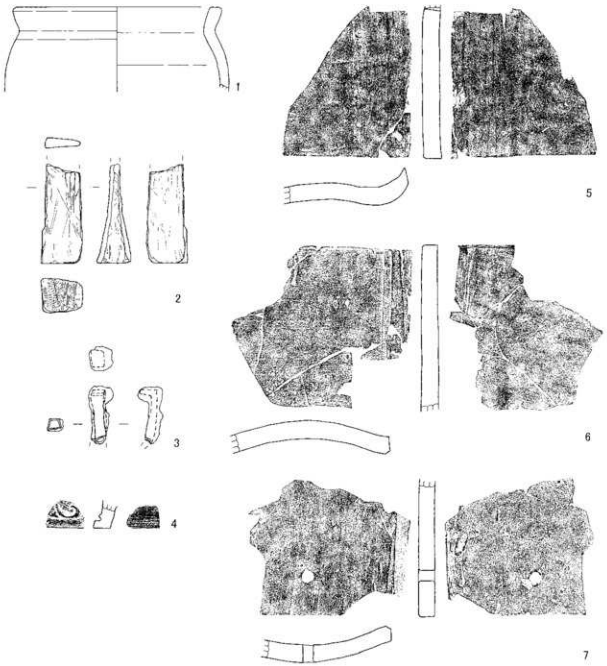
第 88 図　第２号性格不明遺構出土遺物（１）



第89図　第2号性格不明遺構出土遺物（2）



第 90 図　第２号性格不明遺構出土遺物（３）



第91図　第3号性格不明遺構出土遺物

第 21 表　性格不明遺構出土遺物観察表（1）

遺構	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
SX01	1	弥生土器 壺	(12.2)	(3.4)	–	DKN	にぶい橙 7.5YR-5/3	B	口縁部 10%	外面：櫛描簾状文（5 単位一節） 内面：ヘラナデ調整痕有	
SX01	2	弥生土器 壺	–	–	–	DIMO	黒褐 10YR-3/1	B	胴部破片	外面：櫛描波状文 2 段有（4 単位一節） 上段同一工具による刺突連続文有（4 単位一節） 内面：ヘラケズリ後、ナデ調整有	
SX01	3	土師器 甕	–	–	–	ABDIN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部破片	内外面：未塗り 有段口縁	
SX01	4	土師器 坏	(13.2)	(2.9)	–	ABEI	橙 5YR-6/8	B	口縁部 20%	外面横撫坏 口縁部大きく外反する	
SX01	5	土師質土器 坏（かわらけ？）	11.5	3.1	6.4	ABCDI	橙 5YR-6/6	B	90%	ロクロ調整 底部回転糸切痕有	
SX01	6	土師質土器 坏（かわらけ？）	(12.0)	3.5	(7.0)	ABDI	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	50%	ロクロ調整 底部回転糸切後、一部調整有	
SX01	7	陶器 仏具？	(19.4)	(2.3)	–	A	暗赤褐 5YR-3/3	A	口縁部 10%	口縁部内湾する 香炉か？	志戸呂産か？
SX01	8	陶器 白天目茶碗	10.4	7.5	4.2	ABDW	灰白 2.5Y-8/1	B	70%		瀬戸産
SX01	9	陶器 鉢	–	(1.5)	(18.6)	ACN	灰白 5Y-8/2	B	底部 20%	内外とも黄釉有 高浜戸鉢	
SX01	10	すり鉢	(28.0)	(3.2)	–	DHN	灰赤 2.5YR-5/2	B	口縁部 10%	口縁部端すり痕有	大関々産
SX01	11	陶器 壺	–	–	–	ACEI	灰 N-6/	B	破片	外面：押印文痕有	常滑産
SX01	12	すり鉢	(15.4)	(3.4)	(10.4)	ADEMN	黒褐 10YR-2/2	B	底部 10%	内面：5 条擂り目有 瓦質 底部：回転糸切痕有	
SX01	13	火鉢	(36.2)	(2.4)	–	ABCEJM	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	口縁部 20%	波状口縁（指頭整） 内面：ナデ調整	
SX01	14	石臼	最大長　(17.5)　最大幅　(17.3)　最大厚　(9.4)　重さ　2.8 kg								安山岩
SX01	15	鉄釘	残存長　(6.4)　最大幅　(0.7)　最大厚　(0.8)　重さ　12.5g							頭部折きによる曲がり有 先端部欠損	
SX01	16	刀子	残存長　6.6　最大幅　1.3　最大厚　0.5　重さ　7.1g							頭部さび付着 頭から体部残存	
SX02	1	土師器 台付甕	(14.4)	(2.9)	–	ABD	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 10%	S 字状口縁 内外面赤彩有 外面：頸部付近ハケ目痕有（7 本一単位）	
SX02	2	土師質 壺	–	–	–	ABI	灰黄褐 10YR-6/2	B	胴部破片	外面：ハケ目痕有 内面：ヘラケズリ痕有	
SX02	3	弥生土器 壺か？	–	(2.9)	3.2	ABDEGHI	黒 2.5GY-2/1	B	底部 100%	外面：ヘラケズリ痕有 外面摩耗著しい	
SX02	4	土師器 皿	(15.3)	(3.4)	–	ABEHM	橙 5YR-6/8	B	口縁部 20%	外面：ヘラナデ痕　指頭圧痕有 内面：ヘラケズリ調整痕有	
SX02	5	土師質 皿	9.9	2.5	6.8	ABDK	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	70%	ロクロ調整 外面：回転ナデ痕	在地産か？
SX02	6	土師質 皿（かわらけ）	10.7	2.0	7.0	ABDEK	浅黄橙 10YR-8/3	B	80%	ロクロ調整 外面：回転ナデ痕	
SX02	7	土師器 坏	(12.6)	(4.6)	–	ABDIK	外面：にぶい黄橙 10YR-7/3 内面：橙 2.5YR-6/8	B	30%	坏基横撫坏 やや口縁部外反する	
SX02	8	陶器 碗	9.0	5.0	3.4	B	灰白 2.5Y-8/1	B	ほぼ完形 95%	小杉茶碗	京都・信楽産
SX02	9	陶器 碗	9.2	5.3	3.1	B	灰白 5YR-7/2	B	80%	小杉茶碗	京都・信楽産
SX02	10	陶器 碗	9.2	(5.2)	3.2	AB	灰白 7.5Y-8/1	B	70%	小杉茶碗	京都・信楽産
SX02	11	陶器 碗	(9.8)	5.3	(3.6)	AB	灰白 5Y-7/1	B	40%	小杉茶碗	京都・信楽産
SX02	12	陶器 碗	(9.1)	5.2	(3.3)	AB	灰白 10Y-8/1	B	50%	小杉茶碗	京都・信楽産
SX02	13	磁器 碗	(10.2)	5.0	(4.5)	–	灰白色	B	40%	染付　丸型	肥前系か？
SX02	14	磁器 碗	(9.8)	(4.3)	–	–	白色	A	口縁部 30%	染付端反碗　擂横刷	備前系
SX02	15	磁器 碗	–	(3.9)	(2.5)	–	灰白色	A	20%	平球型　染付碗	波佐見・平戸系か？
SX02	16	磁器 碗	(11.0)	(4.1)	–	–	白色	A	口縁部 20%	内面：染付	備前系？
SX02	17	磁器 碗	(9.4)	5.2	3.8	–	白色	A	30%	胎土白色だが黒色粒子多量 端反形	瀬戸・美濃産か？
SX02	18	磁器 碗	(9.9)	4.6	(3.8)	–	白色	A	20%	磁器染付　端反碗	瀬戸・美濃産
SX02	19	磁器 皿	13.0	3.8	7.6	–	白色	B	60%	染付皿（深皿）鉋あり	肥前系
SX02	20	磁器 皿	(10.4)	2.4	(5.7)	–	白色	B	40%	菊花形染付皿	瀬戸・美濃産
SX02	21	陶器 燈明皿	9.9	2.6	4.5	AB	明赤褐 2.5YR-3/2	A	100%	燈明皿（油皿）　鉄釉 底部ヘラケズリ調整 調査時内部に多量にススス、灰付着 外面　重ね焼き痕有	瀬戸・美濃産
SX02	22	磁器 皿	–	–	(3.4)	–	白色	A	底部 40%	外面：赤彩色による上絵染付有 但し未焼成	
SX02	23	磁器 皿	–	(1.8)	5.6	–	明緑灰 10GY-8/1	A	底部 100%	広東形碗の底　肥前系磁器　染付	肥前系
SX02	24	陶器 灯明受皿	9.9	2.4	4.6	AB	明赤褐 2.5YR-3/2	A	90%	灯明受皿（油皿）　鉄釉 外面　油煙痕付着 底部ヘラケズリ調整 外面　重ね焼き痕有	瀬戸・美濃産
SX02	25	陶器 灯明受皿	(11.9)	2.1	(4.8)	ABN	明赤褐 2.5YR-3/2	A	20%	灯明受皿（油皿）　鉄釉 底部ヘラケズリ調整 外面　重ね焼き痕有	瀬戸・美濃産
SX02	26	陶器 灯明皿	(10.0)	1.7	(4.6)	AB	明赤褐 2.5YR-3/2	B	40%	浸着痕有　鉄釉 底部ヘラケズリ調整 外面：重ね焼き痕有	瀬戸・美濃産
SX02	27	陶器 灯明皿	(10.6)	1.8	(3.6)	AHN	灰白 7.5Y-7/2	B	30%	透明釉有（内側、外側口縁部） すす痕有	京都・信楽産

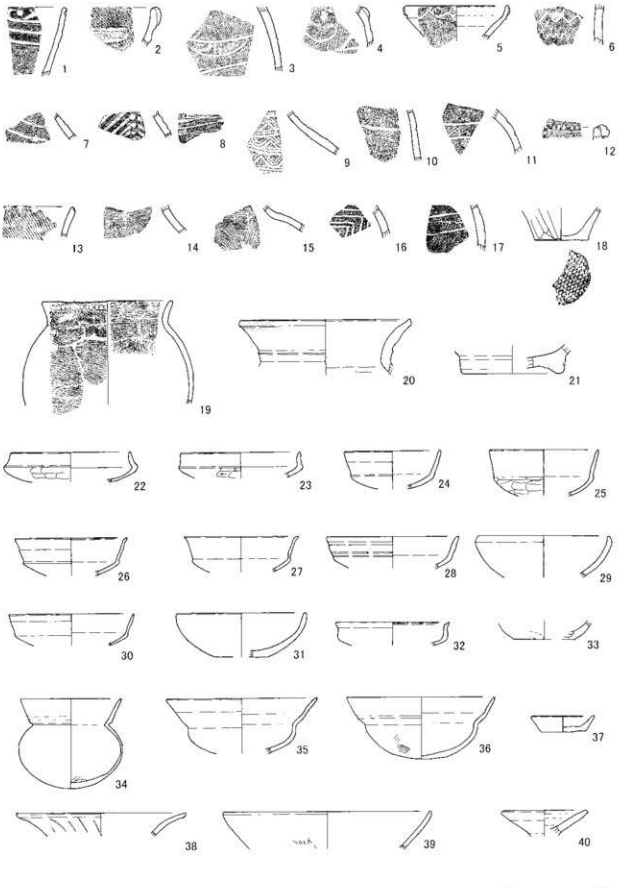
第 21 表　性格不明遺構出土遺物観察表（２）

遺構	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
SX02	28	陶器 小坏	6.0	3.5	3.0	DH	淡黄2.5Y-8/3	B	70%	腰張形小坏か？	
SX02	29	陶器 小坏	(6.1)	3.6	3.0	B	灰白2.5Y-7/1	B	20%	外面　轆体部中段まで 丸形小坏	瀬戸・美濃産
SX02	30	陶器 壺？	–	–	–	AB	黄褐2.5Y-5/6	B	破片	外面　釉有　貼付文様有（貼花か？） 黄色釉一黄瀬戸？	
SX02	31	陶器 鉢 or 壺	–	(4.4)	(15.5)	AB	暗赤褐5YR-3/4	B	底部 20%	鉄釉	瀬戸・美濃産
SX02	32	陶器	–	(1.6)	(6.6)	AB	灰白2.5Y-7/1	B	底部 30%	器種不明 外面：ボタン状突起有 内面　釉有	瀬戸・美濃産
SX02	33	陶器 土瓶	7.2	(9.8)	–	AB	オリーブ灰2.5GY-6/1	B	40%	緑釉流し　翼龍玉形	大聖・相馬産か？
SX02	34	陶器	–	(2.5)	7.5	A	外面：にぶい赤褐5YR-5/3 内面：にぶい赤褐5YR-4/3	B	下位～底部 80%	器種不明 鉄釉 内面　全体　外面　上部のみ 内面　底部ヘ点状刷毛目痕 外面　煤及び油煙付着	
SX02	35	陶器 皿	–	–	–	D	灰褐7.5YR-5/2	B	破片	内面　二重次焼内に重り込み及び「段ホ落とし仕上げ」による文様有	
SX02	36	磁器 壺	(5.0)	2.9	5.6	–	白色	B	50%	染付有 広東碗の底か？	肥前系
SX02	37	硯	最大長 19.7	最大幅 7.7	最大厚 2.8	重さ 692g				丘陵　しい葉跡有 硯頭あり	黒色泥岩
SX02	38	瓦器 or 瓦	最大長 (9.1)	最大幅 (13.3)	最大厚 3.7	ABC	灰白2.5Y-8/1	B	破片	器種不明 表面　ナデ調整痕有 裏面　ナデ調整後、ミガキ痕有 表裏中央部分焦黒？有	
SX02	39	角釘	最大長 (6.3)	最大幅 0.7	最大厚 0.5	重さ 9g				頭部及び先端部欠損	
SX02	40	板石塔婆	最大長 33.0	最大幅 13.0	最大厚 3.3	重さ 2400g			破片	二次転用の可能性有	緑泥石片岩
SX02	41	板石塔婆	最大長 21.2	最大幅 16.4	最大厚 2.2	重さ 850g			破片	種子表現による阿弥陀一尊（薬研彫） 装飾として神輪有 裏面　剥離	緑泥石片岩
SX02	42	板石塔婆	最大長 13.1	最大幅 12.0	最大厚 1.3	重さ 460g			破片	装飾として蓮座有 版石に再利用（併置石側面部） 裏面　剥離	
SX02	43	板石塔婆	最大長 11.8	最大幅 10.9	最大厚 2.6	重さ 400g			破片	裏面　剥離	緑泥石片岩
SX02	44	たたき石	最大長 (7.6)	最大幅 6.5	最大厚 4.6	重さ 310g		一部欠損	底部先端敲打痕		砂岩
SX02	45	たたき石か？	最大長 (8.7)	最大幅 (6.2)	最大厚 (2.8)	重さ 175g				すり石の二次転用か？	砂岩
SX02	46	石材（棒状棒器）	最大長 15.3	最大幅 4.7	最大厚 3.2	重さ 380g					閃緑岩
SX02	47	たたき石	最大長 15.8	最大幅 5.1	最大厚 3.3	重さ 335g				上下先端とも敲打痕有 特に下部先端顕著	雲母片岩
SX02	48	スクレイパー	最大長 5.8	最大幅 7.4	最大厚 1.1	重さ 40g					砂岩
SX02	49	瓦	最大長 (13.3)	最大幅 (10.8)	最大厚 1.9	AB1	灰N-5/	B	破片	重量 422g	
SX02	50	桟瓦	最大長 (12.5)	最大幅 (11.3)	最大厚 1.9	ABE1	暗黄灰5PB-3/1	B	破片	重量 400g	
SX02	51	瓦	最大長 (11.2)	最大幅 (9.7)	最大厚 1.9	I	灰N-5/	B	破片	重量 294g	
SX02	52	瓦	最大長 (11.9)	最大幅 (14.2)	最大厚 1.8	I	灰N-5/	B	破片	重量 312g	
SX02	53	瓦	最大長 (10.1)	最大幅 (7.1)	最大厚 1.7	B	灰N-5/	B	破片	重量 172g	
SX02	54	瓦	最大長 (16.2)	最大幅 (8.3)	最大厚 1.8	AB	表：灰10Y-7/1 裏：灰N-6/1	B	破片	重量 325g	
SX02	55	軒瓦	最大長 (18.7)	最大幅 (17.7)	最大厚 1.9	AB	灰N-5/	B	50%	重量 1 05kg　小巴文損 唐草文	
SX02	56	軒瓦	最大長 (9.7)	最大幅 (16.5)	最大厚 1.9	I	灰7.5Y-5/1	B	破片	重量 320g　唐草文	
SX02	57	瓦	最大長 (5.9)	最大幅 (6.5)	最大厚 1.3	AB	灰白2.5Y-7/1	B	破片	凸面　全面刻線 凹面　布目痕	
SX03	1	瓦質土器 鍋	(22.0)	(8.9)	–	AB1K	暗灰N-3/	B	口縁部 20%	口縁部～胴部にかけてナデ痕	
SX03	2	磁石	最大長 (10.4)	最大幅 4.4	最大厚 3.6	重さ 148g					砂岩
SX03	3	角釘	最大長 (2.8)	最大幅 0.8	最大厚 0.6	重さ 3g				頭部却き後曲げたか？	
SX03	4	桟瓦	最大長 (8.6)	最大幅 (4.5)	最大厚 1.8	ABE	暗灰10YR-6/1	A	破片	重量 22g	
SX03	5	桟瓦	最大長 (16.2)	最大幅 (13.1)	最大厚 1.9	DG	灰N-5/	B	破片	重量 506g	
SX03	6	桟瓦	最大長 (17.5)	最大幅 (16.9)	最大厚 1.8	AD1	灰7.5-4/1	B	破片	重量 617g	
SX03	7	桟瓦	最大長 (14.6)	最大幅 (13.8)	最大厚 1.7	ABEK	暗灰10YR-4/1	A	20%	重量 528g　穿孔有	

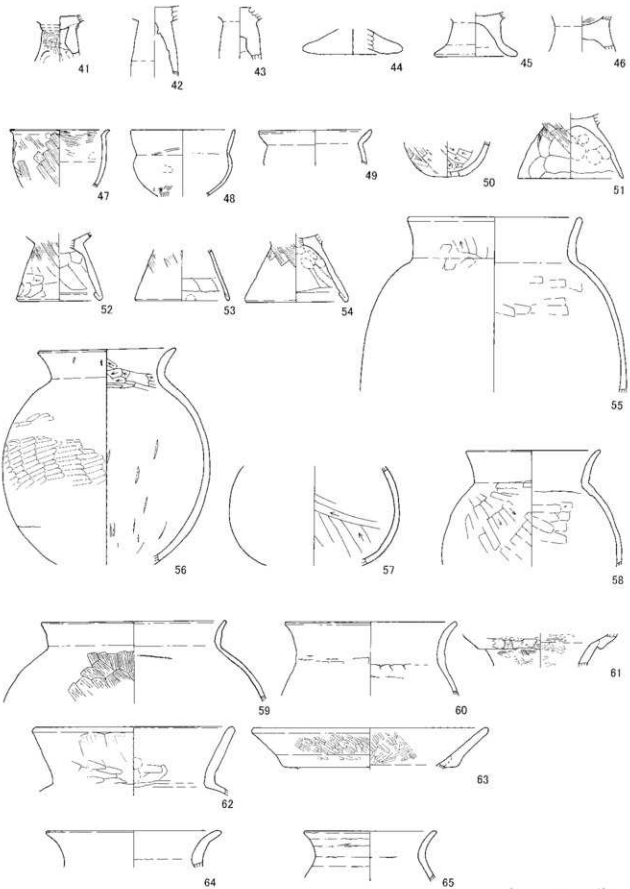
10　遺構外

遺構外から出土した遺物については、主に表土剥ぎの遺物である。多量に出土したが、その内の大部分は調査区北西の現樹の大きい攪乱部分からであった。攪乱によって下層に存在した遺構が壊された際の理設されていた遺物と推測される。出土位置から大まかにＡ区遺物、Ｂ区遺物と分類し、掲載している。

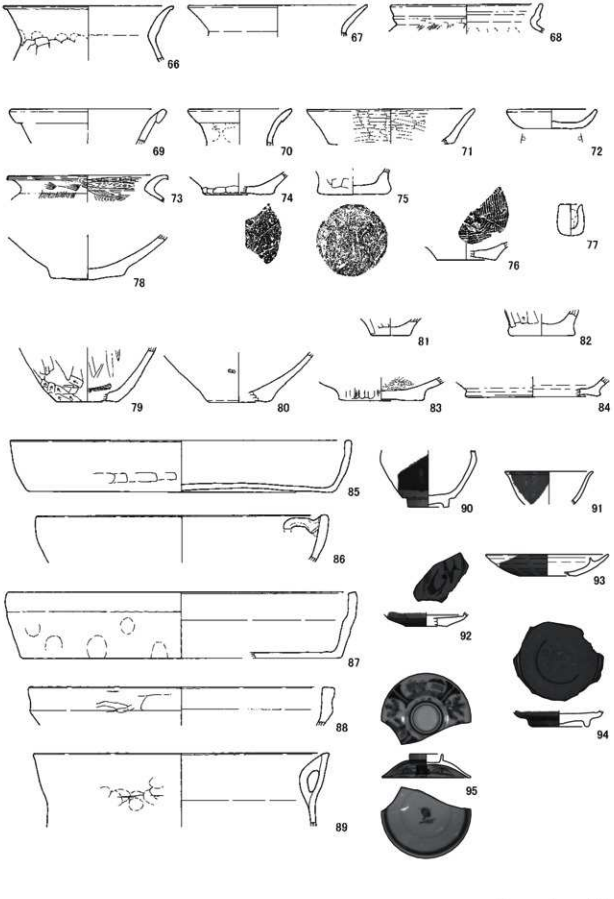
以下、遺構外出土遺物として掲載する。



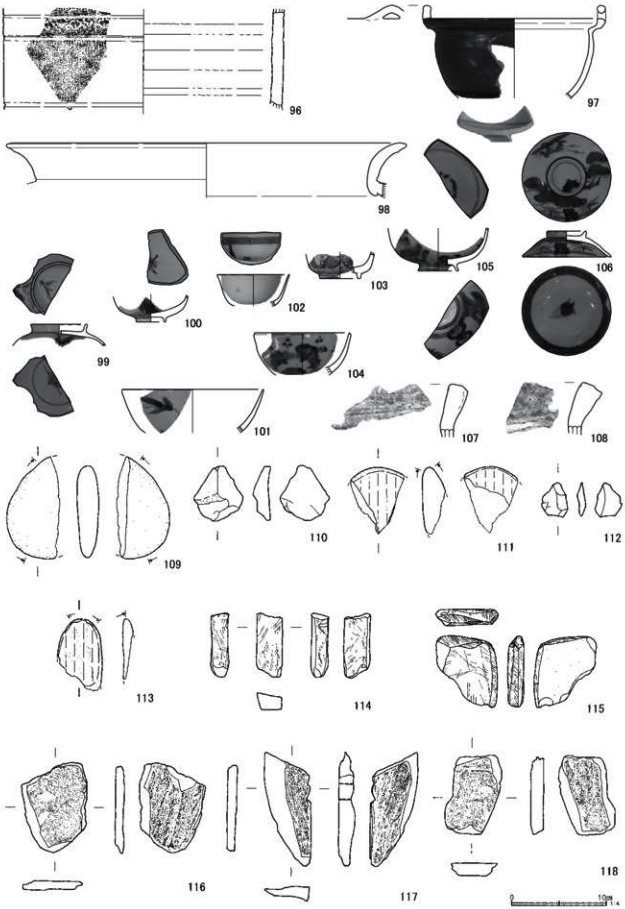
第92図　道構外出土遺物（A区）（1）



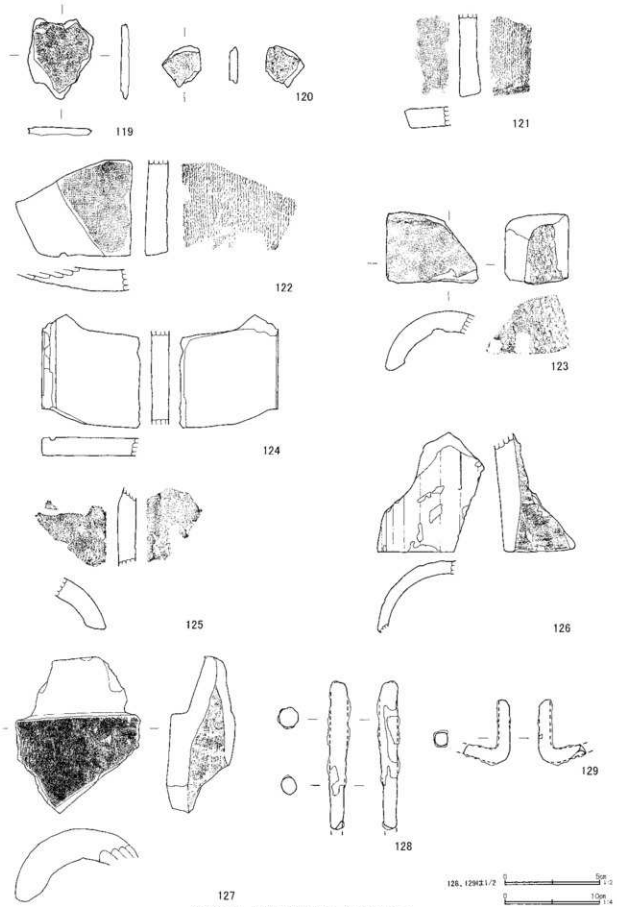
第93図　道構外出土遺物（A区）（2）



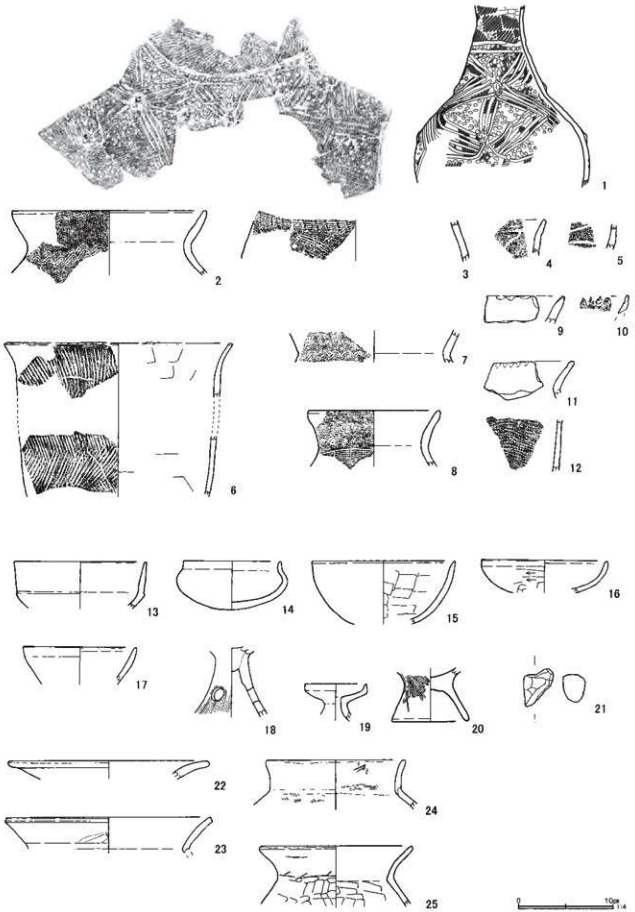
第 94 図　道構外出土遺物（A区）（3）



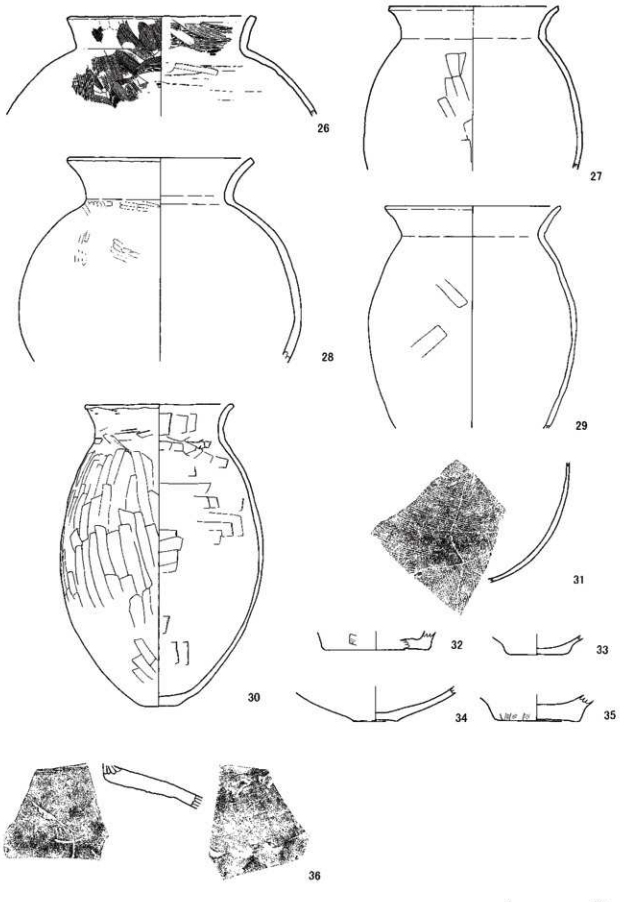
第 95 図　遺構外出土遺物（A 区）（4）



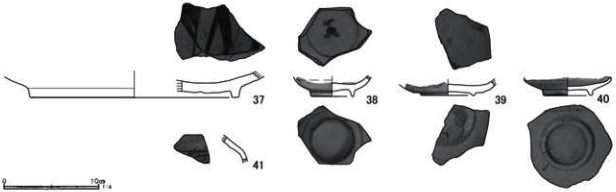
第96図　道構外出土遺物（A区）（5）



第97図　道構外出土遺物（B区）（1）



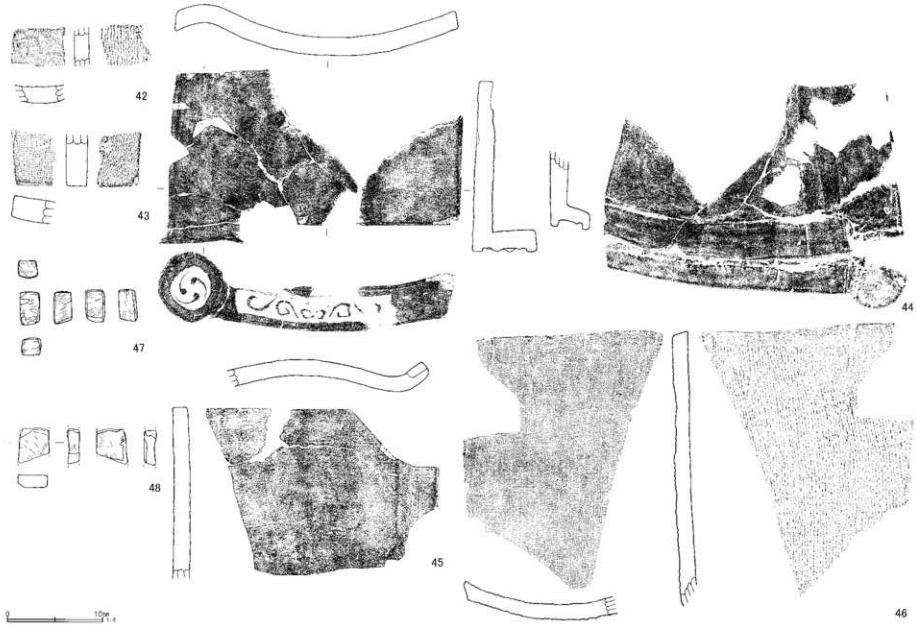
第98図　道構外出土遺物（B区）（2）



第 99 図　遺構外出土遺物（Ｂ区）（３）

第 22 表　遺構外出土遺物観察表（１）

調査区	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
A 区	1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD	褐灰 5YR-4/1	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線文有（３条） その間に LR 単節縄文施有 摩耗著しい	
A 区	2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEGM	橙 2.5YR-6/6	B	口縁部破片	口縁部外面煤付着 外面：LR 単節縄文有	
A 区	3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABJN	明赤褐 5YR-5/6	B	胴部破片	外面：ヘラ描による平行沈線及び半弧文沈線有 それらの間に LR 単節縄文有	
A 区	4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADEHIN	褐灰 5YR-4/1	B	破片	外面：ヘラ描沈線及びわずかに縄文痕有 摩耗著しい	
A 区	5	弥生土器 壺	(11.0)	(3.6)	-	ABEGM	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 10%	外面：口縁部ボタン状貼付文 山形文縁文　その上下縄文痕有	
A 区	6	弥生土器 壺	-	-	-	ABDI	明褐 7.5YR-5/8	B	頸部～胴部破片	外面：大きなヘラ描山形沈線文 その上下に櫛描山形文（３条一単位）有	
A 区	7	弥生土器 壺	-	-	-	ABEI	明赤褐 5YR-5/6	B	破片	外面：ヘラ描平行沈線文 それ以外すべて LR 単節縄文で覆われる	
A 区	8	弥生土器 壺	-	-	-	ABDH	外面：にぶい赤褐 5YR-4/4 内面：明赤褐 5YR-5/8	B	破片	外面：刺突列点文（縦位）及びヘラ描連弧文６条 内面：ヘラケズリ調整痕有	
A 区	9	弥生土器 壺	-	-	-	ABDI	褐 7.5YR-4/3	B	胴部破片	外面：ヘラ描平行沈線文（２条一単位）４節有 その間に櫛描波状文（２条一単位）３節有	
A 区	10	弥生土器 壺	-	-	-	ABE	橙 5YR-6/8	B	破片	外面：ヘラ描沈線文１条有	
A 区	11	弥生土器 壺	-	-	-	ABHIN	にぶい褐 7.5YR-6/3	B	胴部破片	外面：ヘラ描平行沈線文２条有	
A 区	12	弥生土器 壺	-	-	-	ABMN	明赤褐 5YR-5/8	B	口縁部破片	外面：口縁端部に刻み及び突帯部貼付 ヘラ描による平行沈線（２条）それ以外は LR 単節縄文施有	
A 区	13	弥生土器 壺	-	-	-	ABDHI	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	口縁部破片	外面：櫛描羽状文有	
A 区	14	弥生土器 壺	-	-	-	ABE	にぶい褐 7.5YR-5/3	B	破片	外面：櫛描波状文（６本一単位）１節 及び直線文（６本一単位）２節有	
A 区	15	弥生土器 壺	-	-	-	ABDIK	灰黄褐 10YR-5/2	B	破片	外面：櫛描重ね文（７本一単位） 下部，櫛描羽状文（縦位）有	
A 区	16	弥生土器 壺	-	-	-	BHIK	褐灰 7.5YR-4/1	B	破片	外面：ヘラ描沈線によるコの字重ね文有	
A 区	17	弥生土器 壺	-	-	-	ABDGIK	明赤褐 5YR-5/6	B	破片	外面：ヘラ描による平行沈線文２条 わずかにその間に縄文痕有	
A 区	18	弥生土器 壺	-	(3.5)	(5.8)	IN	明赤褐 5YR-5/6	B	底部 50%	外面：ヘラケズリ後（縦位）有 底部「角ばった目撫痕」痕	
A 区	19	弥生土器 鉢	13.8	(10.9)	-	AIDEN	にぶい橙 5YR-7/4	B	口縁部 50%	口縁端部に刻み有 胴部付近は内外とも櫛描による調整痕か？ 外面は横位羽状文か？	
A 区	20	弥生土器 壺	(18.3)	(5.8)	-	ABIN	にぶい橙 7.5YR-6/3	B	口縁部 30%	有段口縁壺 内外，ナデ調整 口縁部一部失端赤彩痕有	
A 区	21	弥生土器 壺	-	(3.0)	(10.8)	ABIJO	明赤褐 2.5YR-5/8	B	底部外面	ヘラ描による横走沈線文有	
A 区	22	土師器 坏	(12.6)	(3.2)	-	ABCIJ	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	20%	坏身模倣坏	



第 100 図　遺構外出土遺物（B区）（4）

第 22 表　遺構外出土遺物観察表（2）

調査区	器種	No.	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
A区	23	土師器 坏	(12.3)	(2.7)	–	ABC1J	橙 2.5YR-6/6	B	10%	坏身模倣坏	
A区	24	土師器 坏	(10.3)	(4.0)	–	ABD1JN	外面：橙 5YR-6/8 内面：橙 7.5YR-6/6	B	20%	坏身模倣坏　口縁部外反 有段有	
A区	25	土師器 坏	(11.6)	(4.9)	–	ABE1N	橙 5YR-6/6	B	20%	坏身模倣坏　口縁部外反ぎみ 外面底部へラケズリ痕	
A区	26	土師器 坏	(11.9)	(4.0)	–	ABC1J	明褐 7.5YR-5/6	B	20%	坏身模倣坏 やや口縁部外反ぎみ	
A区	27	土師器 坏	(12.1)	(3.8)	–	ABC1J	明赤褐 5YR-6/6	B	20%	坏身模倣坏 やや口縁部外反する	
A区	28	土師器 坏	(14.0)	(3.4)	–	ABE1J	明褐 7.5YR-5/8	B	20%	有段口縁坏	
A区	29	土師器 坏	(13.8)	(4.4)	–	ABD1	外面：にぶい橙 7.5YR-6/4 内面：明赤褐 2YR-5/6	B	口縁部～体部20%	口縁部大きく内湾する	
A区	30	土師器 坏	(13.3)	(3.4)	–	ABC1	橙 5YR-6/8	B	10%	有段口縁坏	
A区	31	土師器 坏	(13.8)	4.7	–	ABI1N	橙 5YR-6/8	B	40%	口縁部やや内湾する 厚みがある	
A区	32	土師器 坏	(12.0)	(2.5)	–	ABD	赤 10R-4/6	B	口縁部～体部10%	比企型坏 内外面：赤彩塗り	
A区	33	土師器 坏	–	(2.0)	(6.5)	ABD1	浅黄橙 7.5YR-8/3	B	10%	ロクロ土師　かからけか？ 外面：指調整痕有 底部糸切り調整か？	
A区	34	土師器 坩？	(10.6)	9.5	–	ABI	橙 7.5YR-6/6	B	50%	口縁部～頸部周辺有段有	
A区	35	土師器 坩	16.0	(5.8)	–	ABE1K	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	50%	坩の古相	
A区	36	土師器 坩 or 坪	15.6	6.5	–	ABE1	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	70%	外面：底部付近ミガキ痕有	
A区	37	土師器 ミニチュア土器	(6.7)	1.7	(4.7)	BE1N	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	40%	外面：わずかにナデ調整痕有	
A区	38	土師器 高坏	(18.0)	(2.5)	–	AE	明赤褐 5YR-5/8	B	口縁部 10%	外面：口縁部一定の間隔で溝条痕有	
A区	39	土師器 高坏	(22.0)	(4.0)	–	ABEN	橙 2.5YR-6/8	B	口縁部 10%	内外面：赤彩塗痕わずかに有	
A区	40	土師器 高坏	9.2	(2.7)	–	ABI1N	にぶい橙 7.5YR-7/3	B	坏部 50%	坏部より脚部が大きい	
A区	41	土師器 高坏	–	(4.8)	–	ABE1	赤 10R-5/6	B	脚台部 80%	外面：赤彩有	
A区	42	土師器 高坏	–	(7.5)	–	ABJN	にぶい橙 5YR-7/4	B	脚台部 60%		
A区	43	土師器 高坏	–	(5.5)	–	ABE1	明褐 7.5YR-5/8	B	脚台部 50%		
A区	44	土師器 高坏	–	(2.7)	(10.6)	ABE1	明赤褐 5YR-5/6	B	底部 30%		
A区	45	土師器 高坏	–	(4.6)	8.8	ABEGKW	橙 5YR-6/8	B	底部 70%	台部高やや低い 内外面：ナデ調整	
A区	46	土師器 高坏	–	(3.8)	–	ABDE1W	明黄褐 10YR-7/6	B	脚部 100%	杯部豊込み ハケ目痕有 やや厚み有	
A区	47	土師器 鉢？	(10.6)	(6.1)	–	ABDEGND	橙 5YR-6/6	B	口縁部～胴部 50%	外面：ハケ目調整（斜位）痕及び指頭圧痕 内面：わずかにハケ目痕有	
A区	48	土師器 鉢	(11.0)	(7.0)	–	ABC1	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	30%	口縁部やや内みみ有　やや短に近い 外面：胴部付近指調整痕 底部ハケ目有	
A区	49	土師器 鉢	(12.0)	(3.8)	–	ABEHN	橙 5YR-6/6	B	口縁部 20%	口縁部「く」の字状	
A区	50	土師器 鉢？	–	(3.7)	4.0	ABDEGND	橙 5YR-6/6	B	底部 80%	外面：ハケ目調整斜位痕　一部ヘラケズリ痕残る 底部穿孔有	
A区	51	土師器 台付壺	–	(6.4)	(11.2)	BKN	橙 5YR-6/8	B	台付部 50%	外面：ヘラケズリ調整（斜位）痕及びヘラナデ調整痕有 内面：指頭圧痕有 底部やや内湾する	
A区	52	土師器 台付壺	–	(7.2)	9.2	ABG1KN	外面：にぶい橙 7.5YR-7/4 内面：橙 2.5YR-6/6	B	台部 80%	外面：ハケ目痕 底部付近ヘラナデ調整（横位）痕 内面：指ナデ調整 底部内湾する	
A区	53	土師器 台付壺	–	(5.4)	(10.0)	ABD1JN	外面：にぶい黄橙 10YR-6/4 内面：橙 7.5YR-6/6	B	台部 30%	外面：ハケ目痕有 内面：ナデ調整痕有 底部内湾する	
A区	54	土師器 台付壺	–	(7.2)	(11.0)	ABE	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	台付 30%	外面：ヘラケズリ（縦位）調整 内面：指調整痕有 底部内湾する	
A区	55	土師器 壺	(18.5)	(18.5)	–	ABC1	橙 7.5YR-7/6	B	20%	外面：赤彩塗り痕有り 内外面：ヘラケズリ痕	
A区	56	土師器 壺	14.7	(22.9)	–	ABDEHKW	明赤褐 5YR-5/8	A	90%	外面：ヘラケズリ痕及びヘラミガキ痕有 内面：ハケ目調整及びヘラケズリ痕有	
A区	57	土師器 壺	–	(10.5)	–	BDEGKN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	胴部 30%	内面：ヘラケズリ痕有	
A区	58	土師器 壺	14.2	(12.4)	–	ABC1	橙 5YR-6/6	B	口縁部～胴部 70%	外面：胴部ヘラケズリ（斜位）痕 内面：胴部ヘラケズリ（縦位）痕 絞性上痕有	
A区	59	土師器 壺	(19.7)	(8.6)	–	ABC1	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	口縁部 10%	胴部外面　ハケ目痕（斜位）（やや強め）	
A区	60	土師器 壺	(18.2)	(17.8)	–	ABC1N	外面：にぶい黄橙 10YR-6/4 内面：にぶい橙 7.5YR-5/4	B	口縁部 20%	外面：頸部輪積痕有 内面：わずかにヘラケズリ痕有 内外面：ナデ調整痕	
A区	61	土師器 壺	–	(3.5)	–	ABGEN0	橙 2.5YR-6/6	A	口縁部 20%	外面：口縁部ハケ目痕（縦位）有 頸部付近ハケ目（斜位）有 内面：ハケ目調整後ミガキ	
A区	62	土師器 壺	(21.5)	(7.3)	–	ABCD1N	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	口縁部 10%	外面：口縁部ヘラケズリ（斜位）痕 頸部ヘラケズリ痕（横位）有 内面：指頭圧痕及びヘラケズリ痕	
A区	63	土師器 壺	(25.0)	(4.4)	–	ABD1N	にぶい黄橙 10YR-7/2	B	口縁部 20%	有段口縁壺 内外面：ヘラミガキ（斜位）痕	
A区	64	土師器 壺	(18.6)	(3.8)	–	ABDEFIK	にぶい橙 5YR-7/4	B	口縁部 10%		
A区	65	土師器 壺	(14.1)	(5.3)	–	ABDEG1N	橙 7.5YR-4/4	B	口縁部 10%	口縁部輪積痕有	
A区	66	土師器 壺	(18.1)	(5.7)	–	ABC	橙 5YR-6/6	B	口縁部 20%	口縁部外反 頸部指頭圧痕及びヘラケズリ痕有	
A区	67	土師器 壺	(19.1)	(3.3)	–	ABI0	浅黄橙 10YR-8/3	B	口縁部 20%	外面：ヘラケズリ痕有	

第 22 表　遺構外出土遺物観察表（3）

調査区	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法，形態の特徴等	備考
A 区	68	土師器 壺	(16.0)	(3.1)	–	ABDGIKM	にぶい黄橙 10YR-6/4	B	口縁部 20%	外面：ハケ目調整痕有 内面：指圧痕有	
A 区	69	土師器 壺	(16.6)	(3.7)	–	ABEI	橙 7.5YR-7/6	B	口縁 20%	内面へラミガキ調整痕有	
A 区	70	土師器 壺	(11.0)	(3.9)	–	ABDIKM	淡黄 2.5Y-8/3	B	口縁 20%	外面：指頭圧痕有　わずかにヘラケズリ痕有	
A 区	71	土師器 皿	(17.8)	(3.7)	–	ABCIJ	にぶい橙 5YR-6/4	B	口縁部 20%	有段口縁巻 内外面ヘラミガキ痕有	
A 区	72	土師質土器 皿	(9.6)	2.1	6.2	BCD	灰白 10YR-8/2	B	80%	口クロ形成 糸切痕を留まる	
A 区	73	土師器 壺	(17.0)	(2.8)	–	ABDHI	にぶい橙 7.5YR-6/3	B	口縁部 20%	口縁部雑赤彩痕有 外面：口縁部ハケ目痕（積位）　頸部～胴部ハケ目痕（横位） 内面：ヘラケズリ痕（積位）	
A 区	74	土師器 壺	–	(2.4)	(3.5)	ABE	明黄褐 10YR-6/6	B	底部 50%	底部外面ヘラケズリ痕 底部「面取」痕有	
A 区	75	土師器 壺	–	(2.7)	7.3	ABCI	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	底部 100%	底部やや外へ張り出す 底部「糸目」痕有	
A 区	76	土師器 壺	–	(1.8)	(6.4)	ABEI	にぶい橙 7.5YR-5/3	B	底部 40%	内面：ハケ目調整痕（4 条一単位）有	
A 区	77	ミニチュア土器 鉢	(2.5)	3.3	–	ABI	灰褐 5YR-4/3	B	50%		
A 区	78	土師器 壺	–	(4.5)	7.8	BDEGHKN	明褐 7.5YR-5/6	B	底部 100%	外面：やや赤彩有	
A 区	79	土師器 壺	–	(5.7)	(6.4)	ABEGIN	外面：黒褐 2.5Y-3/1 内面：にぶい黄橙 10YR-7/3	B	底部 30%	外面：指ナデ調整及びヘラケズリ痕有 内面：荒い調整痕	
A 区	80	土師器 壺	–	(5.3)	(7.0)	BDEHIMNO	橙 5YR-6/6	B	底部 30%	外面：圧痕有？ やや張付痕	
A 区	81	土師器 壺	–	(1.6)	4.2	ABHN	にぶい橙 2.5YR-6/4	B	底部 90%		
A 区	82	土師器 壺	–	(2.7)	7.0	ABEIJ	橙 7.5YR-6/8	B	底部 50%	外面：ヘラケズリ痕有 底部やや外へ張り出す	
A 区	83	土師器 壺	–	(2.4)	(9.0)	ABDEIJ	明赤褐 2.5YR-5/6	A	底部 30%	外面：ヘラケズリ痕 内面：底部付近へラミガキ痕	
A 区	84	土師器 壺	–	(2.1)	(14.3)	ABEI	橙 2.5Y-6/6	B	底部 20%	やや底径大きい　大型壺か？	
A 区	85	瓦質土器 焙烙	(26.4)	5.4	22.4	ABIJ	にぶい黄橙 10YR-7/3	B	30%	外面：底部付近へラケズリ痕 底部：平底	
A 区	86	瓦質土器 焙烙	(31.0)	(5.0)	–	BDEGIK	褐灰 5YR-4/1	B	口縁部 10%	有耳内壁 外面：わずかにヘラケズリ痕有	
A 区	87	瓦質土器 焙烙	(37.2)	7.0	(34.0)	ABDEGK	褐灰 5YR-4/1	B	10%	やや底径大きい　大型壺か？	
A 区	88	瓦質土器 焙烙	(32.6)	(4.2)	–	ABDIJKN	外面：黒褐 10YR-3/1 内面：黄灰 2.5Y-6/1	C	口縁部 10%	外面：指ナデ調整痕及びヘラケズリ痕有	
A 区	89	瓦質土器 土鍋	(31.4)	(7.8)	–	ABDIJKN	外面：褐灰 10YR-4/1 内面：黄灰 2.5Y4/1	B	口縁部 10%	吊り手耳付	
A 区	90	陶器 大日茶碗	–	(6.0)	(4.3)	AB	灰褐 7.5YR-4/2	A	30%		瀬戸・美濃産
A 区	91	陶器 碗	(9.3)	(3.5)	–	AB	灰白 5Y-7/2	A	口縁部～体部 20%	内外面：全面釉　堀反形	京・信楽系
A 区	92	磁器 坏	–	(1.5)	(4.4)	–	明緑灰 10GY-7/1	A	底部 30%	青磁 内面見込み部によるジグザグ文が施される	同安窯系
A 区	93	陶器 灯明皿	(12.0)	2.3	(5.0)	B	灰白 5Y-7/1	A	20%	内面：全面釉　油受皿	京・信楽系
A 区	94	磁器 鉢？	–	(1.7)	6.4	–	明オリーブ灰 5GY-7/1	A	底部 100%	外面底部施釉の ち釉剥ぎ痕有 内面見込み沈線及び印花文有	龍泉窯系
A 区	95	磁器 染付皿	9.4	2.5	3.5	–	白色	B	60%	堀反碗の底 外面：岩松文・帆掛舟文 内面：笹文	瀬戸・美濃産
A 区	96	火鉢	–	(10.8)	–	ABEI	外面：褐灰 10YR-4/1 内面：にぶい黄橙 10YR-5/3	B	胴部 10%	型押文様（上部波）	
A 区	97	陶器 土鍋	(19.3)	–	–	A	褐 7.5YR-4/3	A	20%		
A 区	98	陶器 壺	(42.4)	(5.8)	–	ABDN	灰 5Y-5/1	B	口縁部 10%		瀬美産
A 区	99	磁器 皿	つまみ径 (6.0)	(2.3)	–	–	白色	A	つまみ部 50%	磁器染付皿 広東碗の蓋と推測	肥前系
A 区	100	磁器 染付小丸碗	–	(2.9)	3.2	–	白色	A	20%	磁器染付	肥前系
A 区	101	磁器 染付碗	(15.0)	(4.6)	–	–	白色	A	10%		肥前系
A 区	102	磁器 染付小碗	(7.6)	(3.3)	–	–	白灰色	B	30%		瀬戸・美濃産
A 区	103	磁器 染付湯呑	–	(2.8)	(4.4)	–	白灰色	A	10%		肥前系
A 区	104	磁器 染付碗	(10.2)	(4.4)	–	–	白灰色	A	20%	くらわんか椀	肥前系
A 区	105	磁器 碗	–	(4.5)	(4.3)	–	白色	A	体部～底部 40%	染付　高台八の字状碗　腰細形	肥前系
A 区	106	磁器 染付皿	9.4	2.7	4.2	–	白色	B	完形	堀反碗 外面：松竹梅に鶴 内面：亀文	肥前系
A 区	107	陶器 壺	–	–	–	ABIN	橙 5YR-6/6	B	破片		
A 区	108	陶器 壺	–	–	–	ABIGN	橙 5YR-6/6	B	破片		
A 区	109	砥石	最大長　11.6	最大幅　(6.0)	最大厚　2.4	重さ　230g					砂岩
A 区	110	石器 スクレイパー	最大長　6.3	最大幅　5.6	最大厚　2.0	重さ　49.2g					砂岩
A 区	111	砥石	最大長　7.7	最大幅　6.2	最大厚　2.6	重さ　120g				表裏とも磨き痕有	砂岩
A 区	112	石器 スクレイパー	最大長　4.0	最大幅　3.1	最大厚　1.0	重さ　6.7g					砂岩
A 区	113	砥石	最大長　(8.1)	最大幅　5.0	最大厚　1.1	重さ　62.9g				先端部わずかに敲打痕有	せん結岩
A 区	114	硯石	最大長　6.8	最大幅　2.7	最大厚　1.8	重さ　50g					泥岩

第 22 表　遺構外出土遺物観察表（4）

調査区	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成形	残存率	手法，形態の特徴等	備考
A 区	115	石製品	最大長 7.5 最大幅 6.6 最大厚 1.6 重さ 160g						破片	角側面擦り痕有 錘子表面による同形形一群（薬研彫） 装飾として神経及び温線有	縄応石片岩？
A 区	116	板石塔婆	最大長 15.5 最大幅 11.5 最大厚 1.5 重さ 431g						破片	「山形」の一部及び二条線部分有 側面整形痕（応相？）	縄応石片岩
A 区	117	板石塔婆	最大長 19.2 最大幅 8.3 最大厚 2.8 重さ 430g						破片	「山形」の一部及び二条線部分有 側面整形痕（応相？）	縄応石片岩
A 区	118	板石塔婆？	最大長 12.7 最大幅 9.1 最大厚 2.1 重さ 427.0g						破片	側面部整形痕有	縄応石片岩
A 区	119	板石塔婆	最大長 12.9 最大幅 10.5 最大厚 1.3 重さ 254g						破片		縄応石片岩
A 区	120	板石塔婆	最大長 7.2 最大幅 6.6 最大厚 1.5 重さ 100g						破片	装飾として神経及び梵字有 破片断痕見方一部か？	縄応石片岩
A 区	121	平瓦	最大長 (8.9) 最大幅 (4.9) 最大厚 2.2			D	灰白 2.5Y-7/1	B	破片	凹面：布目痕 凸面：縄叩き痕有	
A 区	122	平瓦	最大長 (10.1) 最大幅 (12.0) 最大厚 2.4			ABDI	灰白 7.5Y-7/1	B	破片	凹面：布目痕（一部剥離有） 凸面：縄叩き痕有	
A 区	123	丸瓦	最大長 (7.5) 最大幅 (9.6) 最大厚 2.2			AB	灰 N-5/	B	破片	凹面：平瓦接部切り込み有	
A 区	124	へい瓦	最大長 (12.0) 最大幅 (10.4) 最大厚 1.9			–	灰 N-4/	B	破片	瓶の壁根部材か？	
A 区	125	丸瓦	最大長 (8.7) 最大幅 (5.4) 最大厚 2.1			ABD	灰白 5Y-7/1	B	破片	凹面：布目痕 凸面：縦ナデ調整痕	
A 区	126	丸瓦	最大長 (12.6) 最大幅 (11.3) 最大厚 2.2			ABDEI	灰 5Y-6/1	B	破片	凹面：布目痕（一部横ナデ痕） 凸面：縦ナデ痕	
A 区	127	丸瓦	最大長 (16.5) 最大幅 (13.0) 最大厚 3.4			AI	灰 N-5/	B	破片	玉縁付 凹面：玉縁連結部叩き痕 凸面：わずかに縄叩き痕及び縦ナデ痕有	
A 区	128	鉄製品 釘	最大長 (7.8) 最大幅 (1.2) 最大厚 1.2 重さ 12.9g						90%	丸釘	
A 区	129	鉄製品 釘	最大長 (3.5) 最大幅 (0.7) 最大厚 0.9 重さ 3.6g						40%	丸釘「L」字に屈折する	
B 区	1	弥生土器 壺	–	(18.7)	–	ABHIK	外面：明黄褐 10YR-6/6 内面：にぶい黄橙 10YR-6/2	A	頸部～胴中段 50%	外面：各所に摩耗顕著 頸部から胴部にかけ，LR 単節縄文有 頸部：ヘラ描平行沈線文（2 条） 胴部：ヘラ描による重菱刺連続文（内に刺突充填文有） ※最終文の連続部にコブ状突起貼付有 内面：やや粗いヘラナデ調整痕有	池上式（古）
B 区	2	弥生土器 壺	(20.6)	(6.1)	–	ACH	橙 7.5YR-6/6	B	口縁部 20%	外面：口縁部端，櫛描波状文（3 条一単位）及び頸部に七波状文（8 条一単位）	
B 区	3	弥生土器 壺	–	(4.0)	–	AC	黄褐 2.5Y-5/4	B	胴部 10%	外面：櫛描簾状文（6 条一単位） その下に羽状文（斜位）有	
B 区	4	弥生土器 壺	–	–	–	AC	黄橙 7.5YR-7/8	B	口縁部片	内外面共に摩耗著	
B 区	5	弥生土器 壺 or 甕	–	–	–	ABIJ	黄灰 2.5Y-5/1	B	破片	外面：平行沈線文有	
B 区	6	弥生土器 壺	(24.2)	(16.2)	–	ABGIN	にぶい黄橙 10YR-5/3	B	20%	口縁端部に刻み有 外面：口縁部～頸部にかけ縦羽状文有 内面：ヘラケズリ痕	
B 区	7	弥生時代 壺	–	(3.5)	–	ABDEIKMNO	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	頸部 10%	外面：頸部に櫛描波状文（3 条一単位？）有 摩耗著しい	
B 区	8	弥生土器 壺	(14.0)	(7.9)	–	ABDIKM	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部 20%	外面：頸部に櫛描簾状文（7 条一単位）有	
B 区	9	弥生土器 壺？	–	–	–	EKN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	口縁部片	「波状形」口縁部	
B 区	10	弥生土器 壺？	–	–	–	ABN	橙 5YR-6/6	B	口縁部破片	「山形状」口縁部	
B 区	11	弥生土器 壺 or 甕	–	–	–	HIJK	外面：にぶい褐 7.5YR-6/3 内面：橙 5YR-6/6	B	口縁部破片	口縁端部刻み有	
B 区	12	弥生土器 壺 or 甕	–	–	–	ABCIJ	にぶい黄橙 10YR-7/4	B	破片	外面：LR 単節縄文痕	
B 区	13	土師器 坏	(14.0)	(4.9)	–	ABI	明赤褐 5YR-5/8	B	10%	坏基模倣坏 口縁部が大きく外反する	
B 区	14	土師器 坏	10.4	5.1	–	ABE	橙 5YR-6/8	B	80%	口縁部やや「S」字状となる 比企型坏の系統か？	
B 区	15	土師器 坏	(15.2)	(6.6)	–	AEGIKN	にぶい橙 2.5YR-6/4	B	30%	口縁部わずかに外反する 内面：ヘラケズリ痕有	
B 区	16	土師器 坏	(13.4)	(3.4)	–	AEGN	淡赤橙 2.5YR-7/3	B	10%	内外面：赤彩有 口縁部短長，直立する 体部外面：ヘラケズリ痕有	
B 区	17	土師器 高坏？	(12.0)	(4.0)	–	ABDEIN	にぶい褐 7.5YR-6/3	A	坏部 20%		
B 区	18	弥生土器 高坏	–	(7.3)	–	BDEGI	にぶい黄橙 10YR-7/2	A	高台部 60%	外面：ハケ目痕有 透孔 3 箇所あり（うち 1 か所欠損）	
B 区	19	土師器 器台	(6.5)	(3.9)	–	AN	にぶい橙 7.5YR-7/4	C	40%	坏部：浅底	
B 区	20	土師器 台付壺	–	(5.7)	8.1	ABCDEGIMN	にぶい橙 7.5YR-7/4	B	台部 50%	外面：壺部との接着によるヘラ調整痕有	
B 区	21	土師器 甑部手部	–	–	–	ABN	橙 5YR-6/6	B	破片		
B 区	22	土師器 壺	(21.2)	(1.9)	–	BDGHIK	灰白 7.5YR-8/2	B	口縁部 10%	外面：赤彩塗り痕有り	
B 区	23	土師器 壺	(22.0)	(3.7)	–	ABDEGHIKN	にぶい橙 7.5YR-5/4	B	口縁部 10%	外面：指調整痕有 口縁部断面刻線痕	
B 区	24	弥生土器 壺	(14.8)	(5.3)	–	ABDEGK	にぶい赤橙 5YR-5/4	A	口縁部～頸部 20%	外面：頸部わずかに櫛描痕有 内面：引っ掻き痕有	
B 区	25	土師器 壺	(16.3)	(6.4)	–	ABCDEIN	橙 7.5YR-7/6	B	口縁部 30%	内外面ともヘラケズリ痕（外面縦位，内面横位）有	
B 区	26	土師器 壺	(20.0)	(10.7)	–	ABDI	赤褐 5YR-4/6	B	口縁部 40%	外面：ハケ目調整（斜位）痕 内面：口縁部ハケ目調整（横位）痕 胴部ヘラケズリ痕	
B 区	27	土師器 壺	(18.0)	(17.2)	–	ABCIJ	にぶい黄橙 7.5YR-6/4	B	20%	外面：胴部ヘラケズリ痕（斜位）有	
B 区	28	土師器 壺	19.8	(21.5)	–	BDEHN	にぶい赤橙 2.5YR-4/4	A	40%	外面：赤彩痕有，ミガキ調整痕有	

第 22 表　遺構外出土遺物観察表（5）

調査区	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	手法、形態の特徴等	備考
B 区	29	土師器 壺	18.8	(23.8)	–	ABCI	灰黄褐 10YR-6/2	B	30%	やや長頸タイプ 外面　一部ヘラケズリ痕	
B 区	30	土師器 壺	15.8	31.9	3.4	ABCEGIKN	にぶい橙 7.5YR-6/4	B	90%	外面　口縁部ヘラケズリ（横位）調整 胴部ヘラケズリ（縦位）調整 内面　ヘラケズリ（横位）	
B 区	31	土師器 台付壺	–	–	–	ABDEGHKM	にぶい黄橙 10YR-4/3	B	胴部片	外面　頸部周辺ヘラケズリ（縦位）痕有 胴部ヘラケズリ（横位）痕	
B 区	32	土師器 鉢	–	(2.0)	(11.0)	ABCIN	浅黄橙 7.5YR-8/4	B	底部 20%		
B 区	33	土師器 皿	–	(2.1)	6.5	ABCJ	明赤褐 5YR-5/8	B	底部 80%		
B 区	34	土師器 皿	–	(3.7)	4.6	ABCI	浅黄橙 10YR-8/4	B	底部 80%		
B 区	35	土師器 皿	–	(2.8)	9.0	ABDI	浅黄橙 10YR-8/3	B	底部 100%	外面　わずかにハケ目残存	
B 区	36	陶器 瓶	–	–	–	AB	灰白 2.5Y-7/1	B	頸部～胴部破片		渥美産
B 区	37	陶器 皿（大皿）	–	(2.8)	(22.2)	AB	灰白 5Y-8/1	B	底部 10%	志野丸皿 内面　鉄絵有	瀬戸・美濃産
B 区	38	磁器 中国染付碗	–	(2.2)	4.5	B	白色	A	底部 90%	内面　染付有 マントーシン碗	
B 区	39	陶器 丸皿	–	(1.8)	(5.2)	AD	灰白 2.5Y-8/1	A	20%	志野丸皿 内面　目跡痕有 外面　釉トチン痕有	瀬戸・美濃産
B 区	40	陶器 平底碗？	–	(2.0)	5.3	AB	浅黄 2.5Y-8/3	A	底部 90%	外面　わずかに鉄絵有、高台部面取り調整 京焼風陶器	肥前系
B 区	41	陶器 瓶？	–	–	–	AB	灰白 N-7/	B	破片		古瀬戸産
B 区	42	平瓦	最大長 (4.5)	最大幅 (5.9)	最大厚 (1.8)	ABDI	にぶい赤褐 5YR-5/3	B	破片	凸面　縄叩き痕有 凹面　布目痕有	
B 区	43	平瓦	最大長 (6.1)	最大幅 (4.5)	最大厚 (2.3)	ADM	黒 2.5GY-2/1	A	破片	凸面　縄叩き痕有 凹面　布目痕有	
B 区	44	浅瓦 軒平瓦	最大長 30.1	最大幅 18.1	最大厚 2.0	ABC	灰 N-5/	B	60%		
B 区	45	浅瓦 平瓦	最大長 (18.1)	最大幅 (21.2)	最大厚 2.4	ABC	灰 N-5/	B	60%		
B 区	46	平瓦	最大長 (29.2)	最大幅 (30.7)	最大厚 2.7	AB	灰白 N-7/	B	50%	凸面　縄叩き痕有 凹面　布目痕（一部ナデ消し痕）	
B 区	47	砥石？	最大長　3.4	最大幅　2.0	最大厚　1.8	重さ　7.9g				全面すり痕有	角閃石安山岩
B 区	48	砥石	最大長　(3.7)	最大幅　(3.2)	最大厚　1.3	重さ　23.3g				半分欠損か？	泥岩

Ⅵ　調査のまとめ

今回の調査で、一番古いもので縄文時代後・晩期（表採として）から新しいもので、近世の遺物が確認された。本遺跡の主体的な時期は前１世紀ごろから７世紀後半までの弥生・古墳時代と、中世、近世以降の主として寺院に関係する遺物が検出され、時代の連続性は確認できるものの、大まかに２つの時期（弥生～古墳時代の時期と、中世以降の時期）にわたって展開されていたことが確認できた。一部平安期の遺物も確認できるが、圧倒的に出土数が少なく、ある種の理由により当時の人々の営みが一時断続していたことを示す。時期としては大体８世紀から９世紀代と考えられる。

調査により人々が長い間営んできた証拠を確認することができたわけであるが、今回の調査では興味深い発見が数点あった。

第１号土坑から出土した弥生土器の壺は一方は栗林式の様式を採用しながら、もう一方は、池上式の在地の要素を織り交ぜて製作されており、長野地方要素を取り入れつつ、在地の文化も融合されつつあるという、時代の変遷の一部を垣間見ることができ、当時の文化的影響が確認できた。

さらに、弥生時代中期の第２号住居跡の炉付近からは、数点の管玉、勾玉が出土した。墓域での出土例が大多数で、被葬者の副葬品として確認されていたこれらの遺物が、住居跡からの検出だったため、炉の周辺からの検出に注視すれば、火に関わる祭祀的な儀式の一環で、意図的に遺棄したものではない

かと考える。

また、調査区の全体には古墳時代からの溝跡が張り巡らされており、そのうち一部はのちに寺院の内堀に転用されたと想定できるものも確認され、寺院の歴史を踏まえつつ検討する必要がある。検出された遺物からは五輪塔や硯、板碑、また神社仏閣で盛んに用いられた巴文軒瓦なども出土しており、貴重な情報を得ることができた。

弥生時代から古墳時代における様相

今回の調査において、弥生時代のものと考えられる遺構として、住居跡２基、土坑３～４基とが検出され、また、古墳時代においては、住居跡の検出はなかったが、掘立柱建物跡５～６軒、土坑２～３基、溝跡８～９条が検出されている。

現在における標高や調査時の土層覆土からも推測できるとおり、この調査箇所周辺は微高地に位置し、河川（この付近では衣川）の氾濫における影響も比較的少なかったようである。細かく見てみると、調査区南に数十メートルさらに標高が上がり、反対に北へは、緩やかな谷地形となっているようである。

検出された溝跡のうち特に第 13 号溝跡は北東方向から南西方向に走りながら、他の溝跡と交差している。この様相は過去の調査で行われた平成 13 年度の「諏訪木遺跡」の調査結果と同様のケースであり、周辺の古墳時代中期以前の様相を反映させている。

周囲では、田畑における稲作等が行われていたことが推測され、縦横に張り巡らされた溝跡は灌漑用としての水路跡であったのだろうと考えられる。住居跡の検出は今回の調査区ではやや西に寄っていると考えられることから、集落としての展開は現在の寺院の墓地から西へ広がっていると推測される。弥生時代から古墳時代にかけて生活基盤がここにあったことがこのことからうかがい知ることができる。

第１号土坑出土遺物について

この第１号土坑から出土した弥生時代壺の大半は弥生時代の中期中葉のものと推測でき、外面の文様などから、現在の長野県の中部高原地域の栗林式の影響を濃く受けていると考えることができる。また、それらと同じように、在地の様相を備えた池上式の壺も確認され、様式の異なる土器が同時期に共存していたことを示している。これらの遺物については検出高が現地表面下から 38 cmと非常に浅く、原形を留めていたことは、非常に幸運であった。

№１の壺は胴部にヘラ描沈線による重三角文（間に半円形刺突列点文及びLR 充填縄文）が最大の特徴であり、弥生時代中期中葉の長野地域に栗林Ⅰ式に属すものと考えられる。

続いて№２は№１と異なり、やや胴回りがずんぐりしており、異なった形態を見せる。文様の大半がヘラ描沈線で描かれており胴部外面の文様は、工字状文や「Ｓ」字状文などが中心となっており、こちらは弥生時代中期中葉の在地系である池上式に属すものと考えられる。隣接する前中西遺跡などの遺跡などでも同種の土器が確認されており、同遺跡での墓制に関する埋葬形態も長野地域の様式に類似性が認められることから、当時上之地域において、長野地域との間に深いつながりがあったものと考えられている。

また、さらにこの土坑から検出された土器は、これまで周辺の遺跡で確認されてきた「栗林式」の土

器よりも古く、長野地域で確認されている「栗林式」の初期段階の形態を備えていることが確認された。このことは、当時、比較的早い段階で長野地域からの文化がこの地域に影響していたことを意味しており、当時の歴史を知るうえで貴重な成果であったといえよう。

中世から近世にかけての様相

古墳時代以降では奈良・平安時代の遺構は希薄で、中世以降に再び検出されるようになる。中世になると、一乗院の歴史を垣間見ることのできる痕跡が今回の調査で明らかになった。特徴的であったのが、第１号溝跡の大きな堀跡である。これは、古墳時代からの溝跡を掘り広げ、拡張し寺院の堀跡へと転用したと推測でき、幅 2.2 ～ 4.0m、深さ 0.85 ～ 1.25m と、本格的な掘であったようである。そこからは、中世から近世に至る遺物が大量に出土し、陶器、磁器が多量に出土したほか、寺院の存在を裏付けるかのように、何基もの五輪塔が検出された。五輪塔はその多くに梵字が彫られていたり、「地輪」の部分からは、時期判断は残念ながらできなかったが、戒名のほか月日を解読できるものまであった。文字としての裏付け資料となることから、この検出も大変貴重なものであろう。

近世以降となると、堀跡は無くなり、その上に廃棄抗としてかわらけなどの陶器、磁器などが多量に廃棄されたゴミ捨て場のような場所となり、寺院の痕跡としては、まったく分からなくなっていたようであった。

寺院としての性格

今回の調査で、寺院の要素を色濃く見受ける遺構、遺物が確認されたが、遺物から見ると、それらの多くが、中世から近世にかけてのもので、室町から近世に至る年代のものが多く確認された。第１号溝跡からの出土遺物がその特徴を示しており、五輪塔や板石塔婆、陶磁器類がそれである。遺構から見ると、第１号溝跡、第１・２号井戸跡、第２号性格不明遺構とした遺物廃棄遺構などが寺院に関係する遺構であろう。また、各種掘立柱建物跡についても、遺物数がわずかであるため、時期の特定は難しいが、建物の主軸方向から、２種類の分類ができ、Ⅰ類として北東方向に主軸を備えるものが８軒、Ⅱ類として北～北西方向に主軸を備えるものが３軒になる。その内Ⅰ類が中世に属するものと考えられる。位置からして寺院に付属する建物であっただろうことが想定される。

さらに寺院との直接の関係性は不明であるが、第 10 号、22 号溝跡や第 220 号ピットからは古代瓦に分類できる平瓦が確認された。中でも第 22 号溝跡から検出された平瓦は、９世紀から 10 世紀に遡る可能性のあるもので、点数としてはわずかであるため、決め手に欠けるが、寺院成立などに関連性のある遺物として注目される。

引用・参考文献

『熊谷市史』前編　熊谷市　1963

吉野　健　『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡総括報告書Ⅰ』－西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅲ－　熊谷市教育委員会　2013

金子正之　『石原古墳群第２号墳』熊谷市石原古墳群調査会　2008

蔵持俊輔　『上之古墳群・諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会　2013

松田　哲　『樋の上遺跡』熊谷市遺跡調査会　2012

吉野　健　『西別府遺跡Ⅰ　西別府廃寺Ⅲ』－西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅱ－　熊谷市教育委員会　2012

松田　哲　『拾六間後遺跡』－熊谷都市計画事業籠原第二土地区画整理事業地内遺跡発掘報告書－　熊谷市教育委員会　2006

松田　哲　『前中西遺跡Ⅴ』－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘報告書Ⅵ－　熊谷市教育委員会　2010

松田　哲　『三ヶ尻遺跡Ⅲ』熊谷市教育委員会　2003

新宿区内藤町遺跡調査会　『内藤町遺跡－放射５号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』東京都建設局　新宿区内藤町遺跡調査会　1992

森田安彦　『萩山遺跡』熊谷市教育委員会　2014

金子正之・吉野　健　『西別府廃寺』熊谷市教育委員会　1992

吉野　健　『西別府廃寺（第２次）』熊谷市教育委員会　1994

松田　哲　『前中西遺跡Ⅶ』－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘報告書Ⅸ－　熊谷市教育委員会　2013

加藤隆則・吉野　健　『三ヶ尻遺跡Ⅲ』熊谷市教育委員会　2003

吉野　健・松田　哲　『西別府祭祀遺跡』熊谷市教育委員会　2000

森田安彦　『前中西遺跡Ⅸ』熊谷市前中西遺跡調査会　2014

吉野　健　『西別府遺跡Ⅰ　西別府廃寺Ⅲ』－西別府遺跡群確認調査報告書Ⅱ－　熊谷市教育委員会　2012

埼玉県立民俗文化センター　『埼玉のかわら』－埼玉民俗工芸調査報告書　第４集　1986

吉野　健・腰塚博隆・原野真祐　『池ノ上遺跡』熊谷市教育委員会　2016

大谷　徹　『川越田遺跡Ⅱ』－女堀川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告　埼玉県　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2011

松田　哲　『前中西遺跡Ⅶ』－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘報告書Ⅷ－　熊谷市教育委員会　2012

福田　聖　『川越田遺跡Ⅲ』－女堀川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　埼玉県　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2013

川西直樹　『市谷仲之町遺跡Ⅷ』三井不動産株式会社　加藤建設株式会社　2007

鈴木康好　『山吹町遺跡』－（仮称）神楽坂山吹町計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　野村不動産株式会社　加藤建設株式会社　2009

安井千栄子　『市谷加賀町二丁目遺跡Ⅱ』－（仮称）市谷加賀町マンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　加藤建設株式会社　2001

吉野　健・腰塚博隆　『樋の上遺跡Ⅱ』－幹線３号線道路改良事業地内遺跡発掘調査報告書　熊谷市教育委員会　2016

吉野　健　『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会　2001

寺社下博　『一本前遺跡Ⅳ』熊谷市教育委員会　2003

蔵持俊輔　『上之古墳群・諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会　2013

蔵持俊輔　『合羽山遺跡』熊谷市合羽山遺跡調査会　2009

写　真　図　版

第 64 図 1

第 64 図 2

調査区全景（真上から）

図版 2

A区　全景（真上から）

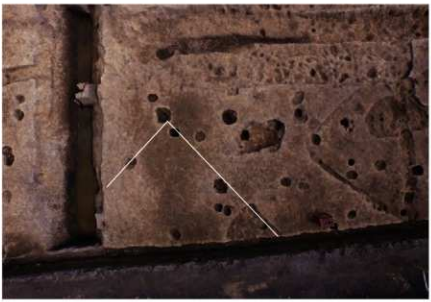
B区　全景（真上から）

第１号住居跡（西から）

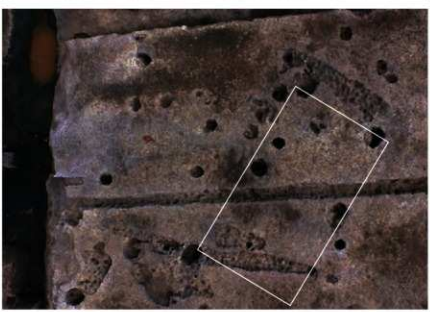
第２号住居跡（南から）

第１・２号掘立柱建物跡
（真上から）

図版 4



第３号掘立柱建物跡
（真上から）



第４号掘立柱建物跡
（真上から）

第５号掘立柱建物跡
（南東から）

第８号掘立柱建物跡
（南から）

第９号掘立柱建物跡
（南から）

第 10 号掘立柱建物跡
（真上から）

図版 6

第１号溝跡　全景（南から）

第１号溝跡（南北軸方向）　全景（北から）

第１号溝跡（東西軸方向）（東から）

第１号溝跡　遺物検出状況（北東から）

第１号溝跡　遺物検出状況（東から）

第２号溝跡　全景（東から）

第３号溝跡　全景（東から）

第４号溝跡（西から）

第５号溝跡（東から）

図版 8

第２号溝跡　全景（東から）

右から第６・７号溝跡　全景（東から）

第 10 号溝跡（南から）

第 13 号溝跡（東から）

第 13・16 号溝跡
（南から）

第 15 号溝跡
（東から）

第 21 号溝跡
（東から）

図版 10

左から第 18～16 号溝跡
（東から）

左から第 18～20 号溝跡
（西から）

第 1 号井戸跡（南東から）

第 2 号井戸跡（南から）

第１号土坑　遺物検出状況（南東から）

第１号土坑　遺物検出状況
（№１）

第１号土坑　遺物検出状況
（№３・４・６・８）

第３号土坑（南から）

第５号土坑（東から）

第９号土坑（北東から）

第 10 号土坑（北西から）

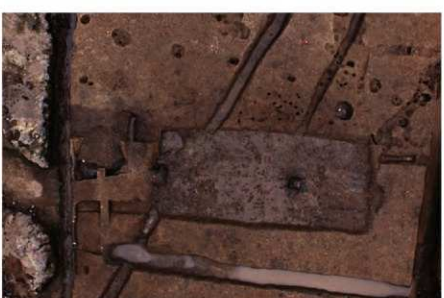
図版 12

第 11 号土坑（南東から）

第 26 号土坑（北から）

第 1 号河川跡
（西から）

第 1 号水田跡
（東から）



第 1 号水田跡
（真上から）

第１号性格不明遺構（東から）

第２号性格不明遺構　遺物検出状況（北東から）

第２号性格不明遺構　遺物検出状況（北東から）

作業員　作業風景

作業員　作業風景

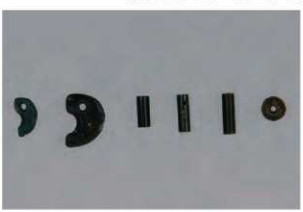
図版 14

第６図１～７

第８図１

第８図２，４，６～９，11，12

第８図３，５，10，13～20



第８図24～29

第８図30～34

第20図1－Ｐ４－１

第20図４－Ｐ２－１，Ｐ４－２・３，Ｐ６－１・２・３

第２３図１～９

第２４，２５図５１～５５、６０

第２４図３８

第２４図３９

第２４図４０

第２４図４１

第２４図４２

第２４図４３

第２５図５７

第２５図５８

第２６図８１

第２６図８２，８３

第２３図３３

第２７図９４

第 33 図 128～131

第 34 図 132～135

第 35 図 136～138

第 36 図 139～141

第 37 図 142

第 38 図 144

第 38 図 145

第 39 図 146

第 39 図 147

第 41 図 150

第 41 図 151

第 33 図 130

第 33 図 131

第 35 図 136

第 35 図 137

第 35 図 138

第 36 図 140

第 36 図 141

第 37 図 143

第 38 図 144

第 39 図 147

第 40 図 148

第 40 図 149

図版 18

第 28 図 97

第 28 図 98

第 28 図 99

第 30 図 116

第 31 図 122

第 28 図～第 30 図 101, 104, 112, 115, 117, 118

第 30 図 120

第 32 図 127

第 42 図 162

第 42 図 163

第 43 図 169

第 43 図 172

第 44 図 173

第 51 図 9

第 51 図 10

第 51 図 11

第 51 図 12

第 51 図 13

第 53 図 53

第 56 図 8

第 56 図 9

第 56 図 10

第 56 図 17

第 56 図 18

第 56 図 20

第 56 図 22

第 56 図 31

第 57 図 38

図版 20

第 58 図 18-1

第 58 図 18-1（裏）

第 60 図 1～5

第 60 図 8，10～15

第 60 図 6

第 60 図 7

第 61 図 29

第 60 図 20

第 60 図 21

第 60 図 25

第 61 図 26

第 61 図 27

第 65 図 3

第 65 図 4

第 65 図 5

第 65 図 6

第 65 図 7～16

第 82 図 43-1

第 82 図 104-1

第 82 図 68-3

第 82 図 144-1

第 83 図 207-1

第 85 図 1～3

第 85 図 5～7

第 85 図 27，28

第 85 図 10

第 85 図 11

図版 22

第 87 図 5

第 87 図 6

第 87 図 14

第 87 図 15，16

第 88 図 21

第 89 図 37

第 89 図 38

第 89 図 41～43

第 90 図 49～54

第 90 図 56

第 92 図 1～4

第 92 図 19

第 92 図 34

第 92 図 35

第 92 図 36

第 93 図 52

第 92 図 54

第 93 図 56

第 93 図 58

第 94 図 87

第 95・96 図 116～120

第 96 図 123，124，126，127

第 97 図 1

第 97 図 14

第 97 図 18

第 98 図 28

第 98 図 29

第 98 図 30

図版 24

第 25 図 68

第 25 図 69

第 25 図 70

第 25 図 71

第 25 図 72

第 25 図 67

第 58 図 9－4

第 51 図 37

第 51 図 38

第 59 図 6

第 59 図 9

第 59 図 10

第 59 図 13

第 60 図 16

第 60 図 17

第 60 図 19

第 69 図 10

第 72 図 6－9

第 72 図 8－2

第 72 図 25－1

第 85 図 14

第 85 図 16

第 85 図 22

第 87 図 8

第 87 図 9

第 88 図 8

第 88 図 9

第 88 図 10

第 88 図 11

第 88 図 12

第 88 図 13

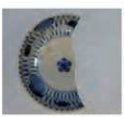
第 88 図 14

第 88 図 15

第 88 図 17

第 88 図 22

第 88 図 19


第 88 図 19

第 88 図 20

第 88 図 23

第 88 図 21

第 88 図 24

第 88 図 25

第 88 図 26

第 88 図 27

第 88 図 28

第 88 図 29

第 88 図 31

第 88 図 33

第 88 図 35

図版 26

第 88 図 36

第 88 図 36

第 94 図 90

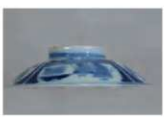
第 94 図 91

第 94 図 92

第 94 図 93

第 94 図 94

第 94 図 94



第 94 図 95

第 94 図 95

第 95 図 97

第 95 図 99

第 95 図 100

第 95 図 101

第 95 図 102

第 95 図 103

第 95 図 104

第 95 図 105

第 95 図 106

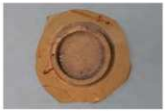
第 95 図 106

第 99 図 37

第 99 図 38

第 99 図 38

第 99 図 39



第 99 図 40

第 99 図 41

調査箇所周辺（南東から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	すわのきいせきさん
書名	諏訪木遺跡Ⅲ
副書名	埼玉県熊谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書　第 25 集
巻次	
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編集者名	腰塚　博隆　　吉野　健
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360 － 8601　熊谷市宮町二丁目 47 番地 1　　ＴＥＬ 048-524-1111
発行年月日	西暦 2017（平成 29）年 3 月 24 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°　′　″)	(°　′　″)	調査期間	調査面積	調査原因
すわのきいせき 諏訪木遺跡	くまがやしかみの 熊谷市上之 2889 番 1、2889 番 3、2889 番 6	11202	059-016	36　16′47″	139°33′38″	20150401 ～ 20150714	1,221 ㎡	墓地造成 道路新設

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪木遺跡	集落跡	弥生、古墳時代 中世・近世	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑・井戸跡	弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器、管玉、勾玉	弥生から古墳時代の集落痕 堀跡を含めた寺院関連遺構

埼玉県熊谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書　第25集
諏訪木遺跡Ⅲ
平成29年3月24日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／朝日印刷工業株式会社